ISSN 1348-0952

研究紀要

第6号
2014.3

目　次

高瀬山遺跡縄文時代中期末葉の石器資料集積遺構出土資料の技術学分析
－縄文石刃技術と短形剥片剥離技術の動作連鎖、そして“コドモ”の発見－　大場　正善　1

最上川中流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布　菅原　哲文　27

東北地方南部における縄文時代終末から弥生時代初頭の遺物組成　植松　暁彦　49

東北地方出土の「橿原式文様浅鉢」について　小林　圭一　69

古代出羽南部における菊花状痕跡を有する土器集成　吉田　満　79

山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の「火縄」について　髙桑　登　97

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

刊行のことば

山形県埋蔵文化財センターは平成５年４月に財団法人として設立され、平成24年４月に公益財団法人として新たな一歩を踏み出しました。

設立以来、東北横断自動車道、東北中央自動車道等の高速道路をはじめとする道路建設や圃場整備等の開発事業に伴い、緊急発掘調査を数多く実施してまいりました。

また、調査の成果を県民の皆様に広く御紹介すべく、調査速報会をはじめ、センター参観デー、ふるさと考古学講座や小中学校に赴いての出前授業等に取り組んでおります。

平成24年９月には舟形町西ノ前遺跡出土の土偶「縄文の女神」が国宝に指定され、県内外の高い関心を集めました。その優美な姿に、多くの方がはるかな時を超えて先人のくらしに思いをはせたことでしょう。我々も埋蔵文化財が与えてくれる大きな活力を改めて感じた次第です。

振り返りますと、この度設立20周年を迎えることが出来ましたのもひとえに関係各位、県民の皆様のあたたかい御支援、御協力の賜物と心より感謝を申し上げます。

日頃の研鑽を御覧いただきたく、この節目に『研究紀要』第６号を上梓いたしました。

東日本大震災以降、東北のみならず日本の各地で地域の歴史、そして未来が見つめ直されています。埋蔵文化財が共有の財産として皆様の生活に活かされ、益々親しまれることを願い、本書がその一助になれば幸いに存じます。

平成26年３月

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長　　菅野　滋

題字

木村　宰（平成 14 年度　財団法人山形県埋蔵文化財センター　理事長）

高瀬山遺跡縄文時代中期末葉の石器資料集積遺構出土資料の技術学分析

―縄文石刃技術と短形剥片剥離技術の動作連鎖、そして“コドモ”の発見―

大場　正善

1 はじめに

石器は、どのように作られたのか。そして、石器を作った担い手は、どのような人物であったのか。それらの課題に取り組むためには、どのような資料を扱い、そしてどのような研究方法が適切なのか。

石刃技術の再登場　縄文時代中期末葉、良質な珪質頁岩を産出する最上川中流域や月布川流域では、縄文時代草創期の前葉までで途絶えてしまったはずの石器製作技術、すなわち縦に長く、かつ連続してカケラを割り取る石刃技術が、なぜか復活し、隆盛する（阿部 1986、宮城県教委 1988、安彦・石井 1992、石井 1984・1996、会田 2000）。かつては、太平洋側などの頁岩が希少な地域への交易のため、あるいは石刃を素材とするトゥールの需要が高まったことにより発生したなどと解釈されてきた。しかし、なぜ一度廃れてしまった技術が再び現れ、隆盛したのかは、いまだに検証されていない考古学的事象の一つである。

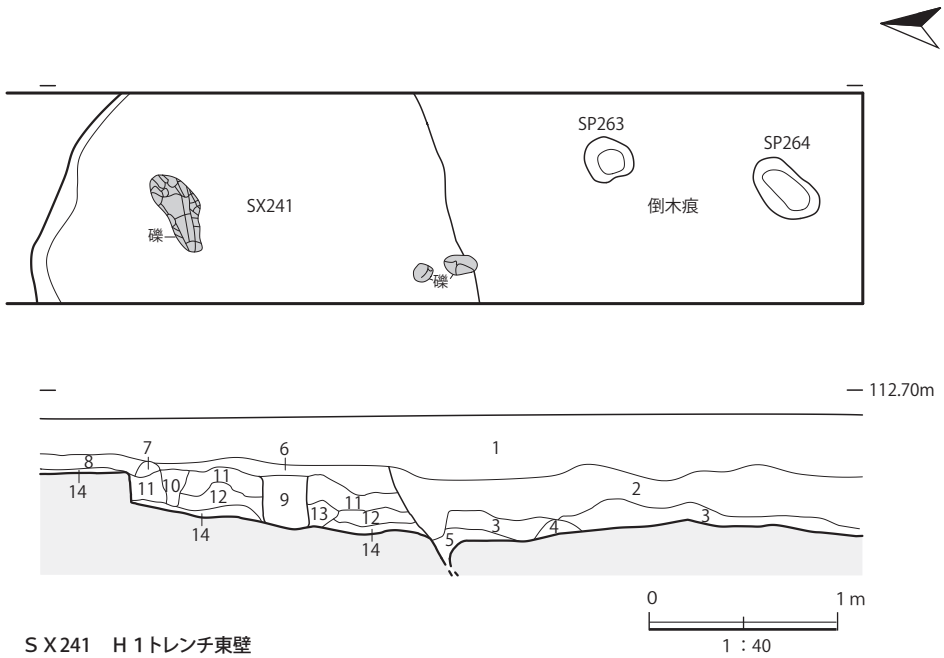
石器資料集積遺構　その石刃技術の再登場とともに、認められるのが、土坑やピットなどに大量の石器資料が密集する、石器資料集積遺構であり、とくに最上川中流域や月布川流域において中期末葉に特徴的に認められる。つまり、これらの地域で発見された中期末葉の石器資料集積遺構から出土した資料は、時期が限定された資料であることから、技術復原を行う意味において優位と言える。なお、その中期末葉の石刃技術の一部については、寒河江市柴橋遺跡や同市向原遺跡、大江町橋上遺跡の資料を基に、石井浩幸氏が精力的に分析を行い、製作工程の一端を明らかにしている（石井・安彦 1992、石井 1984・1996）。

高瀬山遺跡 HO3 期発掘調査　2009 年、当センターが実施した、高瀬山遺跡 HO3 期の第 2 次発掘調査において、H1 トレンチから石刃技術関連資料を中心にする 1,204 点の石器資料が密集する石器資料集積遺構（報文では、「石器一括遺構」）、SX241 が発見された（山埋文 2012）。SX241 では、石器資料とともに大木 10 式を中心にした土器片が出土していることから、上述と同様に、SX241 から出土した資料は、縄文時代中期末葉に位置付けられると考えられる。したがって、本稿で分析・復原する石器製作技術は、この SX241 から出土した縄文時代中期末葉に相当するものである。

石器資料の優位性　ところで、石器は、石材の種類によって風化の強弱はあるものの、基本的に木や粘土、金属などの素材に比べて腐蝕しにくい。そのため、完成品はもちろんのこと、製作過程の残滓も失敗品も欠損品も残るし、作った際の製作痕も使った際の使用痕も残る。さらに、製作直後に足元に落下した石器資料の分布状態、あるいは集められて捨てられた石器資料の分布状態も残る。つまり、製作痕や使用痕の原因を突き止めれば製作や使用の様子が、石器の出来栄えからそのヒトの石器作りの技術的な能力が、そして石器資料の散らばり方を調べればヒトの立ち位置や座した位置、捨てた方向などの空間的な関係が明らかとなる。だからこそ、石器資料は、他の素材の考古資料に比べて、過去のヒトの行動を復原推定するのにもっとも適した資料と言え（山中 2007）、過去のヒトの行動を記録した最良の記憶媒体と言っても過言ではない（大場 2013a）。しかし、問題は、石器に記録されたヒトの行動を読み解くために、残された記憶を掘り起こす方法が必要となることである。観察し、記述するのみであれば、石器資料は黙して語らない。

動作連鎖の概念に基づく技術学　石器資料から過去のヒトの何らかの関与を導き出すには、石器に残された痕跡の原因がどのような行動によるものなのかを突き止めることであり、それが判れば直接的で解り易い。つまりそれは、痕跡からそれが生じた原因を突き止める法科学的な、すなわち犯人追跡的な分析手法が求められよ

第１図　遺跡の位置と SX241 の位置



ＳＸ241　Ｈ１トレンチ東壁

1．10YR2/2 黒褐色シルト　黄褐色シルト粒を 10％含む。しまり弱。表土。
2．7.5YR3/1 黒褐色シルト　遺物を多く含む。しまり強。以下５層まで倒木痕。
3．10YR3/3 暗褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 10％含む。
4．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　しまり強。
5．10YR4/2 灰黄褐色シルト　５mm ～１cm 大の炭化物を 10％含む。しまりやや弱。
6．10YR3/1 黒褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 10％含む。５mm ～１cm 大の炭化物を 10％含む。
7．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 50％含む。しまりやや強。
8．10YR3/1 黒褐色シルト　黄褐色シルト・５mm ～１cm 大の炭化物を 10％含む。遺物を含む。
9．10YR3/2 黒褐色シルト　黄褐色シルトを 20％含む。しまりやや強。柱穴。
10．10YR3/2 黒褐色シルト　黄褐色シルトを 10％含む。しまりやや強。以下 13 層までＳＸ241 覆土。
11．10YR4/2 灰黄褐色シルト　黄褐色シルトを斑状に 10％含む。５mm ～１cm 大の炭化物を 20％含む。しまり強。
12．10YR3/2 黒褐色シルト　黄褐色シルトをブロック状に 20％含む。炭化物を 20％含む。
13．10YR3/3 暗褐色シルト　５mm ～１cm 大の炭化物を 10％含む。しまり強。
14．10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト　しまり弱。地山への漸移層。

第２図　SX241 の平面図と断面図と土層注記

う。その犯人追跡的な石器研究法が、民族誌学的研究法である“動作連鎖の概念に基づく技術学”である（Tixer 1967、ルロワ＝グーラン 1973、山中 2004・2007・2012）。技術学の方法については、山中 2004・2006・2010・2012、大場 2013c に詳しく掲載されているので参照されたい。端的に言えば、形を見て解釈するのではなく、痕跡について、「観察（製作工程と表面に残された痕跡の子細な観察）―仮説（製作技術の仮説）―実験（製作実験）―検証（考古資料と実験資料の対比）」といった科学的方法のプロセスに則った分析を行い、考古資料の背後にあったヒトの姿を、原材から製作、使用、廃棄に至る過程の順で追跡する方法にほかならない。なお、動作連鎖とは、あくまでもモノを視点にしたときに見えるヒトの姿である。モノの原材から廃棄に至る過程のみであれば、モノの記述であり、モノのライフヒストリーでしかない（粟田 2010）。動作連鎖は、いわゆる「技法」や製作工程とも異なり混同され易いので、注意されたい。

動作連鎖から見えるもの　技術学分析において、分析から何が明らかになるか。それは、製作時の意図である“メトード”、そして製作時に用いられた道具とそれを使うジェスチャーと素材を保持するヒトのジェスチャーである“テクニーク”である（山中 2007）。言い換えれば、製作時のヒトの思考であり、製作する道具とヒトの行為である。個々の資料に絡んでいた動作連鎖が明らかになることで、つぎに発想されるのが、個々の資料に絡んだヒトが技術的に「上手」であるとか「下手」であるとかといった、石器製作の技能差である。そして、その技能差をもとに、遺跡内で生活していた石器資料に絡んだヒトびとの構成を推定し、さらに技術の学習行為や技術の習得について議論が深まっていく（Karlin et al 1993、高橋 2001）。個々の動作連鎖のデータが積み重なった上で、技能差、集団構成、学習行為、さらには社会性へと発展的に、かつ検証を踏まえた上で議論されるべきであり、1 つの動作連鎖が明らかになったからといって、そこに「社会」や「文化」があると解釈するのは、論理的飛躍と言わざるを得ない（山中 2009、大場 2013c）。

本稿の目的　上述の頁岩産地である最上川中流域や月布川流域に現れた縄文中期末葉の石刃技術については、他の製作技術と同様により詳細な技術学的検討がまだ行われていないため、具体的なメトードやテクニークについて未解明な点が多い。もちろん、技術差についても検討が行われていない。そこで本稿では、時期が限定され、資料的に優位性を持つ、高瀬山遺跡 HO3 期発見の SX241 出土石器資料に焦点を当て、動作連鎖の概念にもとづく技術学による分析を行い、メトードとテクニークの復原とともに、石器資料の背後にあったヒトの姿（動作連鎖）について考察してみたい。

2　遺跡の概要と分析対象資料

A　概　要

遺跡の位置と立地環境　高瀬山遺跡は、山形県寒河江市街より南西に 1km 離れた、山形盆地の西端、寒河江川の扇状地と最上川左岸に接するところに位置する（第 1 図）。東は標高 122.5m の高瀬山から、西は平塩橋までの東西約 1.6km、南北 0.6km の広範囲に設定されている。遺跡一帯は、最上川中流域の氾濫原であり、河岸段丘、旧河道、後背湿地といった氾濫原特有の複雑な地形が発達する（阿子島 1994・1997・1999）。遺跡内では、これまで高速道やサービスエリア建設、宅地造成や町道建設などにともなう発掘調査が行われ、旧石器から縄文、古墳、古代、中世、近世にかけてのさまざまな時代の遺構・遺物が数多く確認されている（寒河江市教委 1966・1982・1986・1987・2001・2002・2012、山埋文 2000・2001・2004・2005・2008・2012）。

SX241 の位置　高瀬山遺跡 HO3 期の発掘調査では、F 区、および H 区において縄文時代中期末葉に位置付けられる複式炉や埋設土器遺構などの多数の遺構・遺物が確認されている。2009 年に行われた高瀬山遺跡 HO3 期第 2 次調査では、H1 トレンチにおいて土坑内に 1,204 点の石器資料が密集して包含する石器資料集積遺構である SX241 が発見された（第 1 図：山埋文 2012）。SX241 は H1 トレンチの南端部付近に位置する。調査がトレンチ調査であることから、遺構の拡がりの全体像が判然としないが、SX241 は H 区を中心とする中期末葉の遺構群の南西端部に位置すると予想される。

SX241 石器集積遺構　SX 241 は、全面的な調査を行っていないものの、径約 2 m以上で、検出面からの深さが 34cm、底面が概ね平坦で、壁面がほぼ直交する形状を呈している（第 2 図）。また、南側の大部分は、倒木

痕によって削平を受けている。平面形や壁面の立ち上がりの状況からは、本来竪穴住居であった可能性がある。つまり、SX241 は、住居廃絶後に石器資料集積遺構として形成された可能性もある。その覆土からは、整理箱 1 箱分の大木 10 式を中心とした土器片とともに、珪質頁岩製の石器資料が 1,204 点出土している（以下、SX 241 石器資料）。調査期間の関係で、個々の石器の出土状況については、詳細に記録されていない。しかし、調査所見に依拠すれば、大量の石器資料が土器片とともに密集した状態で出土したという。また覆土は、炭化物シルトブロックが混じることから、人為的な埋土と考えられる（第 2 図）。つまり、SX 241 から出土した遺物は、埋積された可能性を示している。ただし、未発掘部があることや、倒木によって遺構が壊されていることから、SX241 石器資料が断片的な資料であるという制約があることは、否めない。

B　資料分析

SX241 石器資料は、総数が 1,204 点で、型式学的、あるいは技術学的に識別できた器種の内訳は、表 1 の通りである。接合資料は、折れ面接合を除く、組み立て接合（山中 2012）が、46 例得られている。接合資料の内訳は、石刃技術関連資料が 8 例、短形剥片技術関連資料が 38 例となる。

表 1　SX241 石器組成

器　種	点　数
石刃	27
稜付石刃	18
石刃核打面再生剥片	51
石刃核	27
短形剥片	150
短形剥片石核	68
石鏃未製品	2
凸基石鏃	1
槍先形尖頭器再加工品	1
錐形石器	1
複刃厚形スクレイパー	1
短形剥片素材エンドスクレイパー	1
尖頭スクレイパー	1
複刃スクレイパー	1
単刃スクレイパー	1

※型式学的、技術学的に識別できた 351 点のみを掲載。残りは、すべて型式学で言う「剥片」である。今後、詳細な技術学的検討を行うことで、「剥片」それぞれの意味合いについて検討することが課題である。

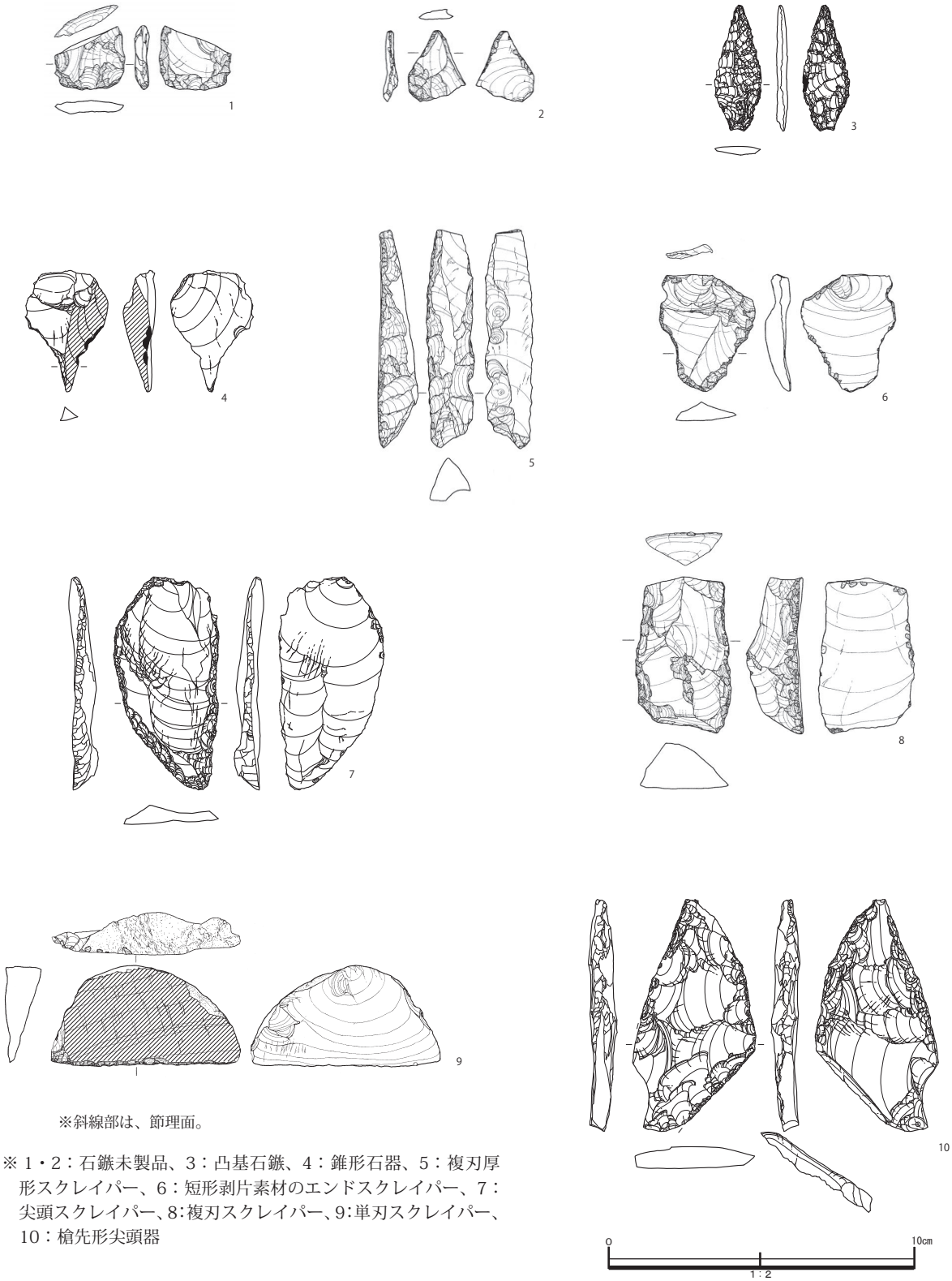
母岩　SX241 石器資料は、すべて珪質頁岩である。母岩は、整理期間の都合により、石質、色調、自然面の状態などがおおよそ類似しているもので分類されている。あくまでも大枠での分類であるが、その母岩分類では 24 種類に区分されることから、わずかな母岩でなく、少なくとも 24 前後の母岩数から構成される可能性が考えられる。

トゥール　明確な二次加工のある石器は、石鏃未製品 2 点、凸基石鏃 1 点、再加工された槍先形尖頭器 1 点、錐形石器 1 点、複刃厚形スクレイパー（報文では、「細形エンドスクレイパー」）1 点、短形剥片素材のエンドスクレイパー 1 点、尖頭スクレイパー 1 点、複刃スクレイパー 1 点、単刃スクレイパー 1 点である（第 3 図）。そのうち、凸基石鏃の基部が折損し、複刃厚形スクレイパーが被熱で部分的に欠損し、槍先形尖頭器は半分近く折損した上で再加工されている。各トゥール素材に関しては、複刃厚形スクレイパーと尖頭スクレイパーが石刃で、1 点の石鏃未製品（第 3 図 -1）と錐形石器、エンドスクレイパーが短形剥片、複刃スクレイパーと単刃スクレイパーが厚手剥片である。そして、もう 1 点の石鏃未製品（第 3 図 -2）が、剥離開始部がリップを呈した刃部加工の二次加工剥片か、ポイントフレークである。凸基石鏃と槍先形尖頭器は、素材が不明である。

両面調整技術の存在　なお、その槍先形尖頭器に関しては、SX241 石器資料の内にポイントフレークなどの両面調整に関する資料がほとんど認められない。後述する、SX241 石器資料から認められる石器製作技術は、その槍先形尖頭器の製作技術とかけ離れているため、本稿ではとくに取り上げない。一方では、SX241 の中に、なぜこの槍先形尖頭器があるのかが問題となる。

C　石刃剥離メトード

原石からの製作工程が明らかに認識することができる接合資料 J1 を中心に、J1 以外の接合資料や非接合資料に残る調整の痕跡を参考にして、SX241 出土資料から確認できる石刃剥離メトードの復原を行う。なお、本稿では、報文で記載されている J1 の製作工程の記述にた



※斜線部は、節理面。

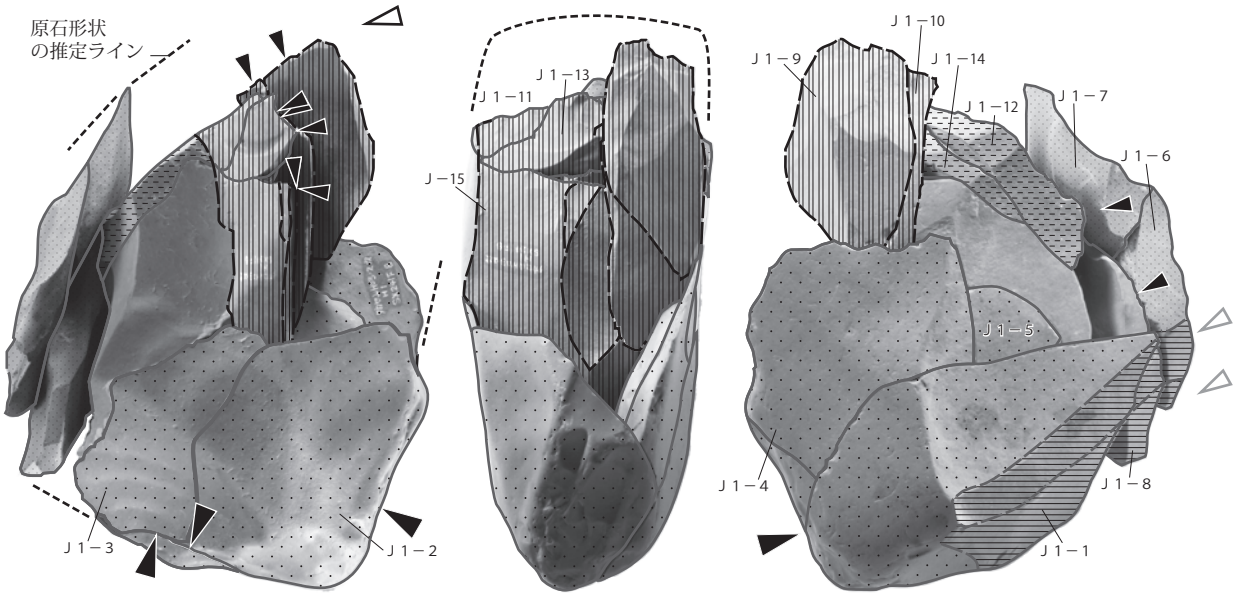
※ 1・2：石鏃未製品、3：凸基石鏃、4：錐形石器、5：複刃厚形スクレイパー、6：短形剥片素材のエンドスクレイパー、7：尖頭スクレイパー、8:複刃スクレイパー、9:単刃スクレイパー、10：槍先形尖頭器

第 3 図　SX241 出土トゥール

いして、若干の修正を行っている。

J1　J1 は石刃核成形剥片 5 点、石刃核背部成形剥片 3 点、側面形成剥片 2 点、打面再生剥片 4 点、石刃核 1 点で構成される。使用された石材は、滑らかな風化面が発達した扁平な亜円礫で、一端が急角度となっている。明黄褐色で、やや珪化が劣り若干粒子が粗いが、質的には石器製作に問題ない。

J1 の製作工程　以下の 7 つの工程を踏む(第 4 図)。1) 右側面の右側縁より石刃状剥片を剥離（未接合)。ただし、初期の工程のため、石刃核成形のために剥離された



【J 1 製作工程】

1) ：石刃状剥片の剥離　⇒　右側面後部成形？（未接合）

2) ：石刃核ブランク (ミー・ザン・フォーム) 下辺と側面の成形

3) ：石刃核ブランク背部の成形

4) ：石刃核ブランク打面の成形（未接合）

5) ：石刃剥離

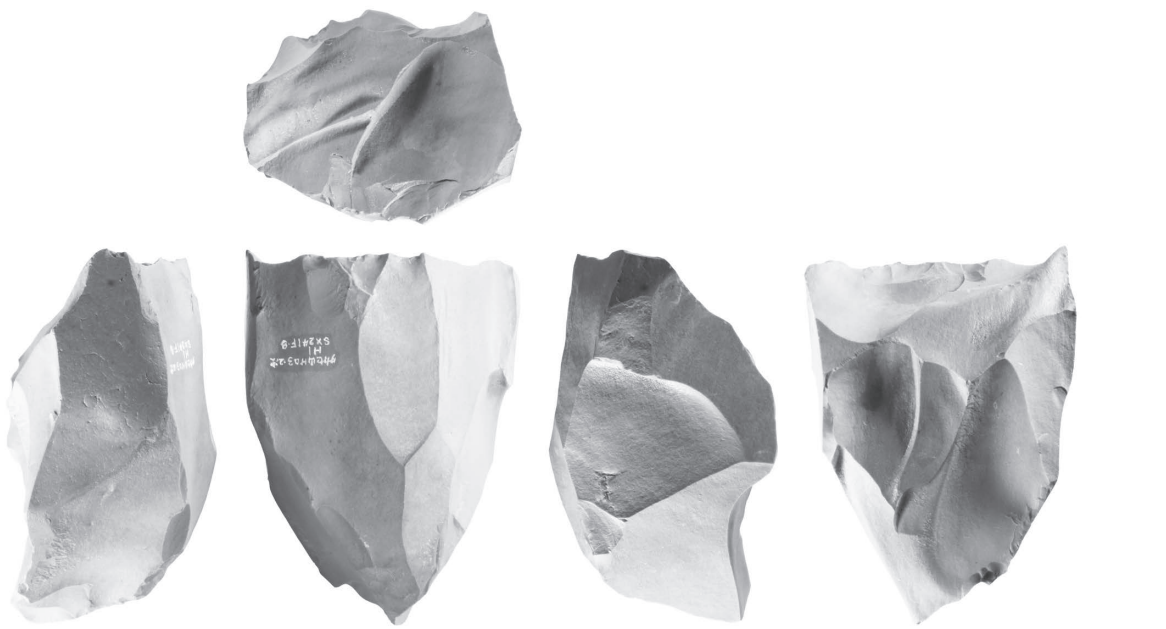
6) ：打面調整（再生）

7) ：石刃剥離

※ ーーー ：石刃剥離痕。
三角は、剥離方向を示す。

0　10cm
（縮尺は任意）

第 4 図　J1 の製作工程



0　10cm
1：2

第 5 図　J1-15 石刃核

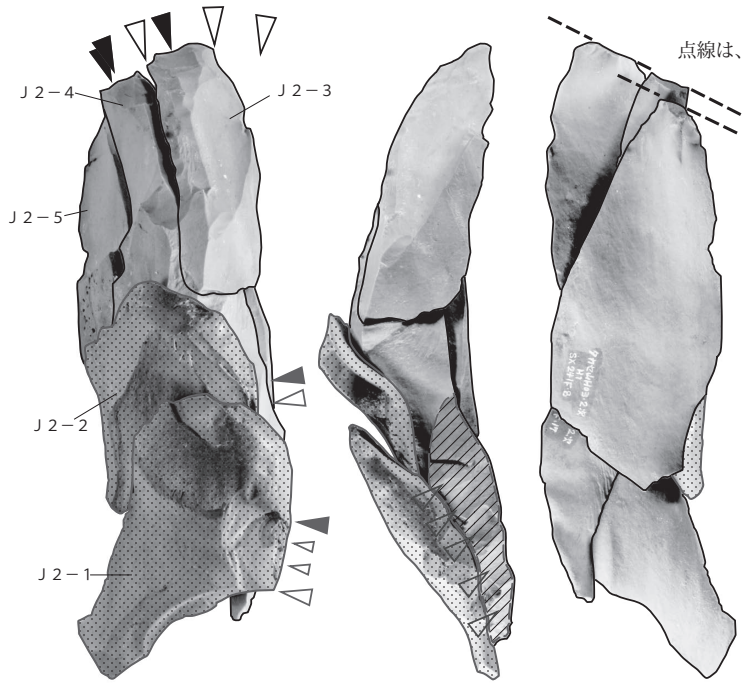
可能性があるが、未接合部位であることから、その剥離した意図はよく解らない。2）左右側面を打面にして交互剥離（alternent［仏］：イニザン他 1998）を行い、石刃核ブランク（ミー・ザン・フォーム）の下部と側面の成形（J1-1 ～ 5）。3）礫の左右側面の平坦面を打面にして、石刃核ブランクの背部を成形（J1-6 ～ 8）。4）正面方向から石刃剥離打面を成形（未接合）。5）上設打面からの石刃剥離（J1-9 ～ 10：ただし、J1-9 ～ 10 は、石刃剥離過程で剥離された石刃核側面調整剥片）。6）作業面正面からの打面調整（再生）剥片を剥離（J1-11 ～ 14）。7）上設打面からの石刃剥離（未接合）。そして、残核（J1-15）。推定される原石の形状が、石刃核の形状とおおよそ一致していることから、原石を選択する時点で、石刃製作に適した形状の原石が選択されていることが考えられる。各工程の意味合いとしては、1）～ 4）の工程で厚手剥片を剥離し、石刃核ブランクの作業面形を左右対称のホームベース状に成形する（第 5 図）。3）では、背部を成形する。4）～ 7）で打面成形と石刃剥離して、さらに打面調整（再生）と石刃剥離を交互に繰り返していく。剥離される打面調整（再生）剥片は、おおむねバルブが発達し、末端がヒンジを呈しており、その形状によって、石刃核打面中央に向かってやや窪むようになる。その結果、打面作出と打面調整（再生）によって、前面角が 60 度前後に維持されながら、石刃剥離が進行していく。また、背部もバルブが発達し、末端がヒンジを呈する剥片が剥離され、背部中央部がやや窪むようになっている。石刃剥離の直前には、前面角の作業面側に頭部調整が施され、さらに打面縁前擦りによって鈍くされる。この J1 は、石刃核成形から石刃剥離、残核に至るまで、比較的計画的な工程を踏んでいる。ただし、接合しなかった石刃剥離作業面の空白部分の容量からは、剥離された石刃の数は、10 点程度と、そう多くはなかったと思われる。

残核の形状　J1-15 の石刃核は、石刃核下端部の交互剥離によって逆三角形になり、作業面正面観が左右対称的なホームベース状に仕上げられている。作業面の側面観が、全体的に下部が湾曲して「し」の字状になっている。前面角は、打面調整（再生）の際に、発達したバルブと末端がヒンジを呈する剥片が剥離されていることから、打面内部が窪み、とくに前面角の頂点付近が 60 度前後になっている。なお、接合資料 J7 と J8 は打面再生剥片同士の接合資料であるが、J1 と同様に末端形状が発達したバルブとヒンジを呈しているのが認められる（第 7 図）。作業面の正面観と石刃剥離痕の形状から、先細りの石刃がおもに剥離されたと考えられる。なお、J1 以外の非接合の石刃核の中には、第 9 図の石刃核のように下端部が逆三角形でないものも含まれる。しかし第 9 図の石刃核は、作業面右側にウットルパセを起こした剥離面があることから、石刃剥離進行にともない石刃核形状が変化した結果であると考えられる。

背部成形　J1 は、背部が成形されているが、背部が石刃剥離やほかの調整に関連していないため、背部成形をした意図がよく解らない。しかし、意味なく背部が作り出されているとは考え難い。石刃核を保持するための整形とも考えられるが、一方で背部が作り出されている第 8 図 -2 の石刃核をみると、背部が作業面からみて右側面にたいする整形剥離をするための打面として、利用されている。そのことから、J1 でも本来は背部からの石刃核側面の成形をすることを予測して、その際の打面に利用するために背部が設定されたと思われる。

稜調整の痕跡　J1 では、稜調整が施された形跡が見当たらない。おそらく、石刃核ブランク成形の際に石刃剥離に適した稜線があったために、稜調整を必要としなかったと思われる。ただし、J1 と接合しないものの、石材が近似する J2 に、明確な稜調整の痕跡が認められる（第 6 図）。

J2 の製作工程　J2 は、稜調整剥片 2 点、稜付き石刃 1 点、石刃 2 点で構成され、稜調整の過程を追うことができる良好な資料である。1）正面右方向からの連続剥離によって稜左側面の成形。2）正面左方向からの連続剥離によって稜右側面の整形（未接合）。3）上設打面からの石刃剥離、および打面調整（未接合）を挟んで上設打面からの石刃剥離。以後は、欠落している。J2 の稜の成形と整形は、一撃一撃、打面と作業面を交互に入れ替える交互剥離でなく、1 打面で複数の剥離を行った後に、打面と作業面を入れ替えるという交互剥離が行われる。稜の側面観は直線的でなく、「し」の字状に外湾する。稜付石刃である J2-4 は、側面観が外湾するものの、末端形状はややヒンジ気味である。なお、J2 資料ではないが、第 10 図 -1 の背面には、石刃剥離作業面上に



点線は、打面前面角の推定ライン。

【Ｊ２ 製作工程】

1）左側面稜成形

2）右側面稜整形（未接合）

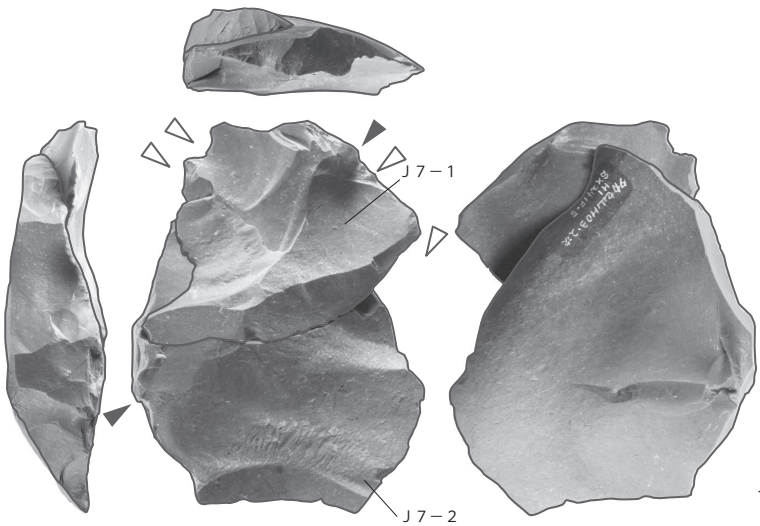
3）石刃剥離（実線）、
　および打面調整（点線）

※トーン付近横方向の三角は、稜調整の剥離方向。
（中ベタが接合剥片の剥離方向で、中ヌキが未接合部分の剥離方向）

未接合の稜整形

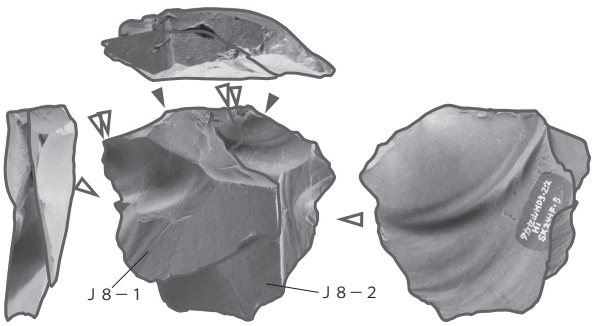
上部縦方向の三角は、石刃剥離の剥離方向。
（中ベタが接合石刃の剥離方向で、中ヌキが未接合部分の剥離方向）

第６図　J2 稜調整の接合資料



1　Ｊ７製作工程図

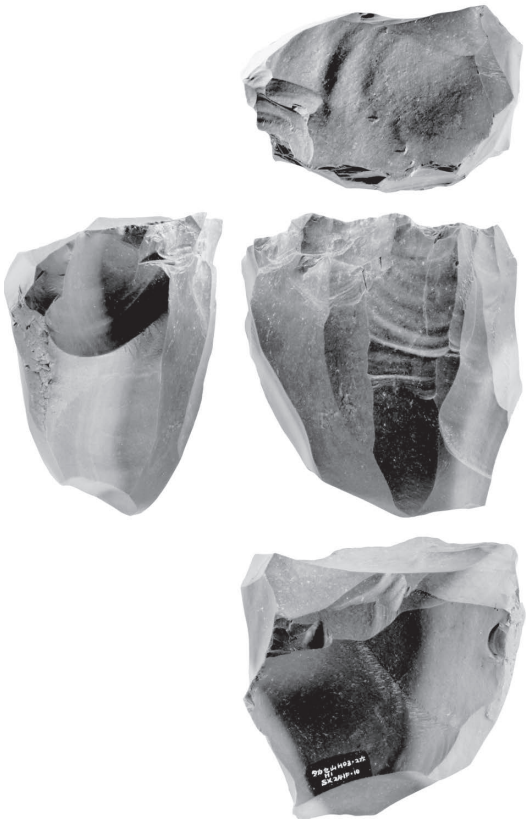
※三角は、打面再生の剥離方向。
（中ベタが、Ｊ７－１とＪ７－２の剥離方向で、
中ヌキが未接合部分の剥離方向）



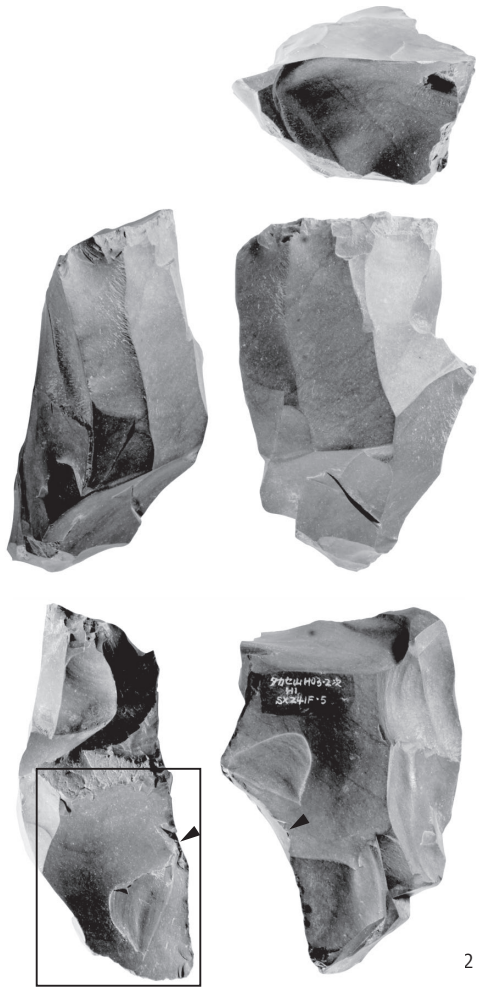
2　Ｊ８製作工程図

※三角は、打面再生の剥離方向。
（中ベタがＪ８－１とＪ８－２の剥離方向で
中ヌキが未接合部分の剥離方向）

第７図　J7・J8 打面再生剥片の接合資料

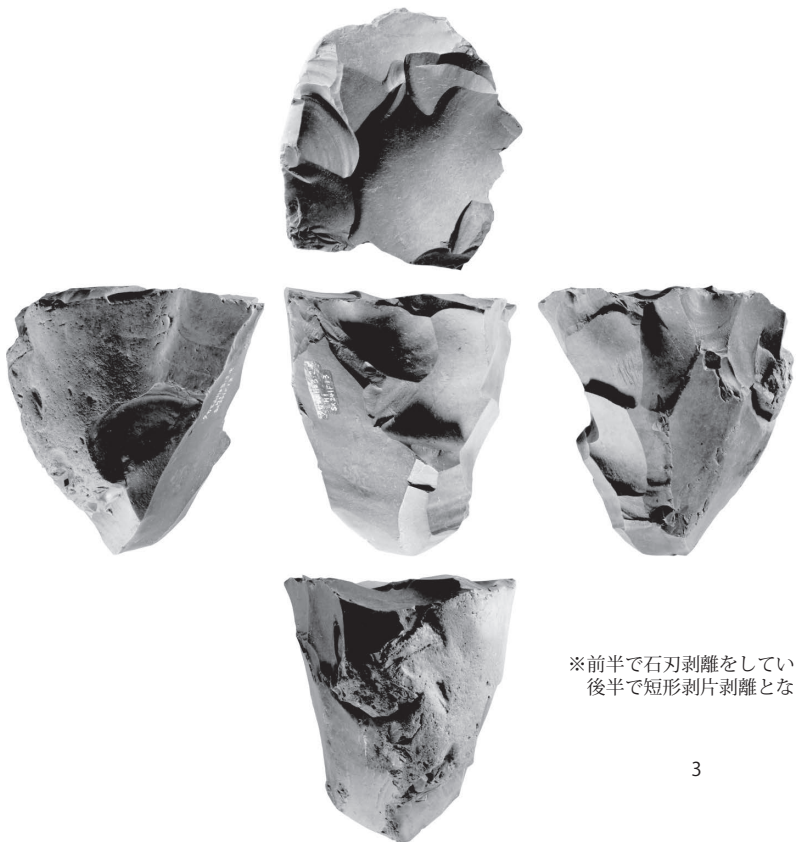


1



2

※背部からの凸部除去（背部からの側面整形）。
三角は、打面再生の剥離方向。

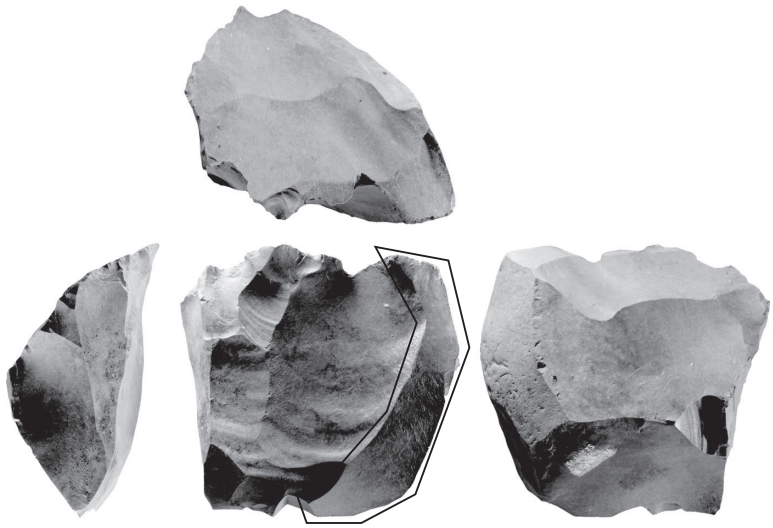


3

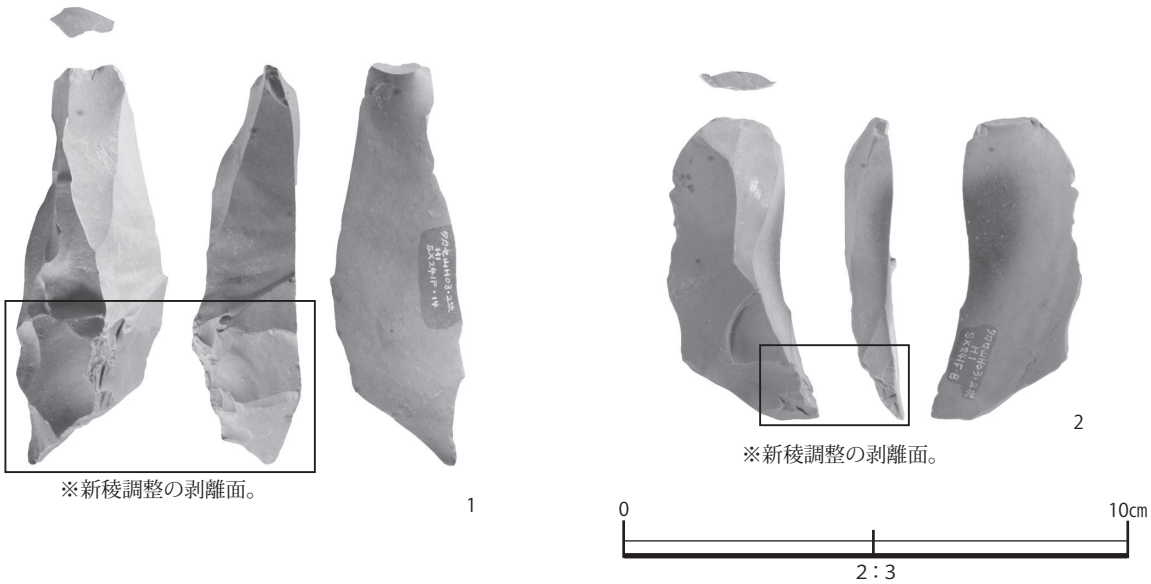
※前半で石刃剥離をしているが、
後半で短形剥片剥離となっている。

0　10cm
1:2

第 8 図　石刃核①



第 9 図　石刃核②

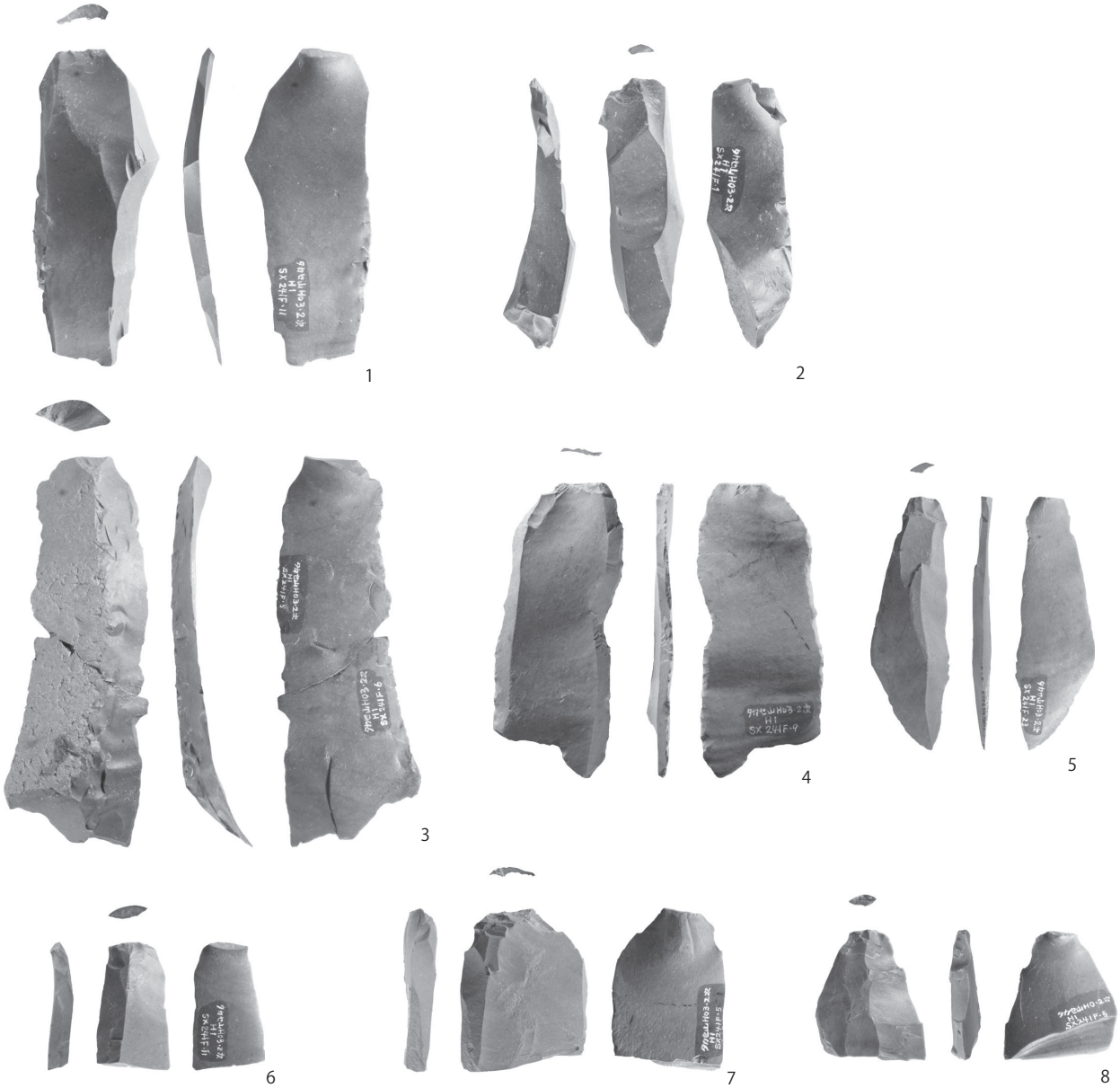


第 10 図　新稜付石刃

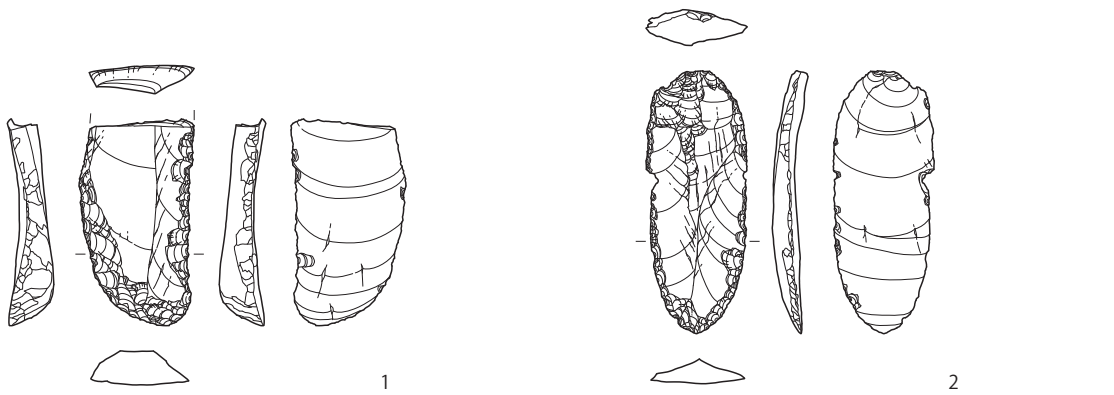
できたステップなどの凸部を除去した新稜調整と考えられる剥離面が認められる。

石刃剥離進行　J1 は、基本的に作業面が 1 面に限定される。非接合資料の石刃核も、作業面が 1 面に限られる（第 8・9 図）。つまり、SX241 石器資料からは、前面的（Frontal［仏］：2006 年ペルグラン石器製作教室より［大場 2007］）な石刃剥離の進行が認められる。ちなみに、同時期の大江町橋上遺跡では、回転的（Tournant［仏］：同上）な石刃の剥離進行形が確認でき、その結果、残核形態が円錐形を呈する石刃核が確認される（大江町 1984：第 13 図）。

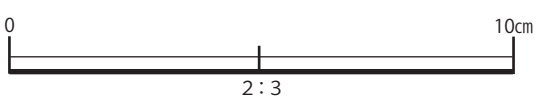
目的となった石刃の形態　J1 に接合する石刃は形態的にやや規則性に劣る。そのため、J1 以外の SX241 石器資料の石刃（8 点）を検討すると、幅 16.1 ～ 36.2mm、厚さ 3.8 ～ 13.1mm である（第 11 図）。個々の剥離ごとのばらつきを考慮すれば、上述の数値のおおよそ幅 20 ～ 30mm 程度で、厚さ 5 ～ 10mm 程度の石刃を目指して製作されたと思われる。ほかの大木 10 式土器片が出土した遺構出土の石刃製トゥールを確認すると、H8 トレンチ SX292 のエンドスクレイパーは、幅



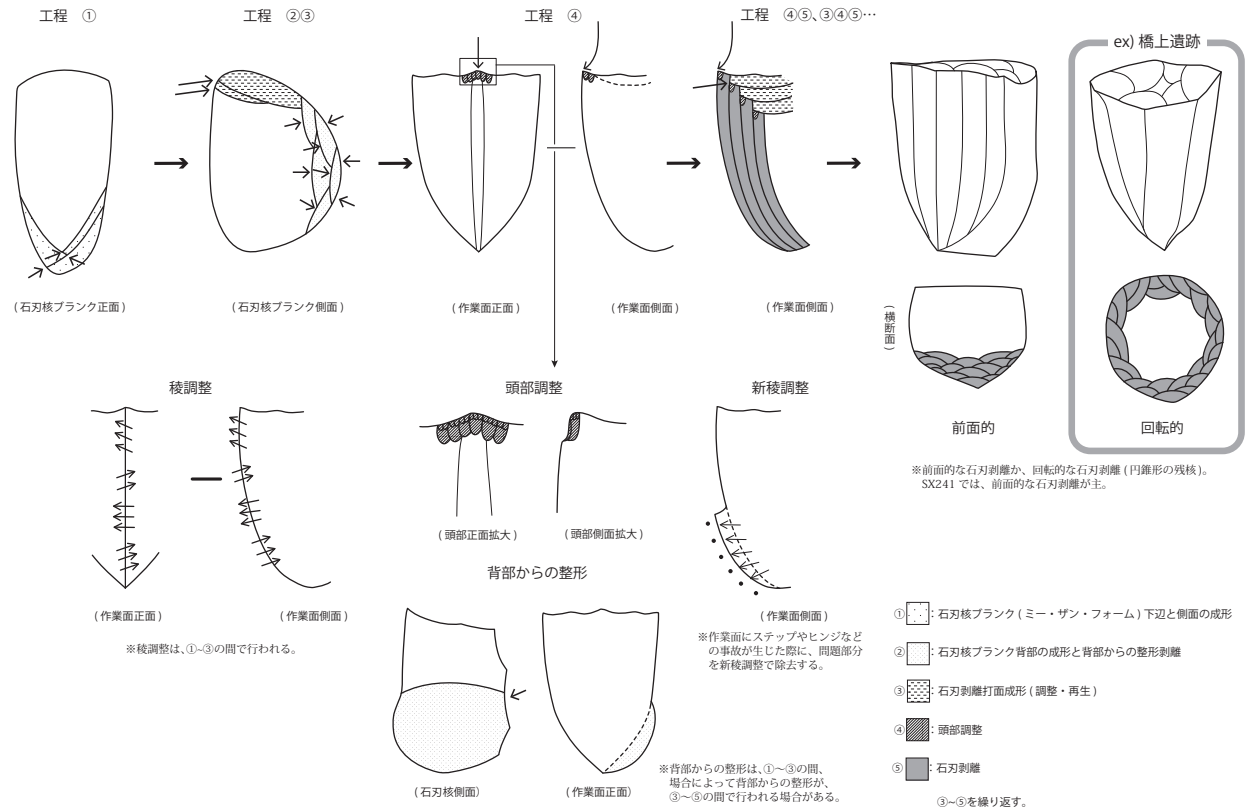
第 11 図　SX241 出土石刃



※ 1：H8 トレンチ SX292、2：H4 トレンチ SK401



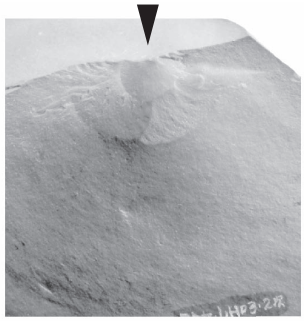
第 12 図　遺構出土石刃素材トゥール



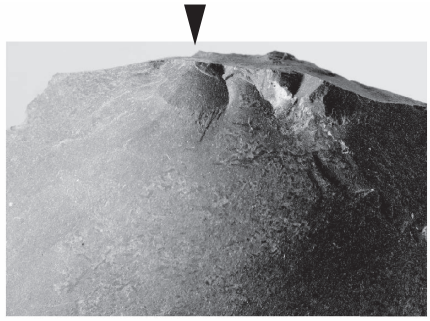
第 13 図　石刃剥離のメトード

22mm、厚さ 7.8mm であり、また H4 トレンチ SK401 の尖頭スクレイパーは、幅 20mm、厚さ 5mm である。これらのトゥールは、上述した規格に近い石刃が素材となっている（第 12 図）。長さについては、欠損資料が多いため、稜付石刃（J2）の長さと石刃核作業面の長さを参照すれば、およそ 5 ～ 10cm の長さが目的となったと思われる。上述の H4 トレンチ SK401 出土の尖頭スクレイパーは、長さが 5.21cm であり、上述の範囲に入る。目的となった石刃の背面は、SX241 出土の石刃や上述の遺構出土のトゥールと考慮すると、縦に 1 稜か 2 稜の稜線が取り込まれたと思われる。末端形状は、石刃核の下端部が外湾する形状や、上述の H8 トレンチ SX292 のエンドスクレイパーの刃部、すなわち素材石刃の末端からすれば、ウットルパセになることを意図していたかもしれない。ちなみに、中期末葉の当該地域の石器組成を検討した石井氏は、石刃とスクレイパーとエンドスクレイパーとの関係性を指摘している（石井 1994）。また、この時期のエンドスクレイパーの多くは、刃部が「し」の字状を呈した石刃の末端に設定されている。エンドスクレイパーの素材を意図して、末端がウットルパセになるように石刃が剥離されたことが考えられる。おそらく、「し」の字状を呈した刃部形状と目的とした機能との関連が窺われる。今後、使用痕分析などのエンドスクレイパーの機能に関する分析が待たれる。

石刃剥離のメトード　以上、J1 を中心にして、J1 以外の資料を補完的に用いて復原したメトードの概念図が第 13 図である。復原したメトードは、①石刃核ブランク（ミー・ザン・フォーム）下辺と側面の成形、②石刃核ブランク背部の成形、③石刃核ブランクの石刃剥離打面の成形、④頭部調整、⑤石刃剥離 5 つの工程からなる。とくに、③～⑤を繰り返すことで、石刃を量産することになる。なお、J1 の 1）では、石刃状剥片を剥離しているが、意図が不明であることから、メトードに含めていない。また、石刃剥離に適した稜がなかった場合は、①～③の間で稜調整が行われる。また、側面の成形では、背部を打面にして利用することがある。さらに、⑤のときに、作業面上にステップなどで凸部が生じた場合は稜線に対して横方向の剥離、すなわち新稜調整によって除去することや、背部からの整形でもって側面や作業面の凸部を除去するといった、事故に対する処理や石刃核整形の工程も含まれていると考えられる。経験的に言えば、このメトードを遂行するうえでは、石刃核ブラン

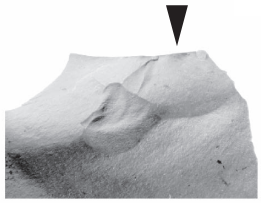


1　J1-2：工程①の厚手剥片



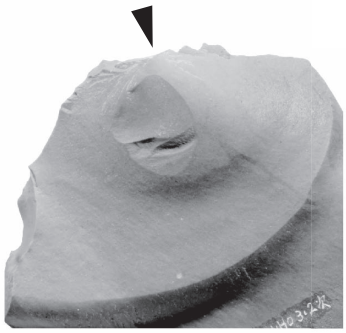
2　実験資料：大型硬石製ハンマーの直接打撃

3　硬石製ハンマーの直接打撃の様子

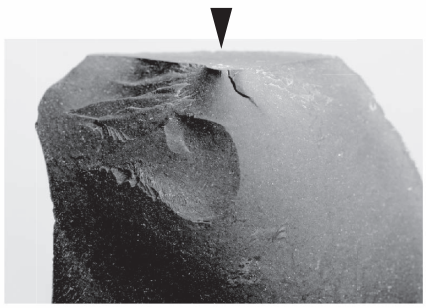


4　J1-7：工程④の背部成形剥片

5　硬石製ハンマー

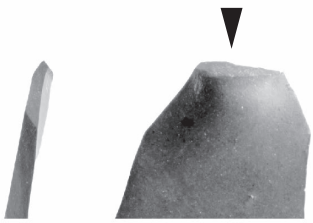


6　J1-11：工程⑥の打面再生剥片

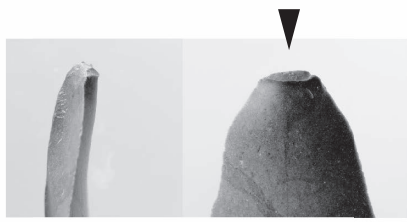


7　実験資料：中型硬石製ハンマーの直接打撃

8　打面再生の際の剥離予定位置の親指押さえ様子



9　第 11 図 -1：石刃



10　実験資料：有機質製ハンマーの直接打撃

11　鹿角製ハンマーの直接打撃の様子

※三角形は、打撃点の位置と剥離方向。
考古資料、実験資料ともに、写真のスケールは、5 以外すべて等倍。
大型硬石製ハンマーの直接打撃では、石英安山岩製で、径：約 15cm、重さ：805g のものを使用。
中型硬石製ハンマーの直接打撃では、石英安山岩製で、径：約 8cm、重さ：402g のものを使用。
鹿角製ハンマーの直接打撃では、エゾシカ鹿角製で、長さ 20cm、重さ 385g のものを使用。

第 14 図　石刃関連資料と実験資料に残る痕跡

クに適した形状と質の原石を選択し、ブランクの形状に仕上げる、そして的確に石刃を剥離していくうえで、次の工程を先読みするなどして、計画的に各工程を進めて行かなくてはならない。つまり、石材やメトードとテクニークに関する経験と知識が必要となるのである。

D　石刃剥離のテクニーク

硬石製ハンマーの直接打撃の痕跡　J1 を含め、工程①

で剥離された厚手剥片の剥離開始部には、おおむね明瞭なコーンと発達したバルブといった、典型的なヘルツ型の割れの特徴が認められる（第 14 図 -1）。また、工程②～④と⑥の打面調整（再生）剥片や背部成形剥片も同様で、剥離開始部に明瞭なコーン、そして発達したバルブが認められる（第 14 図 -4・6）。これらの特徴は、硬石製ハンマーの直接打撃の可能性が高い（第 14 図 -2・7：大場 2012）。実験資料との対比からも、その可能性が高いことを裏付けていよう。

想定される工程①～⑤と⑥の打面調整（再生）のテクニーク　これらの工程で用いられる硬石製ハンマーの直接打撃では、剥片の大きさに応じてハンマーの大きさ・重さを変えていることが想定される。とくに、工程①の厚手剥片を剥離する際は、大きくて重めのハンマー（石英安山岩であれば、径 10 ～ 15cm、重さ 700 ～ 800g 程度）が用いられたことが考えられる（第 14 図 -5 右）。工程②～⑥の打面調整（再生）では、それよりも小型で軽いハンマー（径 7 ～ 8cm、重さ 300 ～ 400g 程度）が用いられたことが考えられる（第 14 図 -5 左）。また、工程④と⑦の打面調整（再生）は、末端形状がヒンジの剥片が剥離されることから、ハンマーを振る際に回転をかけていた可能性が考えられる（大場 2007 を参照）。一方で、工程④と⑦の打面調整（再生）以外では、剥離された剥片の末端形状がフェザーであり、側面観も比較的直線的であることから、ハンマーは回転をかけないようにしてハンマーを振っていた可能性が考えられる。石刃核の保持については、工程①～③がハンマーの入射角がおおよそ約 60 度に入り、かつ正確な位置にハンマーが当たり、剥離の際にブレが生じないような固定の仕方が考えられる（ペルグラン・冨井 2007 参照）。イスなどに座した姿勢の太腿上で石材を固定する、あるいは利き手の反対の脇を締めるなどしたうえで固定した手で、石刃核の作業面を約 60 度に傾けて持って固定するといった、保持の仕方が想定される（第 14 図 -3）。また、工程④と⑦の打面調整（再生）では、イスなどに座した姿勢で打面を下にして石刃核を太腿上に置き、打面部中央を親指で押さえる保持の仕方が想定される（第 14 図 -8）。打面部を親指で押さえる理由は、剥離の進行を押さえるためである。

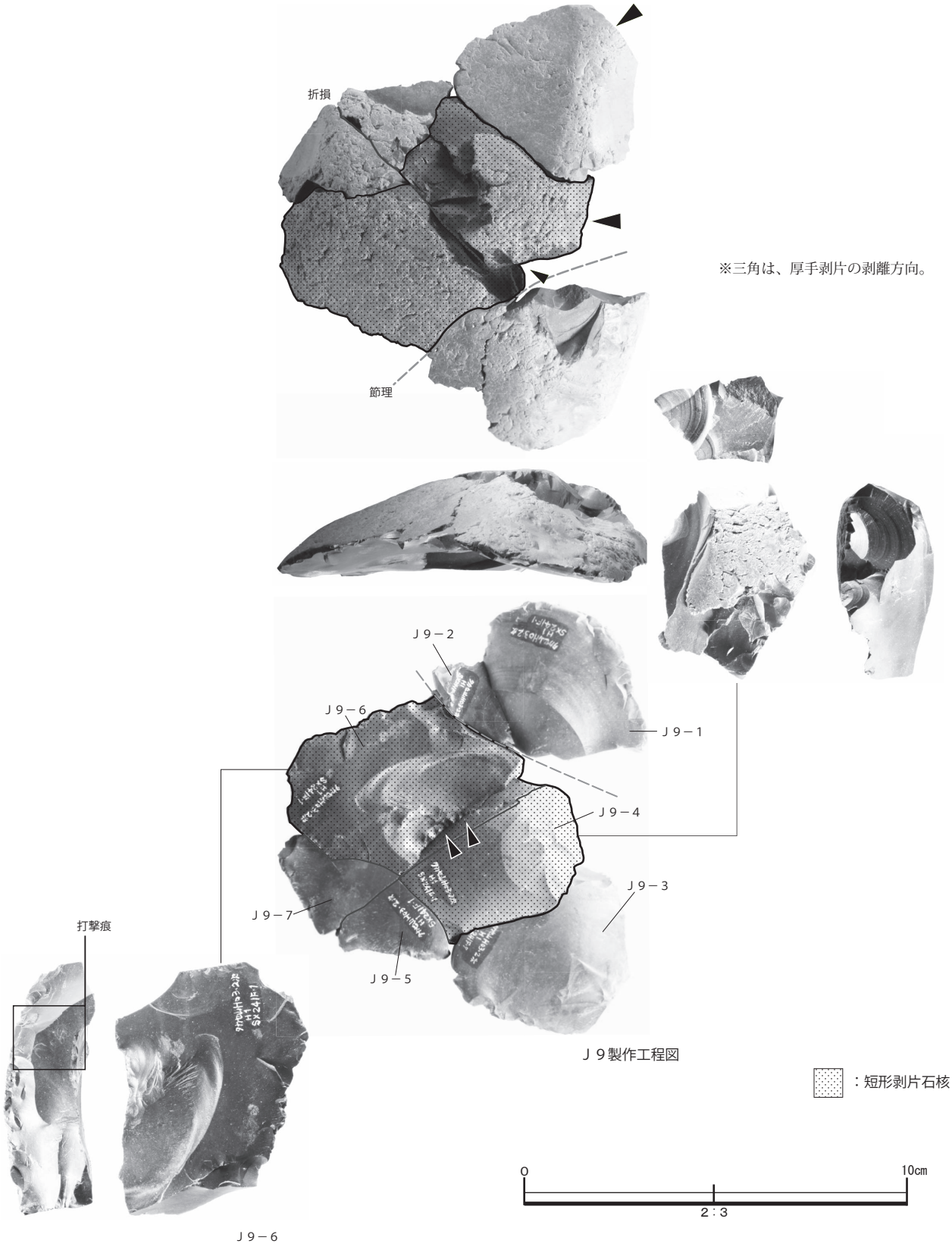
石刃に残る痕跡と想定されるテクニーク　石刃に残る剥離開始部の痕跡は、ほとんどの石刃が内傾打面で、剥離開始部がリップとあまり発達しないバルブといった、典型的な曲げ割れの特徴が認められる（第 14 図 -1）。加えて、前面角がおおよそ 70 ～ 80 度のものが多いことからも、石刃剥離は、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が高い（第 14 図 -10：大場 2012）。ハンマーは、エゾシカの鹿角製ハンマーの直接打撃の角座をハンマーの頭にしたものであれば、長さが 10 ～ 25cm で、重さが 200 ～ 500g くらいになる。石刃核の保持は、座した姿勢で利き手でない方の足の太腿上に石刃剥離作業面を下にして置き、打面を内股側に向けて作業面をおおよそ 50 度付近に傾ける保持の仕方が想定される（第 14 図 -11）。ただし、末端形状がウットルパセの石刃を剥離する際には、作業面が 60 度くらいに傾けることになる。またハンマーの軌道と石刃剥離に狙う稜線が一直線になるように、石刃核を据えなくてはならない。なお、さまざまなテクニークによる石刃剥離については大場 2013 で、各テクニークで残る痕跡については大場 2012 で解説しているので参照されたい。

間接打撃の可能性　ところで、SX241 石器資料の石刃関連資料については、石刃の規格性、剥離進行の規則性、パンチでなければ打撃できないような部分の剥離痕（たとえば、凹んだ部分の最低部からの剥離など）といった、間接打撃に関する痕跡が認められない。したがって、間接打撃が用いられた可能性は、かなり低いと考えられる。

以上、工程①から⑤に至るメトードに絡んだ、さまざまな保持の仕方を含んだ、大き目で重めの硬石製ハンマーの直接打撃、中・小型の硬石製ハンマーの直接打撃、そして有機質製ハンマーの直接打撃といったテクニーク、すなわち一連の動作連鎖が認められる。

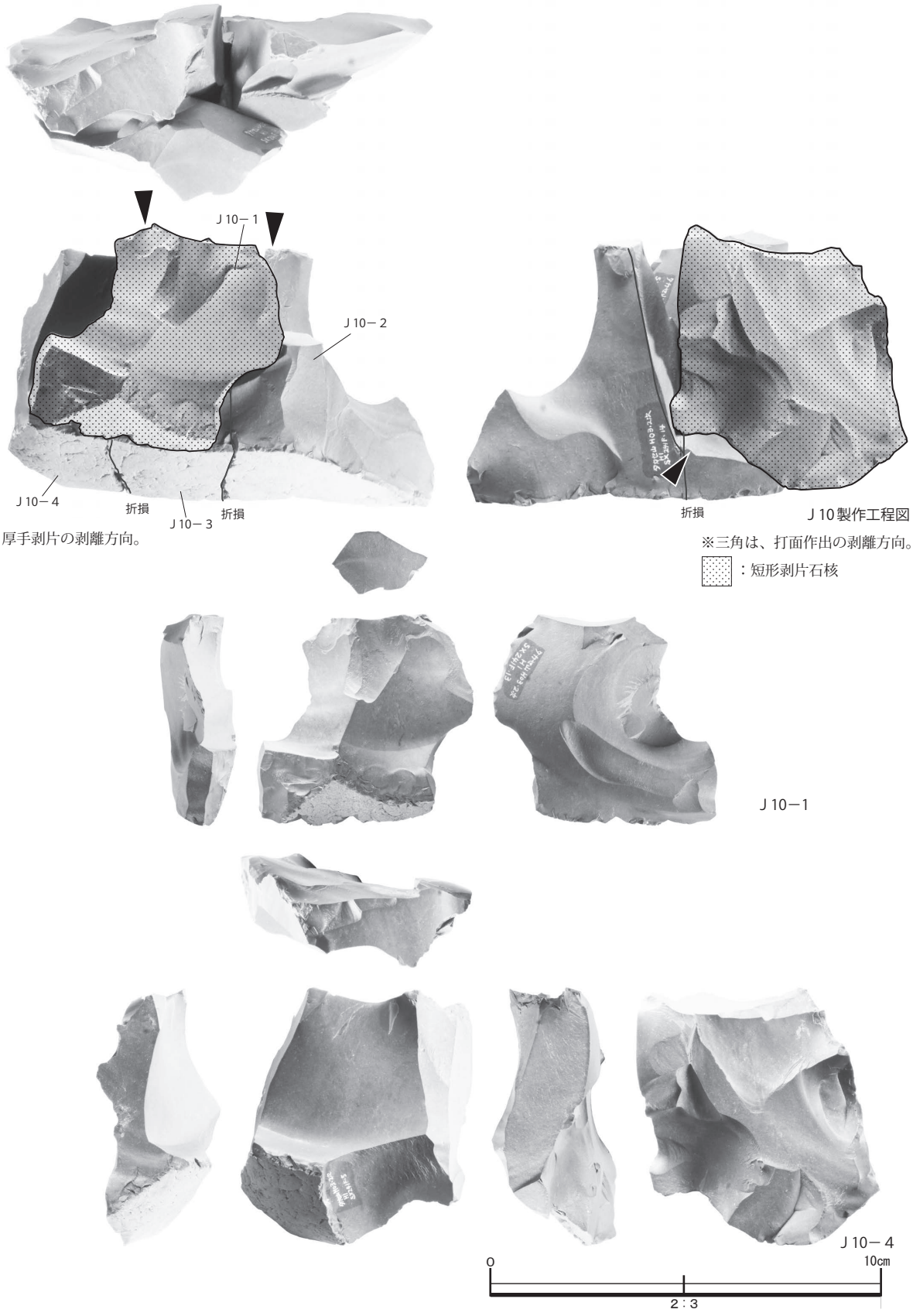
E　短形剥片剥離のメトード

SX241 では、石刃技術のほかにも、厚手剥片の腹面側から短形剥片を剥離する技術が認められる。短形剥片剥離技術に関する接合資料は、38 例になり、石刃技術関連に比べて数が多い。短形剥片石核の数も、69 点と多い（うち 1 点は、横長剥片石核［J13-2］であるが、メトードに違いが認められないことから、短形剥片石核のヴァリエーションと考えられる）。



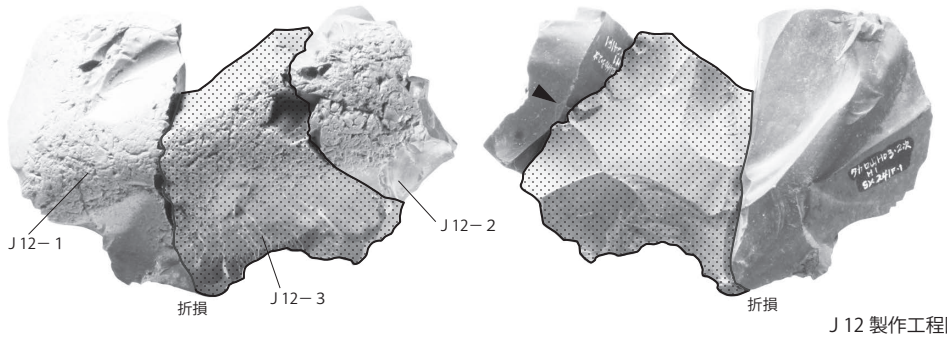
第 15 図　J9 接合資料

短形剥片石核の素材　短形剥片を剥離する石核の素材は、J11 のように厚手剥片ではなく節理で分裂した分割礫を用いているものもあるが、主として厚手剥片が用いられる。厚手剥片を意図して剥離した石核がないことから、厚手剥片は石刃を製作する初期工程、すなわち上述のメトードの工程①などで剥離されたものと考えられる。石刃関連資料と短形剥片石核との接合関係はないが、厚手剥片を剥離した石核がないことからすれば、石

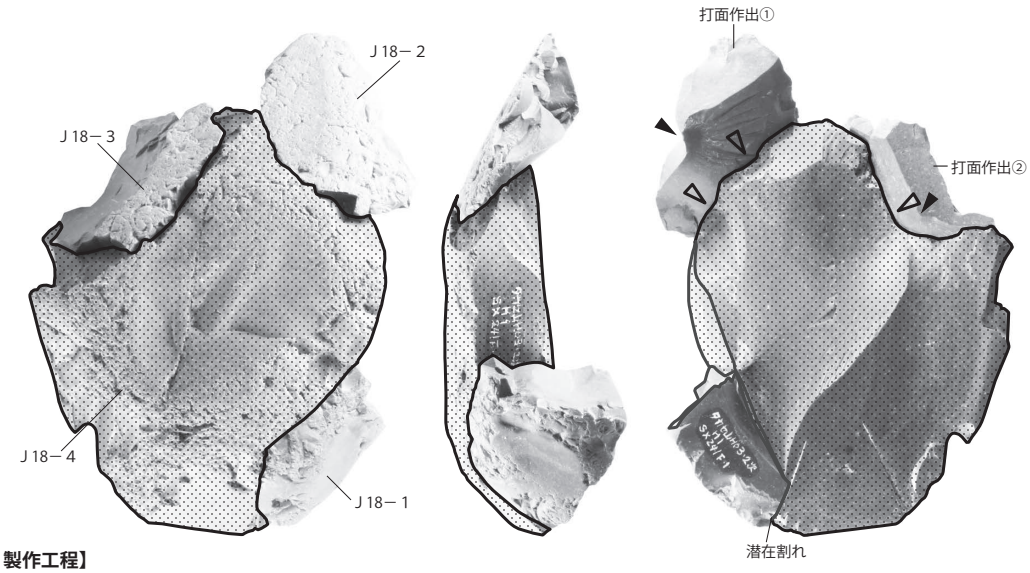


第 16 図　J10 接合資料

刃剥離メトードの工程①などで剥離された厚手剥片が、短形剥片石核の素材であったと考えられる。短形剥片石核の厚みをみると、厚手剥片に 2cm 程度の適度な厚さがあれば、短形剥片石核に利用している状況が認められる。また厚手剥片を利用して石刃を製作することがなく、厚手剥片は短形剥片剥離のためだけに利用されてい



J 12 製作工程図
※三角は、打面作出の剥離方向。
：短形剥片石核。



【J 18 製作工程】
1）大型剥片剥離
2）打面作出①（J 18－2）
3）短形剥片剥離（未接合）
4）打面作出②（J 18－3）
5）短形剥片剥離（未接合）

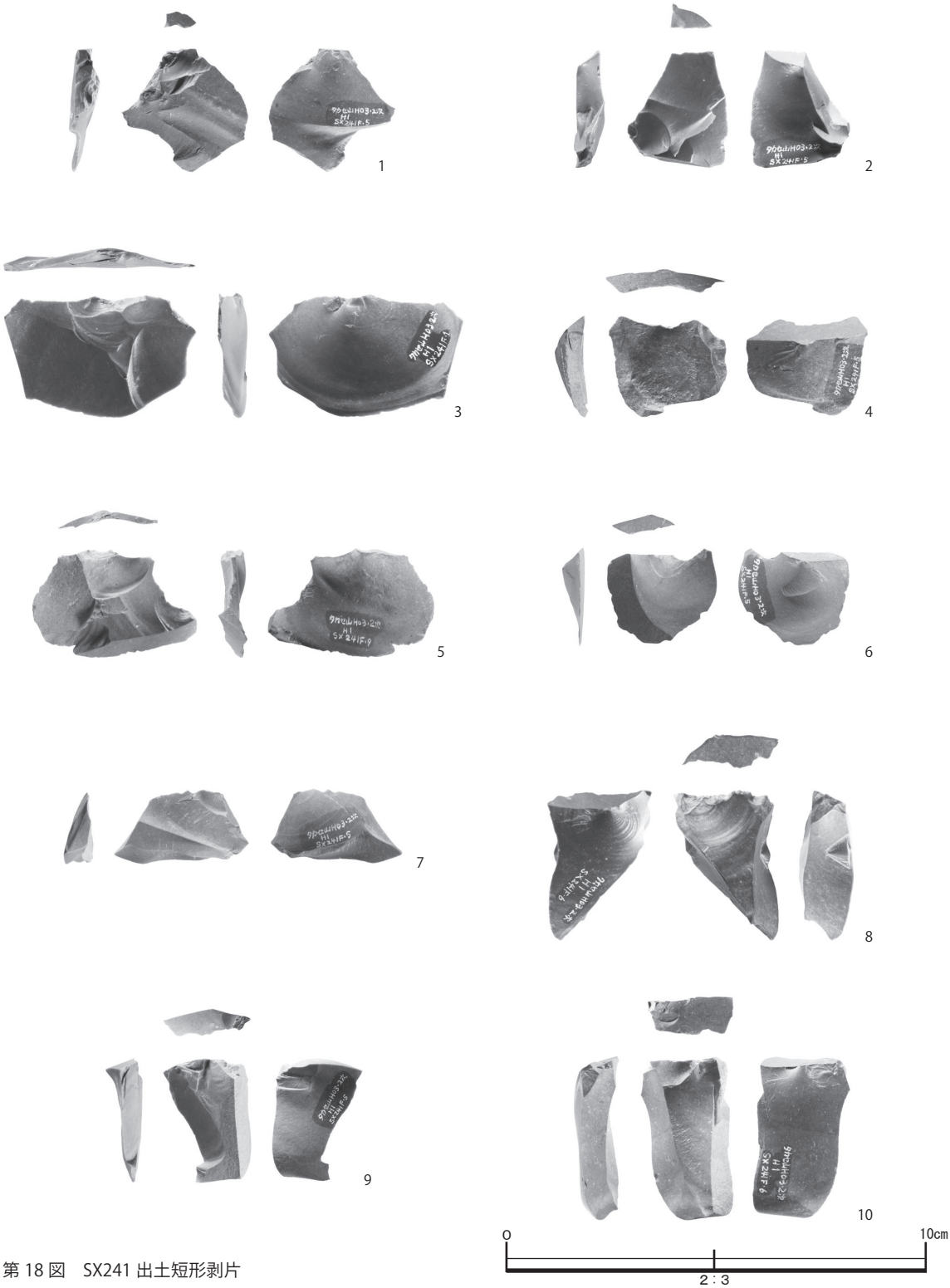
※中ベタ三角は、打面作出の剥離方向。
中ヌキ三角は、短形剥片の剥離方向。
：短形剥片石核。

第 17 図　J12・J18 接合資料

ることが特筆に値する。

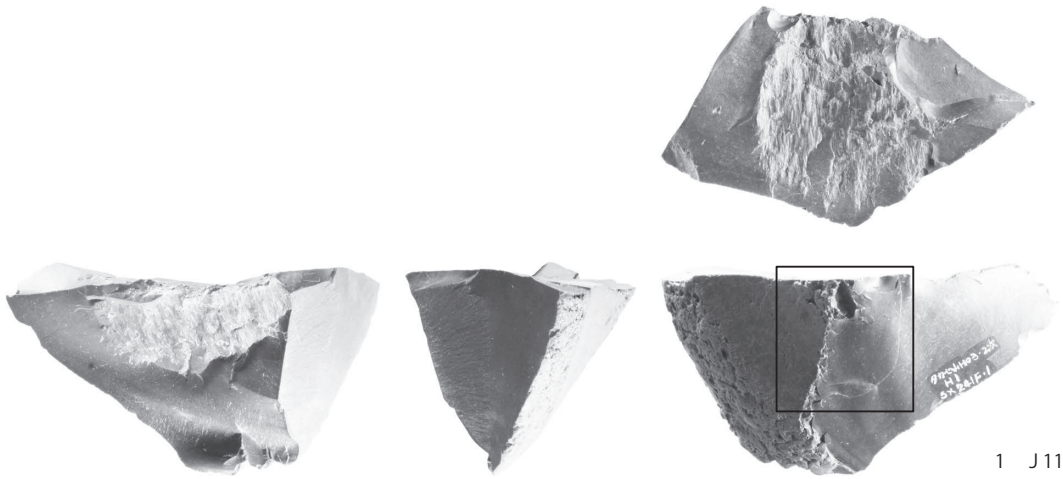
短形剥片の製作工程　38 例の接合資料のうち、代表的な接合資料を中心にして考察する。J9 や J10、J18、J21、J22 のように、基本的には 2cm 程度の厚手剥片を素材に、腹面を背面に取り込んだ、長さと幅が 2 ～ 3cm 程度の短形剥片を剥離している（第 15 ～ 17・19 図 -2・3）。短形剥片を剥離する打面は、a）J10-1、J21-2 などのように素材剥片の背面（第 16 図・第 19 図 -2）、b）J9-6 や J10-4 などのように折れ面（第 15・16 図）、c）J11-1 のように節理面（第 19 図 -1）、J12 や J18-1 のように剥離面打面（第 17 図）の場合が認められる。c）の場合は、短形剥片剥離に適した前面角がないとき、腹面からの剥離で短形剥片剥離のための打面を作出していることが考えられる。打面成形以外に、打面調整や頭部調整などの調整はほとんど見られない。打面のやや奥（前面角より 3mm 程度離れた部分）から剥離を加えて、末端形状がヒンジを起こした短形剥片が剥離されている。

短形剥片　剥離された短形剥片は、基本的に末端形状がヒンジを起こしている（第 18 図）。また、当然ながら、背面に石核素材剥片のポジ面を取り込んでいるものが多い。末端がヒンジを起こした短形剥片は、末端部分がやや肥大しているのはもちろんのこと、縦断面形が直線的、かつ並行的で、横断面形がレンズ状である。石鏃未製品である第 3 図 -1 は、欠損しているものの、残された素材面の形状から、短形剥片を素材にしている可能性



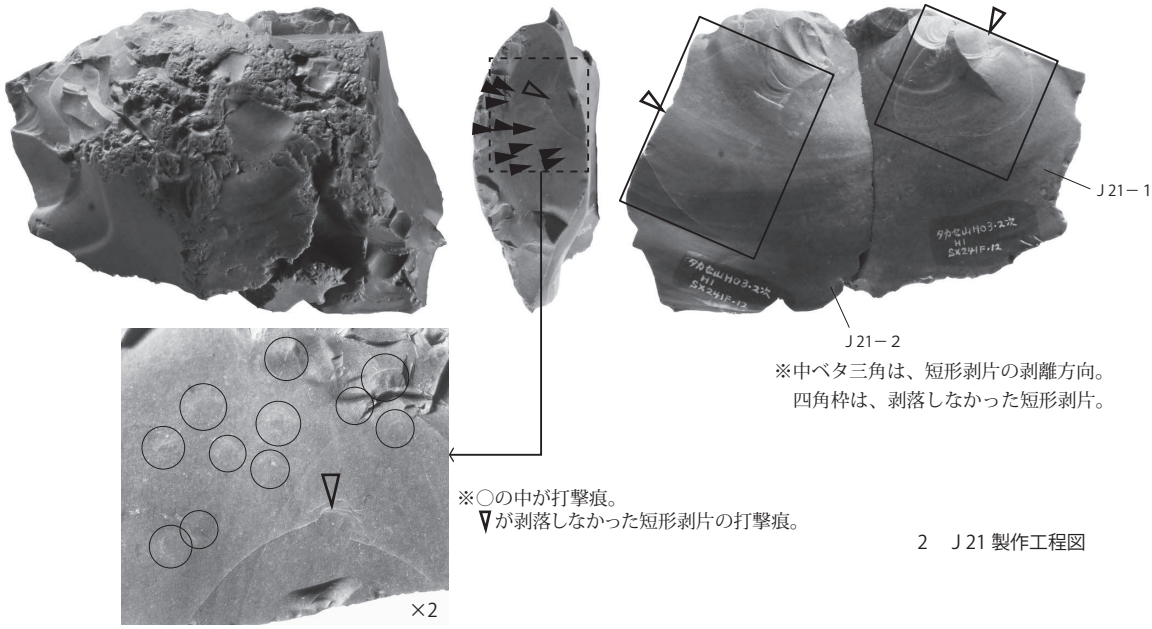
第 18 図　SX241 出土短形剥片

がある。経験上ではあるが、短形剥片は、断面形状が直線的、かつ並行的であること、そしてヒンジ部分が両面調整を押圧でするときに押圧の打面として役立てられる特徴から、石鏃や錐形石器などの小型石器の素材に適している。一方で、石刃が石鏃の素材となった可能性もなくはない。たとえば、折れた石刃のバルブ付近や、側面観が直線的な部分が石鏃素材に利用できる。また、石刃核の調整剥片も、小型石器の素材に利用できる。しかし、厚手剥片からわざわざ短形剥片を剥離している事実から、主としてこのような短形剥片剥離技術が石鏃などの小型石器素材の生産を担っていたと考えられる。なお、頭部調整や打面調整などで前面角を調整をしなかった場



1　J11－1

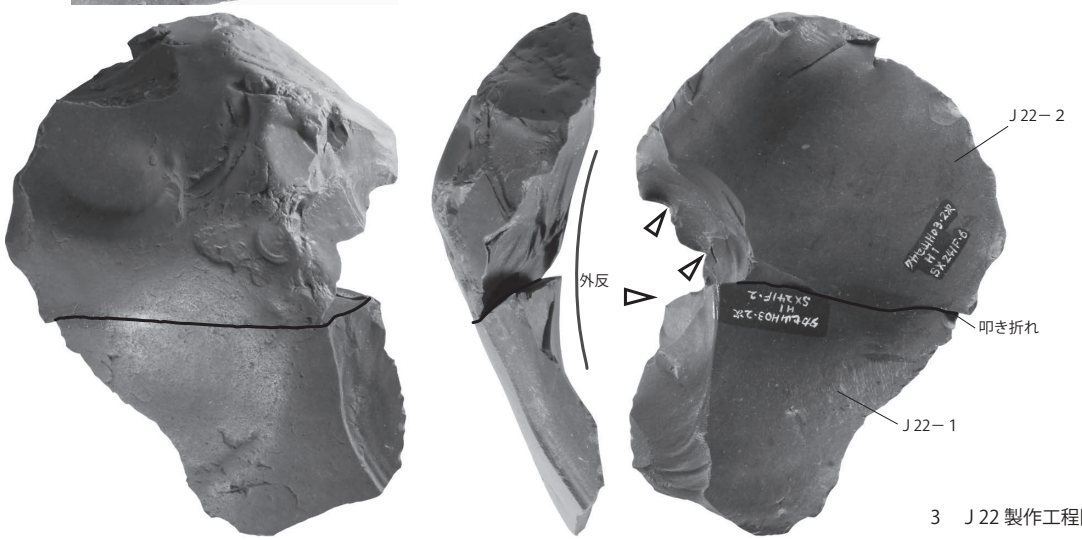
※四角枠は、剥落しなかった短形剥片。



※中ベタ三角は、短形剥片の剥離方向。
四角枠は、剥落しなかった短形剥片。

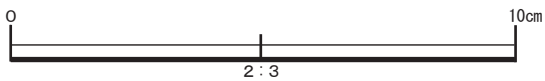
※○の中が打撃痕。
▽が剥落しなかった短形剥片の打撃痕。

2　J21 製作工程図

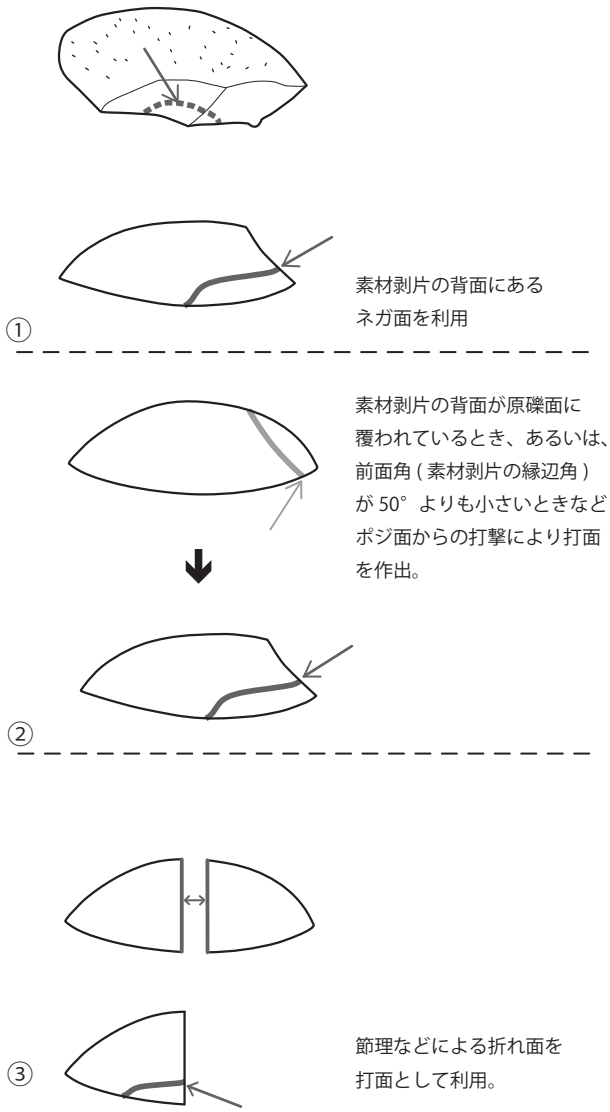


3　J22 製作工程図

※中ヌキ三角は、短形剥片の剥離方向。



第 19 図　J11-1、J21・J22 接合資料



第 20 図　短形剥片剥離のメトード

合は、打面のやや奥から硬石製ハンマーの直接打撃で剥離すれば、ヒンジを起こした剥片を剥離することができる。

短形剥片が少ない　また、SX241 石器資料では、短形剥片とその石核との接合があまり認められない。さらに、69 点の短形剥片石核に対して、技術学的に識別できた短形剥片が 144 点と少ない（石核 1 点当たり 1 ～ 10 点程度の短形剥片を剥離しているとすれば）。少々不自然とも考えられるが、しかし、剥離された短形剥片の大半が、石鏃の素材として利用されることを考えれば、接合の少なさ、短形剥片自体の少なさは、むしろ理にかなっていると言えよう。

短形剥片の剥離のメトード　第 20 図は短形剥片を剥離するメトードの概念図である。複雑な工程ではなく、ごく単純なメトードと言える。打面の状況は素材剥片の背面や折れ面、節理面といったバリエーションがあることから、打面の選択については臨機的であったと言えよう。

F　短形剥片剥離のテクニーク

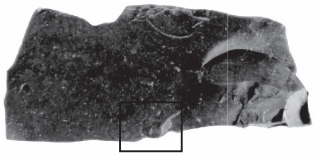
短形剥片に残された痕跡　短形剥片は、総じて明瞭なコーンと発達したバルブが認められる（第 21 図 -3･5）。また、珪化が強い石材のものは、打面上に円や弧を描く小さなクラックが認められる（第 21 図 -1）。加えて、短形剥片石核の短形剥片剥離痕の剥離開始部付近には、ネガのコーンや、その付近の砕けが認められる（第 21 図 -8・10）。

想定されるテクニーク　これらの痕跡から、短形剥片剥離には、硬石製ハンマーの直接打撃が用いられた可能性が高いことが考えられる。逆に、たとえば有機質製ハンマーの直接打撃で剥離するとき、前面角を調整していない場合は、打面の縁辺を打撃すると、打撃した部分が確実に砕けてしまう。また、有機質製ハンマーの直接打撃で、同じように短形石核の打面の奥を打撃するには、強い力が必要であり、打撃して剥離できたとしても割れが広く奥まで進んでしまい、その剥片の末端形状がウットルパセになるだろう。つまり、打面の奥を打撃する、かつ短形剥片を剥離するうえでも、硬石製ハンマーの直接打撃が合理的と言え、その可能性の高さを裏付けていよう。短形剥片石核の保持は、剥離が必要以上に延びないように、剥離予定位置に指を当て、石核作業面を 60 ～ 70 度に傾けるような仕方が想定される（第 21 図 -7）。この場合、やや固定が甘くても大丈夫であるため、座した姿勢での太腿上でも、利き手の反対の掌上で掴み持つくらいでも構わない。ただし、安定的に短形剥片を剥離したい場合は、固定が安定する座した姿勢で太腿の上で作業する必要がある。

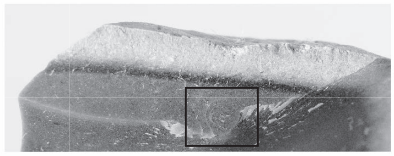
以上、短形剥片を剥離するごく単純なメトードと硬石製ハンマーの直接打撃を用いたテクニーク、すなわち短形剥片剥離の動作連鎖となる。

3 考　察

原石から製作へ　SX241 では、1 点の両面調整による槍先形尖頭器を除けば、二つの動作連鎖が認められる。

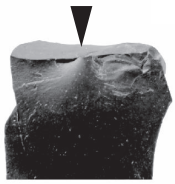


1　第 18 図 -1 の打面部（2 倍）

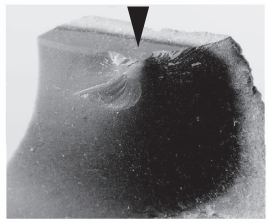


2　実験資料：2 段目の実験資料の打面部（2 倍）

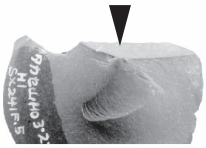
※四角枠が剥離開始部。打点上に円、または弧状のクラックが認められる。



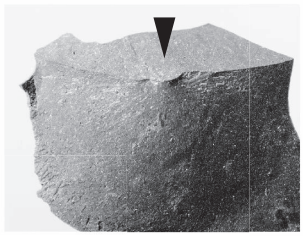
3　第 18 図 -1



4　実験資料：硬石製ハンマーの直接打撃

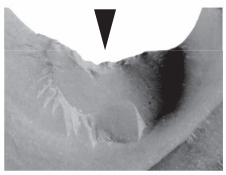


5　第 18 図 -6

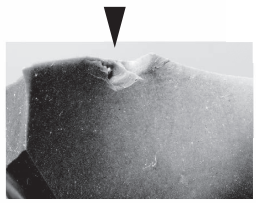


6　実験資料：
硬石製ハンマーの直接打撃

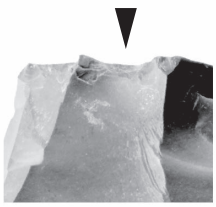
7　硬石製ハンマーの直接打撃で
短形剥片を剥離している様子



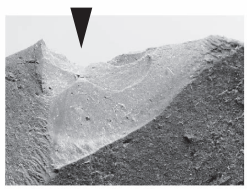
8　J10-1 の短形剥片剥離痕



9　実験資料：硬石製ハンマーの直接打撃
で剥離した剥離痕ネガ面



10　J10-4 の短形剥片剥離痕



11　実験資料：硬石製ハンマーの直接打撃
で剥離した剥離痕ネガ面

※三角形は、打撃点の位置と剥離方向。
打面部の写真以外、石器資料の写真は、等倍。
実験で使用したハンマーは、石英安山岩製で、
径：約 5 ㎝、重さ：214g。

第 21 図　短形剥片剥離関連資料と実験資料に残る痕跡

一つは石刃製作の動作連鎖、もう一つは短形剥片製作の動作連鎖である。素材供給の点からすれば、石刃剥離に用いられた原石は、原礫面の状態から、河川の転石のものがほとんどであり、亜円礫がほとんどであることからは中流域で採取できるものと判断される。北側に隣接する最上川の河川敷では、いまでも径 20cm 大の頁岩原石を採取することができる（秦 2011、大場も確認）。したがって、原石は遺跡近隣よりもたらされた可能性が考えられる。その原石を用いて、まず石刃製作が行われ、エンドスクレイパーなどの石刃製トゥールが作られた。一方で、短形剥片製作では、石刃製作の過程で生じた厚手剥片が石核素材に用いられた。つまり、石刃製作

の際に生じた製作残滓である厚手剥片を短形剥片石核に再利用、すなわちリサイクルし、石鏃などの小型石器を作るといった流れがあったことが考えられる。言い換えれば、あくまでも石刃製作が主目的であり、短形剥片製作は、石刃製作からの派生的な関係であったと言えよう。

技術の複雑さと単純さ　両者のメトードを比べてみても解るように、石刃剥離は石刃核の側面と背部成形、打面調整（再生）による打面作出、稜調整、背部からの側面整形、頭部調整、石刃剥離、打面前面角の維持といった複雑な工程を踏むのにたいして、短形剥片剥離はごく単純なメトードである。テクニークも同様に、石刃剥離の複雑な一連のテクニークに比べて、短形剥離のテクニークは、硬石製ハンマーの直接打撃のみで、保持の仕方を含めてもごく単純である。つまり、短形剥片剥離の動作連鎖は、石刃剥離の動作連鎖に比べて、きわめて“簡単”なのである。

割れなかった痕跡　その短形剥片剥離技術に関する資料の中で、J11-1 と J21 に認められるのが、短形剥片を剥離しようとしていた資料である（第 19 図 -1・2）。J11-1 には、節理面を打面に、２面の分割面でできた縦に延びる１本の稜線上を打撃したものの、割れなかった痕跡である短形剥片の外形に沿うヒビが認められるのである。J21-1 と J21-2 にも同様のヒビが認められる。J21-1 は、素材剥片の打面を短形剥片剥離の打面にしている。打撃した部分は、前面角が 90 度よりもやや開いていることから、本来は短形剥片を剥離するのに適切でない。しかし、打撃してしまっている。また、J21-2 は、素材剥片の背面を短形剥片剥離の打面に設定しているものの、打面の前面角よりも 7mm ほど奥を打撃してしまっているため、割れに至らず、ヒビで終わっている。

連打の痕跡　さらに、J21-2 の打面には、上述のヒビ以外に、少なくとも 11 か所の打撃痕が確認される（第 19 図 -2）。J21-2 のほかにも、J9-6 の左側の短形剥片剥離打面にも、連打の痕跡が、認められる（第 15 図）。J21-2 に残るの打撃痕の範囲は、およそ径 2.5cm の範囲である。一定程度石器作りの経験を積んだ者が打撃した場合は、およそ径 1cm の範囲の中に収まるものである（大場本人の経験と、多くの方々の石器作りの様子を観察しての所見）。しかし、この J21-2 の場合は、それよりも範囲が広いし、かつバラつきが大きい。短形剥片以外の目的で、わざと打撃を繰り返した、とも考えられようが、だとしても、その意図を知る手掛かりは遺跡の中、あるいは中期末葉の石器やほかの考古資料では確認することができない。むしろ、打撃を繰り返したその意図は、不明と言わざるを得ない。

適切でない打撃　また、打撃したけれども割れなかった痕跡のほかには、J21-1 のように、適切でない部分を打撃してしまったものがある。そのほかには、素材剥片の側面観が大きく外湾し、その背面右側の中央部の外湾の頂部付近を打撃した J22 がある（第 19 図 -3）。基本的に、側面観が外湾したものの頂部付近を打撃すれば、その打撃点を起点として折れてしまう。J22 は、その折れ易い部分を打撃し、見事に折れてしまっているものである。意図的に、折っているとも考えられるが、その折れに続く J22-2 の短形剥離は、打面作出をしていないで短形剥片剥離が行われているし、まだ短形剥片が剥離できるスペースを大きく残して、剥離が終了している。J22-1 も、まだ短形剥片が剥離できる容量があるにもかかわらず、剥離が行われていない。つまり、J22 からは、製作工程全体の計画性が認められないのである。したがって、J22 が折れてしまった原因は、石核が折れることを知らないで打撃した結果、石核が折れてしまった可能性が考えられる。あるいは、とくに考えもなしに打撃したかである。

短形剥片剥離の動作連鎖の演者　J9-6、J11-1、J21-1・2、J22 のように、SX241 石器資料には、割れに至らなかった痕跡や多数の打撃痕、不適切な部分に打面を設定し打撃してしまった痕跡がある資料が認められる。とくに、J11-1 と J21-1・2 のように、割れに至らなかった痕跡は、割れに至るくらいの力がなかったことを示している。使われたハンマーは、主目的としていた剥片の大きさと力加減を考慮すれば、小型（石英安山岩で言えば、大きさが径 5cm で、重さ 200g 未満）のものが用いられたことが想定される。また、J11-1 が高さ 42.2mm、幅 73.6mm、奥行き 44.8mm、重さ 72.32g、J21-1 が高さ 54.4mm、幅 63.1mm、奥行き 18.9mm、重さ 50.1g、J21-2 が高さ 56.9mm、幅 42.2mm、奥行き 27.3mm、重さ 48.85g である。３つとも、大きさが 100mm 未満で、重さも 100g 以下である。つまり、小型の硬石製ハンマーと小型で軽量の石核を用い、ごく簡

単なメトードをごく簡単なテクニークで実行し、かつ打撃コントロールが不安定で、打撃力が弱い人物であったことが考えられる。したがって、そのような人物と言えば、石器製作技術を習い始めるような“コドモ”であると言えよう。

「女性」？　一方で石器製作に従事していなかった成人女性との考えもあろうが、現在とは異なり、狩猟採集生活の当時として「非力な女性像」は考えにくい。むしろ、力の弱さ、ハンマーと石核の小ささからは、コドモの可能性を強く示唆していよう。コドモとは言えども、石核が小さくて、小さなハンマーを持ち、ハンマーを振る力が弱いコドモであるから、2～5歳くらいであろうか。

初心者の特徴　J9-6やJ21-2にみられる、執拗な連打は、なんとか剥片を剥離しようともがく、とくに習い始めの未熟者によく見られる行動である。また、初心者は、適切な重さや形のハンマーについて知らないこと、適切に剥離するためのハンマーの握り方を知らいないこと、ハンマーを振る際の適切な打撃フォームを知らないこと、石核のどの部分を叩けばよいのか知らないことなどが、特徴として挙げられる。

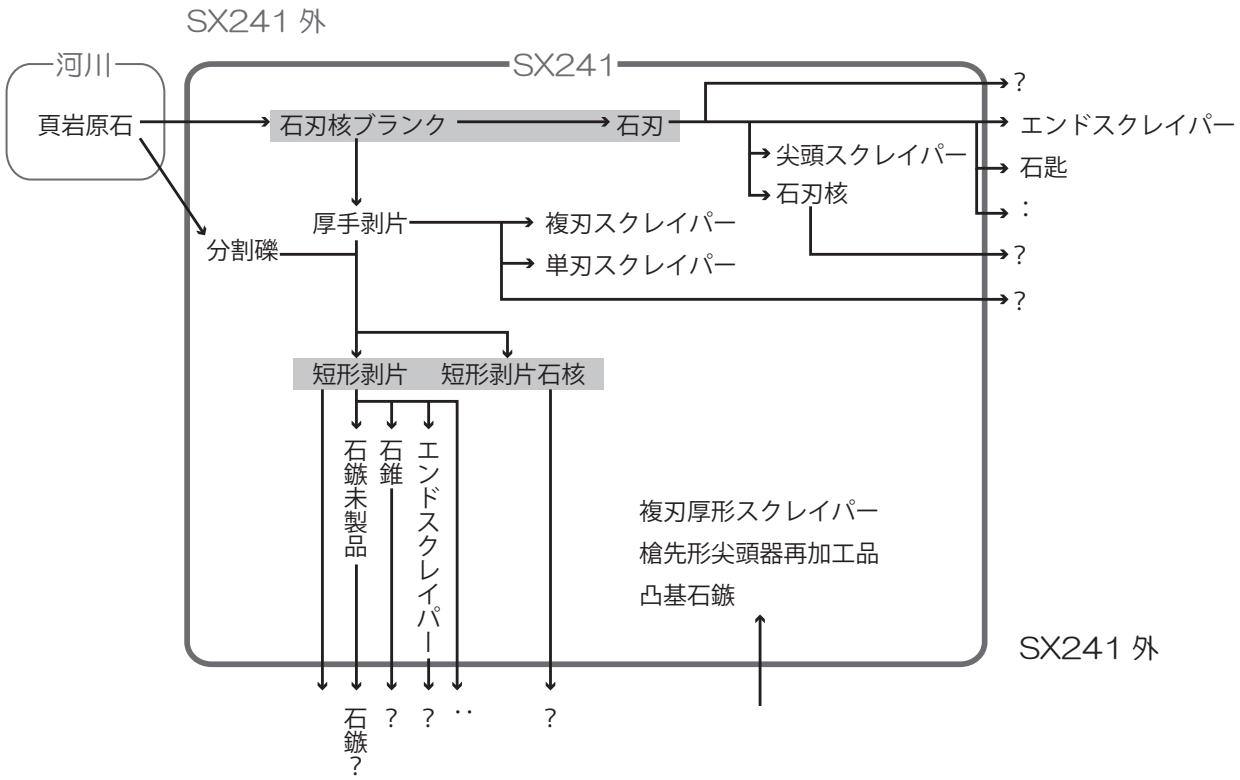
J22の演者　一方で、J22は、どの部分を叩いてはいけないといったような知識がまだ備わっていない、経験が浅い人物であったことが想定される。側面観が湾曲している部分の頂点を打撃すれば、石材がすぐに折れてしまうということは、一定程度経験があれば解かることである。とすれば、上述と同様のコドモか、あるいは前者のコドモよりも少し年を取ったコドモであろうか。

コドモ以外の存在　なお、もちろん、J12やJ18のように打面作出を行ったうえで短形剥片を的確に剥離している“上手い”割り手が製作した資料もある。したがって、短形剥片のすべてが、コドモのような技術が未熟な者が製作したとは限らない。

SX241出土石器の残された状況　SX241は、残念ながら個々の石器資料の出土状況に関する詳細な記録がない。その場合はたとえば、後期旧石器時代後半期の大阪府翠鳥園遺跡（高橋2001）のように、“剥離の座”から技能が異なる人物が、それぞれどの位置にいたのか、また上級者から石器製作技術をどのように学んでいたのかといったことは、検討に耐えうる記録がないため、遺棄であるかを検討することができない。しかし、上述したように、その出土状況の所見や、多数の土器片とともに出土していることを尊重すれば、土坑、あるいは廃絶した住居の跡地などの窪地に大量の石器資料を一括して廃棄した可能性が考えられる。ちなみに、仮にSX241が石器製作直後の石クズの遺棄であったとしたら、SX241石器資料における厚手剥片の二次利用率の高さや接合率の低さからは、当初の分布状態から相当に手が付けられていた、すなわち「荒らされていた」ことが想定される。

SX241の機能　ところで、石器製作残滓、すなわち割りクズは、鋭利であることから危険であり、そもそも本当に不用であるならば、一カ所に溜めずにすぐ近くの最上川にでも投棄すれば良い。しかし、わざわざSX241に一括して廃棄していたとみられる。逆に言えば、むしろ廃棄と言うよりは、石器製作で生じた割りクズを、意図的にSX241に溜めていたということになろう。つまり、SX241は、遺構群の南西端部に位置していることから、予想される中期末葉の集落の外縁の一角にあった、石器製作残滓を溜める“石溜め場”であった可能性が考えられる。集落にそのような石溜め場があるということは、わざわざ河川敷まで行かずに、適時、石溜め場で手ごろなサイズの石材を調達して、短形剥片製作のためにリサイクルすることを可能にしたと言えよう（冬場は、川に入れないことも溜めた理由の一つであろう）。そして、短形剥片剥離の演者から、石を割り始めたコドモの存在が窺われることから、集落にいたコドモが簡単な短形剥片剥離のメトードとテクニークを習得するために、この石溜め場であるSX241に来て、手ごろなサイズの厚手剥片分割礫を手にして練習していた。石鏃、すなわち弓矢が主な狩猟具であった縄文時代では、石鏃がおもな石器製作の重要課題であったと考えられることからも、はじめに習い覚える石器製作は、その素材を製作する短形剥片剥離であったということが考えられるのである。ちなみに、いまのわたしたち石の割り手でも、よく割りクズをリサイクルする。それは、まだ小型石器を作るのに使える、すなわち「もったいない」と感じるからである。

SX241から見える動作連鎖　資料的な制約があるものの、HO3期の調査で得られたSX241石器資料に絡んでいた動作連鎖を、改めて整理すると、第22図の模式図のようになる。資料からは、近隣河川からの頁岩原石の



第 22 図　SX241 石器資料からみえる動作連鎖模式図

採取、そして石刃剥離と石刃製トゥールの製作、石刃製作過程の割りクズのリサイクルとしての短形剥片剥離、石鏃などの小形石器の製作という一連の動作連鎖が想定される。さらに、厚手剥片や分割礫は、小型石器の素材生産用としてだけでなく、石器製作技術を学び始めるための、いわば“学習資材”としても用いられていた可能性が高い。その一方で、複刃厚形スクレイパーや槍先形尖頭器、凸基石鏃といった欠損品は、石刃や短形剥片を剥離する過程で出た割りクズとともに出土しているという状況から、使用し終えた“ゴミ”として投棄された可能性が考えられる。

4　まとめと展望

以上、SX241 出土石器資料の分析において、以下のことが明らかになった。

- 縄文時代中期末葉における高瀬山遺跡での石刃剥離のメトードとテクニーク（動作連鎖）
- 同じく高瀬山遺跡での小型石器素材生産技術である短形剥片剥離のメトードとテクニーク（動作連鎖）
- “石溜め場”としての SX241 の機能と製作残滓のリサイクル
- 一部の短形剥片剥離技術関連資料から認められた“コドモ”の存在（“コドモ”の発見）
- 縄文中期末葉の高瀬山遺跡における石器製作技術の学習の一端

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

石刃剥離の動作連鎖の演者　石刃剥離は、上述したように、短形剥片の動作連鎖と比べて、複雑なメトードとテクニークであり、これを実演するには一定の知識と経験を要する。つまり、この石刃製作には、J11 や J21-1・2、J22 の演者にはまずできない、高度な技術であると言えよう。したがって、SX241 石器資料からは、石器製作技術が未熟なヒト、それも習い始めのコドモと、それよりも少し経験を積んだコドモ、そして短形剥片を上手に割り取るヒト、さらに石刃をうまく割り取るヒトの存在が想定されるのである。なお、今回、石刃技術に関する技術差については、言及することができなかった。少なくとも、観察する限り、石刃技術にも技術差が認められることから、石刃製作に絡んでいたヒトも異なる技能を有する複数のヒトびとの存在が想定される。

SX241 の石刃技術の拡がり　高瀬山遺跡 HO3 期発見の SX241 の石刃技術は、同市柴橋遺跡 ST1 内 EP3 出土資料（石井 1996）、同市向原遺跡（安彦・石井 1992）、大江町橋上遺跡（石井 1984）でも確認できる。また、

会田 2000 に掲載された山形市熊ノ前遺跡と旧・鳴瀬町（現・東松島市）里浜貝塚出土の石刃製石器に残された剥離開始部の写真は、リップ形状の剥離開始部と発達しないバルブ形状が確認できることから、有機質製ハンマーの直接打撃の可能性が考えられる。つまり、技術的な関連性が遠隔地遺跡からも認められると言えるが、その技術的な関連性のより詳細な検討が必要となる。また、この中期末葉の石刃技術は、本地域だけではなく、秋田や青森でも確認されており、それらの地域との技術的な違いについて考察する必要があろう（吉川 2009、青森県埋蔵文化財センターの斉藤岳氏よりご教示）。なお、会田氏は、過去の実験結果より得られた統計的な数値から、分析資料に用いられていたテクニークを間接打撃と推定していたが、会田 2006 において撤回するという英断をされている。

中期末葉の石刃技術と短形剥片剥離技術の伝統　中期末葉に突如として現れる石刃技術であるが、それ以前の石器製作技術に関連性がないのか、あるいは中期末葉以降においてどのように変容するのかについては、今後の課題となる。一方で、短形剥片剥離技術は、後期旧石器時代の前半期の台形石器素材生産技術として、すでに存在していた。しかし、少なくとも縄文時代草創期中葉の高畠町日向洞窟遺跡西地区では、短形剥片でなく、槍先形尖頭器製作のときに剥離されるポイントフレークが石鏃素材となっていた（大場 2006 など）。そのことから、短形剥片剥離技術も石刃技術と同様に、その出現と衰退を繰り返していること、あるいは地域的にさまざまな展開があったことが予想される。その短形剥片剥離技術の変遷過程や地域性についても、検討すべき課題である。

石器資料集積遺構　従来、SX241 のような多数の石器資料が集積された遺構については、「デポ・埋納（田中 2001、磯村・吉川 2009 など）」、「管理空間としての片付け（阿部 2007）」などと解釈されてきた。SX241 では、「デポ・埋納」に関する証拠は、ほとんど認められないことから、その可能性は低い。しかし、一方で SX241 石器資料は、製作残滓と言え、その割りクズを捨てる、すなわち他所にあった製作場の「片付け」があったことが強く示唆される。また、この SX241 の事例は、石器資料集積遺構が、従来の「デポ・埋納」や「片付け」のほかに、“割りクズのリサイクルための石溜め場”や“石器製作技術の学習資材置き場”といったより多様な役割を果たしていた可能性を示している。今後、さまざまな遺跡で確認された石器資料集積遺構出土の石器資料について技術学分析を進める中で、その機能についてさらに追究していきたい。

石器製作技術の学習の変遷　高瀬山遺跡 HO3 期では、第 3 次発掘調査 J15 トレンチにおいて後期旧石器時代後半期の杉久保型ナイフ形石器群が発見され、また翌年の寒河江市教委の学術調査によって、J15 トレンチ発見の杉久保型ナイフ形石器群の拡がりが確認された（山埋文 2012、寒河江市教委 2012）。その旧石器資料については、現在整理作業が進められ、一部を公表している（大場 2012）。短形剥片剥離技術はないものの、杉久保型ナイフ形石器群もまた、石刃技術を中心としており、縄文中期末葉の石刃技術との比較とともに、遊動生活の後期旧石器時代と定住的な生活の縄文時代中期末葉において、石器製作技術の学習にどのような違いが認められるのかも、大きな課題となろう。

謝辞

本稿作成に当たっては、高瀬山遺跡 HO3 期発掘調査に当たった今正幸氏より調査についてのご教示をいただきました。東北学院大学教授の佐川正敏氏からは、日頃よりご指導・ご鞭撻をいただいております。技術学研究については、フランス国立科学研究所のジャック・ペルグラン氏、京都大学名誉教授の故・山中一郎氏、郡山女子短期大学准教授の会田容弘氏より、ご教示をいただきました。また、秋田県立博物館の吉川耕太郎氏より文献を提供していただきました。青森県埋蔵文化財センターの斉藤岳氏より、青森県の中期末～後期初頭の石刃技術について、ご教示をいただきました。末筆ながら記して、感謝申し上げます。

引用文献

会田容弘　2000 「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通―東北地方南部のありかた―」『山形考古』第 6 巻第 4 号　p.88 ～ p.107　山形考古学会

会田容弘　2006 「石刃技法について―東北地方の頁岩製石刃石器群研究のために―」『第 20 回東北日本の旧石器文化を語る会　東北日本の石刃石器群』p.26 ～ p.32　東北日本の旧石器文化を語る会

安彦政信・石井浩幸　1992 「縄文時代の石刃と石刃核―西村山地域における資料集成（二）―寒河江市向原遺跡の調査から」『西村山地域史研究』第 10 号　p.90 ～ p.105　西村山地域史研究会

阿子島功　1994 「山形盆地西縁の洪積世末～沖積世の地形発達史と遺跡立地」『西村山地域史の研究』第 12 号　p.29 ～

p.46　西村山地域史研究会
阿子島功　1997 「Ⅱ　寒河江市の最上川北岸氾濫原の微地形と遺跡立地」『高瀬山遺跡（市道山西線）発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 14 集　p.12 ～ p.16　寒河江市教育委員会
阿子島功　1999 「Ⅶ　寒河江市付近の最上川段丘面と氾濫原面の形成年代と活構造運動」『落衣長者屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 19 集　寒河江市教育委員会
阿部朝衛　1986「縄文時代の縦長剥片生産技術」『法政史学』第 38 号　p.18 ～ p.46　法政大学史学会
粟田　薫　2010 『弥生時代石器の技術的研究』 真陽社
石井浩幸　1984 「C. 橋上遺跡における石器製作作業の分析」『橋上遺跡発掘調査報告書』山形県大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集　p.72 ～ p.98　大江町教育委員会
石井浩幸　1994 「縄文時代中期（大木 10 式期）の石器組成－寒河江川・最上川流域の遺跡調査から－」『西村山地域史の研究』第 12 号 p.47 ～ p.60　西村山地域史研究会
石浩浩幸　1996 「寒河江市柴橋遺跡出土の石器接合資料」『西村山の歴史と文化』Ⅲ　p.1 ～ p.20　　西村山地域史研究会
磯村　亨・吉川耕太郎　2009 「三種町堂の下遺跡における縄文時代の石器集積遺構」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第 23 号　p.20 ～ p.29　秋田県埋蔵文化財センター
イニザン．M．－L・．ロッシュ．H・．ティキシエ．J（．大沼克彦ほか訳）　1998 『石器研究入門』 クバプロ
大場正善　2007 「＜紹介＞ペルグラン石器製作教室に参加して―フランス技術学研究にふれて―」『古代文化』第 58 巻第Ⅳ号　p.152 ～ p.159　古代學協會
大場正善　2012 「動作連鎖の概念に基づく技術学のおけるテクニークの同定法―山形県高瀬山遺跡出土杉久保型ナイフ形石器群の石刃剥離のテクニーク同定を例に―」『第 26 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』 p.59 ～ p.68　東北日本旧石器文化を語る会
大場正善　2013a 「コラム２：「最上川流域の“頁岩”で作られた石器～旧石器・縄文・弥生時代のヒトが残した生活の記憶を読み解く～」」『山形県立博物館　平成 25 年度企画展　最上川流域の文化と景観』p.18 ～ p.19　山形県立博物館
大場正善　2013b 「石刃をどうやってつくるの？―石刃を割り取る道具と身ぶり・手ぶり」『平成 25 年度特別企画展　ひらけ！旧石器人の道具箱―東北の旧石器―』p.22 ～ 27 （公財）仙台市民文化事業団　仙台市富沢遺跡保存館　地底の森ミュージアム
大場正善　2013c 「動作連鎖の概念に基づく技術学における石器製作実験―意義と必要性とその方法について―」『シンポジウム　日本列島の細石刃石器群の起源』p.74 ～ p.80　八ヶ岳旧石器研究グループ
寒河江市教育委員会　1966 『寒河江市高瀬山縄文時代遺跡調査報告書』
寒河江市教育委員会　1982 『高瀬山遺跡群分布調査報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
寒河江市教育委員会　1986 『高瀬山 K・L 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
寒河江市教育委員会　1987 『高瀬山 B・K 遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
寒河江市教育委員会　2001 『高瀬山（市道駅南高瀬山線・島落衣線）遺跡発掘報告書』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 6 集
寒河江市教育委員会　2002 『寒河江市内遺跡発掘報告書 (9)』山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第 22 集
寒河江市教育委員会　2012 『寒河江市内遺跡発掘調査報告 (18) 書』第 34 集
高橋章治　2001 「翠鳥園遺跡の技術と構造」『翠鳥園遺跡発掘調査報告書』p.192 ～ p.221　羽曳野市教育委員会
田中英司　2001 『日本先史時代におけるデポの研究』千葉大学考古学研究叢書 1　千葉大学考古学研究室
秦　昭繁　2011 「山形盆地の珪質頁岩の原石調査」『山形考古』第 9 巻第 3 号　p.16 ～ p.26　山形県考古学会
ペルグラン , J.・冨井　眞　2007 「石割りにおける考古学的概念としてのテクニークとメトードについて―石割りに対する認知論的取り組みの諸要素―」『古代文化』第 59 巻第Ⅳ号　p.61 ～ p.76　古代學協会
宮城県教育委員会　1986 『大梁川・小梁川遺跡』
山形県教育委員会　1990 『高瀬山 K 遺跡第 1 ・ 2 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 158 集
山形県教育委員会　1992 『高瀬山 K 遺跡第 3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第 179 集
山形県埋蔵文化財センター　2000 『高瀬山遺跡（2 期）第 2・3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 80 集
山形県埋蔵文化財センター　2001 『高瀬山遺跡（SA）第 2・3 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集
山形県埋蔵文化財センター　2004 『高瀬山遺跡（1 期）第 1 ～ 4 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 121 集
山形県埋蔵文化財センター　2005 『高瀬山遺跡（HO 地区）発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集
山形県埋蔵文化財センター　2008 『高瀬山遺跡（HO）2 期発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 167 集
山形県埋蔵文化財位センター 2012『高瀬山遺跡 HO3 期発掘調査報告書』財団法人山形埋蔵文化財センター報告書第 200 集
山中一郎　2004 「考古学における方法の問題」『郵政考古紀要』第 35 号　p.1 ～ p.37　郵政考古学会
山中一郎　2006 「石器技術学から見る「石刃」」『第 20 回東北日本の旧石器文化を語る会　東北日本の石刃石器群』p.13 ～ p.25　東北日本の旧石器文化を語る会
山中一郎　2007 「「動作連鎖」の概念で観る考古資料」『古代文化』第 58 巻第Ⅳ号　p.30 ～ p.36　古代學協会
山中一郎　2009「動作連鎖の概念を巡って」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』 p.3 ～ p.16　日本考古学協会
山中一郎　2010 「「ミドルレンジ」そして「動作連鎖」」『遠古登攀―遠山昭登君追悼考古学論集―』p.453 ～ p.460 『遠古登攀』刊行会
山中一郎　2012 「型式学から技術学へ」『郵政考古紀要』第 54 号　p.1 ～ p.41　郵政考古学会
吉川耕太郎　2009 「上岩川遺跡群からみた石刃生産とその運用に関する予察」『秋田考古学』第 53 号　p.1 ～ p.14　秋田考古学協会
ルロワ＝グーラン，アンドレ（荒木　亨訳） 1973 『身ぶりと言葉』 新潮社
Karlin, C. and Julien, M. 1994 Prehistoric technology: A cognitive science ? *The Ancient Mind; Elements of congnitive archaeology*, eds, Colin Renfrew and B. W. Zuborw, p. 152~p.164 Cambrige U. P.
Tixier, J.　1967 Procédés d' analyse et questions de terminologie concernant l' étude des ensembles industriels du Paléolithique récent et de l' Epipaléolithique dans l' Afrique du Nord-Ouest' , *Background to Evolution in Africa* p.771 ～ p.820 eds. W.W. Bishop and J.D. Clark Chicago: University of Chicago.

最上川中流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布

菅原哲文

1　はじめに

山形県における最上川流域は、縄文時代の遺跡分布が密な地域である。特に山形盆地では、登録されている遺跡数が多く、今までの調査成果が蓄積されつつあり、集落相互の関係はこれから検討されるべき課題となっている。隆盛した中期の遺跡は中期末になると急激に減少し、後期に移行すると遺跡数はきわめて少なくなり、集落の内容は貧弱なものとなる。筆者は、山形盆地西部での集落変遷の様相を検討したことがある (菅原 2008)。ここでは山形盆地や村山盆地を含む最上川中流域を対象とし、縄文時代中期初頭から後期前葉にかけての遺跡分布と時期的な変遷を検討したい。

2　時期区分について

縄文時代中期の時期区分であるが、最上川流域を含む東北地方南部は、大木式土器の主体的な分布圏になる。中期大木式は、大木 7a・7b・8a・8b・9・10 式が設定されており、中期の時期区分はこれに従った。一方、後期初頭から前葉の当地域の土器型式であるが、内容の把握や型式的位置づけはまだ不明な点が多い。後期初頭の土器群は、他地域の編年と対応させての細分も可能であろうが、後期初頭の遺跡数や資料数は少なく、細別時期を設定しても遺跡や集落の動向を把握するのが困難と考えられる。そのため大木 10 式後で、後述する南境 1 式の前に該当する時期を後期初頭期とし、一括して扱うこととする。また、後期前葉の時期区分については、関東地方の堀之内 1 式・2 式に併行する型式として、南境 1 式、2 式を採択して対応することとした [1)]。

3　対象とする地域と研究の動向

最上川流域の縄文時代遺跡分布や領域に関するこれまでの研究について触れておきたい。佐藤禎宏氏は、県内の縄文時代中期の遺跡分布を検討し、分水嶺と水系を基準に縄文時代の集団領域を想定した (佐藤 1981)。縄文時代の最上川流域を、7 つの中遺跡群と 21 の小遺跡群に区分した。最上川中流域については、Ⅳ尾花沢盆地周辺部、Ⅴ山形盆地周辺部を設定し、Ⅳ地域は、A 丹生川流域、B 葉山北東麓に、Ⅴ地域は、A 乱川・立谷川周辺、B 須川上流域、C 白鷹山北東部、D 白鷹山北西部、E 寒河江川流域、F 葉山南東麓に細別した領域設定を行った。

小林圭一氏は、最上川流域の庄内・最上・村山・置賜の各地域において、縄文時代後晩期の遺跡分布と立地の傾向について土器型式別に遺跡分布の分析を行った (小林 2001)。また、黒坂雅人氏は縄文時代中期の白鷹山丘陵と周辺地域おいて、遺跡分布をもとに十三の遺跡群を設定した。白鷹丘陵地域は他の支群と交流を持ちながら、西側から東側への石器供給のネットワークとして、山形盆地と米沢盆地とのネットワークとして機能していたことを想定した (黒坂 2004)。

本論では、これらの先行する研究をふまえ、遺跡分布の領域について時期毎の分布傾向、変遷、地域内の遺跡の関係について検討したい。分析対象とする地域は最上川中流域の山形盆地、および尾花沢盆地とした。該当する市町村は、村山地方の山形市をはじめとした 14 市町村である。この地域は、さらに最上川の支流になる河川を中心にいくつかの領域が設定できる。

4　最上川中流域の遺跡数と立地傾向

最上川中流域の村山地方 14 市町村の縄文時代中期および後期前葉の時期の遺跡において、土器型式での時期把握が可能な遺跡、おおまかな型式把握が可能な遺跡を対象とし、所在地・地形・標高・帰属する河川流域・細別時期・調査実施遺跡は、遺構・遺物の概要について表 5 ～ 11 に記した [2)]。掲載遺跡数は 318 遺跡であり、山形県で登録されている遺跡が主である。県で未登録であるが県史や市町村史などで掲載された、時期や所在地が特定できる遺跡も採録している。中期、後期など大別時期しか判明しない遺跡は分析対象から除外した。

表 1・図 1 は、最上川中流域の時期別の縄文遺跡数を

示したものである。表１上は中期前葉 (大木 7a・7b 式期)・中葉 (大木 8a・8b 式期)・後葉 (大木 9・10 式期)・後期前葉 (後期初頭・南境１式・南境２式期) の大別時期での遺跡数、表１下は型式区分で集計した遺跡数である。遺跡の時期は、報告で大木７式、８式など細別型式が表記されていないものなどは前葉・中葉などに含めているので、大別時期の対象遺跡数が多くなっている。当地域の傾向としては、大木 7a 式期から大木 8b 式期にかけて、遺跡数の急激な増加が認められ、大木 8b 式期が遺跡数のピークとなる。大木９式期に減少に転じ、大木 10 式は減少が大きく、後期初頭も急激な減少となる。南境１・２式期にかけては、減少は止まるようであるが、遺跡数が少ない状態で推移していく。

山形県内の土器型式別遺跡数に関する先行する研究として、佐藤庄一氏作成のグラフが報告されている (佐藤 1981)。傾向は、大木 7a・7b 式期にかけて緩やかな増加が認められるが、大木 8a 式にかけて急激な増加を示し、8b 式がピークとなる。大木９式では減少が始まり、大木 10 式から後期初め (杉の堂式) にかけて急激に遺跡が減少する。当地域の様相は、佐藤氏のデータの傾向に概ね合致する。

表２は、中期初頭から後期前葉にかけての遺跡の消長を示した。大木 7a ～ 7b、7b ～ 8a 式期にかけては、新たに出現する遺跡が大半を占め、消滅する遺跡よりも存続する遺跡の方が多い。大木 8a ～ 8b 式期にかけては存続する遺跡が大半を占める。8b 式～９式においては、消滅する遺跡が最も多く、ついで出現する遺跡と存続する遺跡が同程度である。大木９～ 10 式期にかけては、消滅する遺跡が最も多く、次いで存続する遺跡、出現する遺跡の割合は最も少ない。大木 10 式～後期初頭にかけては、ほとんどの遺跡は消滅してしまう。以後は、少数の遺跡が継続してゆく傾向がうかがわれる。

表４・図２は、最上川中流域の時期別遺跡立地を示したものである。遺跡の地形について、山形県刊行の土地分類基本調査に示す地形図に従い、山地・丘陵・台地・段丘・低地・その他に分類し、各遺跡の立地について時期的な傾向と変化を検討した。大木 7a 式期では、台地・段丘の立地比率が高い。低地は他の時期と比較して比率が少ない。以後、大木９式期にかけて、台地・段丘および丘陵の割合は少しずつ減少し、低地・山地などに進出しているように見受けられる。大木 10 式期や後期前葉では立地傾向が変化し、台地・段丘の増加が認められる。

表３は、時期別の遺跡標高分布を示した。8a ～ 8b 式期は、標高 300m を超える遺跡が少数ながら増加する。後葉期の９・10 式期は若干ながらも標高が高い遺跡は減少し、後期前葉期になると標高 200m を超える遺跡はかなり少なく、標高 51 ～ 200m の範囲にまとまる。縄文時代では「ボンド・イベント」と呼ばれる限定的だが顕著な寒冷化や寒冷化直後の急激な気温の上昇現象が何度か起こり、中期から後期にかけての 4300 年前 (4.3ka イベント) の寒冷化現象は地球規模の影響があり、地形や植生にも影響が及んでいたことが指摘されている [3]。遺跡立地の変化は、この事象に関連するものであろうか。

5　各時期の遺跡分布の様相

最上川中流域の時期別遺跡分布の傾向を検討する。図３に最上川中流域の中期から後期前葉にかけての遺跡分布を示した。遺跡の分布傾向を把握した上で、これまでの縄文遺跡の地域区分研究を考慮し、最上川中流域において、いくつかの地域区分を設定した。

A 須川上流域 (上山盆地)

B 山形盆地南西部 (B1) および白鷹山北東部 (B2) －須川の中・下流域のうち、須川左岸と、東側の丘陵地・山地にかかる領域である。この領域は須川の支流となる本沢川・富神川・南沢川が流れ、山地から盆地にかかる領域は遺跡分布が密である。分布に B1 と B2 の２つのまとまりが見られる。

C 馬見ヶ崎川流域－馬見ヶ崎川扇状地を含む。須川右岸の領域もここに含めた。

D 山形盆地東部－この地域は、東側の山地・丘陵地から最上川へ合流するいくつかの河川と扇状地で形成される。さらに、立谷川流域 (立谷川扇状地を含む)D1、押切川・倉津川・乱川流域の D2、白水川・日塔川流域の D3 の小分布域が認められる。

E 寒河江川流域－東流する寒河江川と寒河江川に合流する熊野川、水沢川などの支流を含む領域で、河川の合流域に遺跡の分布が多い。

F 山形盆地西部および白鷹山北西部－この地域は、F1

山形盆地西部の寒河江周辺の地域、F2 月布川流域、F3 山形盆地から上流にわたる最上川の五百川峡谷地帯の小分布地域が認められる。

G 葉山南東麓－この地域は南側の河北町古佐川の流域 G1 と、北側の最上川と合流する樽石川などの支流域 G2 の小分布域で構成される。

H 尾花沢盆地南部－尾花沢盆地の南端、葉山の北東麓で、最上川の段丘沿いや富並川などの支流で構成される地域である。最上川の左岸で H1・右岸で H2 の小分布域が設定できると思われる。

I 尾花沢盆地丹生川流域－尾花沢盆地の丹生川と支流で構成される地域で遺跡分布が特に多い地域である。

図 4 ～図 7 は、中期の前葉・中葉・後葉期と、後期前葉の各遺跡分布を示したものである。なお、遺跡の型式が判別できるように表記した。また、小林達雄氏がセトルメントパターンを提唱したように、遺跡の立地・集落規模・出土遺物の状況において、地域の拠点的集落、規模が小さく短期間の集落、キャンプサイト的な性格の遺跡、居住ではない狩猟や採集、作業場などの生業に関係する遺跡などの存在が想定される。発掘調査が行われた遺跡はごく一部であるので、ここでは調査された遺跡が地域内でどの性格の集落にあたるのか推定するにとどめ、未調査でも遺物により集落の性格づけが可能と思われる遺跡があれば触れておきたい。以下、各時期と地域毎に遺跡分布の様相を述べる。

(1) 中期前葉 (大木 7a・7b 式期)

当期の遺跡分布を図 4 に示した。大木 7a 式期では、最上川中流域おいて集落構成が明らかにされた調査例は乏しい。7b 式期も住居跡の報告はあるが、集落の全体像は把握されていない。

A 須川上流域：大木 7a 式期では、牧野遺跡 (11) と台の上遺跡 (2) で遺物が出土している。集落の様相は明らかではないが、牧野遺跡は 7a 式期の古い段階から土器が確認されており、当期の主な集落になる可能性がある。7b 式期になると、牧野遺跡に当期と考えられる住居跡が検出されている。土器などが廃棄された捨て場が存在し、三脚土製品を中心とする祭祀関係遺物がまとまって出土している。須川支流の思い川流域に位置する思い川遺跡 (12) でも集落が出現する。7b 式期より集落が形成されると考えられ、三脚土製品などもこの時期に伴うと思われる。須川上流域は、この 2 遺跡が中心となると考えられる。また、須川に合流する蔵王川沿いにも蔵王開拓遺跡 (13)、前下遺跡 (14) などの分布が確認される。

B 山形盆地南西部および白鷹山北東部：7a 式期では、柏倉八幡遺跡 (40) がある。当遺跡は大木 6 式期から出現し 8b式期まで存在する。遺構の状況は不明であるが、当地域の主な集落になる可能性もある。7b 式期には、百々山遺跡 (32) が存在する。前期大木 5・6 式期、中期大木 7b ～ 8b 式期の遺跡として登録されている。7b ～ 8a 式期の大量の縄文土器、土偶、三脚土製品、三脚石器、石棒などが出土しており (赤塚ほか 1969)、7b 式期ではこの地域の中核的な集落であった可能性が高い。白鷹山北東部では、向坂遺跡 (75) が、後続する 7b 式や中葉・後葉期まで存在し、この地域の拠点となる集落と考えられる (黒坂 2004)。

C 馬見ヶ崎川流域：当地域は 7a 式期の飯田遺跡 (60) と城南町遺跡 (51)、7b 式期の中桜田遺跡 (46) があるが、集落内容や遺跡相互の関係は不明である。今後の調査の進展が望まれる。

D 山形盆地東部：D1・D2・D3 の各小地域に遺跡の分布が確認される。D1 立谷川流域であるが、中地蔵遺跡 (63) から 7a・7b 式期の遺物が出土する。遺物内容や立地より、一時的な集落に該当すると思われる。石達山遺跡 (84) は 7b 式期になるが内容は明らかではない。D2 押切川・倉津川・乱川流域であるが、倉津川の下流に大木 7a 式期の板橋 1 遺跡 (99) が認められる。遺構は不明であるが、土器などの遺物が廃棄されている。板橋 2 遺跡 (100) は、大木 7a 式から 8a 式まで遺物が確認され、板橋 1 遺跡から後続する遺跡と考えられる。7b 式期には同じ流域に沼田遺跡 (96) が、押切川上流域には鍛冶屋敷遺跡 (105) がある。D3 白水川・日塔川流域では、小田島城跡 (119) から 7a・7b 式の遺物が出土するものの、当期の遺構は確認されていない。小池山遺跡 (122) も 7a 式期となるが詳細は不明である。

E 寒河江川流域：本流沿いや支流との合流地点に分布が見られるが遺跡数は少ない。熊野遺跡 (194) が 7a・7b 式期の遺跡である。山居遺跡 (198)、富沢 I 遺跡 (181) では、7b 式期の遺物が出土している。この地域の集落の様相はまだ不明が部分が多い。

F 山形盆地西部および白鷹山北西部：高瀬山遺跡 (175)

で、7a・7b 式期の集落が確認されている。高瀬山遺跡 (HO)3 期の調査では、遺跡の東部、高瀬山古墳の周辺と段丘縁辺を中心にトレンチによる調査が実施され、古墳南側の斜面部や段丘平坦面より、大木 7a 式期を中心とする遺物包含層や土坑が検出された (山形県埋文 2005)。住居域は当調査では不明であるが、高瀬山古墳東側の段丘平坦面に存在するものと推測される。なお、前期末の大型住居跡を中心に構成される集落域は、北西に約 250m の近接する地点にある。その他、藤田原遺跡 (205) は 7b 式期の遺跡になる。月布川流域には 7a・7b 式期の大鉢遺跡 (213) がある。白鷹山北西部の最上川沿いは、当期の遺跡は不明である。

G 葉山南東麓：南側 G1 古佐川流域には、お月山遺跡 (190) や曲沢遺跡 (188) などの 5 ヵ所の遺跡分布が確認される。面的な調査は実施されていないが、前葉期にこの流域に継続的に集落が営まれていたと考えられる。北側 G2 の最上川西側丘陵地でも峯山遺跡 (125) や北原遺跡 (139) などの分布が確認される。

H 尾花沢盆地南部:この地域は、比較的遺跡分布が多い。H1 の富並川流域では岩倉遺跡 (156) が 7a 式～ 9 式古段階まで比較的長期にわたって営まれる遺跡である。最上川の段丘沿いには、前葉から中葉にかけて存在する来迎寺遺跡 (235) がある。最上川の対岸 H2 の落合遺跡 (166) も、7a 式～ 9 式期にわたる遺跡である。範囲は東西 300m、南北 600m、面積は 150,500 ㎡と大規模である。県埋蔵文化財センターによる平成 7 年の調査では面積 382 ㎡と小規模ながら、中期中葉を中心とする遺構が検出されている (山形県埋文 1996)。この領域は、7b 式期になっても継続する遺跡や出現する遺跡が多い。

I 尾花沢盆地丹生川流域：丹生川に合流する支流毎に遺跡分布が確認される。原の内 A 遺跡 (308) は 7b 式期に出現し、この地域の主要な集落になると考えられる。山形県による第 2 次調査で 7b 式期の住居跡が 1 棟検出され、土偶の出土も認められる (山形県教委 1983)。

(2) 中期中葉 (大木 8a・8b 式期)

図 5 に当期の遺跡分布を示した。

A 須川上流域：思い川遺跡 (12) はこの領域の主要な集落跡と考えられる。思い川 A 遺跡では、11 棟の竪穴住居跡が検出され、うち 1 棟は 7b ～ 8a 式期、7 棟は大木 8a ～ 8b 式になる。埋設土器も確認されている (山形県教委 1981)。思い川 B 遺跡では 5 棟の竪穴住居跡が検出され、大木 8a ～ 8b 式期が主と考えられる (上山市教委 1980)。思い川遺跡は当期と考えられる三脚土製品や土偶などの祭祀遺物の出土が多く、この時期の中心的集落と思われる。牧野遺跡 (11) は、8a・8b 式期も存在するが、主体は 7b ～ 8a 式期と考えられる。土偶・大量の三脚土製品・三脚石器が出土し、この時期に伴うものと考えられる (上山市教委 1974・1975)。台の上遺跡 (2) は県による調査で、大型柱穴 35 基や袋状土坑 3 基などが確認され、長軸 9m を超える建物跡の存在も報告された (山形県教委 2004)。遺構の時期は 8b 式期とされる。大型住居跡を伴う中核的な遺跡になりそうである。須川から山形盆地への入口地点にも遺跡が分布する。

B 山形盆地南西部および白鷹山北東部：B1、B2 各々の領域で遺跡分布が密となる。百々山遺跡 (32) は、前葉から存続すると考えられ、三脚土製品・三脚石器・土偶など祭祀関係遺物の出土が豊富である。この地域の中心となる集落と考えられる。B2 地域は 8a 式期から継続する遺跡も多く、8b 式期に遺跡数が最も多くなる。発掘調査が行われた遺跡が乏しく、詳細は不明である。

C 馬見ヶ崎川流域：8a 式期に馬見ヶ崎扇状地の扇頂部に熊ノ前（くまのべ）遺跡 (53) が出現し、大木 10 式期まで存続する。当遺跡は山形県や山形市によって 4 次にわたる発掘調査が実施された。第 2･4 次調査区で 8a 式期 2 棟、8b 式期 2 棟、8a ～ 8b 式期 17 棟 (内検出のみ 8 棟)、8b ～ 9 式期 1 棟の竪穴住居跡が検出されている (山形県教委 1979)。住居は分布が密集し重複が多い。検出された住居跡は円形プランの小・中規模のもので、大型住居跡は確認されていない。また、8b から 9 式期にかけての墓壙が確認された。墓壙には逆位に埋設された深鉢の土器棺が納められている。祭祀遺物は、当期に伴う土偶や大型石棒が出土している。周辺遺跡は、上流に松留遺跡 (56)、南西には松山遺跡 (52) がある。

D 山形盆地東部：D1 地域は、立谷川の河岸段丘沿い、東側の丘陵沿いに遺跡の分布が密となる。8a 式期から 8b 式期まで存続する遺跡と、新たに 8b 式期に出現する遺跡で構成されている。D2 地域の倉津川流域と周辺の低地には、8a 式期に板橋 2 遺跡 (100) があり、8b 式

期に願正壇遺跡 (97) が出現する。西沼田遺跡 (98) にも 8b 式期の遺物が確認される。砂子田遺跡 (95) は、南側の扇状地扇端部に立地する。押切川流域では、上流と下流域に遺跡の分布が認められる。D3 の白水川・日塔川流域では、小田島城跡 (119) から、8a・8b 式期の遺物が出土している。遺構の状況は不明である。薬師原遺跡 (117) は、8b 式期のみの短期間の遺跡である。

E 寒河江川流域：上流域では、山居遺跡 (198) が長期的に存続する遺跡である。住居跡は中期後葉が中心であるが、集落に由来する 2 ヵ所の捨場では、1000 箱以上の遺物が出土し、中期中葉期の土偶も出土した (山形県埋文 1998)。山居遺跡周辺にも、8a・8b 式期の遺跡が分布する。下流域では、富沢 I 遺跡周辺で遺跡の分布が認められるが、主要な集落となるのかは不明である。

F 山形盆地西部および白鷹山北西部：F1 地域の最上川の段丘上に立地する高瀬山遺跡 (175) では、8a・8b 式期の住居跡や遺物は、HO 地区や 1 期地区で確認されているものの、現段階で拠点的な集落は確認されていない。むしろ柴橋遺跡 (179) において、長方形プランの大型住居跡や、深さ 3m に及ぶ大型のフラスコ状土坑が確認されており (寒河江市教委 1989)、当遺跡がこの地域の中核的な集落に該当する可能性が高いものと考えられる。

F2 の月布川流域では、最上川との合流地点付近に、小見遺跡 (206)、最上川沿いに藤田原遺跡 (205) がある。中間地域の遺跡分布は不明であるが、この地域も利用されていたことが想定される。F3 地域では、最上川の段丘に沿って遺跡が点在する。八ツ目久保遺跡 (221) は 8b 式期の竪穴住居跡 2 棟、土坑、包含層が検出された (山形県埋文 1999)。祭祀遺物は出土していない。地形的な制約もあり小規模な分村的集落と考えられる。

G 葉山南東麓：G1 古佐川流域は、中葉期にも遺跡の分布が確認される。小規模な遺跡とされる鶴狭間遺跡 (189)、お月山遺跡 (190) は前型式から継続し、中土入 (なかどにゅう) 遺跡 (186)、奥土入 (おくどにゅう) 遺跡 (187) が前後して存在する。

G2 地域は遺跡の分布が密である。千座川流域には中村 A 遺跡 (124) が出現する。樽石川流域沿いは特に分布が多く、8a・8b 式期を通じて存在する遺跡も多い。しかし発掘調査が実施された遺跡がほとんどなく遺跡相互の関係については不明である。

H 尾花沢盆地南部：遺跡密度が特に高い地域である。最上川に合流する支流沿いや最上川沿いに遺跡が分布する。主要な集落跡となるのは、富並川流域の 8b 式期を中心とする西海渕 (さいかいぶち) 遺跡 (153)、最上川の東岸に落合遺跡 (166) が存在する。西海渕遺跡は、県教育委員会によって 1990・1991 年の 2 次にわたり調査が実施され、直径約 140m におよぶ環状集落の全容が明らになった。検出された主な遺構は長方形プランの大型竪穴住居跡が 26 棟以上、円形・楕円形・隅丸方形の竪穴住居跡が 30 棟以上、墓壙が約 150 基、フラスコ状土坑を含む土坑・ピット群である (山形県教委 1991・1992、小林 2012)。祭祀関係遺物では、多数の土偶・石棒が出土している。この地域を中心とする拠点集落と考えられる。西海渕遺跡から北東へ 3.4km に位置するドザキ遺跡 (234) は、町教育委員会の調査で、中期中葉と考えられる全長 10m を超える大型住居 2 棟が検出されている (大石田町教委 1996)。8b 式期の土偶も出土しており、規模の大きな集落になると考えられる。北東へ約 5km の位置に来迎寺遺跡 (235) がある。遺跡範囲が比較的広く、県による調査で小型の竪穴住居跡が検出された (山形県教委 1981)。また、調査に伴うものではないが青龍刀形石器が出土している。

最上川の東岸、沢の目川流域にある落合遺跡 (166) は、山形県埋蔵文化財センターによる調査で、8a 式期を中心とする竪穴住居跡 6 棟、土坑 142 基が検出され、土偶や石棒も伴出した (山形県埋文 1996)。一方、古道遺跡 (157)・中山遺跡 (158) は、小型・中型の円形プランが主体の住居跡で構成される。大型住居跡は未検出であり、分村的な性格の集落と考えられる。

I 尾花沢盆地丹生川流域：丹生川と丹生川や最上川に合流する各支流、牛房野川、赤井川、朧気川などの流域沿いに遺跡が密に分布する。丹生川の上流に位置する原の内 A 遺跡 (308) は、7b・8a・8b 式期にわたって継続し、土偶も約 40 点の出土が報告されている (山形県教委 1981・1983・1984)。第 1 次調査では 8b 式期の住居跡 2 棟が確認された。第 2 次調査では、調査面積は狭いものの遺構が密集して検出され、8a 式期の住居跡が 3 棟、8b 式期の住居跡が 8 棟検出された。第 3 次調査でも、中期中葉と考えられる住居跡 2 棟、炉跡 47(石囲炉 9 基を含む)、フラスコ状土坑、墓壙、配石遺構 3 基、

埋設土器 5 基などが調査された。フラスコ状土坑からは大木 8a・8b 式土器が出土しており、中葉期の集落に伴うと考えられる。遺跡範囲は東西約 200m と推定され、この領域の中核的な集落と考えられる。

朧気川流域に立地する巾遺跡 (306) は市教育委員会により調査が行われている (尾花沢市教委 1983・1984)。東西 100m、南北 500m の大規模な遺跡で、開発により削平された部分が多いが、調査では 8a 式期を中心とした埋設土器や土坑が報告されている。落合遺跡に準じる主な集落と考えられる。

(3) 中期後葉 (大木 9・10 式期)

図 6 に当期の遺跡分布を示した。

A 須川上流域：この地域は、9 式期の遺跡は比較的確認できるものの、10 式期では 2 遺跡のみの確認と大幅に減少する。9 式期では、思い川遺跡 (12) で埋設土器 2 基や、竪穴住居跡 (炉形態から 9 式以前の可能性もある) も報告されているが、中心的集落とは考えにくい。この地域で発掘調査により当期の集落様相が判明した事例は現在のところ乏しい。

B 山形盆地南西部および白鷹山北東部：B1 山形盆地南西部丘陵地では、須川支流の本沢川流域沿いに二位田遺跡 (31)、石田遺跡 (28) を中心として遺跡分布が認められる。石田遺跡では居住域は不明であるが、10 式期の埋設土器が検出されている (山形県埋文 2004)。窪遺跡 (37) も 9・10 式期にかけて継続すると考えられる。

B2 白鷹山北東部地域では、根際的場遺跡 (64) で 10 式期の竪穴住居跡が 4 棟確認された。東側の山地・丘陵地にも向坂遺跡 (75)、西の原遺跡 (71) などが存在し、山間部にも集落があると考えられる。

C 馬見ヶ崎川流域：中流域や上流域にかけて遺跡が点在する。9・10 式期にかけて存続する遺跡が目立つ。熊ノ前遺跡 (53) は、9・10 式期 (10 式は前半) の集落跡が存在し、この地域の中心的集落と考えられる。第 2・4 次調査では、9 式期の住居跡が 4 棟、炉跡のみが 3 基、9 ～ 10 式期の住居跡が 4 棟、炉跡のみが 2 基、10 式期住居跡が 7 棟、炉跡のみ 3 基が調査された (山形県教委 1979)。山形市の調査では、第 1 次調査で 9 式期と考えられる住居跡が 4 棟、炉跡 2 基が (山形市教委 1975)、第 3 次調査では、複式炉を備える 9 ～ 10 式期の住居跡が 4 棟調査された (山形市教委 1978)。

馬見ヶ崎扇状地の扇央部に位置する西高敷地内遺跡 (49) は、9 式新段階から集落が出現すると考えられるが、最も規模が拡大すると考えられるのは 10 式期である。熊ノ前遺跡が衰退する 10 式後半が最も集落規模が拡大し、地域集団の移動が想定される。第 1・2 次調査で、10 棟の中期末の竪穴住居跡が検出され、10 式期と考えられるのは 8 棟である (山形県教委 1979)。第 3 次調査では、10 式期の住居跡が 1 棟確認された (山形県教委 1985)。第 4 次調査では、48 棟の竪穴住居跡が確認され、その内 10 式期は 44 棟である。祭祀遺物として 6 点の土偶、石棒などが出土した (山形県教委 1992)。第 5 次調査では、19 棟の竪穴住居跡が検出され、その内 10 式期に比定された住居跡は 11 棟である (山形県教委 1993)。山形市教育委員会による調査 (山形市教委 2004) では、5 棟の竪穴住居跡と 2 棟の掘立柱建物跡が確認されている。当集落跡は、竪穴住居跡および掘立柱建物跡群を伴う集落構成をとることが考えられる。短期間であるがこの領域の拠点的集落を形成していたことが想定される。

D 山形盆地東部：9 式期の遺跡は多いが 10 式期になると遺跡数は減少する。D1 立谷川流域や東側の丘陵地に分布が多い。D2 地域では、倉津川・押切川・乱川流域の扇央部に 9 式期の遺跡が分布するが、10 式期には消滅する。野川流域には少数ながら 9・10 式期にわたる遺跡が存在する。D3 白水川・日塔川流域であるが、小林遺跡 (115)・小田島城跡 (119) など比較的遺跡の分布が多い地域である。小林遺跡 B 地点では部分的調査ながら 9・10 式期の竪穴住居跡 8 棟が確認された (山形県教委 1976)。祭祀関連の遺構では、中期末と考えられる配石遺構 1 基や直径約 17m の列石遺構が確認されており、墓域を伴う可能性がある拠点的な集落であると考えられる。小田島城跡は 9・10 式期を主体とする遺物包含層が報告されている (山形県埋文 2004)。付近に居住域が存在する可能性がある。

E 寒河江川流域：寒河江川中流域では富沢 I 遺跡 (181) などが、上流地域では山居遺跡 (198) と周辺に分布が密な地域が確認される。山居遺跡は、中期後半の時期を主とする集落跡であり、検出された 22 棟の竪穴住居跡の大半は 9 式から 10 式前半にかけての時期である (山形県埋文 1998)。寒河江川上流域での長期的に存続する集

落跡であると考えられる。

F 山形盆地西部および白鷹山北西部：この地域は調査によって集落の内容が明らかになった遺跡が比較的多い。

F1 地域であるが、高瀬山遺跡 (175) では当期の集落跡が地点を変えながら営まれている事が判明している。1 期地区では、9 式前半の 4 棟の住居跡による集落が存在する (山形県埋文 2004)。SA 地区・HO 地区では 10 式前半を中心とする集落が確認された (山形県埋文 2001・2005)。短期間に営まれた小規模な集落であり、集落構造が把握できる (菅原 2008)。住居群は全体に半円状に分布し、住居群に重複してやや内側に土坑群が分布し、埋設土器が集中する地点も確認される。規模は直径約 120 ～ 150m である。1 時期に 4 ～ 5 棟の戸数で構成されると想定される。HO 地区 3 期では、10 式後半を中心とする集落が確認されている (山形県埋文 2012)。うぐいす沢遺跡 (178) では、9 式期の竪穴住居跡 1 棟、10 式期の重複する竪穴住居跡 7 棟と、貯蔵穴や墓壙と考えられる土坑群が報告された (山形県教委 1981)。柴橋遺跡 (179) では、10 式前半の竪穴住居跡 9 棟が報告されている (寒河江市教委 1989)。住居は重複し密集した分布を呈し、高瀬山遺跡と比較してより規模の大きい集落となることが想定される。

F2 の月布川流域では、橋上遺跡 (208) が当期に出現する (大江町教委 1984)。竪穴住居跡 14 棟、埋設土器約 50 基、土坑群、配石遺構が確認された。集落は 10 式期から後期初頭にかけてが中心であり、この流域の中心的な集落跡と考えられる。

F3 でも比較的当期の遺跡が認められる。八ツ目久保遺跡 (221) では、9 式期の竪穴住居跡が 1 棟、10 式期の竪穴住居跡が 4 棟、土坑、包含層が検出されており (山形県埋文 1999)、分村的な集落と考えらえる。

G 葉山南東麓：G1 古佐川流域は、お月山遺跡 (190) がある。昭和 29 年に山形大学により、複式炉と考えられる炉跡を備える竪穴住居跡 1 棟が調査された (赤塚ほか 1969)。

G2 葉山南東麓北側では、千座川流域に中村 A 遺跡 (124) がある。県による調査で、竪穴住居跡 9 棟、土坑、埋設土器 12 基、配石遺構 1 基が確認された (山形県教委 1983)。竪穴住居跡は概ね 10 式期と考えられる。埋設土器からなる墓域と考えられる領域や貯蔵域を備える継続的な集落であると思われる。また、最上川が蛇行する三ヶ瀬付近には、9・10 式期の遺跡分布が比較的多い。

H 尾花沢盆地南部:最上川とその支流 (富並川・沢の目川) を中心に、9 式期の遺跡の分布が多いが、10 式期では 2 ヵ所程度と激減する。西海渕遺跡 (153)・中山遺跡 (158)・古道遺跡 (157)・落合遺跡 (166) などは 8b 式期から存在している遺跡であるが、9 式期の古・中段階でほぼ集落の継続が途絶えるように思われる。

I 尾花沢盆地丹生川流域：丹生川とその支流沿いに遺跡が分布するが、中葉期と比較すれば遺跡数はやや少ない。この地域では集落全体の調査事例が乏しく遺跡内容は不明であるが、丹生川と支流に沿って短期間で場所を変える遺跡が多いように思われる。

(4) 後期初頭～前葉 (後期初頭・南境 1・2 式期)

図 7 に当期の遺跡分布を示した。

A 須川上流域：上野遺跡 (20) が南境 2 式期に位置付けられる以外、この時期の遺跡はほとんど報告されていない。遺跡数は減少するが、集落が無いと考えるのは早計であり、今後の調査の進展が期待される [4]。

B 山形盆地南西部および白鷹山北東部：B1 山形盆地南西部では、須川支流本沢川が流れる低地に谷柏遺跡 (26) など遺跡が集中している。富神山南東には南境 1 ～ 2 式期の窪遺跡 (37) や大清水遺跡 (36) がある。窪遺跡には環状列石や集石遺構が確認されており、後期中葉にかけて墓域が形成されていく (山形県教委 1981)。B2 白鷹山北東山間部は当期の遺跡は少なく、後期前葉の玉虫 A 遺跡 (67) のみである。低地との境界の段丘上には根際的場遺跡 (64) などが立地する。

C 馬見ヶ崎川流域：中期後葉と比較すれば遺跡の分布は少ない。関沢 B 遺跡 (58)・千葉屋敷遺跡 (55)・双葉町遺跡 (50) などの遺跡が確認されているが、細別時期や遺構の内容は不明である。

D 山形盆地東部：当期の遺跡分布は少ない。D1 立谷川流域には、中地蔵遺跡 (63)・桜江遺跡 (79) などがあるが、集落内容は不明である。D2 の押切川流域には渡戸遺跡 (104) がある。後期中葉にかけての時期が主体である。乱川流域には猪野沢横台遺跡 (109) がある。D3 白水川・日塔川流域であるが、小田島城跡 (119) は南境 1 ～ 2 式期になる。遺構は埋設土器が報告されている (山形埋文 2004)。キノコ形土製品が出土しているが、この

時期に伴う可能性がある。調査で住居跡は検出されていないが付近に集落も存在すると考えられる。

E 寒河江川流域：下流には、後期初頭から南境２式期まで確認される富沢Ⅰ遺跡 (181) がある。土坑などの遺構が確認されているが住居跡は検出されていない。上流には南境２式期の小月山橋遺跡 (195) がある。

F 山形盆地西部および白鷹山北西部：F1 の高瀬山遺跡 (175) では、後期初頭から南境２式期にかけて継続して遺構が確認されている (山形県埋文2012)。後期初頭は、主要な集落の存在は確認されていないが、南境１式期には包含層が形成されるなど安定した集落が存在していた可能性が考えられる。平野山古窯跡群 (180) などは一時的な利用と思われる。

F2 の月布川流域であるが、橋上遺跡 (208) は中期末から後期初頭、南境１式期と存続する集落跡である。後期初頭と考えられる住居群が確認されている (大江町教委 1984)。遺物では、後期前葉と考えられる土偶や、腕輪状土製品などが出土しており、後期初頭から前葉のこの流域の中心的な集落と考えられる。また、橋上遺跡の上流や下流域沿いに後期前葉の遺跡が３ヶ所確認されている。

F3 地域では、後期初頭の遺物が確認された上川原山ノ神遺跡 (217) のみである。当遺跡は晩期が主体で掘立柱建物跡が検出されている。

G 葉山南東麓：G1 葉山南東麓南側では、奥土入遺跡 (187) が後期前葉となる。他に時期の判別できる遺跡はない。

G2 千座川流域には中村Ａ遺跡 (124) があり、中期から継続して営まれる集落跡である。後期初頭から南境２式期・後期中葉まで遺構・遺物が確認され、時期幅が長い。後期は南境１式期の土坑・埋設土器が確認され、前葉・中葉期の土偶が出土する。住居跡は検出されず集落規模は不明であるが、墓域を伴うこの地域の中心となる集落であると考えられる (山形県教委 1983)。三ヶ瀬付近の南側には、前葉の遺跡が分布するが、細別時期や集落内容は不明である。

H 尾花沢盆地南部：最上川やその支流の段丘を中心として比較的遺跡の分布が確認される。注目されるのは、富並川と最上川の合流地点に立地する川口遺跡 (150) である。県教育委員会による調査で、南境２式期を中心とする竪穴住居跡 13 棟、墓壙 45 基、土坑・柱穴 1500 基以上、集石遺構が検出され、集落構造について分析が行われている (山形県教委 1990・小林 2012)。墓壙は小判型を基調とし、石組石棺をもつ墓壙は６基確認され、主軸方向は西に偏る傾向があることが指摘されている。後期前葉から中葉の当地域の中心的な集落であると考えられる。その他、本格的な発掘調査は実施されていないが、北側の最上川段丘沿いに、玉ノ木平Ｆ遺跡 (243)、来迎寺遺跡 (235) などが分布する。

I 尾花沢盆地丹生川流域：詳細時期が判別できる遺跡は少ないが、丹生川と丹生川に合流する牛房野川や赤井川などの支流に沿って後期前葉遺跡の分布が認められる。調査が行われた遺跡では漆坊遺跡 (269) があり、南境 1・2 式と、それ以降に存続する集落である (尾花沢市教委 1982)。

6　まとめ

最上川の中流域における縄文中期から後期前葉にわたる遺跡分布を検討してきた。内容を以下にまとめ、補足を述べたい。

中期から後期前葉にわたる最上川中流域の遺跡数は、大木 7a 式～大木 8b 式にかけて増加し、8b 式期がピークとなる。しかし、大木９式期から減少に転じ、大木 10 式期から後期初頭期にかけて激減する。後期前葉期は遺跡数が少ない状態で推移している。遺跡の標高分布では、遺跡の増加にともない標高が高い領域の利用が進むが、後期前葉期では標高 201m 以上となる遺跡数が他の時期と比較し少ない。中期後半から後期にかけて気候が寒冷化することが指摘されているが、植生や環境の変異により、中期前・中葉期の居住地や生業域の不適化などが反映されているものと考えられる。

各期にわたる遺跡分布であるが、台地・段丘から低地にかかる領域や河川沿いの段丘上、河川の合流地点が特に密である。平野部や扇状地の扇央・扇端部は分布が希薄な地域である。しかし西高敷地内遺跡や城南町遺跡のように、沖積地の地表深くから確認された遺跡もあり、今後低地域での活動が明らかにされることが望まれる。

遺跡分布の領域であるが、最上川に合流する支流域を中心とするものが多く、小分布域では直径 5km ～ 10km、比較的長大な寒河江川流域などでも 20km 内の範囲で分布のまとまりが認められる [5)]。この分布域は中

期を通じて遺跡の多寡はあるが存続する。後期前葉では遺跡数は極めて少ないが各領域に遺跡の分布が継続している。この分布領域がそのまま当時の縄文人の活動領域を示すものとして結論づけることはひかえたいが、今後の調査の進展によって各領域の遺跡と集落の性格が明らかにされ、より具体的な縄文時代の集団領域が復元できることを望みたい。

最後に、本論をまとめるにあたり、小林圭一氏からは地形図の提供や遺跡内容についてご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

註

1) 小林氏は、山形県の縄文後期前葉の時期区分について、堀之内 1 式・2 式に併行させて南境式を南境 1 式・2 式に区分することを提唱している。また、水戸部秀樹氏はかっぱ遺跡の報告において、この見解に基づき後期前葉の土器群について南境 1・2 式の呼称を用いている (水戸部 2003)。
2) 遺跡一覧表の時期の表記であるが、「○」は報告書などでその時期に比定される事を表す。「◎」は、その時期の遺構が存在することを表す。「●」はその時期に住居跡が検出されていることを表す。「－」は細別型式が不詳であることを示す。例えば、中期前葉に比定されるが型式が不詳である場合は、7a・7b 式の欄に「－」を入れている。また表の作成にあたり、引用・参考とした報告書や文献について、本来は引用文献の欄に記すべきであるが、紙面の制約もあり、「文献」の欄に略記した。本文中で引用した報告書出典も文献欄に略記した。
3) 公開シンポジウム「関東甲信越地方における中期 / 後期変動期」において、安斎正人氏は縄文時代の気候変動について概要を述べている (安斎正人 2013「ー完新世の気候変動と縄紋文化の変化ー」『関東甲信越地方における中期 / 後期変動期　4.3ka イベントに関する考古学現象③』公開シンポジウム『関東甲信越地方における中期 / 後期変動期』実行委員会)。
4) 未報告であるが、本荘郷土史編集委員会鈴木直一氏が保管されている、上山市楢下の上新田出土の遺物が注目される。遺物は、南境 1・2 式期の縄文土器が中心で、この時期に伴うと思われる土偶体部もあった。未登録の当遺跡により、この地域に後期前葉期集落が存在していると考えられる。
5) 小林圭一氏は、最上川流域の縄文晩期遺跡領域について、半径 2.5 ～ 5km の範囲をひとつの拠点集落の単位と考え検討を行っている (小林 2001)。

引用文献

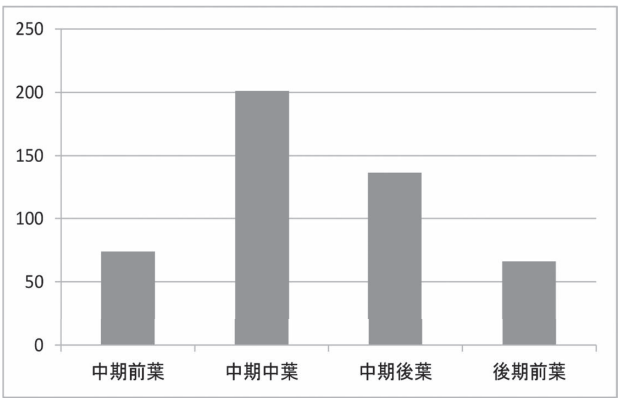
赤塚長一郎ほか　1969 「第三編考古資料」『山形県史　考古資料』
黒坂雅人　2004 「第二節　縄文時代と白鷹丘陵の遺跡群」『山辺町史上巻』pp.70 － 124　山辺町
佐藤禎宏　1981 「山形県における縄文領域論のための基礎作業」『さあべい』第 3 巻・第 3 号 pp.1 － 22
菅原哲文　2008 「山形県における縄文時代中期後半の集落様相ー山形盆地西部を中心としてー」『研究紀要』第 5 号 pp.1 － 16 財団法人山形県埋蔵文化財センター
小林圭一　2001 「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第 7 巻 1 号 pp.21 － 81
小林圭一　2012 「富並川流域における縄文時代の遺跡動態―西海渕・川口・宮の前遺跡の検討を通して―」平成 19 年度～平成 23 年度文部科学省私立大学学術高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター整備事業」東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究　研究成果報告書 I　pp.125 － 198　東北芸術工科大学東北文化研究センター

表 1　最上川中流域の時期別遺跡数

時期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前葉
遺跡数	74	201	136	66

	中期						後期		
時期	大木 7a	大木 7b	大木 8a	大木 8b	大木 9	大木 10	初頭	南境 1	南境 2
遺跡数	30	54	96	132	105	63	12	15	12

図 1　最上川中流域の時期別遺跡数グラフ



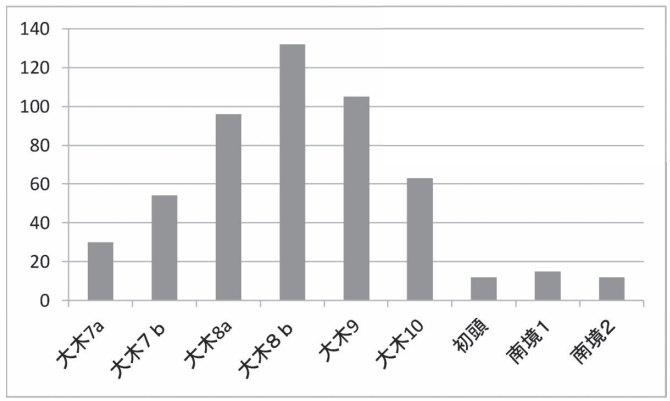


表 2　最上川中流域の時期別遺跡消長

	7a ～ 7b	7b ～ 8a	8a ～ 8b	8b ～ 9	9 ～ 10	10 ～後初	後初～南境 1	南境 1 ～ 2
存続	21	30	73	51	39	9	5	9
出現	32	65	58	53	23	3	10	3
消滅	9	23	22	79	65	53	7	3
計	62	118	153	183	127	65	22	15

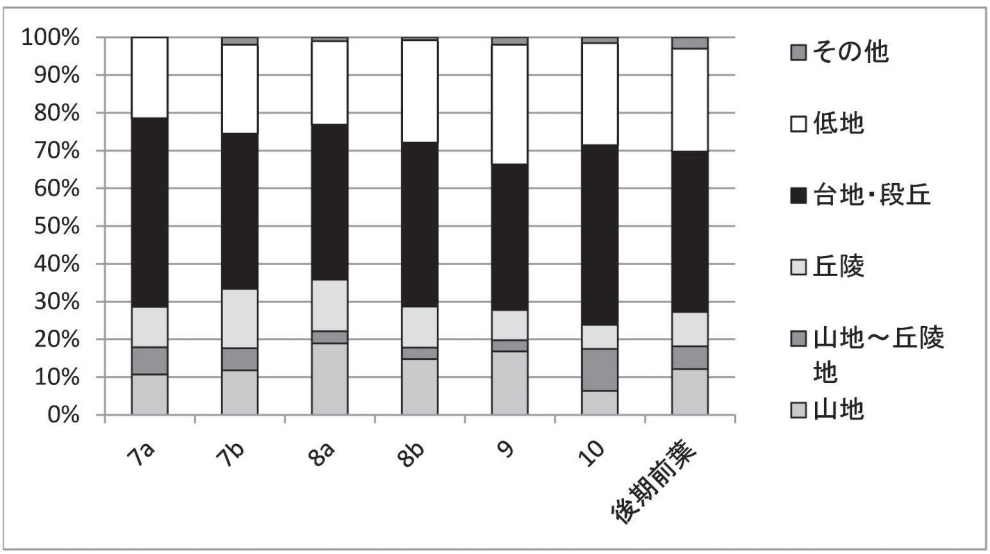
表３　最上川中流域の時期別遺跡標高

	7a	7 b	8a	8b	9	10	後期前葉
51 ～ 100m	7	15	19	30	24	10	18
101 ～ 150m	8	11	29	38	34	22	23
151 ～ 200m	4	8	23	27	20	16	18
201 ～ 250m	5	9	9	15	10	5	1
251 ～ 300m	4	3	5	5	6	2	1
301 ～ 350m	0	3	2	5	4	3	1
351 ～ 400m	0	1	2	2	1	0	1
401 ～ 450m	0	1	2	2	2	2	1
451 ～ 500m	0	0	1	1	0	1	1
501 ～ 550m	0	0	2	3	1	1	0
551 ～ 600m	0	1	1	2	0	1	1
601 ～ 650m	0	1	1	1	2	0	0
650 ～ 700m	1	0	0	0	0	0	0
701 ～ 750m	0	0	0	0	0	0	0
751 ～ 800m	0	0	0	0	0	0	0
801 ～ 850m	0	0	0	0	1	0	0
計	29	53	96	131	105	63	66

表４　最上川中流域の時期別遺跡立地

	山地	山地～丘陵地	丘陵	台地・段丘	低地	その他	合計
7a	3	2	3	14	6	0	28
	10.71%	7.14%	10.71%	50.00%	21.43%	0.00%	100.00%
7b	6	3	8	21	12	1	51
	11.76%	5.88%	15.69%	41.18%	23.53%	1.96%	100.00%
8a	18	3	13	39	21	1	95
	18.95%	3.16%	13.68%	41.05%	22.11%	1.05%	100.00%
8b	19	4	14	56	35	1	129
	14.73%	3.10%	10.85%	43.41%	27.13%	0.78%	100.00%
9	17	3	8	39	32	2	101
	16.83%	2.97%	7.92%	38.61%	31.68%	1.98%	100.00%
10	4	7	4	30	17	1	63
	6.35%	11.11%	6.35%	47.62%	26.98%	1.59%	100.00%
後期前葉	8	4	6	28	18	2	66
	12.12%	6.06%	9.09%	42.42%	27.27%	3.03%	100.00%

図２　最上川中流域の時期別遺跡立地グラフ



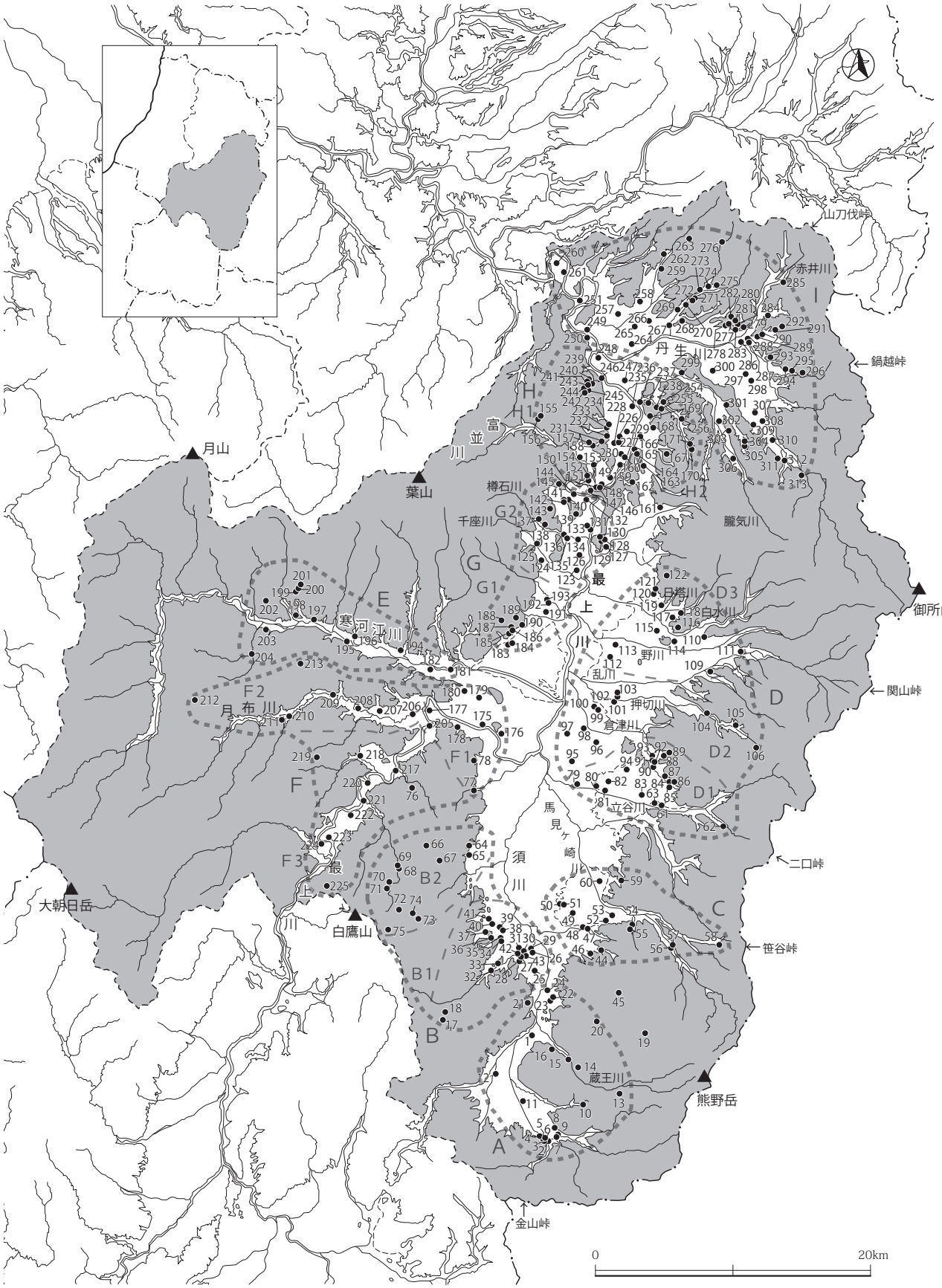


図３　縄文時代中期から後期前葉にかけての遺跡分布

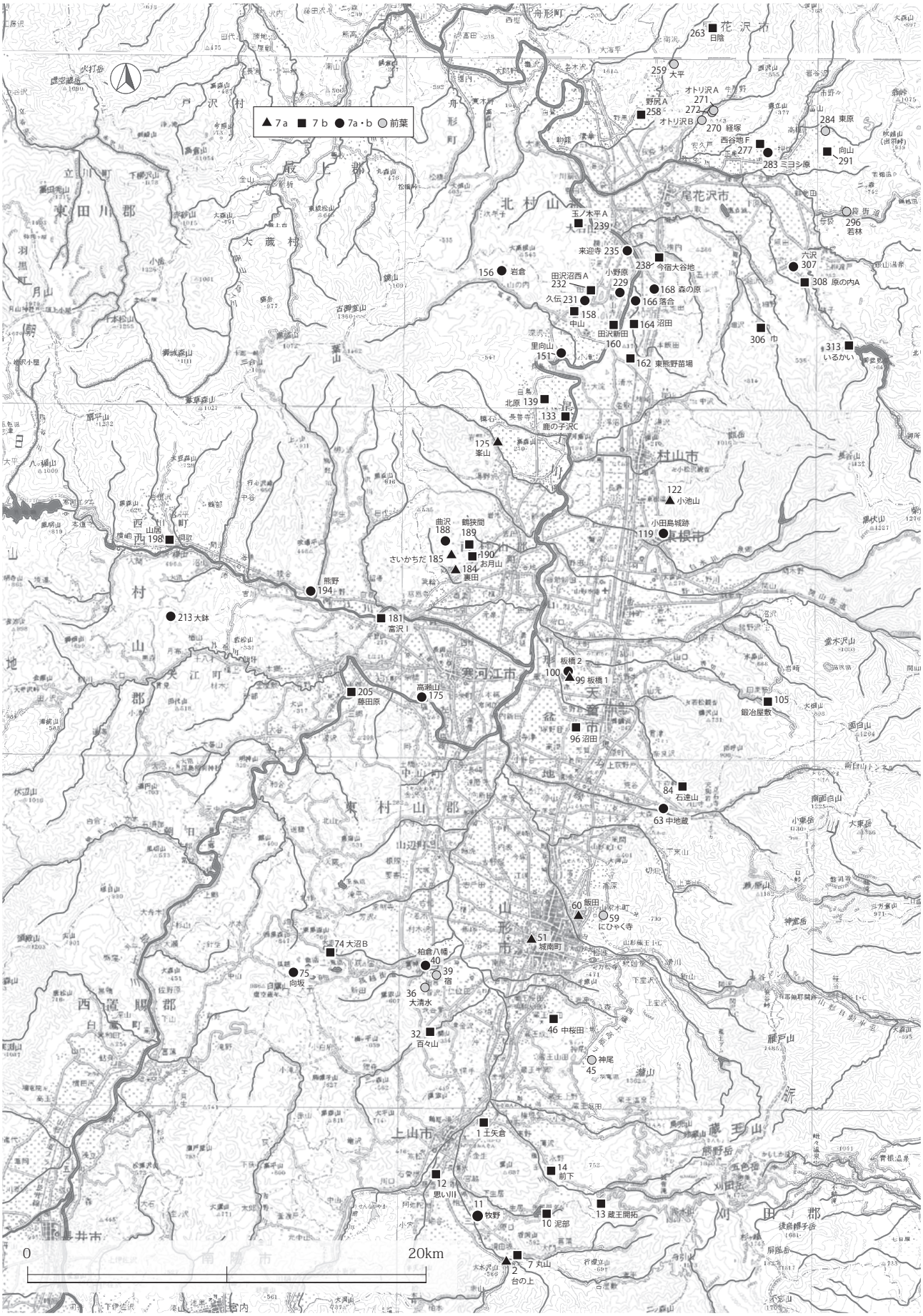


図 4　縄文時代中期前葉の遺跡分布 (国土地理院発行 20 万分の 1 地形図「仙台」・「新庄」使用)

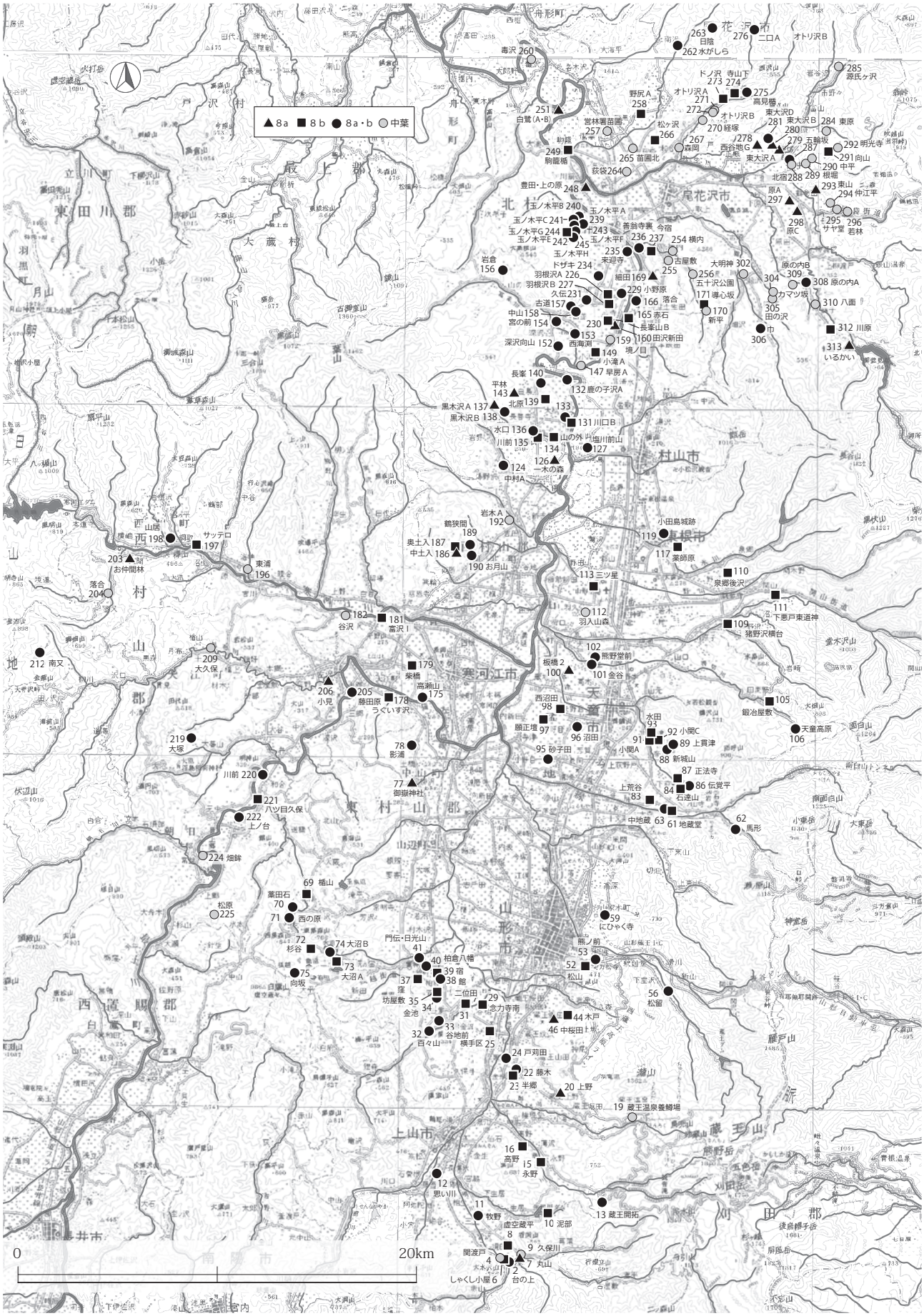


図5　縄文時代中期中葉の遺跡分布

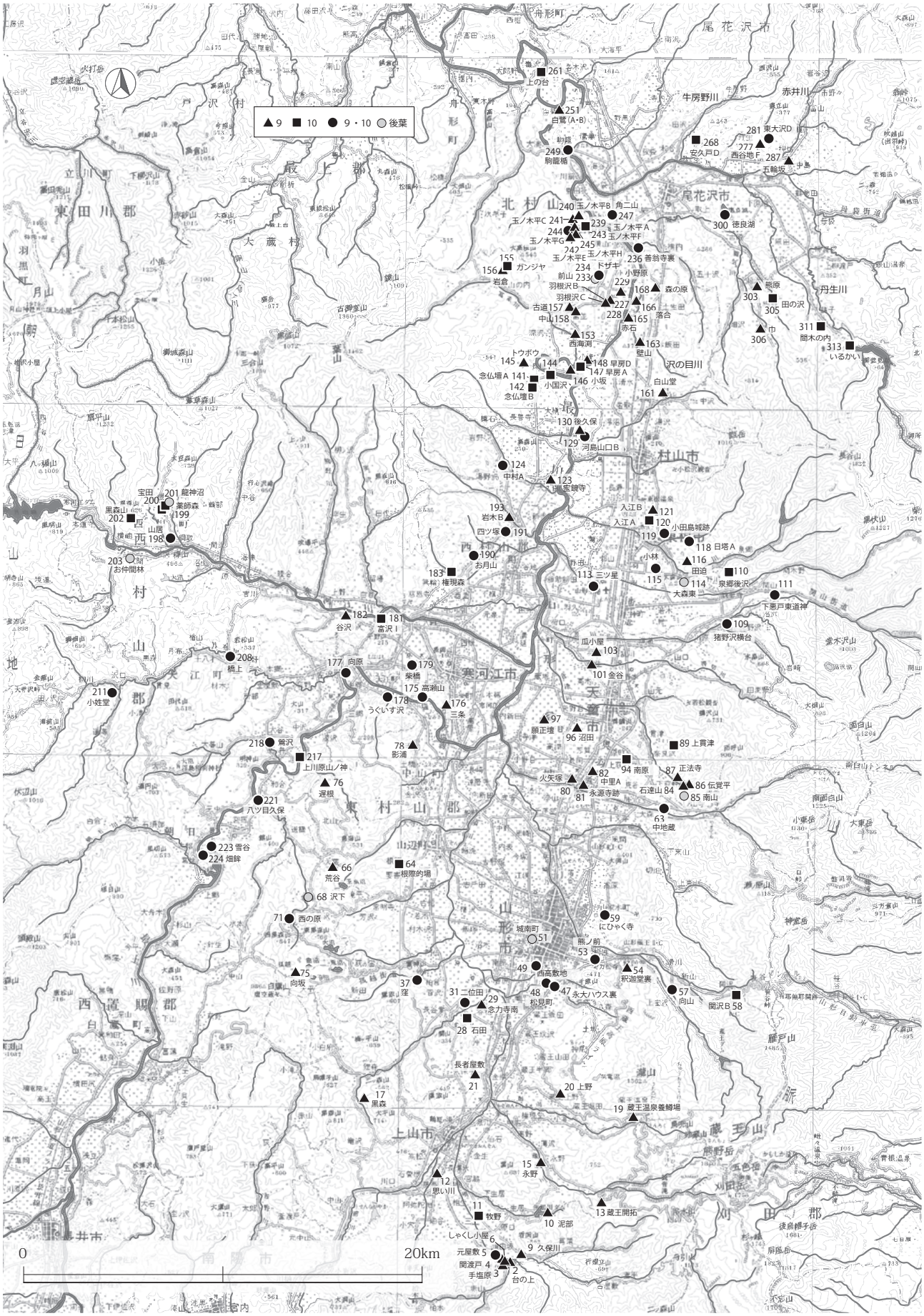


図６　縄文時代中期後葉の遺跡分布

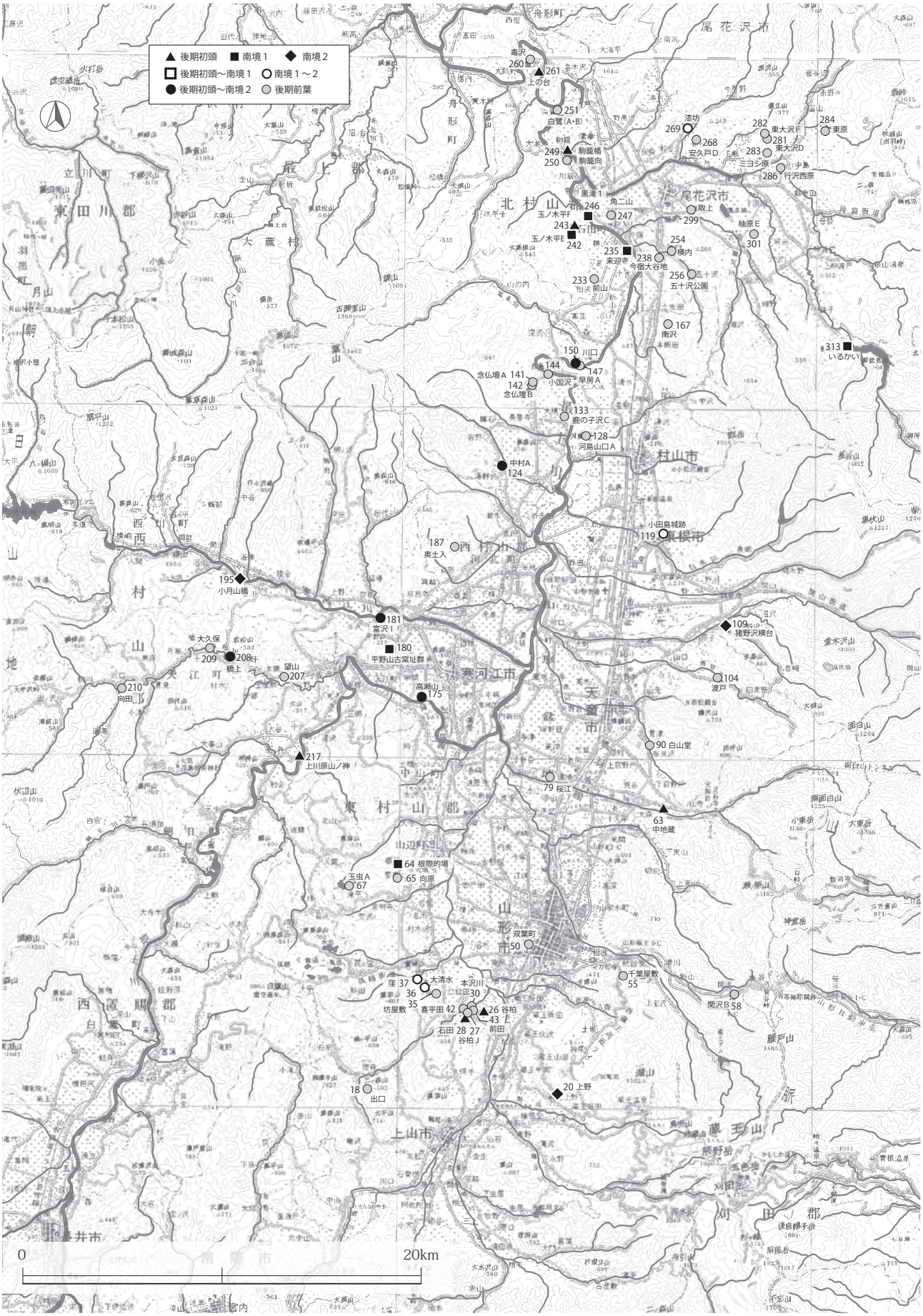


図7　縄文時代後期前葉の遺跡分布

表５　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高(m)	河川	時期中期 7a	7b	8a	8b	9	10	後期 初頭	南１	南２	遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
1	207-039	土矢倉	上山市土矢倉金谷	低地（河間低地）	210	須川		○								土器片 /（県台帳では土矢倉Ａに該当か）	上山市史別巻上他
2	207-003	台の上	上山市楢下字平林 1160	段丘（Ⅲ）	282	金山川	○		○	●	○					土器片・石器片	
		（県分布）														（中期中葉中心）土坑	県分布 (29)
		（県調査）														（前期・中期）掘立柱建物跡？・土坑・柱穴 / 土器	県分布 (30)
3	207-005	手塩原	上山市楢下字手塩皿塚	低地（谷底平野）	260	須川					○					土器・石鏃・土師器	県遺跡台帳・県史考古資料
4	207-007	関渡戸	上山市楢下字上新田 1017	低地（谷底平野）	240	須川			−	−	○					中期の土器片・石鏃・石匙	県史考古資料他
5	207-008	元屋敷	上山市楢下字元屋敷 76	低地（谷底平野）	240	須川					○	○				土器片・石鏃・石斧	県史考古資料他
6	207-006	しゃくし小屋	上山市楢下字神明前 1211	低地（谷底平野）	230	須川				○	○					中期の土器片・石鏃	県史考古資料他
7	207-009	丸山	上山市小笹字丸山	段丘（Ⅲ）	267	須川		○	○							土器片・石棒・石鏃	県史考古資料・県分布 (27) 他
8	207-011	虚空蔵平	上山市小笹字虚空蔵平 779	段丘（Ⅲ）	320	須川				○						土器片	県遺跡台帳・県史考古資料
9	207-010	久保川	上山市久保川字道下 113	段丘（Ⅲ）	260	須川			−	−	○					土器片	県史考古資料他
10	207-019	泥部	上山市上生居字包小屋地 1136・字泥部他	丘陵地	310	生居川（須川支流）		○		○	○					（後期後葉・晩期）竪穴住居 10・土坑 /（後期・晩期主体）土器・貝形土製品・土偶・石棒・石刀・石剣・円盤状石製品・土錘・有孔石製品・異形石器	県分布 (9)・県 70 集他
11	207-018	牧野	上山市牧野字原 2153	段丘（Ⅲ）	230	須川	○	○	●	○		○				（中期前半）土器・石器・三脚土製品・三脚石器・土偶・耳栓	上山市 1975・市史別巻上他
12	207-037	思い川	上山市高松字向里	河間低地	185	思い川		●	●	●	●					土器・石棒・土偶・耳栓・三脚土製品・三脚石器・鳥帽子形土製品	
		（思い川 A）														（中期）竪穴住居 12・土坑・埋設土器 / 遺物 200 箱	県 37 集
		（思い川 B）														（中期）竪穴住居 5・土坑 / 遺物 90 箱	上山市 2 号
13	207-040	蔵王開拓	上山市永野蔵王 2007	大起伏火山地	440	蔵王川		○	○	○	○					土器片	県史考古資料・市史別巻上他
14	207-023	前下	上山市永野字前下 1927	低地（谷底平野）	360	蔵王川		○								土器片	県史考古資料他
15	207-061	永野	上山市永原・川原 2007	低地（谷底平野）	330	蔵王川				○	○					石斧多い	県史考古資料・市史別巻上他
16	207-020	高野	上山市高野	扇状地	300	蔵王川				○						土器・石鏃・石匙・石篦	上山市史別巻上他
17	207-048	黒森	上山市黒森・大森	崩積緩斜面	640	本沢川					○					土器片・石鏃・石斧・発火石	県史考古資料他
18	207-034	出口	上山市黒森原野	崩積緩斜面	470	本沢川							−	−	−	土器片	県史考古資料・小林 2001 他
19	201-170	蔵王温泉養鱒場	山形市蔵王温泉	火山山麓地	820	酢川			−	−	○					土器片・石鏃	県遺跡台帳
20	201-158	上野	山形市上野大坊清水	中起伏山地	400	松尾川			○		○				○	土器・石鏃・石皿	県台帳・市史上巻・小林 2001
21	201-143	長者屋敷	山形市松原字石原坂 1733-10	山地・火山山麓地	190	須川					○					（後期？）竪穴住居跡 2・土坑 / 土器・石器	センター 147 集
22	201-152	藤木	山形市蔵王半郷藤木	扇状地	180	松尾川			○	○						土器片・石器	県遺跡台帳
23	201-153	半郷	山形市蔵王半郷戸苅田	扇状地	160 ～ 170	松尾川				○						土器片・土偶	県遺跡台帳
24	201-126	戸苅田	山形市蔵王半郷戸苅田	段丘（Ⅲ）	175	須川			○	○						土器片	県遺跡台帳
25	201-064	横手区	山形市松原字横手	扇状地	125	須川				○						土器	県遺跡台帳他
26	201-296	谷柏	山形市谷柏	段丘（Ⅲ）	120	花川							○				山形市史上巻
27	201-293	谷柏 J	山形市谷柏	低地（自然堤防）	128	須川支流							−	−	−		小林 2001
28	201-327	石田	山形市谷柏字石田	扇状地	127	本沢川						◎	◎			（中期末～後期前葉）埋設土器 4/ 土器・石器	センター 122 集・小林 2001
29	201-282	念力寺南	山形市谷柏	段丘（Ⅲ）	120	本沢川				○	○					土器	県分布 (12) 他
30	201-280	本沢川	山形市谷柏	低地（自然堤防）	128	本沢川							−	−	−		山形市史上巻・県分布 (12) 他
31	201-276	二位田	山形市二位田字割田 330-1	扇状地扇央部	127	本沢川				○	○	○				土器・石器（磨斧・石皿・石棒・石鏃他）・土製品（土偶等）・弥生土器	県 6 集他
32	201-041	百々山	山形市長谷堂字百々山	扇状地	167	本沢川		○	○	○						土器多量・石器多数（石匙・石鏃・石斧・石皿等）・土偶・三脚石製品・三脚土製品・三脚石器・刻線のある石製品・土製玦状耳飾・土師器・須恵器	山形市史・県史考古資料・分布 (12) 他
33	201-018	谷地前	山形市長谷堂字谷地前	丘陵地	145	本沢川			○	○						土器	県遺跡台帳
34	201-226	金池	山形市柏倉字金池	低地（谷底平野）	150	遅沢川			○	○						（晩期）土坑 / 土器・石器は晩期が主体	山形市史上巻・県 33 集他
35	201-213	坊屋敷	山形市柏倉字坊屋敷	谷底平野	154	遅沢川				○			−	−	−	（晩期）土壙（墓壙）・埋設土器 /（晩期中心）土器・土偶・石棒・石刀	県分布 (12)・県 33 集
36	201-229	大清水	山形市柏倉字大清水	丘陵地	154	遅沢川	−	−						○	○	（後期中葉）住居跡 2・土坑 / 石刀（後期か）	県分布 (12)・県 33 集
37	201-185	窪	山形市柏倉字窪	扇状地	171	須川				○	○	○		○	○	（後期中葉）環状列石・配石 / 土器・石器・石棒	山形市史上巻・県 33 集
38	201-181	館	山形市柏倉字館	段丘（Ⅱ）	140	富神川			○	○						縄文の遺構未確認、遺物のみ	県 34 集・県分布 (12)
39	201-166	宿	山形市柏倉字宿	段丘（Ⅱ）	140	富神川	−	−		○							県史考古・市史・県分布 (12)
40	201-165	柏倉八幡	山形市柏倉字八幡	段丘（Ⅲ）	168	富神川	○	○	○	○							県分布 (12) 他
41	201-099	門伝・日光山	山形市門伝字日光山	扇状地	160	山王川			○	○						石小刀・石篦	県分布 (12) 他
42	201-285	喜平田	山形市谷柏	低地（自然堤防）	130	須川支流							−	−	−		山形市史上巻・小林 2001
43	201-290	前田	山形市谷柏字前田	低地（扇状地・崖錐）	128	須川支流							−	−	−	土偶・岩版・石棒（後期）	山形市史上巻・小林 2001
44	201-283	木戸	山形市上桜田字木戸 355 外	段丘（Ⅲ）	202	馬立川				○						（中期？）竪穴住居 1・土坑 / 土器・掻器・剥片	県分布 (18)
45	201-131	神尾	山形市神尾	低地（扇状地）	530	（滝山川）	−	−									県遺跡台帳
46	201-305	中桜田	山形市中桜田	中起伏山地	200	須川		○	○							土器・石器	県遺跡台帳
47	201-210	永大ハウス裏	山形市小立１丁目	扇状地前縁部	160	滝山川					○	○				土器片多数	県遺跡台帳
48	201-211	松見町	山形市松見町（地図では鳥居ヶ岡）	扇状地前縁部	150	滝山川					○	○				土器片・凹石・磨石・石皿・打製石斧	県遺跡台帳
49	201-141	山形西高敷地内	山形市鉄砲町１丁目	扇状地扇央部	134	馬見ヶ崎川					○	●					県分布 (23)
		（1 次）	山形市鉄砲町１丁目 15-64													（中期後葉）竪穴住居 10・土坑 / 土器・石器	県 17 集
		（3 次）	山形市鉄砲町１丁目 15-65													（中期後葉）竪穴住居 1	県 91 集
		（4 次）	山形市鉄砲町１丁目 15-66													（中期後葉）竪穴住居 48・土坑・埋設 21/ 土偶・土製垂飾・キノコ形土製品？	県 173 集

表 6　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高 (m)	河川	時期中期 7a	7b	8a	8b	9	10	後期 初頭	南 1	南 2	遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
49	201-141	山形西高敷地内 (5 次)	山形市鉄砲町 1 丁目 15-67													(中期後葉) 竪穴住居 19・土坑・埋設土器 1	県 191 集
		(6 次)	山形市鉄砲町 1 丁目 15-46													河川跡・土坑・ピット	センター 117 集
		(7 次)	山形市鉄砲町 1 丁目 15-46													土坑・遺物包含層	センター 143 集
		(市教委)	山形市若葉町 12-21													(中期後葉) 竪穴住居 5・掘立柱建物跡 2・土坑・埋設土器 2・河川跡	山形市 18 集
50	201-001	双葉町	山形市双葉町 1 丁目	扇状地扇崖	127 ～ 131	馬見ヶ崎川							−	−	−	(後期前葉) 土坑・(時期不明) 陥穴 / 土器片 / 山形城三の丸跡内	山形市 24 集・小林 2001
51	H9 登録	城南町	山形市城南町 1 丁目・2 丁目	扇状地扇崖	129	馬見ヶ崎川	○				−	−				(後期中葉・晩期主体) 包含層 /(後期中葉・晩期主体) 土器	山形市 25 集
52	201-213	松山	山形市松山	扇状地	190	馬見ヶ崎川				○						土器	県遺跡台帳
53	201-082	熊ノ前 (2・4 次)	山形市あこや町	扇状地扇頂部	230 ～ 250	馬見ヶ崎川			●	●	●	●				(中期中～末葉) 竪穴住居 47・土坑・埋設・配石 1/ 土器・石器・石棒・土偶	県 16 集
		(1 次)														(中期中～末葉) 竪穴住居 9/ 土偶	山形市熊ノ前 1 次報告
		(3 次)														(中期中～末葉) 竪穴住居 5・土坑 / 土偶・石製垂飾品	山形市熊ノ前 3 次報告
54	201-213	釈迦堂裏	山形市釈迦堂字南在家	小起伏山地	255	内山川					○					土器・土師器・フレーク	県分布 (4)・(12) 他
55	201-179	千葉屋敷	山形市妙見寺	小起伏山地	300	馬見ヶ崎川							−	−	−		山形市史上巻
56	201-248	松留	山形市下宝沢松留	段丘 (Ⅲ)	351	馬見ヶ崎川			○	○						土器片・凹石・磨石・石皿・石篦	県遺跡台帳・県分布 (8) 他
57	201-239	向山 (下宝沢)	山形市下宝沢字向山	段丘 (Ⅲ)	336 ～ 340	馬見ヶ崎川					○	○				(後期後葉～晩期) 竪穴住居跡 3・土坑 / 土器・石器・(後晩期) 石棒・土偶・耳飾・遺物 27 箱	県分布 (8)・(14)・県 133 集他
58	201-258	関沢 B	山形市関沢字大谷沢	扇状地	588	滑川 (馬見ヶ崎川支流)						○	−	−	−	(時期不詳) 竪穴住居跡 1・土坑 / 土器・石器・土師器・遺物 2 箱 / キャンプサイト的性格	県分布 (8)・県 133 集
59	201-227	にひゃく寺	山形市上山家町字大網	扇状地	175	大網川	−	−	○	○	○	○				土器・石器	県分布 (11)
																竪穴住居 1(時期不明)/ 土器・石器	県分布 (4)
																(早期～中期) 竪穴住居 16・土坑 / 早期の遺物が中心	県 92 集
60	201-234	飯田	山形市飯田字本籠	低地 (扇状地)	245	馬見ヶ崎川	○										県遺跡台帳
61	201-089	地蔵堂	山形市地蔵堂	段丘 (Ⅱ)	180 ～ 200	立谷川				○						土器片	県遺跡台帳
62	201-308	馬形	山形市山寺馬形	段丘 (Ⅱ)	280 ～ 300	立谷川			○	○						土器片・石鏃・石匙等	県遺跡台帳
63	201-083	中地蔵	山形市山寺字赤石	段丘 (Ⅱ)	190 ～ 193	立谷川	○	○	○	○	○	○	○			(中期) 包含層 1/ 土器・石器・石棒	センター 77 集
64	301-031	根際の場	山辺町根際字的場	段丘 (Ⅱ)	158	須川						●		◎		(大木 10) 竪穴住居・(中期末・後期前葉) 土坑 /(中期) 石棒	県分布 (32)
65	301-049	向原	山辺町根際字向原	段丘 (Ⅲ)	165	須川支流							−	−	−		小林 2001
66	301-040	荒谷	山辺町大蔵字荒谷字三本松	中起伏火山地	440	ー					○					土器・打製石斧・石篦・打斧・石篦	県分布 (6) 他
67	OK4(町)	玉虫 A	山辺町大塚字雉平	崩積緩斜面	450	小鶴沢川							−	−	−	中期もあるが時期不明	山辺町史上巻・山辺町 8 集
68	301-003	沢下	山辺町北作字沢下	中起伏火山地	370	沢上川					−	−				土器	県分布 (6) 他
69	KS4(町)	楯山	山辺町北作字楯山	中起伏火山地	360	沢上川				○							山辺町史上巻・山辺町 8 集
70	301-009	藁田石	山辺町北作字藁田石	扇状地	420	沢上川			○	○						土器・磨製石斧・打斧・石小刀・石篦・三脚土製品・環状石斧・土師器片	県分布 (6)・(9)
71	301-013	西の原	山辺町畑谷字西の原	中起伏火山地	536	沢上川			○	○	○	○				竪穴住居あり / 土器 (大木 10 主体)・石器	県分布 (6)・(9)・山辺町史上巻他
72	301-007	杉谷	山辺町畑谷字上郷	中起伏火山地	550	ー				○							山辺町史上巻
73	301-076	大沼 A	山辺町畑谷字板橋 1933-28	中起伏火山地	600	山王川				○						土器・石皿	県分布 (6) 他
74	301-032	大沼 B	山辺町畑谷	中起伏火山地	580	山王川		○	○	○							山辺町史上巻・山辺町 8 集他
75	301-063	向坂 (嶽原)	山辺町畑谷字嶽原・向原	低地 (谷底平野・氾濫原)	620	沢上川	○	○	○	○	○					竪穴住居 2/(中期 7b 中心) 土器・石鏃・石ヒ・石錐・石匙・石錘・土製耳飾	県分布 (6)・山形考古 8・町史
76	301-058	遅根	山辺町北山字遅根 1707	小起伏火山地	240	面白沢					○					土器・フレーク	県分布 (6)・山辺町 8 集他
77	302-026	御嶽神社	中山町柳沢字吉田 2006	台地及び段丘 (段丘Ⅲ)	120	石小沢川			○							土器	中山町上巻
78	302-002	影浦	中山町岡字影浦 881-1	段丘 (Ⅲ) 低位面	120	最上川			○	○	○					土器・石器 (石匙・石鏃)	中山町上巻・県遺跡台帳
79	210-135	桜江	天童市高擶字桜江	低地 (河間低地)	101	立谷川							−	−	−		小林 2001
80	210-201	火矢塚	天童市清地字火矢塚	扇状地	110	立谷川					○					土器片	県遺跡台帳
81	210-059	永源寺跡	天童市清池字笠仏	扇状地	113	立谷川					○					(後期) 竪穴住居 4・土坑 / 土器・削器・石匙	センター 86 集
82	210-190	中里 A	天童市長岡字中里	扇状地	115	立谷川					○					土器片	県遺跡台帳
83	210-177	上荒谷	天童市荒谷字上荒谷	段丘 (Ⅱ)	180	立谷川				○						(前期) 竪穴住居 3・土坑・土壙墓 1/ 土器・石器・土偶	県分布 (19)・センター 37 集
84	210-046	石達山	天童市下荻野戸字石達山	扇状地	250	倉津川		○		○	○					土器片・石皿・石小刀・石篦 /(県では石転山)	県史考古資料他
85	210-187	南山	天童市下荻野戸字南山	扇状地	210	倉津川					−	−				土器片・打石斧・石槍	県台帳・山大歴史学研究 1
86	210-052	伝覚平	天童市荻野戸字法覚平	扇状地	250	倉津川			○	○	○					土器片	県遺跡台帳
87	210-199	正法寺	天童市上荻野戸字正法寺	扇状地	200	倉津川			○	○	○					石鏃・打斧・石小刀	県分布 (14) 他
88	210-113	新城	天童市貫津字新城	丘陵地 (Ⅰ)	220	倉津川			○	○						土器片	県遺跡台帳
89	210-161	上貫津	天童市貫津 (志田尻)	段丘 (Ⅱ)	190	倉津川			○	○		○				土器・石斧・石鏃・石匙・凹石	天童市史別巻上
90	210-145	白山堂	天童市奈良沢字白山堂	低地 (扇状地)	130	倉津川							−	−	−		小林 2001
91	210-151	小関 A	天童市貫津字小関	扇状地前縁部	135	倉津川				○						土器片	県遺跡台帳
92	210-156	小関 C	天童市貫津字小関	低地 (扇状地)	134	倉津川				○						土器・石器・須恵器・土師器	天童市 5 集
93		水田	天童市貫津	低地 (扇状地前縁部)	130	倉津川				○						土器・石斧・石鏃・石篦	天童市史別巻上
94	210-012	南原	天童市原町字南原 1019-429 他	扇状地	133	立谷川						○					県分布 (11)
95	210-182	砂子田	天童市高擶字砂子田	低地 (河間低地)	95	立谷川			○	○						(後期後葉) 竪穴住居 7・埋設・土坑・河川跡 / 単孔壺 (後期)・土偶 (後晩期)	センター 113 集・小林 2001
96	210-082	沼田	天童市矢野目字沼田	自然堤防	95	倉津川		○	○	○	○					土器片	県遺跡台帳他
97	210-176	願正壇	天童市高擶字街道下	後背湿地	90	倉津川				○	○					土器片	県遺跡台帳

表７　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高(m)	河川	時期中期 7a	7b	8a	8b	9	10	後期 初頭	南１	南２	遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
98	210-172	西沼田	天童市矢野目字西沼田	低地（河間低地）	90	倉津川				○						古墳時代遺構面の下に包含層 / 土器	天童市 31 集・天童市教委 2003
99	H9 登録	板橋１	天童市蔵増字板橋	扇状地前縁部	90	倉津川	○									(後期中葉) 竪穴住居 1・埋設土器 3/ 土器・石器・石棒	センター 125 集
100	H9 登録	板橋２	天童市蔵増字板橋	扇状地前縁部	90	倉津川	○	○	○							(中期) 包含層 / 土器・石器・耳飾	センター 125 集
101	210-041	金谷	天童市成生字金谷	扇状地	100	押切川			○	○	○					鉄滓	県史考古資料他
102	210-100	熊野堂前	天童市成生字熊野堂前	段丘（Ⅲ)(低位面)	100	押切川			○	○						土器・石棒	県分布 (10)・(24)
103	210-195	瓜小屋	天童市成生字瓜小屋	段丘（Ⅲ)(低位面)	101	押切川					○					石鏃・磨斧	県分布 (24)
104	210-055	渡戸	天童市山口字坊所	段丘（Ⅱ）	185	押切川							－	－	－	(後期中葉) 土坑・包含層ほか /(後期) 土器・土偶・土版	県分布 (22)・センター 35 集
105		鍛冶屋敷	天童市田麦野地区	段丘（Ⅲ）	350	押切川		○		○							天童市史別巻上
106	210-105	天童高原 A	天童市田麦野	山腹緩斜面	530	押切川			○	○							天童市史別巻上
107		下尻	天童市貫津字下尻 87		200	貫津川			－	－						石鏃・石匙・凹石	山形県史考古資料
108		乱川	天童市乱川字後田 904		100	乱川					○						山形県史考古資料
109	211-062	猪野沢横台	東根市猪野沢字横台 40	段丘（Ⅲ）開析扇状地	180	乱川				○	○	○			○	土器・石器・晩期石剣・石錐・磨製石斧	県分布 (15)・(18)・東根市史別巻上・県史考古資料
110	211-024	泉郷後沢	東根市泉郷字後沢 2708・2712・神明 2850	段丘（Ⅲ）開析扇状地	190	白水川				○		○				土器	東根市史別巻上
111	211-065	下悪戸東道六神	東根市関山字東道六神 581・582・588	段丘（Ⅲ）開析扇状地	220	乱川				○	○	○					市史別巻上・県史考古資料
112	211-001	羽入山森	東根市羽入字東原 591・596・598・600	段丘（Ⅲ）開析扇状地	95	乱川			－	－						土器・須恵器・スタンプ形土製品	県史考古資料
113	211-043	三ツ屋	東根市三つ屋字三屋裏 748	段丘（Ⅲ）開析扇状地	90	野川				○	○	○				土器・土偶 (8b 式期)・須恵器	市史別巻上・県史考古資料
114	211-036	大森東	東根市大森 8849・8856	段丘（Ⅱ）	158	白水川					－	－					東根市史別巻上
115	211-019	小林 (東根市教委) (県教委 A 地点) (県教委 B 地点)	東根市東根字大森 6441	段丘（Ⅲ）開析扇状地	135	白水川					○	○				石鏃・石槍・打製石斧・磨製石斧・凹石・石小刀・石篦 (前期) 竪穴住居 1・配石 (前期中葉) 竪穴住居 2・土坑 (中期後末葉) 竪穴住居 8・土坑・配石・列石 /(中期末) 石棒	県遺跡台帳 東根市教委他 1975 県 8 集 県 8 集
116	211-010	田迫	東根市東根字田山入	小起伏山地	170	白水川					○					土器片	県遺跡台帳
117	211-040	薬師原	東根市東根字日塔	段丘（Ⅲ）開析扇状地	100	日塔川				○						土器片・須恵器	県分布 (10)
118	211-014	日塔 A	東根市東根字日塔	段丘（Ⅲ）開析扇状地	150	日塔川					○	○				土器・石篦・石鏃・平安中期須恵器	東根市史別巻上他
119	211-078	小田島城跡	東根市東根字本丸・小犠・西橋ほか	段丘（Ⅲ）開析扇状地	119～124	白水川・日塔川	○	○	○	○	○	○		◎	○	土坑・埋設土器 (後期前葉)・包含層 / きのこ形土製品	センター 131 集
120	211-038	上江 A	東根市東根上江	扇状地前縁部	110	日塔川						○				土器・石器	東根市史別巻上
121	211-012	上江 B	東根市東根上江	扇状地前縁部	110	日塔川					○					土器・石鏃・凹石・須恵器・土師器	県遺跡台帳
122	211-068	小池山	東根市東根 (小池山)	中起伏山地	270	白水川	○									土器・土師器・須恵器	県遺跡台帳
123	208-027	宝鏡寺	村山市大久保字市の町 4487	段丘（Ⅱ）	100	最上川					○					土器	県分布 (8)
124	208-023	中村 A	村山市湯野沢字中村	段丘（Ⅱ）	110	千座川			○	○	○	●	○	○	●	(中期末葉中心) 竪穴住居 9・土坑・埋設土器 12・配石 1・複式炉 8/ 土器 (加曾利 E4 式土器出土)・土偶 (中後期)・石棒・石刀・玦状耳飾・垂飾品・石碗	県 73 集・県分布 (8) 他
125	208-010	峯山	村山市湯野沢字峯山 2378-11	段丘（Ⅰ+)	120	千座川	○										県史考古資料他
126	208-021	一木の森	村山市稲下字一木の森	段丘（Ⅱ）	100	最上川			○							石鏃・石匙	県史考古資料
127	208-015	塩川前山	村山市河島甲・前山 1578 の 37～45・95～99	丘陵地（Ⅰ）	130	大旦川			○	○							県史考古資料
128	208-157	河島山口 A	村山市河島乙	段丘（Ⅰ）	105	最上川							－	－	－	土偶・動物土偶	小林 2001
129	208-001	河島山口 B	村山市河島乙 142・150	丘陵地（Ⅰ）	120	最上川					○	○				石鏃	県史考古資料他
130	208-154	後久保	村山市河島乙字後久保 1113-48・1301-1	段丘（Ⅲ）	80	最上川					○					須恵器	県史考古資料他
131	208-153	川口 B	村山市大槙	段丘（Ⅱ）	80	最上川				○						土器	県遺跡台帳
132	208-113	鹿の子沢 A	村山市大槙字鹿の子沢	段丘（Ⅲ）	100	最上川			○	○						土器・石斧・石鏃・石匙	県史考古資料他
133	208-148	鹿の子沢 C	村山市大槙字鹿の子沢	段丘（Ⅱ）	92	最上川		○	○	○			－	－	－	土器・石皿・石匙・石斧・砥石・顔面土偶	県史考古資料他
134	208-002	山の外	村山市稲下字山の外 896-1	段丘（Ⅱ）	95	樽石川				○						石鏃	県史考古資料他
135	208-003	川前	村山市稲下字川前 200-1	段丘（Ⅱ）	105	樽石川				○							県史考古資料
136	208-156	水口	村山市長善寺字樋道	段丘（Ⅱ）	125	樽石川			○	○						土器	県分布 (20) 他
137	208-137	黒木沢 A	村山市樽石字黒木沢 610	小起伏山地	150	樽石川			○							土器・石鏃・石匙・石斧	県史考古資料
138	208-142	黒木沢 B	村山市樽石字黒木沢 13024	小起伏山地	240	樽石川			○	○							県遺跡台帳
139	208-135	北原	村山市土生田字北原	段丘（Ⅰ+)	88	最上川		○		○						土器・石篦	県 35 集
140	208-115	長峯	村山市白鳥字長峯	丘陵地（Ⅱ）	130	最上川			○	○						土器・石斧・石鏃・石匙	県史考古資料他
141	208-036	念仏壇 A	村山市白鳥字字石田 1878 他	谷底平野	100	最上川						○	－	－	－	土器片 (中期末)・剝片	県分布 (27) 他
142	208-117	念仏壇 B	村山市白鳥字念仏壇 1842 他	谷底平野	100	最上川						○	－	－	－	土器・石鏃・石匙・石斧	県遺跡台帳・県分布 (27) 他
143	208-119	平林	村山市白鳥字平林	小起伏山地	150	最上川			○							土器	県史考古資料他
144	208-109	小国沢 (三ヶ瀬)	村山市白鳥字小国沢 3067	段丘（Ⅲ）	95	最上川						○	－	－	－	土器・須恵器	県分布 (27)・市史別巻―他
145	208-102	トウボウ	村山市白鳥字須巻沢 2722 他	扇状地	145						○					土器・凹石・石棒・石鏃・石匙・剝片	県分布 (27) 他
146	208-106	小坂	村山市長島字小坂 564	段丘（Ⅱ）	105	最上川					○					土器	県分布 (7)・(12)
147	208-103	早房 A	村山市富並字小滝	段丘（Ⅱ）	84	最上川			－	－		○	－	－	－	土器・石篦・フレーク・磨石・掻器	県分布 (7)・(15)
148	208-095	早房 D	村山市富並字小滝	段丘（Ⅱ）	85	最上川					○					土器・フレーク・弥生土器	県分布 (7)・県 131 集
149	208-091	小滝 A	村山市富並字小滝	段丘（Ⅱ）	95	最上川				○						土器・フレーク	県分布 (7)

表 8　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高 (m)	河川	時期中期 7a	7b	8a	8b	9	10	後期 初頭	南 1	南 2	遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
150	208-099	川口	村山市富並字川口	低地 (谷底平野)	80	富並川							◎	◎	●	(後期前・中葉) 竪穴住居 13・墓壙 45・集石・土坑・柱穴 / 土器・石器・土偶・耳栓・スタンプ形土製品・石棒・石刀ほか	県 151 集
151	208-092	里向山	村山市富並字向山 4920-11	段丘 (Ⅰ +)	135	最上川	○	○								土器・弥生土器・環状石斧	県遺跡台帳・県分布 (7)
152	208-084	深沢向山	村山市富並字向山 4528-7 ～ 12	段丘 (Ⅰ +)	140	最上川			○	○						土器・フレーク	県分布 (7)・(15) 他
153	208-075	西海渕	村山市富並字西海渕	段丘 (Ⅱ)	107	富並川			●	●	●					土器・石鏃・石皿 (中期中葉) 竪穴住居約 50・墓壙約 150/(中期中葉) 土偶・石棒・手形付土製品・三角形土製品・管状土製品・石製垂飾品・遺物 1000 箱 (中期中葉) 竪穴住居 10・掘立柱建物跡 4・土坑 /(中期中葉) 石棒・石冠・三角形土製品・煙管形土製品・石製垂飾品・遺物 100 箱	県 164. 集 県 174 集
154	208-065	宮の前	村山市富並字宮の前	段丘 (Ⅱ)	128	富並川			○	○						主体は後期・晩期、中期は土器片のみ出土。土器・石器・土偶・石製品・石製品 (センター 2・3 次調査)	センター 19・65 集
155	208-037	ガンジャ (山の内)	村山市山の内字小高根宮地	中起伏山地	320	富並川						○				土器	加藤 1956 山形史学研究 2 他
156	208-038	岩倉	村山市山ノ内字小高根宮地	中起伏山地	300	富並川	○	○	○	○	○					土器・土偶顔面	県史考古資料・市史別巻一
157	208-056	古道	村山市富並字中山 4676-2 他	丘陵地 (Ⅱ)	135	富並川			●	●	○					(中期中葉) 竪穴住居 10・土坑 / 土器・石器・土偶 2 点・遺物 9 箱	県 9 集他
158	208-058	中山	村山市富並字中山 4544-4 他	丘陵地 (Ⅱ)	137	富並川		○	○	○	●					(大木 9) 竪穴住居 4・土坑 / 土器・土偶・遺物 36 箱	県 9 集・村山市史別巻一
159	208-080	境ノ目	村山市境ノ目 4585	段丘 (Ⅱ)	85	最上川			−	−						土器・フレーク	県分布 (7)
160	208-068	田沢新田	村山市新田字大川端	段丘 (Ⅱ)	90	最上川		○	○							土器	県遺跡台帳
161	208-123	白山堂	村山市林崎字大尻且	扇状地	120	大旦川					○					土器・須恵器片	県史考古資料
162	208-094	東熊野苗畑	村山市本飯田字熊の山 2515 他	谷底平野	95	最上川		○								土器・剝片	県分布 (27)
163	208-076	壁山	村山市本飯田壁山 3481-3	丘陵地 (Ⅱ)	100	沢の目川					○					土器	県史考古資料他
164	208-063	沼田	村山市土生田字沼田	丘陵地 (Ⅱ)	85	最上川		○								土器	県 35 集
165	208-061	赤石	村山市土生田字赤石	丘陵地 (Ⅱ)	80	最上川				○	○					(早・前・晩期) 土坑 / 土器・石器・石錘	県 35 集
166	208-052	落合	村山市土生田字落合 2595 他	段丘 (Ⅲ)	75	最上川	○	●	●	○	○					(中期前葉～中葉) 竪穴住居 6・土坑 / 土器・円筒上層 d 式・耳飾・煙管形土製品・石器・土偶・石棒 (遺物 52 箱)	県史考古資料・センター 36 集他
167	208-064	南沢	村山市土生田字南沢	小起伏山地	120	沢の目川							−	−	−	内面沈線文土器	小林 2001
168	208-048	森の原	村山市土生田字鼠田 1263-12・20・24	自然堤防	70	沢の目川	○	○			○					土器片・須恵器片	県史考古資料
169	208-041	細田	村山市土生田字細田	段丘 (Ⅰ)	74	最上川			○							土器・石器・石錘	県史考古資料・県分布 (29)
170	208-057	新平	村山市上五十沢字新平	段丘 (Ⅱ)	120	五十沢川			−	−						土器・勾玉 (ヒスイ)	県遺跡台帳
171	208-054	導心坂	村山市上五十沢字導心坂	小起伏山地	120	五十沢川				○						土器	県遺跡台帳
172		柳平	村山市湯沢字柳平、モモクシ柴山官有地		320						○						県史考古資料
173		東原	村山市稲下字平林 878 の 7		100					○							県史考古資料
174		拝見	村山市土生田字拝見 2714 － 42 ～ 72		70	最上川	○	○								土器	県史考古資料
175	206-023	高瀬山	寒河江市高瀬山乙 978	段丘 (Ⅲ) 低位面	110	最上川	◎	◎	●	●	●	●	◎	◎	◎	旧石器・縄文から古代・中世に至る複合遺跡	寒河江市 1・6 集・県分布 (10) 他
		(SA)	寒河江市大字柴橋字落衣他		100 ～ 102											(大木 10 式) 竪穴住居 1・土坑・埋設土器 8/ 土坑中心に大木 10 式土器出土。	センター 94 集
		(1 期)	寒河江市大字寒河江字高瀬山他		122											(前期末) 大型住居を伴う環状集落・(中期中葉～末葉) 竪穴住居 7・土坑・埋設土器 /(前期) 土偶・石棒・石剣・玦状耳飾・石製垂飾品・(中期) 石棒	センター 121 集
		(HO 地区 2 ～ 6 次)	寒河江市柴橋		99 ～ 103											(中期中～末葉) 竪穴住居 9・埋設土器 3・土坑・(後期初頭) 土坑・(後期中葉) 竪穴住居 15・埋設土器 2・土坑・配石 2・木組遺構 2・(後期) 包含層・(晩期) 土坑・木組遺構・石組遺構・(時期不明) 陥穴 5/ 土器・石器・土偶・スタンプ状土製品・石棒・線刻礫・木製品	センター 145 集
		(HO3 期)	寒河江市寒河江字高瀬山他													(中期末) 竪穴住居 1・複式炉 2・(中期～後期前葉) 埋設土器 5・包含層 /(後期) 土偶・耳飾・腕輪状土製品・石器・石製品	センター 200 集
176	206-005	三条	寒河江市寒河江字三条	低地 (河間低地)	93 ～ 99	最上川					○					(大木 6 式) 竪穴住居 1・土坑 / 土器・石器	センター 93 集
177	206-045	向原	寒河江市中郷字南 2285	段丘 (Ⅲ) 低位面	120	最上川					○	●				(大木 10) 複式炉 / 大木 9・10 式浅鉢・深鉢・石鏃・石小刀・三脚石器・石篦・磨製石斧・ナイフ形石器・石刃・掻器・石刃核	県遺跡台帳・寒河江考古 3 他
178	206-015	うぐいす沢 (県 1 次)	寒河江市中郷上ノ代 434 他	山地及丘陵・山麓緩斜面	108 ～ 110	最上川				○	◎	●				土器 (大木 9・10 式)・剝片 (大木 9・10 式) 竪穴住居 8・土坑 /(大木 9・10 式) 土器・石器・土偶・48 箱	県分布 (8) 県 41 集
179	206-041	柴橋	寒河江市柴橋字金谷	段丘 (Ⅲ) 低位面	105	最上川				●	◎	●				(中期中葉～後葉) 竪穴住居 10(内大型住居 1)・土坑ほか / 土器・石器・三角形土製品・石器接合資料	寒河江市 7 集
180	206-029	平野山古窯跡群第 12 地点	寒河江市柴橋字高松ほか	山地及丘陵・山麓緩斜面	110 ～ 117	最上川								○		土器片・石器	センター 52 集
181	206-008	富沢 I	寒河江市清助新田字富沢	段丘 (Ⅲ)	129 ～ 132	寒河江川		○		○		◎	◎	◎	◎	(中期末葉～後期前・中葉) 土坑・陥穴・旧河川跡 3 条 / 土器・土製円盤・円盤状石製品・石核と接合資料・蓋型土器	センター 30 集
182	206-006	谷沢	寒河江市上谷沢	段丘 (Ⅲ)	150	寒河江川			−	−	○					深鉢・石小刀・凹石・石斧	県史考古資料他
183	321-052	権現森	河北町両所裏田 3646	段丘 (Ⅱ)	200	古佐川						○				磨製石斧・打製石斧・石鏃・石小刀・土師器片	県史考古資料他
184	321-001	裏田	河北町両所裏田 3919	段丘 (Ⅱ)	120	古佐川	○									土器片・打製石斧・磨製石斧	県史考古資料他
185	321-006	さいかちだ	河北町西里根際 4376-3	丘陵地 (Ⅰ)	200	古佐川	○									打製石斧・石鏃・石小刀・磨石	県史考古資料他
186	321-009	中土入	河北町西里字土入 2929 他	丘陵地 (Ⅰ)	170	古佐川			○							土器・打製石斧・石篦・凹石・石鏃・石小刀・三脚石器・磨石・フレーク	分布 (11)
187	321-011	奥土入	河北町西里根際土入 12929	丘陵地 (Ⅰ)	180	古佐川				○			−	−	−	土器・舟底形細石刃核・石刀・石斧・石小刀・磨斧・石篦・石鏃・磨石・石槍	県史考古資料他
188	321-013	曲沢	河北町西里土入 41290	小起伏山地	220	古佐川	○	○								土器片少量・打製石斧・石鏃・石小刀・石槍	県史考古資料

表９　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高(m)	河川	時期中期						後期			遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
							7a	7b	8a	8b	9	10	初頭	南１	南２		
189	321-019	鶴狭間	河北町西里高嶋 4461	丘陵地（Ⅰ）	200	古佐川		○	○	○						磨製石斧・石小刀・石皿	県史考古資料他
190	321-016	お月山	河北町沢畑 807	段丘（Ⅱ）	100	古佐川		○	○	○	○	○				(中期後葉) 竪穴住居 1/ 土器・石小刀・石鏃・磨製石斧・凹石・石槍・土偶・管玉	県史考古資料・河北町史上
191	321-028	四ツ塚	河北町岩木 454	段丘（Ⅱ）	160	法師川					○	○				磨製石斧・打製石斧・石鏃・石小刀・土師器片	県遺跡台帳
192	321-033	岩木 A	河北町岩木 236	段丘（Ⅱ）	200	法師川			−	−						磨製石斧・打製石斧・石鏃	県史考古資料他
193	321-036	岩木 B	河北町岩木 220	段丘（Ⅱ）	100	法師川					○					土器片・石小刀・石槍・石鏃・打製石斧等	県史考古資料他
194	322-018	熊野	西川町睦合字熊野	段丘（Ⅲ）	160	熊野川	○	○								土器片・石核・その他石器	県遺跡台帳他
195	322-025	小月山橋	西川町吉川字小月山地内	谷底平野	193～196	寒河江川									○	後晩期・土坑・石囲炉 / 石器・土偶・土製円盤・石製円盤・遺物 20 箱	県分布 (11)・西川町史上巻他
196	322-030	東浦	西川町海味字東浦 311	段丘（Ⅲ）	200	海味川			−	−						土器・石篦・石匙・石斧	県遺跡台帳
197	322-055	サッテロ	西川町間沢字サッテロ	段丘（Ⅲ）	230	寒河江川				○						土器・石篦・石鏃・石斧	県遺跡台帳
198	322-100	山居	西川町水沢字山居	山地及丘陵（山麓緩斜面）	248	水沢川		○	○	●	●	●				(中期中～後葉) 竪穴住居 22・土坑・包含層 2/ 土器・石器・土偶 55 点・皮袋形土製品・キノコ形土製品・管状土製品・石棒・遺物 1215 箱	センター 53 集他
199	322-053	宝田	西川町岩根沢字上の平	山地及丘陵（中・急斜面）	410	水沢川						○				土器・石篦・石斧・石小刀	県遺跡台帳
200	322-063	薬師森	西川町岩根沢字上の平	山地及丘陵（中・急斜面）	410	水沢川						○				土器・石篦・石斧・・石核	県分布 (18)
201	322-087	龍神沼	西川町岩根沢字上の平	山地及丘陵（中・急斜面）	420	水沢川					−	−				石小刀・スクレーパー	県遺跡台帳
202	322-084	黒森山	西川町水沢字黒森 1559	山地及丘陵（中・急斜面）	460	横岨川						○				土器・石斧・凹石・石篦・石小刀・石鏃・石核	県遺跡台帳
203	322-047	お仲間林	西川町入間字平助新田 2677・1554-2	段丘（Ⅲ）	292	寒河江川			●		−	−				(中期) 長方形竪穴住居 1・石囲炉 1・土坑 /(遺物は旧石器中心) 土器・石刀・石核・石篦・石鏃・石錐・尖頭器・石匙・掻器・削器	センター 20 集他
204	322-016	落合	西川町入間字落合 734	山地及丘陵（山麓緩斜面）	290	大入間川			−	−						石篦・石斧	県遺跡台帳他
205	324-016	藤田原	大江町藤田字藤田原	段丘（Ⅲ）	135	最上川		○	○	○						石鏃・石小刀・打製石斧・磨製石器	県史考古資料他
206	324-026	小見	大江町小見字下原	段丘（Ⅲ）	130	月布川			○							土器片・石篦・掻器	県遺跡台帳
207	324-055	望山	大江町望山字前表 101	段丘（Ⅲ）	140	月布川							−	−	−		大江町史・小林 2001
208	324-043	橋上	大江町橋上アントン沢	段丘（Ⅲ）	170	月布川					○	●	●	○	○	(中期末～後期初) 竪穴住居 14・埋設土器 50・配石あり・拠点的集落 / 土器・石器・土偶・耳飾？・腕輪状土製品・土鈴・ヒスイ製太珠	大江町 1 集・大江町史
209	324-036	大久保	大江町十八才字大久保西ノ原 189	段丘（Ⅲ）	180	月布川			−	−			−	−	−	独鈷石・石冠	県史考古資料・大江町史他
210	324-021	向田	大江町沢口字阿ヨシ	山地及丘陵（中・急斜面）	240	月布川							−	−	−		小林 2001
211	324-017	小姓堂	大江町沢口字小姓堂	山地及丘陵（中・急斜面）	257	月布川					○	○				石鏃・石小刀・打製石斧	県史考古資料他
212	324-032	南又	大江町柳川 (南又)	山地及丘陵地 (山麓緩斜面)	500	月布川			○	○						打製石斧・石小刀	県史考古資料他
213	324-039	大鉢	大江町大鉢久保場畑 179	山地及丘陵 (山麓・山腹緩斜面)	290	月布川	○	○								打製石斧・石小刀	大江町史他
214		藤田柏陵グラウンド	大江町藤田			最上川	○	○									大江町史
215		十八才	大江町十八才			月布川			−	−						石皿	県遺跡台帳・大江町史
216		月布高	大江町月布			月布川				○						土器・石器	大江町史
217	323-033	上川原山ノ神	朝日町玉ノ井乙字上川原	台地及段丘・段丘（Ⅲ）	136	最上川						○	○			(晩期) 柱穴・柱材 25 本検出 / 土器・石器・時期は大洞 C1・C2・A	県分布 (26)
218	323-016	鷲沢	朝日町大谷字鷲沢 927-2	台地及段丘・段丘（Ⅲ）	140	大谷川					○	○				土器・磨製石斧・打製石斧・石匙・石鏃	県遺跡台帳
219	323-020	大塚	朝日町大暮山字大塚道違 82-1	山地および丘陵地	330	大谷川			○	○						土器・打製石斧・磨製石斧・石匙・石鏃	県分布 (15) 他
220	323-052	川前	朝日町和合字川前 474	台地及段丘・段丘（Ⅲ）	140	最上川			○	○						土器・磨製石斧・石錐・石匙・石錘・石鏃	県史考古資料他
221	323-006	八ツ目久保	朝日町四ノ沢字八ツ目久保	低地 (谷底平野・氾濫原)	143	最上川				●	●	●				(中期中～末葉) 竪穴住居 7・土坑・配石 1・(時期不明) 陥穴 39/ 土器・土偶・円盤状土製品・石器	センター 64 集
222	323-008	上ノ台	朝日町宮宿字上ノ台 500	台地及段丘・段丘（Ⅲ）	150	最上川			○	○						土器・打製石斧・磨製石斧・石匙	県史考古資料他
223	323-036	雪谷	朝日町雪谷字大畑 222	丘陵地	190	最上川					○	○				土器・磨製石斧・打製石斧・石匙・石棒・石皿	県史考古資料他
224	323-003	畑鉾	朝日町常盤字前田畑鉾	台地及段丘・段丘（Ⅲ）	190	最上川			−	−	○	○				土器・石匙・打製石斧・石槍・三脚石器	県遺跡台帳
225	323-047	松原	朝日町松原字ヒデリ田	崩積緩斜面及地滑滑動地	260	最上川			−	−						土板・石棒	県史考古資料
226	341-100	羽根沢 A	大石田町田沢字羽根沢 1841	段丘（Ⅱ）	90	最上川				○						土器	大石田町 9 集他
227	341-102	羽根沢 B	大石田町田沢	段丘（Ⅱ）	95	最上川				○	○					土器	県分布 (7) 他
228	341-105	羽根沢 C	大石田町田沢字小野原 1845-7	段丘（Ⅱ）	90	最上川					○					ポイント・須恵器	大石田町 9 集他
229	341-101	小野原 (笹山)	大石田町田沢小野原	段丘（Ⅱ）	80	最上川	◎	○	○	●	○					(中期前・中葉) 竪穴住居 1・土坑 / 土器・石棒・ナイフ形石器	町史・大石田町 8・9 集他
230	341-112	長峯山 B	大石田町田沢字長峯山	段丘（Ⅱ）	80	最上川				○						土器・フレーク	県分布 (7)・(27)・大石田町 9 集
231	341-103	久伝	大石田町田沢字久田 1875 他	丘陵地（Ⅱ）	130	最上川	○	○	○	●						(中期中葉) 土坑 /(中期) 土偶	県 9 集他
232	341-091	田沢沼西 A	大石田町田沢	丘陵地（Ⅱ）	130	最上川		○								土器	県遺跡台帳
233	341-078	前山	大石田町田沢字前山大平	段丘（Ⅲ）	90	最上川					−	−	−	−	−		県遺跡台帳
234	341-069	ドザキ	大石田町田沢字防崎 239	段丘（Ⅲ）	80	最上川			○	○	○					(中期) 大型住居跡 2・土坑 / 土器・土偶・三角形土製品・石棒	大石田町 8 集他
235	341-014	来迎寺	大石田町横山字来迎寺	段丘（Ⅲ）	69	最上川	○	◎	◎	○				○		(中期前～中葉) 竪穴住居 1・土坑 15・埋設土器 1 ほか / 土器・石鏃・石斧・青龍刀型石器	県 34 集・県分布 (10)・大石田町 8・9 集他
236	341-018	善翁寺裏	大石田町今宿 355	丘陵地（Ⅱ）	60	最上川			○	○	○	○				土器・石器・大珠	大石田町 6 集他
237	341-015	今宿	大石田町今宿	丘陵地（Ⅱ）	100	最上川				○						土器	県遺跡台帳
238	H23 新規	今宿大谷地	大石田町今宿字大谷地	丘陵地（Ⅱ）	90	最上川		◎					−	−	−	土坑 / 土器・石器	H24 センター年報
239	341-054	玉ノ木平 A	大石田町横山 4223-1	小起伏山地	110	黒滝沢川		○	○	○	○	○				(晩期) 竪穴住居跡・土坑・包含層他 / 土器・石斧・石皿・石鏃・土板・岩板	県遺跡台帳・大石田町 5 集他
240	341-056	玉ノ木平 B	大石田町横山字黒滝沢	小起伏山地	130	黒滝沢川			○	○	○					土器・石器フレーク	大石田町 5 集
241	341-055	玉の木平 C	大石田町横山字黒滝沢	小起伏山地	150	黒滝沢川			○	○	○					土器・磨石・フレーク	県遺跡台帳他

表 10　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高 (m)	河川	時期中期						後期			遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
							7a	7b	8a	8b	9	10	初頭	南 1	南 2		
242	341-033	玉の木平 E	大石田町横山字白羽毛 4404-9	火山山麓地	170	黒滝沢川			○	○	○			○		土器・石器 / 別名　白羽毛 B	大石田町 5 集
243	341-041	玉の木平 F	大石田町横山字一ノ渡戸 4588	小起伏山地	150	黒滝沢川			○	○	○		○			土器・石器 / 別名　一ノ渡戸 C	大石田町 5 集
244		玉の木平 G	大石田町横山	小起伏山地	170	黒滝沢川				○	○	○				小規模遺跡	県遺跡台帳・大石田町史上巻
245	341-039	玉の木平 H	大石田町横山字白羽毛 4404-9	火山山麓地	170	黒滝沢川			○	○	○					土器・磨石 / 別名　白羽毛 A	大石田町 5 集
246	341-058	黒滝 1	大石田町横沢字黒滝	小起伏山地	90	最上川								○		土器・石篦・円盤状石製品	小林 2001
247	341-062	角二山	大石田町字上ノ原乙 509-4	段丘 (Ⅱ)	80	最上川					○	○	−	−	−	(大木 6) 竪穴住居・土坑 / 土器・細石器・石刃・須恵器	県分布 (32)・県史考古資料他
248	341-084	豊田・上の原	大石田町豊田字家浦	低地 (自然堤防)	40	丹生川			○							土器・土偶・石鏃・石錐・石匙・石槍	県遺跡台帳
249	341-122	駒籠橋 (橋の鼻)	大石田町駒籠字土井ノ前 727-1	段丘Ⅲ	65	最上川				○	○	○	○			土器・石斧	大石田町 10 集他
250	341-118	駒籠向	大石田町川前字中ヶ袋	低地 (谷底平野)	70	最上川							−	−	−	石棒	小林 2001 他
251	341-003・004	白鷺 (A・B)	大石田町大浦 1569	段丘Ⅱ	65	最上川			○		○		−	−	−	土器・石器・石匙・鏃・錘・篦・掻器・揆型石器	県遺跡台帳
252		新林	大石田町横山字来迎寺 727-8		60			○	○	○						石鏃・石匙・石斧	県史考古資料
253		八幡町	大石田町大石田上の原甲 614		77.5						○						県史考古資料
254	212-012	横内	尾花沢市横内	小起伏山地	90	五十沢川			−	−			−	−	−		県史考古資料他
255	212-013	古屋敷	尾花沢市横内字古屋敷	小起伏山地	120	五十沢川			−	−							県史考古資料他
256	212-020	五十沢公園	尾花沢市五十沢公園下	段丘 (Ⅱ)	100	五十沢川			−	−			−	−	−		県史考古資料他
257	212-098	営林署苗圃	尾花沢市萩袋字営林署苗圃	段丘 (Ⅱ)	80	野尻川			−	−							県史考古資料他
258	212-097	野尻 A	尾花沢市寺内字野尻	段丘 (Ⅱ)	102	野尻川		○		○						土器・スクレーパー	
259	212-080	大平	尾花沢市寺内字大平	山地 (小起伏山地)	180	野尻川	−	−									県史考古資料他
260	212-078	毒沢	尾花沢市毒沢 1401-1 他	段丘 (Ⅲ低位)	50	最上川			−	−			−	−	−	(前期・後期前葉) 土坑・ピット / 土器・石器	県史考古資料・市第 1 集他
261	市登録	上の台	尾花沢市毒沢	段丘 (Ⅲ)	55	最上川						○	○			土器・石斧・篦状石器・スクレイパー・凹石・石皿	尾花沢市 1 集・小林 2001
262	212-077	水がしら	尾花沢市寺内	低地 (谷底平野及氾濫原)	150	野尻川			○	○							県史考古資料他
263	212-073	日陰	尾花沢市寺内字日陰	人工改変地	250	野尻川		○	○	○							県史考古資料他
264	212-162	荻袋	尾花沢市荻袋	段丘 (Ⅱ)	90	丹生川			−	−						土器	県史考古資料他
265	212-128	苗圃北	尾花沢市萩袋	段丘 (Ⅱ)	50	野尻川			−	−							県史考古資料
266	212-119	松ヶ沢	尾花沢市牛房野字田沢	段丘 (Ⅱ)	95	野尻川				○						土器	県史考古資料・県分布 (10) 他
267	212-137	森岡	尾花沢市牛房野字森岡	段丘 (Ⅱ)	90	牛房野川			−	−							県史考古資料他
268	212-114	安久戸 D	尾花沢市丹生字源田山森岡山	丘陵地 (Ⅱ)	120	丹生川支流						○	−	−	−	土器・石匙	県分布 (12)・(14)・小林 2001
269	212-103	漆坊	尾花沢市牛房野字田沢前	低地 (谷底平野)	123	丹生川支流								○	○	(後晩期) 土坑・(晩期) 配石 4・柱穴 /(後晩期) 土偶・耳栓・土板・スプーン形土製品・石棒・石刀・石剣・独鈷石・岩板・小玉・勾玉	尾花沢市 2 集
270	212-100	経塚	尾花沢市牛房野字経塚	低地 (谷底平野)	100	牛房野川	−	−	−	−						石鏃・石匙・石篦・観音像頭部・五輪塔	県史考古資料他
271	212-094	オトリ沢 A	尾花沢市牛房野字オトリ沢	低地 (谷底平野)	100	牛房野川	−	−	−	−						石器・石鏃・石小刀	県史考古資料他
272	212-096	オトリ沢 B	尾花沢市牛房野字オトリ沢	低地 (谷底平野)	100	牛房野川	−	−	−	−						石鏃・石篦	県史考古資料他
273	212-090	ドノ沢	尾花沢市牛房野字ドノ沢	低地 (谷底平野)	100	牛房野川				○						深鉢・網代底部	県史考古資料他
274	212-089	寺山下	尾花沢市牛房野字寺山下	低地 (谷底平野)	200	牛房野川				○						土器・石鏃・石鏃 (黒曜石)	県史考古資料他
275	212-088	高見橋	尾花沢市牛房野字高見橋	山地 (中起伏山地)	100	牛房野川			○	○							県遺跡台帳
276	212-074	二口 A	尾花沢市牛房野字二口	中起伏山地	200	牛房野川			○	○							県史考古資料他
277	212-121	西谷地 F	尾花沢市丹生字西谷地	低地 (谷底平野)	155	赤井川		○			○					土器	県分布 (10)・県 69 集
278	212-124	西谷地 G	尾花沢市丹生字西谷地	丘陵地 (Ⅱ)	155	赤井川			○							土器・須恵器	県分布 (10)
279	212-132	東大沢 A	尾花沢市丹生字東大沢	丘陵地 (Ⅱ)	150	赤井川			○							土器 (大木 8a 式、後期か晩期)	県分布 (10)
280	212-118	東大沢 B	尾花沢市丹生字東大沢	低地 (谷底平野)	155	赤井川			○							土器 (大木 8a 式、後期か晩期)・石匙・フレーク	県分布 (10)
281	212-110	東大沢 D	尾花沢市丹生字東大沢	谷底平野	160	赤井川			○	○	○	○	−	−	−	土器・石篦・フレーク・篦状石器	県分布 (10)・県 69 集
282	212-106	東大沢 F	尾花沢市丹生字東大沢	小起伏山地	160	赤井川							−	−	−	土器・削器・フレーク	県分布 (10)
283	212-093	ミヨシ原	尾花沢市丹生字三吉原	丘陵地 (Ⅱ)	150	赤井川	○	○					−	−	−	土器・石鏃・石匙・フレーク	県史考古資料・県分布 (10)
284	212-105	東原	尾花沢市中沢字東原	扇状地	200	赤井川	−	−	−	−			−	−	−		県遺跡台帳
285	212-081	源氏ヶ沢	尾花沢市岩谷沢字源氏ヶ沢	山地及丘陵 (山地山腹)	290	赤井川			−	−							県遺跡台帳
286	212-159	行沢西原	尾花沢市行沢字西原・中島字西原	段丘 (Ⅱ)	165	丹生川							−	−	−	土器 (前期、南境式)・石錐・石篦・削器・フレーク	県分布 (10)
287	212-155	五輪坂	尾花沢市中島字五輪坂	段丘 (Ⅱ)	170	赤井川			○	○	○					土器・石篦・フレーク	県分布 (10) 他
288	212-156	北宿	尾花沢市中島字北宿	段丘 (Ⅱ)	170	丹生川			−	−						土器	県分布 (10) 他
289	212-154	根堀	尾花沢市中島字根堀	段丘 (Ⅱ)	120	赤井川			−	−						県では「根掘」	県史考古資料他
290	212-153	中平	尾花沢市中島字中平開拓	段丘 (Ⅱ)	200	赤井川			−	−							県遺跡台帳
291	212-152	向山	尾花沢市中島	山地及丘陵 (山地山腹)	250	丹生川	○			○							県史考古資料他
292	212-143	明光寺	尾花沢市中島明光寺原	山地及丘陵 (山地山腹)	300	丹生川			−	−							県遺跡台帳
293	212-171	東山	尾花沢市鶴巻田字東山	低地 (谷底平野)	200	丹生川			○							土器・篦状石器・石匙・石鏃	県分布 (10)・県 69 集
294	212-180	仲江平	尾花沢市母袋字仲江平	山地及丘陵 (山地山腹)	500	丹生川			−	−							県史考古資料他
295	212-187	サヤ堂	尾花沢市母袋字サヤ堂	台地及低地 (低位段丘面)	220	丹生川			−	−						打製石斧・磨製石斧	県史考古資料他
296	212-188	若林	尾花沢市母袋字若林	谷底平野・氾濫原	220	丹生川	−	−	−	−							県史考古資料他
297	212-174	原 A	尾花沢市鶴巻田字原	段丘 (Ⅱ)	160	丹生川			○							土器	県分布 (10)

表 11　最上川中流域縄文時代中期～後期前葉の遺跡

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高 (m)	河川	時期中期 7a	7b	8a	8b	9	10	後期 初頭	南 1	南 2	遺構 / 出土遺物 / 備考	文献
298	212-184	原 C	尾花沢市鶴巻田字原	段丘 (Ⅱ)	170	丹生川			○							土器	県分布 (10)
299	212-186	取上	尾花沢市尾花沢字取上	段丘 (Ⅱ)	110	朧気川							－	－	－		小林 2001
300	212-191	徳良湖	尾花沢市袖原 (徳良湖底)	溜池	140	朧気川					○	○					県遺跡台帳
301	212-006	袖原 E	尾花沢市延沢字袖原	丘陵地 (Ⅱ)	185	綱木川							－	－	－	土器 (大木 1 式、南境式) ・フレーク・石核	県分布 (10)
302	212-022	大明神	尾花沢市荒町字大明神	段丘 (Ⅱ)	180	朧気川			－	－							県史考古資料他
303	212-.032	熊原	尾花沢市延沢字熊原	段丘 (Ⅱ)	180	朧気川					○					土器・フレーク	県分布 (10)
304	212-040	カマツ坂	尾花沢市延沢字カマツ坂	小起伏山地	200	朧気川支流			－	－							県史考古資料他
305	212-045	田の沢	尾花沢市延沢字屋敷沢 517-1	谷底平野	188	前田川 (朧気川支流)			－	－		○				土器・石匙・石篦	県分布 (12) 他
306	212-060	巾 (市 1 次) (市 2 次)	尾花沢市細野字幅・カバ山	谷底平野	230	前田川 (朧気川支流)		○	◎	○	○					土器多数・石器・土偶 (中期 8a 中心) 土坑・埋設土器 1・埋甕 6・土坑 / 土器・土偶・環状土製品・石冠 (中期 8a 中心) 土坑・柱穴	県分布 (9)・(10) 他 尾花沢市 3 集 尾花沢市 4 集
307	212-014	六沢	尾花沢市六沢	段丘 (Ⅱ)	210	丹生川	○	○								土器	県分布 (10)・(11) 他
308	212-029	原の内 A 県 1 次 県 2 次 県 3 次	尾花沢市鶴子字中原・字山崎・字大田	段丘 (Ⅱ)	240	丹生川		●	●	●						土器 (早期・中期・晩期)・石器 (中期中葉) 竪穴住居 2・土坑・(晩期) 竪穴住居 1/ 遺物 10 箱 (中期前～中葉) 竪穴住居 12・炉跡 4/ 遺物約 90 箱・土器・中期前～中葉土偶 5 点・石冠 (7b ～ 8a)・土版・耳栓・遺物 90 箱 (中期前～中葉) 竪穴住居 2・土坑・埋設土器 5・配石 3・炉跡 / 土偶 35 点・管状土製品・馬高式土器・土製耳飾・石製装身具・遺物 390 箱	県 28 集 県 57 集 県 132 集
309	212-031	原の内 B	尾花沢市鶴子字立目	段丘 (Ⅱ)	225	綱木川			－	－						土器 (室浜式・中期・後期・晩期)・石鏃・凹石・石核・フレーク	県分布 (10)・県史考古資料他
310	212-043	八面	尾花沢市鶴子字八面	段丘 (Ⅱ)	180	丹生川			－	－						土偶	
311	212-056	間木の内	尾花沢市鶴子字間木の内	低位段丘面	260	丹生川						○				土器・フレーク	県分布 (10)
312	212-057	川原	尾花沢市鶴子字川原	低位段丘面	270	丹生川				○						土器 (中期・晩期)・石鏃・石篦・フレーク	県分布 (10)・(24) 他
313	212-066	いるかい (1 次・2 次)	尾花沢市鶴子字定本	山地・丘陵 (中・急斜面)	320	丹生川		○	○			◎		◎		早期～前期の縄文土器が中心・石器・玦状耳飾 1 次 (後期後葉) 竪穴住居 1・土坑・2 次 (前期中心) 竪穴住居 10・土坑	県分布 (9)・県 69 集
314		観音前	尾花沢市下五十沢字観音前		120	五十沢川					○						県史考古資料他
315		上柳渡戸	尾花沢市上柳渡戸		250				－	－							県史考古資料
316		中野	尾花沢市丹生字中野		150				－	－							県史考古資料
317		名木沢川岸	尾花沢市名木沢		50				－	－							県史考古資料
318		白仏	尾花沢市荻袋字白仏		50				－	－							県史考古資料

東北南部における縄文時代終末から弥生時代初頭の遺物組成

植松暁彦

1　はじめに

近年、発掘調査の増加に伴い、山形県でも縄文時代晩期の「捨て場」と称される遺物廃棄場がいくつか確認されている。同晩期は、青森県の亀ヶ岡遺跡に代表される磨消縄文など多様な文様や器形（浅鉢や皿、注口土器など）の土器群や遮光器土偶などが知られ、亀ヶ岡文化と称される縄文時代終末の精巧な文化が東北一円に盛行した時期として知られている。

しかし、実際の発掘調査では、土器の地文が縄文のみで構成され、粗雑な造作の所謂粗製土器（深鉢や鉢など）が一定量あることが知られており、他県ではこれら粗製土器も含めた全体的な遺物の組成や形態の変化から、当該期の土器製作や社会変化の実体に迫ろうとする研究も行われている（藤村 1983・須藤 1995）。

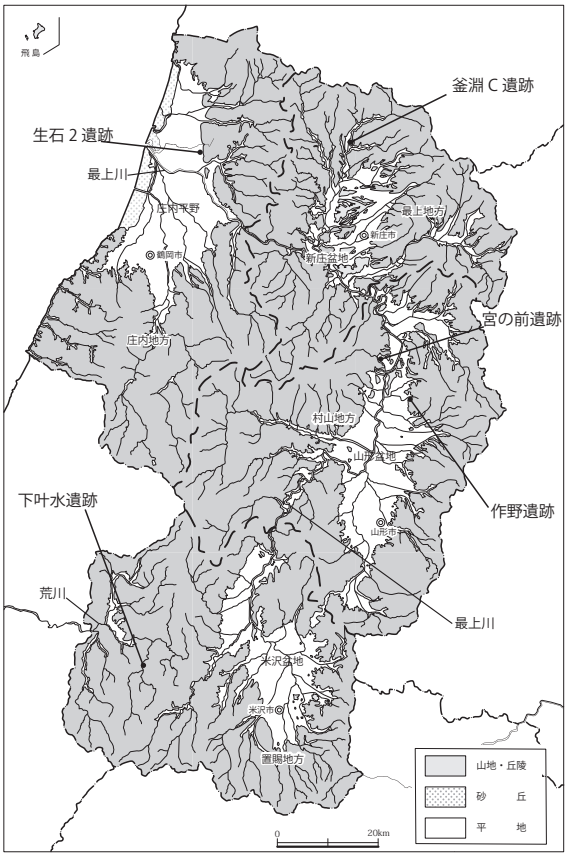
筆者も県内の村山市宮の前遺跡第３次調査（植松 1999）、小国町下叶水遺跡（植松 2009）、村山市作野遺跡第２・３次調査（植松 2011・2012）などで、縄文時代後期末～晩期の捨て場などを調査する機会を得て、多量の土器や石器などの遺物の組成を、層位やブロック毎に整理したことがある。

本稿では、縄文時代の狩猟採集から「米どころ山形」の始まりである弥生時代の稲作開始への変移や地域の様相を探るため、上記遺跡と同時期や後続する弥生時代初頭の遺跡を再整理し、報告書刊行後の新たな知見なども加え、縄文時代終末から弥生時代初頭に至る変革期の遺物組成の特徴などを概括したい。

2　研究史と編年観

縄文時代の遺物組成は、東北地方北部において多様な器種や形態が認められる縄文時代後晩期の遺跡などで、研究が進められた経緯がある。これは、縄文時代終末から弥生時代にかけての変換期に関わることとも絡み、縄文・弥生時代研究者双方からのアプローチがあった。

近年では、特に岩手県九年橋遺跡で、藤村東男氏が土器について「徹底して復元」した結果を基に、詳細な土器組成について成果を上げている（藤村 1983）。



第１図　遺跡位置図

また、青森県や岩手県などの縄文時代から弥生時代にかけての遺跡の土器組成を整理し、その利点と弱点について整理された（藤村 1983）。

東北大学の須藤隆氏は、宮城県や岩手県の資料（中沢目貝塚・山王遺跡など）を精査し、縄文時代から弥生時代にかけての土器組成の変化などを整理し、大きな時代変化を土器組成の中に求めようとした（須藤 1995）。他に、宮城県の田柄貝塚（藤沼 1986）や摺萩遺跡（柳沢 1990）などで同様に一部土器組成を整理している。

但し、これらの研究には、数値化にあたり、求める情報の相違もあって各々大きな違いがあった。藤村氏は、「徹底した復元」により、遺跡内での土器の実数（個数）やその組成の実体に迫ろうとした。一方、須藤氏は、遺跡出土の精密な全点計測により、遺物組成を追求したた

め、全体に大型で復元が難しい深鉢などの点数がより多く組成される結果になった（第 22 ～ 24 図）。

本県では、多量の遺物が出土した調査例はあったが、明確な捨て場があまりなかった点や、復元時の制約もあり、遺物組成はあまり行われてこなかった。

但し、遺物組成の数量化を検討した遺跡もいくつか散見される。土器では、縄文時代後晩期を主体とした鶴岡市（旧朝日村）砂川Ａ遺跡（佐藤 1984）で、破片資料も含む全点計測で器種毎の数量化をはかった。

石器では、砂川Ａ遺跡で数量化をはかっているほか、遊佐町吹浦遺跡（前期）、南陽市月ノ木Ｂ遺跡（早期）などで、石材も含めた組成を行っており（渋谷 1989）、県内の縄文時代の石器組成の一端を知ることができる。

近年、筆者も宮の前遺跡の遺物組成を層位毎に概略を報告し、報告書表などから詳細を再整理した（植松 1999）。他に下叶水遺跡や作野遺跡の報告でも捨て場などの層位毎に遺物組成や法量分布、赤彩・補修孔、炭付着の数量化を行い、集落内や地域毎の時期による変遷を指摘した（植松 2009・2011）。

なお当該期の編年観は、上記報告書でも基準にした東北南部の土器型式などを採用し、古い順に縄文時代後期後葉は小林圭一氏の所謂「瘤付土器」（高柳 1988）の各段階（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）の時期、後続の同晩期は山内清男氏の「大洞式」（山内 1964・1979）の各型式（Ｂ・ＢＣ・Ｃ１・Ｃ２・Ａ・Ａ'式）の時期、弥生時代初頭は、筆者の大洞Ａ'式の一部に弥生時代が含まれるものとし、須藤隆氏の「青木畑式」期などを援用する。

3　当該期の遺跡と概要

本稿では、縄文時代終末～弥生時代初頭の遺物組成検討のため、近年多量の遺物が出土し、ある程度まとまりのある出土状況と判断される下記５遺跡６地点を取り上げる。

①宮の前遺跡 SG（縄文時代後期後葉～晩期後葉）
②下叶水遺跡 SG・包含層（同後期後葉～晩期後葉）
③作野遺跡 3 次 SG（同晩期中葉～後葉）
④釜淵 C 遺跡 C 区包含層（同晩期中葉～後葉）
⑤作野遺跡 2 次 ST40（同晩期後葉～弥生初頭）
⑥生石 2 遺跡 C 区包含層（弥生時代初頭）

上記遺跡（以下、遺跡を省略）は、①～③は報告書でも遺物組成をまとめており、④～⑥は報告書で総体的な遺物組成に言及していないが、後述する遺物量や一括性のある出土状況から筆者が判断し、報告書の遺物図や表から器形の特徴が分かる完形品を抽出し資料化した。年代的には、①から⑥にかけて時代が新しくなり、時期的な器種組成の増減などが推定できる。また､地域的には、①・③・⑤が最上川中流域、④が同中～下流域、⑥が同下流域、②のみが最上川以外の荒川流域の小国盆地に所在し、地域毎の特徴も推測できよう（第１・２図）。なお、①・②・③・⑤の整理作業では、九年橋遺跡と同様に「徹底的に復元」を行い、 口径や器高などが判断できる１個体資料として認識できるもの(残存率 1/6 以上。宮の前３次は 1/4 以上）を抽出した。

以下に各遺跡の特徴や捨て場などを列記する。

①宮の前遺跡 3 次 SG（第 3・4 図：植松 1999）

第３次調査は、道路改築事業に伴い行われた。捨て場は、調査区中央で、第２次調査で確認された第３捨て場の延長部と考えられ、東南方向に発見された。

この捨て場は、旧河川跡が捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、洪水砂層（Ⅳ－１・３・４'）を含む間層を複数挟み、最終的に調査区をほぼ覆う包含層（Ⅳ―3 層・Ⅲ層）的な状況が看取された。最深部で

第２図　近年の縄文時代末葉～弥生時代初頭の遺物捨て場

遺跡名	次数・地区	市町村 ＊1	流域	標高（m）	調査面積（㎡）	遺物捨て場＊2 遺構名	面積(㎡) 下：長・幅	深さ（m）	大別層準	層準	出土箱数	時期（縄文時代）	年代観	報告書	備考
宮の前	3次	村山市（山形北部）	最上川中流	125	1320	SG 谷跡	320（20×16）	1.2	3層	Ⅲ・Ⅳ-1～5	540	後期後葉～晩期後葉	瘤付Ⅰ～大洞A	セ65集（植松1999）	主体は晩期中葉～後葉
下叶水		小国町（米沢西部）	荒川上流	262	5900	SG1 河川跡	375（25×15）	0.6	3層	Ⅳ・F1～3	600	後期後葉～晩期後葉	瘤付Ⅰ～大洞A	セ177集（植松2009）	主体は後期後葉
作野	3次	村山市（山形北部）	最上川中流	134	250	SG1 河川跡	64（8×8）	1.5	3層	F1～4	60	晩期中葉～同後葉	大洞C2～大洞A	セ205集（植松2012）	主体は晩期中葉
釜淵C	C区	新庄市（新庄盆地）	最上川中下流	125	1150	包含層	168（28×6）	2	4層	Ⅰ・Ⅱ・Ⅱa・b	570	晩期中葉～同後葉	大洞C1～大洞A	セ115集（黒坂2003）	出土地点毎に時期的まとまり
作野	2次	村山市（山形北部）	最上川中流	126	1400	ST40 竪住	12.5（5×2.5）	0.5	1層	F1～2	65	晩期後葉～弥生初頭	大洞A'～青木畑	セ205集（植松2011）	覆土・床面の一括資料
生石2	C区	酒田市（庄内北部）	最上川下流	11	117	包含層	117（13×9）	0.15	1層	Ⅴ層	約200個	弥生初頭	青木畑	県117集（安部1987）	E区でも弥生出土（後期含む）

＊1：山形北部は山形盆地北部、米沢西部は米沢盆地西部、庄内北部は庄内平野北部を表す。
＊2：遺物捨て場の面積などは筆者が報文や平面図などから抽出、判断した。

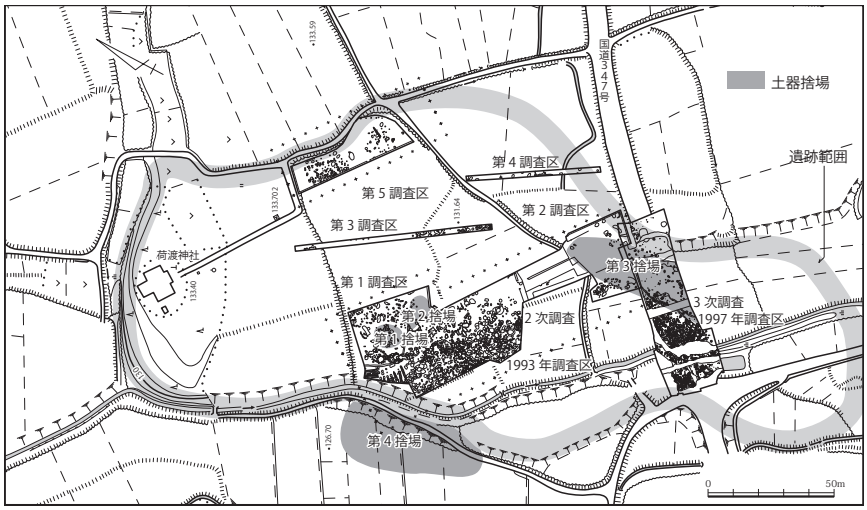
約 1.5m を測り、概ね 5 層に大別される。遺物は、洪水砂層以外を主に多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉、耳栓、化石を利用した装身具などが出土した。なお、遺物の一部には、ほぼ完形品で廃棄され、土圧によりそのまま圧壊したような出土状況のものも認められた。整理作業では総個体点数約 286 点とした。

②下叶水遺跡（第 5・6 図：植松 2009）

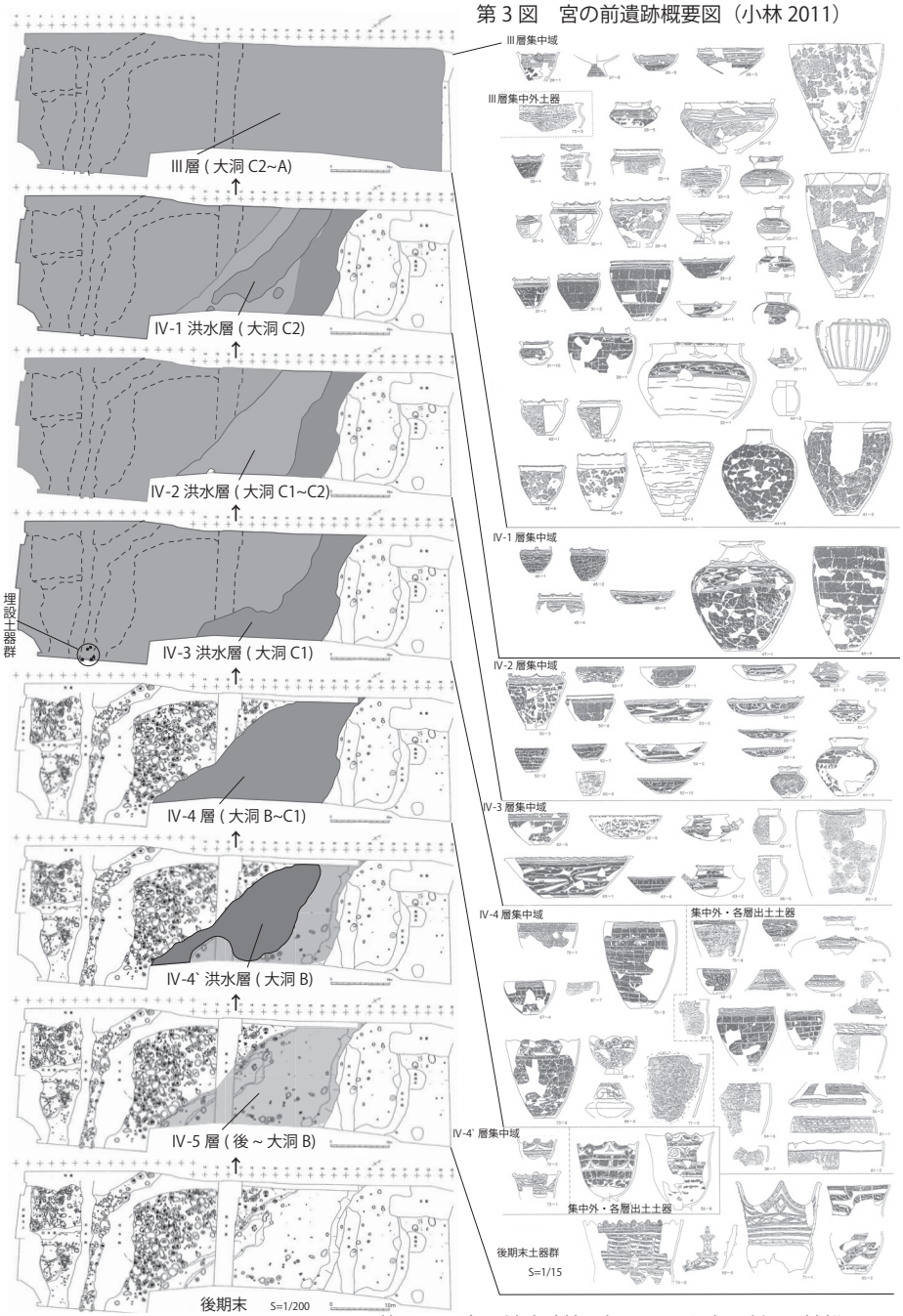
横川ダム工事に伴い調査された。捨て場は、旧河川跡の上層を利用し、遺物が出土する最深部で約 1.5m を測り、概ね 3 層に大別される。遺物は多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉などの装身具が出土した。

調査区は下叶水集落と重なり、調査区西半部などは攪乱や包含層の掘削が著しかったが、旧河川や東側の包含層（Ⅳ層）は概ね良好な遺存状況であった。そのため、埋設土器が出土した包含層を含め、その下位の河川跡も層位毎に発掘調査を行った。

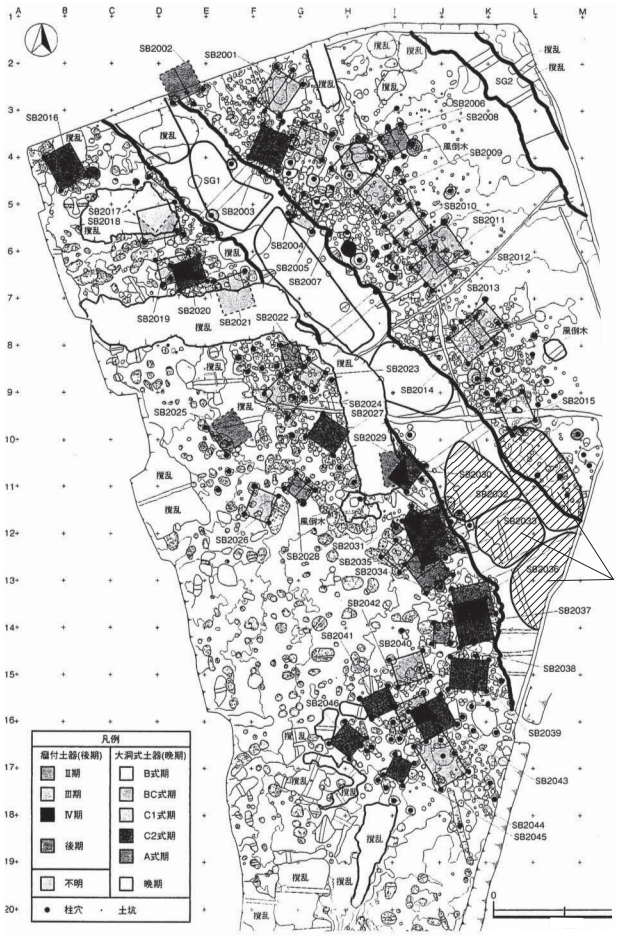
その結果、旧河川跡が捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、包含層（Ⅳ層）が最終的に調査区をほぼ覆う状況が看取された。特に旧河川には、遺物が集中して出土する「集中ブロック」が複数形成され、時期毎の建物群の分布と相関関係があることも分かった。



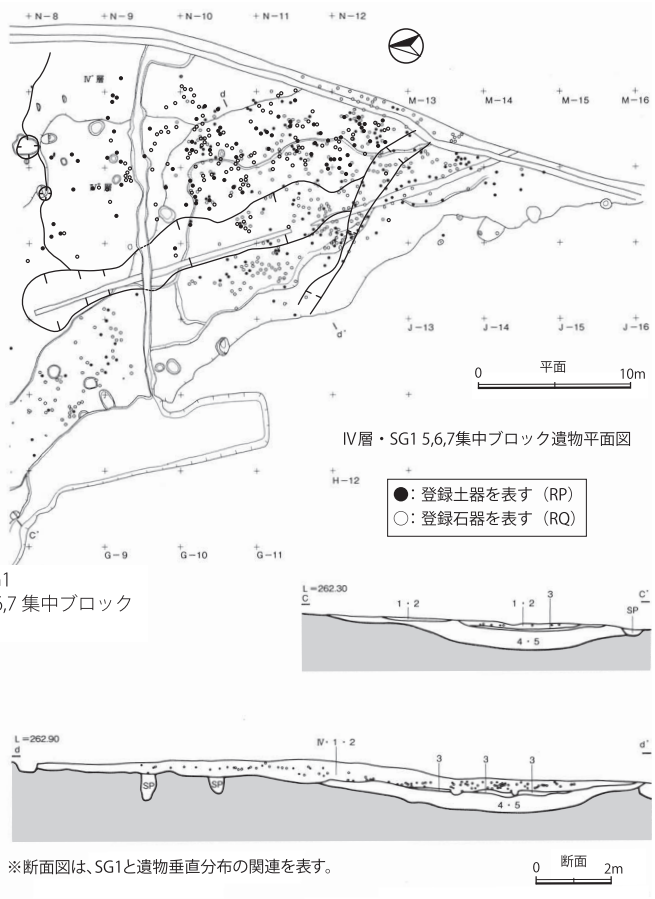
第 3 図　宮の前遺跡概要図（小林 2011）



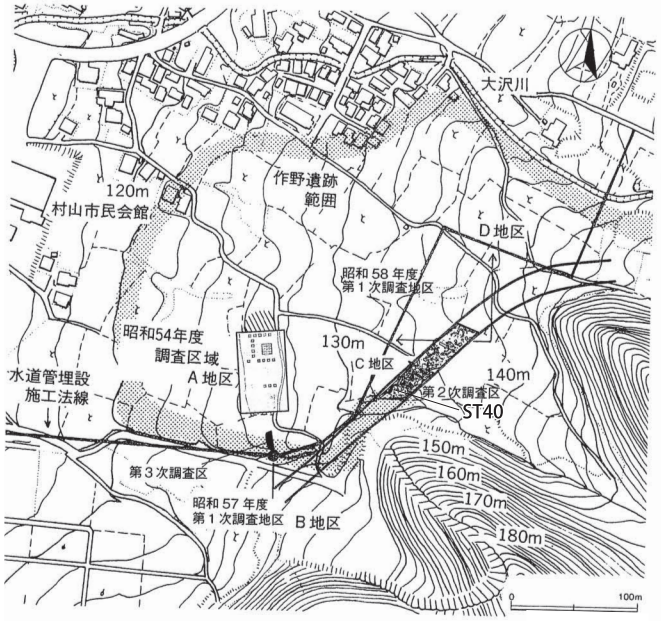
第 4 図　宮の前遺跡捨て場平面図と土層断面 (植松 2007)



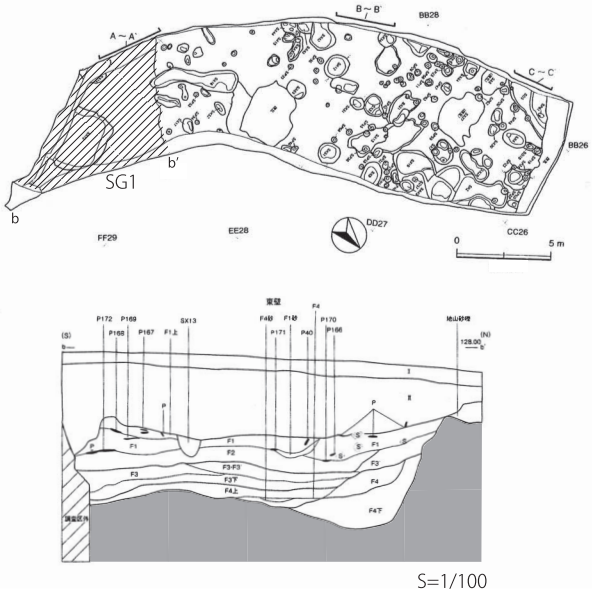
第 5 図　下叶水遺跡概要図 (植松 2009)



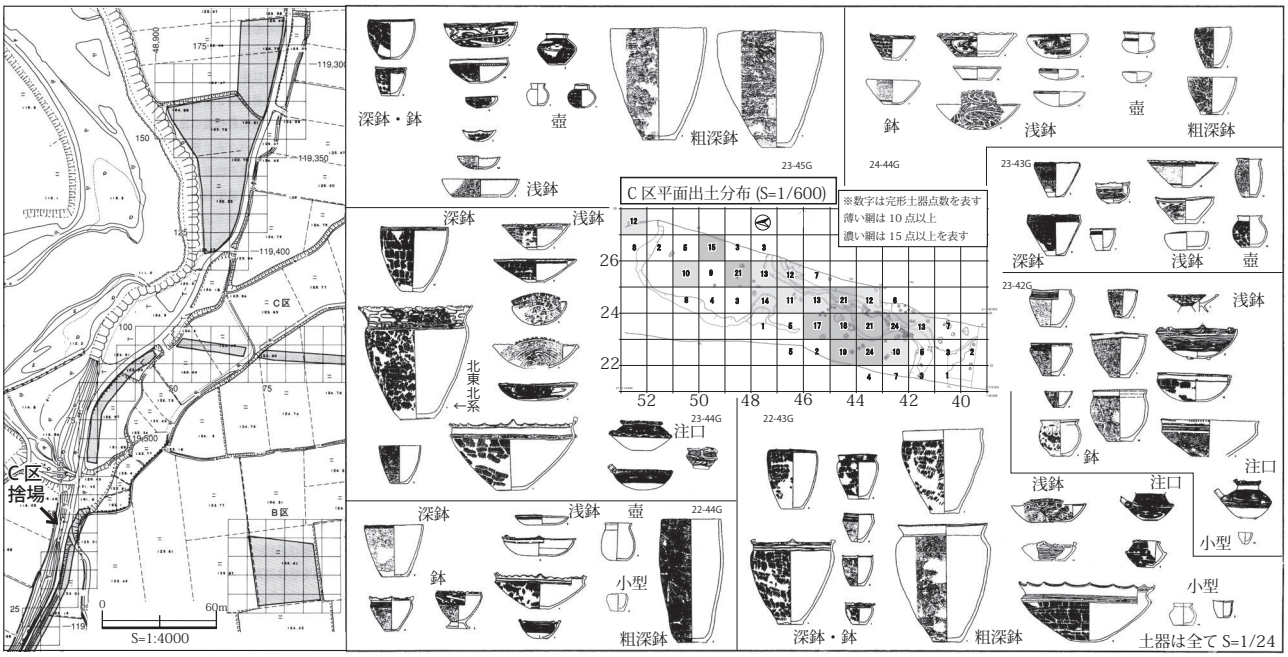
第 6 図　下叶水捨て場平面図Ⅳ層・SG1 5~7 ブロックと土層断面
(植松 2009 合成)



第 7 図　作野遺跡概要図 (植松 2012)



第 8 図　作野遺跡 3 次調査 SG1 捨て場平面図と土層断面図
(植松 2012)



第 9 図　釜淵 C 遺跡概要図・平面分布と主な土器 (黒坂 2003 に筆者加筆・改変)

なお、調査区南東の 5 ～ 7 集中ブロックは、特に遺物が集中し、ブロック毎の境界も不明瞭なほどであった。また、時期幅はややあるが、完形や半完形品なども多く、まとまりのある資料と考えられた。その上位には包含層Ⅳ層が堆積し、新相の遺物が出土する。整理作業により総個体点数 251 点を数えた。

③作野遺跡 3 次 SG1（第 7・8 図：植松 2012）

第 3 次調査は、2011 年に市道路事業に伴い行われた。その結果、小規模ながら第 1 次調査で確認された河川跡の「捨て場」の北岸と推測される部分（幅約 8m ×長さ約 8m）が発見された。この捨て場は、最深部で約 1.5m を測り、概ね 5 層に大別される。遺物は、中～下層を主に多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉といった装身具が出土した。

捨て場となる河川は丘陵のある東から西に流れ、下位は洪水砂層などが堆積しており、その後捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、最終的には埋設土器などが設置された墓域になるようである。なお、捨て場の中心的な中～下層の遺物の一部は、ほぼ完形品で、土圧により圧壊したような出土状況も認められた。整理作業では総個体点数 177 点であった。

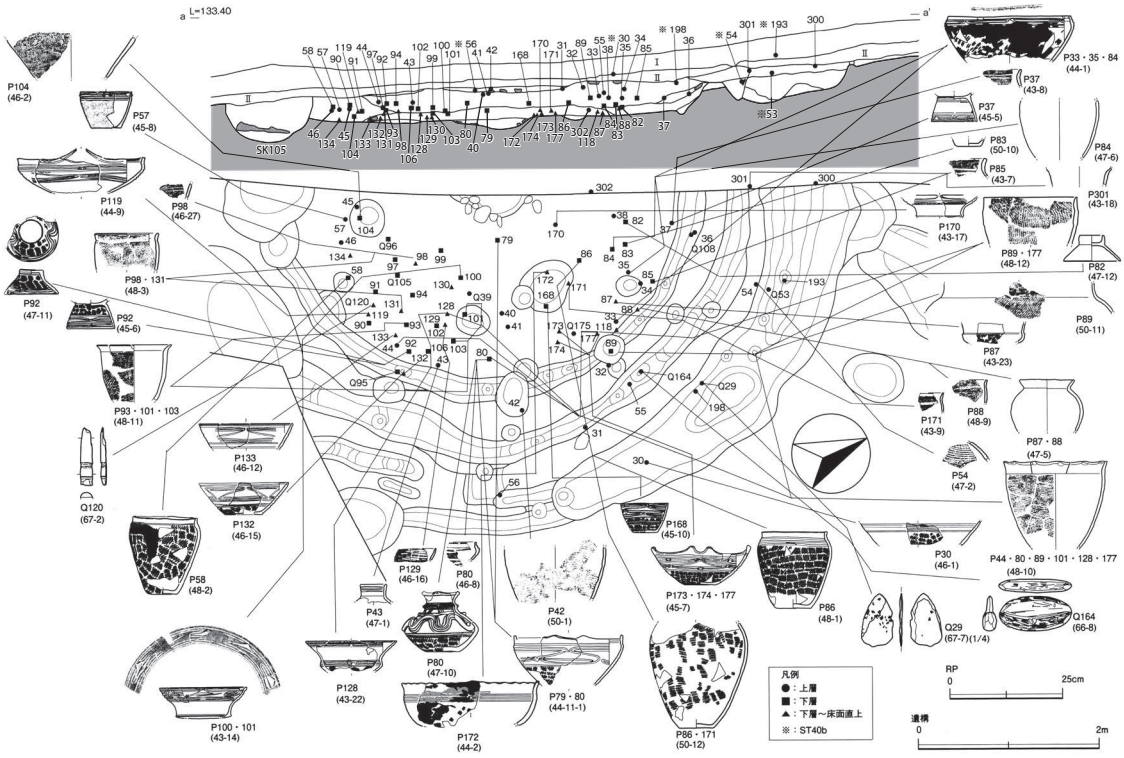
④釜淵 C 遺跡 C 区包含層（第 9 図：黒坂 2003）

圃場整備事業に伴い調査された。縄文時代中期の遺構もあるが、遺跡南側のトレンチ調査（B・C 区）で多量の遺物が出土し、報文では包含層とする。特に C 区北端部の一角（7 グリッド分）では、落込み状地形の上が、概ね 4 層（Ⅰ・Ⅱ・Ⅱ a・Ⅱ b）に大別される、遺物が多量に包含される層（包含層）が深さ約 2m で堆積し、報文で「層位的よりも平面分布で時期的なまとまりがある」とされた。土器や石器、土偶などの祭祀具が出土した。

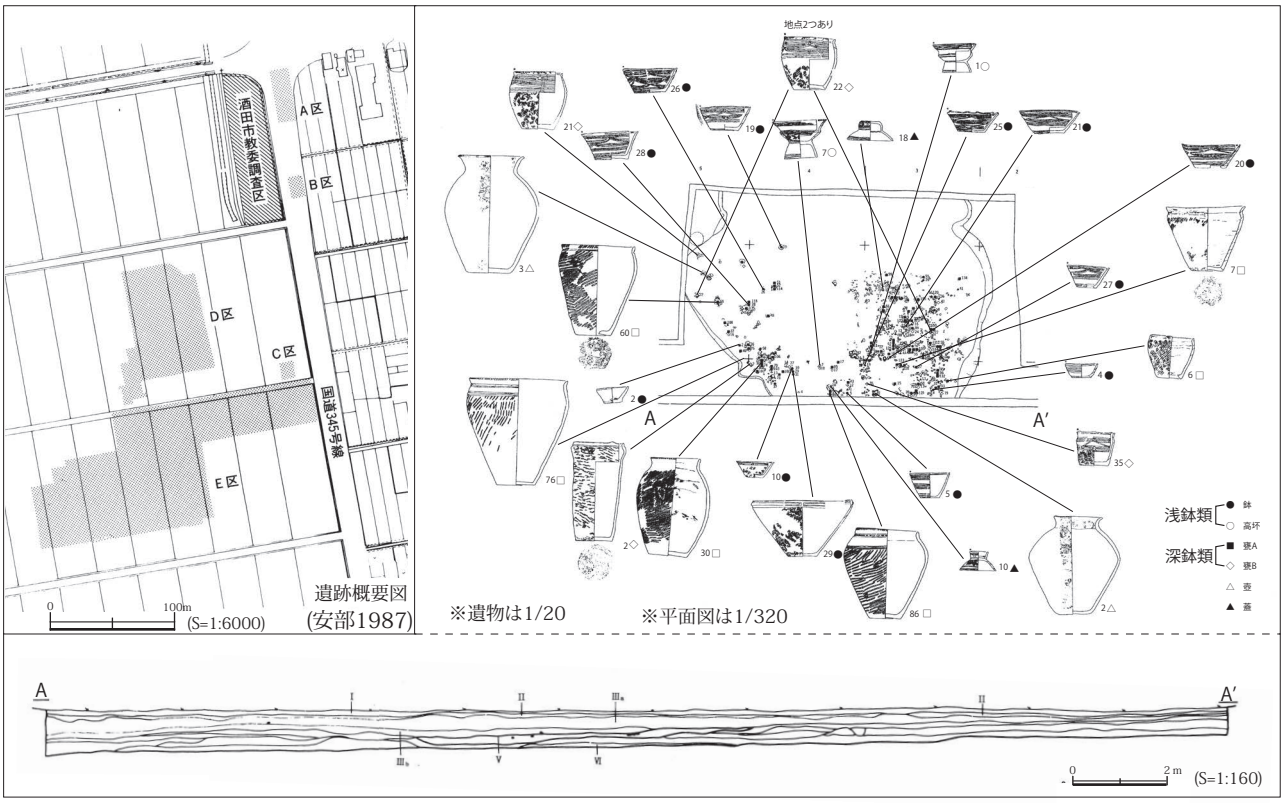
調査では、C 区中央部で遺物が集中して出土し、特に前述 7 グリッド分（22 ～ 24 － 42 ～ 44G）では、完形品がグリッド単位（2m 四方）で 15 個以上確認される範囲がある（第 9 図濃網部）。報文でも一定幅（大洞 C1 ～ A 式）はあるが、「晩期中～後葉のまとまり」が指摘される。整理では時間の制約もあったが、少なくとも有文のものはほぼ復元し実測した（黒坂雅人氏のご教示による）。なお、石器の石材や出土量も本文中で提示するが、個別は不明である。本稿では筆者も全てを実見しておらず、全体の組成など詳細は別稿に譲り、これまで不明であった土器完形品の法量分布などの検討に留める。上記 7 グリッド分の完形資料は約 144 点ある。

⑤作野遺跡 2 次 ST40（第 10 図：植松 2011）

作野遺跡の第 2 次調査は道路事業に伴い行われた。その結果、直径約 5m の円形の竪穴住居跡が 1 棟確認され、床面からは弥生時代初頭（青木畑式期）、堆積土からは縄文時代末期（大洞 A ' 式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）の土器や石器が多く出土した。この竪穴住居跡は、2 時期の変遷が判断され、最深部で約 0.5m を測り、概ね 3 層に大別される。遺物は、中～下層を主に



第 10 図　作野遺跡 2 次調査 ST40 平面図と土層断面 (植松 2011)



第 11 図　生石 2 遺跡概要図・同 C 区平断面図と主な登録完形土器 (安部 1987 に筆者加筆・改変)

多量の土器、石器のほか、土偶・石棒・石冠・石製品などの祭祀具が出土した。

これらの土器の一部は遺存状況がよく、床面資料の時期から、大半は周囲の流れ込みと考えられるが、晩期末（大洞Ａ'式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）にかけて一定のまとまりのある一括性のある資料と判断された。

なお、弥生時代には、甕・高坏などが新器種として登場するのが一般的だが、作野２次報文では、同時期の山形市北柳１遺跡（小林 1997）で示されたように、「（本県内陸部では）甕と深鉢の区分は厳密ではなく」、また「縄文土器からの系譜を引く」段階であることから、器種名称を深鉢・浅鉢とした。後述する生石２遺跡でも同様の理由から本稿では同じ名称を用いた。整理では総点数39点（残存率 1/6 以上）が確認された。

⑥生石２遺跡（第 11 図：安部 1987）

調査は、圃場整備事業に伴い、県教育委員会が行った。C・E区などの古代遺構面の下層から弥生時代の文化層が確認された。C区は弥生と古代との間に間層を挟み、遺構は検出するに至っていないが、「径６～８mの中央部が若干盛り上がる落ち込んだ範囲に、弥生土器が200個体以上集中して出土」し、「土器は各個体がまとまりを持ち、投棄されたような出土状況」を示し、「遺物層が単一」であることからも「一括遺物」として扱われている。

報文では、C・E区全体で土器は器種６種からなり、器種の組成は実測したもので下記の通りである。器種は、鉢91点（約16％）・C区破片92点（18％）、高坏33点（約６％）・同破片21点（４％）、甕A243点（約43％）・同破片331点（65％）、甕B（＝深鉢）63点（12％）・同破片甕に含む、壺97点（約17％）・C同破片54点（10％）、蓋32点（約６％）・同破片14点（3％＊）の器種組成割合で、「C区・E区各個別の破片を含めた総出土数量から見た場合も、同様な組成率を示している」とする（＊蓋は口縁部と底部を口縁部の個体数としたため重複数である）。

なお、E区では、弥生後期の天王山式の混在などもあり、本稿ではC区資料を主に取り扱う。また、本稿で後述する器種を縄文時代からの系譜を留意して勘案すれば、鉢・高坏が浅鉢類（22％）、甕A・Bが深鉢類（65％）、壺10％、蓋３％となる。

4　遺物組成の整理と概要

本章では、前章であげた遺跡で、土偶や石棒などの祭祀具、勾玉などの装飾品を除き、遺物の大半を占める土器と石器を分けて、組成を整理する。特に土器は、各遺跡の報告書で時期を大別しており、それを援用する。その結果、時期は古い順に以下の段階に分けられる（なお、以下は「遺跡」・「SG」、瘤付土器の「段階」、大洞型式の「式」を省略。第14図など参照）。

Ⅰ期：縄文時代後期後葉（下叶水下層［瘤付Ⅰ～Ⅲ］）

Ⅱ期：同後期末葉～晩期中葉（下叶水中層［瘤付Ⅲ～大洞C 1］、宮の前３次下層［瘤付Ⅲ～大洞C 1］）

Ⅲ期：同晩期中葉（宮の前３次中層［大洞C 1～C 2］）

Ⅳ期：同晩期中葉～後葉（下叶水上層［大洞C 1～A］宮の前３次上層［同C 2～A］、作野３次［同C 2～A］、釜淵C－C区［同C 1～A］）

Ⅴ期：晩期後葉～弥生時代初頭（作野２次ST40［大洞A'～青木畑］、生石２－C区［青木畑］）

以後、この大別Ⅰ～Ⅴ期の段階で、組成や変遷などを比較し、報告書刊行後の新たな知見も加えて概略を記す。

A　土器

土器は、①～③の報告書で、口径と器高の比率などから器種毎に大別（器種分類）し、深鉢、鉢、浅鉢（皿含む）、壺、注口土器、小型土器（ミニチュア土器含む）、蓋、の７種類などに分類した（第12～14図）。

更に大半の器種を器形毎に細分した（器形分類）。他に土器の施文文様や成形技法などから、特に晩期に特徴

第12図　縄文時代終末の土器分類図（器種・器形・文様）：（植松 1999 より）

器種分類		器形分類	
深鉢	器高＞口径	Ⅰ類	胴部等が括れ、口縁部外傾
鉢	器高（口径の1/2以上）＜口径	Ⅱ類	胴部が口縁部に至り、直立・内湾
		Ⅲ類	口縁部が屈曲し、外傾・外反
浅鉢	器高（口径の1/2未満）＜口径	Ⅰ類	底部から湾曲して立ち上がる
＊皿も含む		Ⅱ類	底部から直線的に立ち上がる
壺	最大径の2/3＜頸部	Ⅰ類	口縁突起、装飾等付す広口壺
		Ⅱ類	口縁突起、装飾等付す細口壺
		Ⅲ類	口縁部が単純に立ち上がる壺
注口土器		Ⅰ類	頸部の傾きのまま口縁部に至る
		Ⅱ類	頸部の上に受皿状に口縁がつく
香炉土器			
小型土器	＊多孔土器含む		

文様分類	
後期	後期後葉の入組文、貼瘤の土器群。細別Ⅳ段階（瘤付土器Ⅰ～Ⅳ期）
1類	三叉文、入組文、沈線文による区画文（大洞B式期）
2類	羊歯状文、曲線的な入組文、渦文（大洞BC式期）
3類	羊歯状文の簡略化、珠文状文様、曲線的な雲形文（大洞C1式期）
4類	珠文状文様の列点化、、多重平行沈線、雲形文の簡略化（大洞C2式期）
5類	1～3条の平行沈線、口縁部等から4類とは区別
6類	工字文を主体（大洞A式期）
7類	無文で、丁寧なミガキ、朱等を施す
8類	地文や無文のみ、所謂粗製土器

宮の前3次遺跡SG（縄文時代晩期後葉～後期後葉）
生石2遺跡C区（弥生初頭）
作野遺跡2次ST40（弥生時代初頭～縄文時代晩期末）
下叶水遺跡SG（縄文時代晩期後葉～後期末）
浅鉢（鉢・高坏）・壺
深鉢（甕A・B）
粗製土器
青木畑：V期
大洞A′～青木畑：V期
IV層他（上層）大洞C1～A：IV期
F1層（中層）瘤付III～大洞C1：II期
F2～4層（下層）瘤付II～III：I期
瘤付土器IV期
瘤付土器III期
瘤付土器I・II期
III層（上層）大洞C2～A：IV期
IV-1～3層（中層）大洞C2～C1：III期
IV-4～5層（下層）瘤付I～大洞C1：II期
深後期
深後期I
深後期III
深後期IV
0　20cm
（1：20）
第13図　土器変遷図（植松2007・2009改編）

的な精製品の文様（有文）と、地文のみの文様（8 類）に分類した（文様分類）。

本稿でも概ねこれに準じ、第 12 図にまとめた。なお、一部浅鉢は、報告書によって分類が異なっていたことから、第 12 図の浅鉢Ⅰ類は作野 3 次Ⅲ類・作野 2 次 ST40 B 類、同Ⅱ類は作野 3 次Ⅰ類・作野 2 次 ST40 C 類に対応する。

なお、作野 2 次 ST40、生石 2 の遺物は、数量は限定的だが一括性があり、時期変遷などの特徴を得るため同様の分類を行った。具体的には、変形工字文（同Ａ' 式期）や波状文（青木畑式期）などが縄文時代最終末（大洞Ａ' 式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）に特徴的な文様として、各報告書に基づき、概ね上記時期に対応させた。また、前述②作野 2 次で述べた一部器種の集約（浅鉢類・深鉢類）、新たな器形の浅鉢類Ⅳ類（底部丸底で口縁部外反）や深鉢類Ⅳ類（寸胴形で同上部が膨らむ）を加え、先の文様分類などから精粗も判断した（第 15 図註）。

本稿では、大きく器種と器形、精粗の比較を注視する。他に、土器の精粗などを検討する上で、赤彩顔料の土器、補修孔を有する土器、器種毎の法量分布、縄文原体の分類や組成比率なども比較し、所見などを記した。

B　石器

遺跡の各層位毎では、数量が限られるため、各報告書に準じた遺跡毎（主体時期）の比較を試みた。　具体的には、一般的な定形石器や礫石器を器種分類し、加工痕のある石器なども含め数量的な組成を比較する。また、器種毎の石材やアスファルト付着もまとめた。

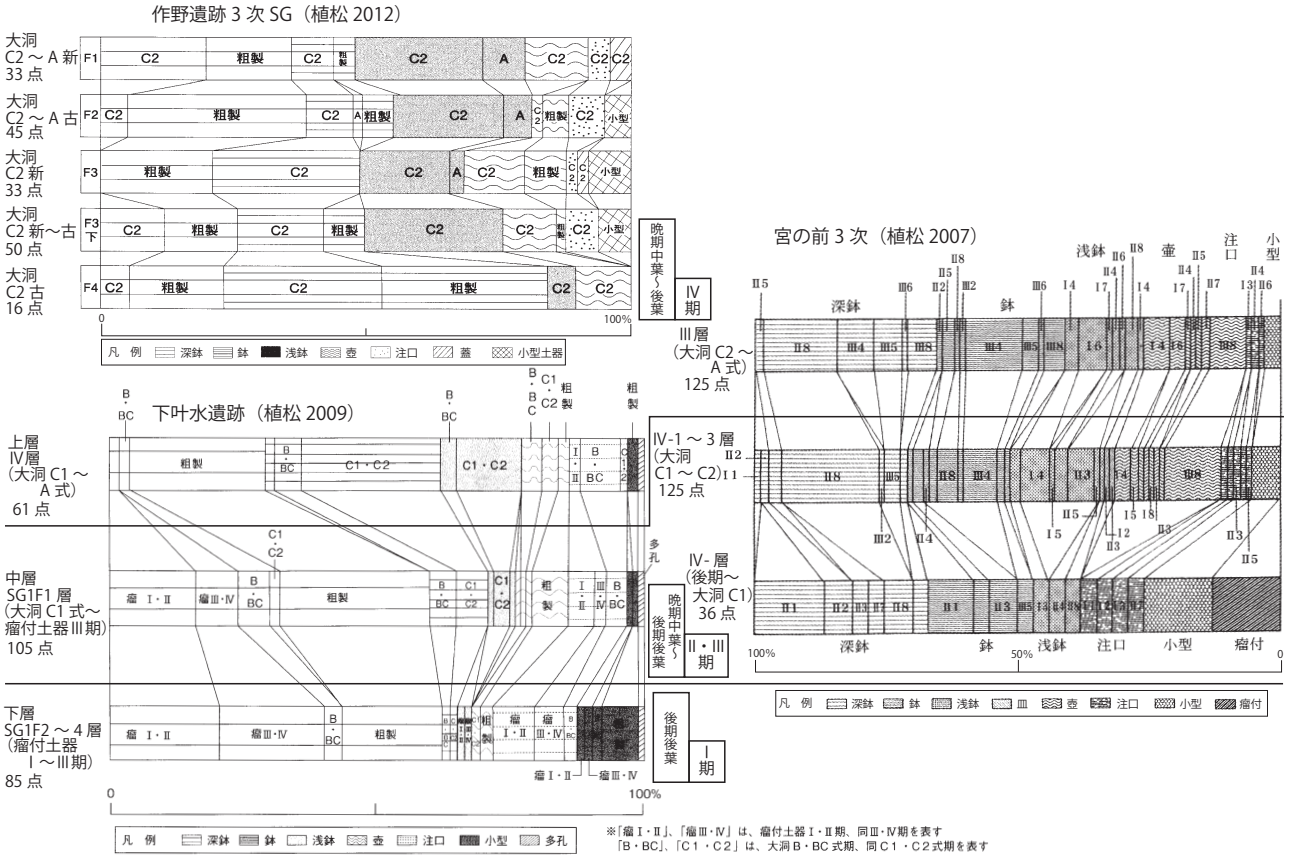
5　出土遺物の組成比率の比較から

本章では、前述で示した時期や分類などに基づき、各期毎に、遺物の器種組成などを具体的に検討していく。

A－1　土器　器種・器形組成・精粗（第 15 図）

Ⅰ期：縄文時代後期後葉（瘤付Ⅰ～Ⅲ）

当該期の最も古相資料では、下叶水下層（瘤付Ⅰ～Ⅲ）をあげる。器種では深鉢が全体の 60％以上あり、組成の 2/3 を占め最も割合が高く、精製（有文）が約 40％と多く、粗製は約 20％と少ない。その他では、注口土器、小型土器が 10％以上で一定量認められる。注口土器は有文の精製品が多く、小型土器は粗製品が多い。他に鉢・



第 14 図　縄文時代終末期の土器器種組成図（植松 2007,2009,2012 を合成）

壺などが 5%以下で散見されるほどである。

器形では、深鉢の器形では、精製（有文）では胴部が括れるⅠ類が 15%、括れないⅡ類が 10%以下で、比率は約半々ながらⅠ類が多い。それに比べ粗製深鉢の器形は、Ⅱ類が大半で器形が限定的である。なお、注口土器は全体に口縁部に受け部をもたないⅠ類である。

Ⅱ期：同後期末葉～同晩期中葉（瘤付Ⅲ～大洞Ｃ 1）

下叶水中層（瘤付Ⅲ～大洞Ｃ 1）を主に、宮の前 3 次下層（瘤付Ⅲ～大洞Ｃ 1）は総点数が少なく判然としないが、補完資料として傾向をみる。

器種では、深鉢がⅠ期と同じ全体の約 60%近くだが（宮の前約 35%）、下叶水では後期約 20%に減少、晩期約 10%、粗製約 30%と増加する。鉢は約 10%（宮の前約 20%）に増加し、精製品が主である。両遺跡とも深鉢と鉢で全体の 50 ～ 60%（約 1/2）を占める。

Ⅰ期に一定量あった注口土器は当期でも約 10%（後期 7%・晩期 3%）存在し、同様に当期から晩期の壺類も 10%以上に増加（宮の前 0%）、浅鉢も 5%（宮の前 10%）散見される。Ⅰ期に一定量あった小型土器は 5%以下（宮の前約 10%）だが当期も存続する。

器形では、最も多い深鉢は胴部が括れる後期Ⅰ類が 5%前後（宮の前 10%）、括れないⅡ類がⅠ期と同じく 5%以下（宮の前 25%）に減少するが、宮の前遺跡ではⅡ類が増加傾向にある。粗製深鉢は約 30%（宮の前約 10%）組成し、下叶水ではⅠ期と同等で、両遺跡ともⅠ期と同じⅡ類が大半である。鉢類は全体に晩期精製が主体で、Ⅱ類が 10%以上（宮の前約 5%）に増加し、口縁部が屈曲するⅢ類が 5%以下だが出現し始める。

浅鉢は、Ⅰ・Ⅱ類とも 5%以下と未だ少ないが、一定量存在する。壺は、精製は散見的だが、粗製が単純な口縁壺Ⅲ類が 5%以下だが存在する。注口土器はⅠ期に続き受け部をもたないⅠ類が全体に多い。

全体としては、両遺跡とも、概ねⅠ期と同様の器種構成や組成比率ながら、晩期の鉢・浅鉢・壺などの器種が増加し、多様な器種構成が認められる傾向が窺える。一部器種（深鉢・鉢、壺）の器形や組成比率には、両遺跡でやや相違があり、下叶水が全体に後期主体、宮の前が晩期前葉を主体にするなど時期的な違いによるのであろう。

Ⅲ期：同晩期中葉（大洞Ｃ１～Ｃ２）

層位的に宮の前 3 次中層を参照する。器種では深鉢が未だ 30%弱と組成中で最も多いが、精製品は約 10%以下に減少し、粗製が 20%に増加する。鉢は約 20%で、Ⅱ期と同じ精製品が 16%と多い。深鉢と鉢で全体の 50%（約 1/2）と他器種増加に伴う減少傾向がある。

浅鉢はⅡ期で一定量確認され、当期で約 20%と鉢と同等の組成比率に増加し、大半が精製品である。壺も 20%弱に増加し、当該期に鉢・浅鉢と同程度の比率になり、精製（8%）と粗製（11%）は半々である。注口土器は、やや比率がⅡ期から減少し、5%前後になる。小型土器も 5%以下に減るが、当該期も存続する。

器形では、深鉢Ⅰ類がほぼ無くなり、精製ではⅡ・Ⅲ類が 5%前後で拮抗するが、粗製ではⅡ類が 20%前後と大半を占め、Ⅲ類は 2%と少なく、差異がある。鉢では、精製Ⅱ類（7.2%）、Ⅲ類（9.6%）とややⅢ類が多い。粗製はⅡ類（4%）のみである。浅鉢は、精製では口～体部が緩やかに湾曲するⅠ類（13%）、体部直線的なⅡ類（6.4%）でⅠ類が多い。粗製もⅡ類が僅かにある。壺は、精製は広口Ⅰ類（13.6%）、細口Ⅱ類（1.6%）でⅠ類が多い。粗製では単純な素口縁Ⅲ類（10%）が大半である。注口土器では、当該期にⅠ類（1.6%）とⅡ類（3.2%）が逆転し、受け口が増加する。

全体には、Ⅱ期の晩期前葉的な様相（宮の前 3 次下層）を引き継ぐが、器種では精製の鉢・浅鉢・壺・粗製深鉢の増加、精製深鉢・注口土器の減少がある。器形では、深鉢・鉢類でⅡ・Ⅲ類の定量化が特徴として上げられる。

Ⅳ期：晩期中葉～後葉（大洞Ｃ２～Ａ）

Ⅲ期の流れから宮の前 3 次上層（大洞Ｃ２～Ａ）を中心に、下叶水上層（大洞Ｃ１～Ａ）、作野 3 次（大洞Ｃ２）を補完し、釜淵Ｃ（大洞Ｃ１～Ａ）を参考にする。

器種では、深鉢が未だ 35%（作野 3 次 31%・下叶水 31%）と組成の中で最も多く、Ⅲ期に継続して、精製品は 15%前後（作野 3 次 7%・下叶水 2%）、粗製が 20%前後（作野 3 次 25%・下叶水 28%）と粗製深鉢が全体に多い。鉢もⅢ期と同じく主体を占め約 25%（作野 3 次 22%・下叶水 31%）あり、精製品約 20%（作野 3 次 16%・下叶水 30%）と多い。深鉢と鉢類では 60%（作野 3 次 53%・下叶水 62%）と全体の 1/2 以上を占める。浅鉢もⅢ期と同じく 14%（作野 3 次 24%・下叶水 16%）と一定量確認され、大半が精製

第 15 図　縄文時代終末 ~ 弥生時代初頭遺跡の土器組成

| | | |

品で 12％（作野３次 23％・下叶水 12％）である。壺もⅢ期と同じく 20％弱（作野３次 13％・下叶水８％）あり、精製・粗製は 12％・7％（作野３次８％・5％・下叶水７％・2％）と精製が若干多い。注口土器もⅢ期と同じく 5％前後（作野３次５％・下叶水３％）と少ないが、一定量確認される。小型土器も数量は 5％以下（作野３次５％・下叶水２％）だが当該期も存続する。

器形では、深鉢が精製でⅡ類（1.6％。作野３次 0.5％・下叶水 1.6％）が減少し、Ⅲ類（14％。作野３次７％・下叶水０％）が増加と一部遺跡で減少傾向にある。粗製はⅢ期と同じくⅡ類（14％。作野３次 8.5％・下叶水 18％）が多いが、精製と同じくⅢ類（5.6％。作野３次 11％・下叶水 3.3％）も増加し、遺跡で差がある。

鉢では、精製Ⅱ類（3.2％。作野３次０％・下叶水 21.3％）が全体に少なく、Ⅲ類（16.8％。作野３次４％・下叶水 8.2％）が多くなり、粗製にもⅢ類（4.0％。作野３次 3.7％・下叶水０％）が散見される。

浅鉢では、精製がⅢ期と同じくⅠ類（9.6％。作野３次９％・下叶水３％）、Ⅱ類（2.4％。作野３次 9.5％・下叶水 9.8％）と類似した比率である。粗製はⅡ類（2.4％。作野３次 0.5％・下叶水０％）が僅かにある。

壺も精製の組成の比率は、Ⅲ期を踏襲し、精製はⅠ類（8.8％。作野３次 5.1％・下叶水 4.9％）、Ⅱ類（3.2％。作野３次 0.5％・下叶水０％）の順で多い。粗製もⅢ類（7.2％。作野３次 1.5％・下叶水 1.6％）が全体的に多い。

注口土器も、Ⅲ期と同じくⅠ類（0.8％。作野３次０％・下叶水 1.6％）とⅡ類（2.4％。作野３次 3.5％・下叶水 1.6％）で後者の受け口を持つものが多い。

全体としては、前Ⅲ期：晩期中葉の様相と同様の器種・組成だが、器種では精製の深鉢・鉢類の増加、器形では深鉢・鉢類でのⅢ類の増加など、他遺跡でも共通の状況が看取される。なお、深鉢や鉢類の形態などは、最上川中流域遺跡（宮の前・作野）と、荒川流域遺跡（下叶水）でやや様相が異なる部分も認められる。

Ⅴ期：晩期後葉～弥生時代初頭（大洞Ａ'～青木畑）

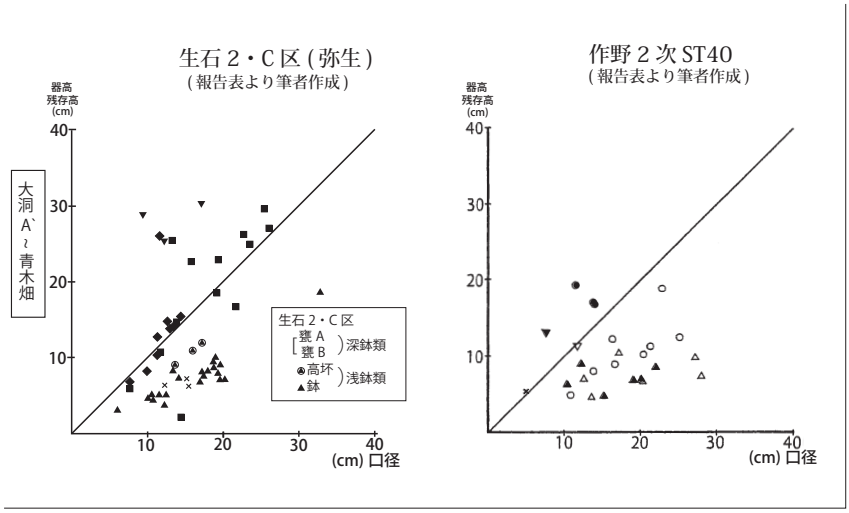
Ⅳ期の後続資料は、数少ないが、大きな器種構成の検討上、作野２次 ST40（1/6 以上残存率の土器。以下、作野 ST40 と省略）を主に、生石２遺跡－Ｃ区（以下、生石と省略）の完形土器群を補完とする。

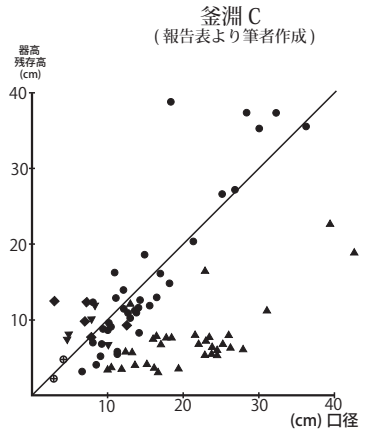
器種では、深鉢（生石報文の甕Ａ・Ｂ含む）と浅鉢（生石報文の鉢・高坏含む）が多い。深鉢は、Ⅳ期から継続して未だ 39％（生石 41％）と組成の中で２番目に高く、作野２次 ST40 も生石と同等の組成比率を示す。但し、作野 ST40 の精製品は、Ⅳ期と同じく５％前後（生石 24％）と更に減少し、粗製が 33％（生石 18％）と増加するが、時期的に同時期～後出の生石では精製と粗製品が同等か精製（有文）の方が比率が高い傾向にある。Ⅳ期まで一定量あった口径と器高が同じ口縁部屈曲Ⅲ類の鉢類などは急減し、法量や器形などから上記深鉢形態に変容したものと考えられる。

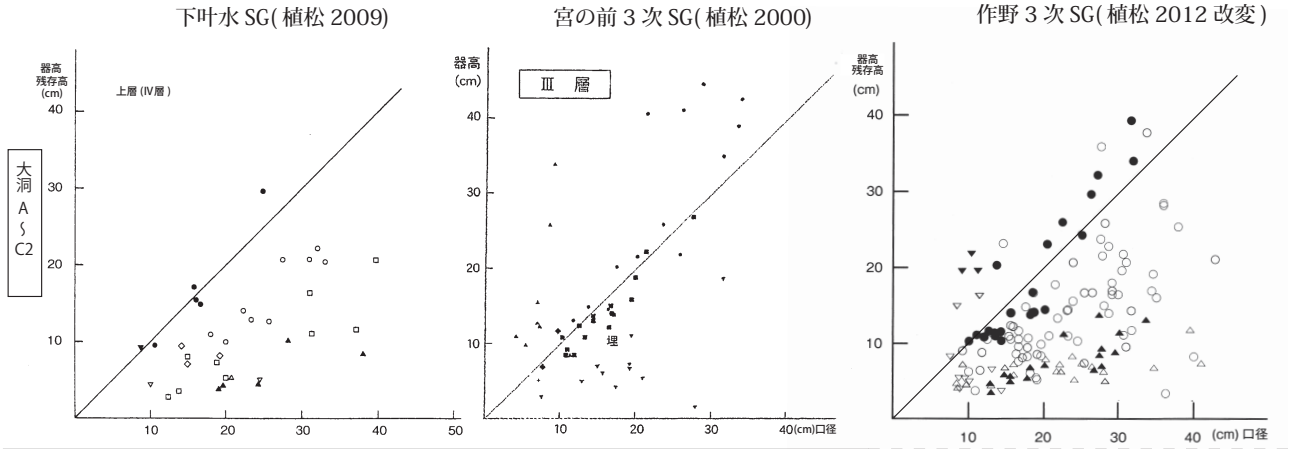
浅鉢（鉢状や台付浅鉢も含む）は、Ⅳ期より増加し、44％（生石 45％）と最も数が多くなる。精製品が大半で、Ⅳ期の鉢や浅鉢に見られた精製品が多い点を踏襲したものと考えられる。壺もⅣ期と同じく 13％（生石６％）と一定量あるが、概ね減少傾向にある。なお、作野 ST40 の器形が不明な点もあるが、全体に無文ミガキなどの精製５％（生石 5.9％）と縄文地文の粗製 7.7％（生石０％）があり、Ⅳ期と同様に作野 ST40 段階では壺にも精・粗があるが、後出の生石段階では前者が多くなるようである。他に生石では弥生時代特有の大型壺や遠賀川系壺も認められるが、完形品の復元率からは実際個体数としてはあまり多くない可能性もある。壺に付随する蓋も５％（生石６％）ながら当期では明確に存在し、弥生時代的な遺物として注目される。なお、作野 ST40 にはないが、生石の浅鉢形の小型品を小型土器とした。Ⅰ期から継続して散見される縄文的な遺物かもしれない。

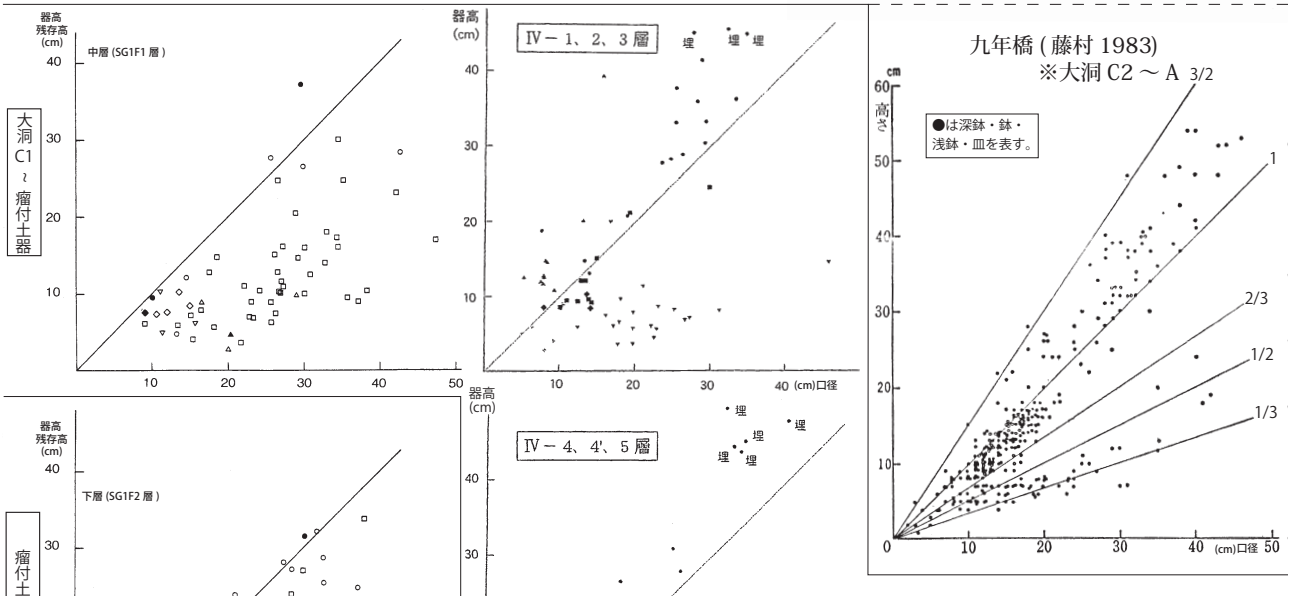
器形では、深鉢（生石報文の甕Ａ・Ｂ含む）の精製品Ⅱ類がほぼ消失し、Ⅲ類 2.6％（生石 17.6％）となり、作野 ST40 では変形工字文など有文のものは非常に少ないが、生石では変形工字文など有文の急増が確認され、主要な組成の一つとなる。他に生石段階で、寸胴で胴部上半が膨らみを持つⅣ類が 5.9％程だが出現し一定量認められる。粗製でもⅣ期と比べⅡ類 2.6％（生石 3.9％）が減少し、Ⅲ類 25.6％（生石 11.8％）が急増する。

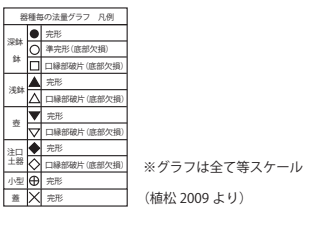
浅鉢（生石報文の鉢・高坏含む）では、精製がⅠ類 10.3％（生石 37.3％）、Ⅱ類 2.6％（生石 5.9％）Ⅲ類の口縁部屈曲 7.7％（生石２％）、当期から出現するⅣ類の底部丸底で口縁部が強く外反するもの 17.9％（生石０％）となっており、作野 ST40 の方が全体にバラエティに富む器形構成となっている。一方、生石は完形資料は











第 16 図　各遺跡の土器法量図

第 17 図　各遺跡の土器地文組成表

土器捨場集中域出土の個体土器地文組成

遺跡	地区・層位等	斜縄文													撚糸文	櫛歯状	ヘラ描	条痕文	無文	文様有他	合計
		LR	結節LR	縦位LR	RL	縦位RL	L	結節L	R	LR・RL	RLR	LR・L{RRR	直前段多条/付加条＊	絡条体条痕							
生石	C区（参考）	20		3	6	1													2	19	51
	:青木畑	39%		6%	12%	2%													4%	37%	100%
作野	2次ST40（参考）	28		1		1												1	1	8	40
	:大洞A'～青木畑	70%		3%		3%												3%	3%	20%	100%
作野	F1	19	1							2			2	1		1			0	7	33
	:大洞C2新～A	58%	3%							6%			6%	3%		3%			0%	21%	100%
3次	F2・F3計	37	1		3		2		1	9			2	1					2	20	78
SG	:大洞C2新	47%	1%		4%		3%		1%	12%			3%	1%					3%	26%	100%
	F3下・F4計	33	2		9		1			9			2		1				8	1	66
	:大洞C2古	50%	3%		14%		2%			14%			3%		2%				12%	2%	100%
宮の	Ⅲ層	52	3		5		22	1	4	5	1	1			6				25		125
	:大洞C2～A	42%	2%		4%		18%	1%	3%	4%	1%	1%			5%				20%		100%
前	Ⅳ－1～3	48	13		7		2	5		22			3						25		125
3次	:大洞C1～C2	38%	10%		6%		2%	4%		18%			2%						20%		100%
SG	Ⅳ－4～5	12	8		1		3		1	3									8		36
	:瘤～大洞C1	33%	22%		3%		8%		3%	8%									22%		100%
下	上層（Ⅳ・Ⅳ'）	24	7		1		1			1			1		2				9	15	61
叶	:大洞C1～A	39%	11%		2%		2%			2%			2%		3%				15%	25%	100%
水	中層（SG1F1）	42	6		2		5		1				4		4	2			20	18	104
5～	:瘤Ⅳ～大洞C1	40%	6%		2%		5%		1%				4%		4%	2%			19%	17%	100%
7ブロ	下層（SG1F2）	30			5		2			2					1	2	1		24	13	80
ック	:瘤Ⅰ～Ⅲ	38%			6%		3%			3%					1%	3%	1%		30%	16%	100%

＊直前段多条と付加条は、数が少量などからまとめた。

第 18 図　各遺跡の土器赤彩組成表

赤彩	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
生石2	青木畑	7		17					2	26	51
C区	V期	26.9	0.0	65.4	0.0	0.0	0.0	0.0	7.7	51.0	
作野2次	青木畑～A'			6						6	39
ST40	V期	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15	
宮の前3	A～C2				3					3	125
Ⅲ	Ⅳ期	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	
宮の前3	C2～C1			1	4	1		1		7	125
Ⅳ1～3	Ⅲ期	0.0	0.0	0.8	3.2	0.8	0.0	0.8	0.0	5.6	
宮の前3	C1～瘤									0	61
Ⅳ4～5	Ⅱ期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	

赤彩	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
下叶水	A～C1			1	1					2	61
上層	Ⅳ期	0.0	0.0	3.8	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3	
下叶水	C1～瘤Ⅲ					1				1	105
中層	Ⅱ期	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	3.8	
下叶水	瘤Ⅲ~瘤Ⅰ							1		1	85
下層	Ⅰ期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	3.8	

赤彩	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
作野3次	A～C2		2	4		4		1		11	173
	Ⅳ期	0.0	7.7	15.4	0.0	15.4	0.0	3.8	0.0	6.4	

＊本稿では、縄文時代から弥生時代にかけての変遷をみるため、生石2報告書中の壺ABは深鉢、鉢高坏は浅鉢として器種分類した。

第 19 図　各遺跡の土器補修孔組成表

補修孔	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
生石2	青木畑									0	51
C区	V期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
作野2次	青木畑～A'			1						1	39
ST40	V期	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	
宮の前3	A～C2	8	1	1						10	125
Ⅲ	Ⅳ期	6.4	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.0	
宮の前3	C2～C1	1		1						2	125
Ⅳ1～3	Ⅲ期	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	
宮の前3	C1～瘤	2		1						3	61
Ⅳ4～5	Ⅱ期	3.3	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	

補修孔	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
下叶水	A～C1	1	1	1		1				4	61
上層	Ⅳ期	1.6	1.6	1.6	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	6.6	
下叶水	C1～瘤Ⅲ	7	1							8	105
中層	Ⅱ期	6.7	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.6	
下叶水	瘤Ⅲ~瘤Ⅰ	6								6	85
下層	Ⅰ期	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	

補修孔	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
作野3次上～下層	A～C2	3		2						5	78
	Ⅳ期	3.8	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.4	

＊本稿では、縄文時代から弥生時代にかけての変遷をみるため、生石2報告書中の壺ABは深鉢、鉢高坏は浅鉢として器種分類した。

Ⅰ類が圧倒的に多く、他はⅣ類の破片資料も含めて一定量確認できるだけである。壺は、精製でⅢ類 2.6％（生石 3.9％）と一定量あるが、Ⅳ期の有文のものは少なく、ミガキによる無文が主である。蓋は、笠状Ⅰ類 2.6％（生石 2.0％）、取手付Ⅱ類 2.6％（生石 3.9％）と作野では半々だったものが、生石ではⅡ類がやや増加傾向にある。

全体として、作野 ST40・生石の両遺跡とも器種組成などで類似した比率を示しており、組成からⅣ期までとは異なる様相が看取される。一方で新たな深鉢Ⅳ類の出現や器形の組成比率からは、両遺跡の相違も推測され、前述土器編年で示した通り、Ⅳ期→作野 ST40 →生石の変遷により、縄文時代から弥生時代に移行する時期の組成変遷が窺えるよ。未だⅣ期の縄文的な精粗・器形組成などを残す作野 ST40 と、後出でより弥生時代的な生石の土器組成の状況が推測される。

A－2　土器　法量分布・赤彩・補修孔・地文施文

土器に関連する法量分布等についても概括し、前章Ⅰ～Ⅴ期の中での変遷や特徴を検討する。

法量分布（第 16 図）　土器の器種毎の法量分布は、深鉢・鉢がⅠ～Ⅱ期では完形品が少なく不明な点が多いが、粗製深鉢は一定量ある。Ⅲ期では、宮の前Ⅳ－３層上面の埋設土器が深鉢全体の中で大形品が多く、一般的な粗製深鉢とは異なる可能性がある。詳細は別稿に譲るが、Ⅳ期にあたる新庄盆地の釜淵Ｃ遺跡Ｃ区では、包含層から完形土器 144 点が集中して出土しており、口径に比して長大な器高の寸胴形の深鉢から地域性の一端が窺える。Ⅴ期の深鉢は法量的にはⅣ期の鉢類と同等の法量のものが多い。なお数量の多いⅣ期の鉢は、口径と器高比がほぼ同じものが多く（約 20㎝前後）、口縁部Ａ突起や平行沈線文等文様も含め、同一の規格（指向）の中で量産されたのかもしれない。

浅鉢では、Ⅲ期の精製Ｃ１浅鉢（宮の前報文 52 図－10）が文様や法量なども含め同じものがあるが、他遺跡でも出土しており関連が注目される。Ⅲ期段階で一部大型化が認められる。壺では、Ⅲ期で大型の精製壺（宮の前Ⅳ－１層）が存在する。それ以前では大型壺は明確でなく、当期から壺の大型化が始まったものと推測される。Ⅴ期弥生時代初頭は、北陸や東北南部を中心に特殊大型壺が分布するが、これらの祖形も当期あたりの在地壺に由来しないだろうか。この大型化は注口土器でも見られ、概ねⅡ期の大洞ＢＣ式期（下叶水）にあたる。

赤彩（第 18 図）　赤彩された土器は、精製土器に多いが、粗製とした土器にも赤彩される場合がある。Ⅰ期～Ⅱ期では、小型土器と注口土器で１点赤彩されるのみで、全体に占める赤彩率は１％台である。Ⅲ期に入りⅠ期の器種以外に浅鉢や壺への赤彩が多くなり、赤彩率は５％前後に増加する。Ⅳ期も同等の比率を保つが、浅鉢や壺などに器種が限定的になる。Ⅴ期には古相の作野 ST40 では浅鉢に限定され 15％程に赤彩率が増加し、新相の生石では同じ浅鉢（報文では鉢・高坏）、深鉢、蓋など

第 20 図　各遺跡の石器器種組成表

	下叶水 瘤付前～大洞A Ⅰ・Ⅱ期主体			宮の前3次 瘤付～大洞A Ⅱ～Ⅳ期主体			宮の前2次 瘤付～大洞A Ⅱ～Ⅳ期主体			作野3次 大洞C2～A Ⅳ期主体			作野1次 大洞C2～A Ⅳ期主体			釜淵C・C区 大洞C1～A Ⅳ期主体			作野2次ST40 大洞A'～青木畑 Ⅴ期主体			生石2 青木畑 Ⅴ期主体		
種別	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)
石鏃	169	6.5	15.8	203	16.9	29.1	145	26.9	38.5	26	24.3	37.7	6	7.9	13.6	247	16.5	25.1	5	22.7	31.3	21	42.9	80.8
石槍	116	4.5	10.9	17	1.4	2.4	30	5.6	8.0	11	10.3	15.9				8	0.5	0.8	5	22.7	31.3			
石錐	121	4.6	11.3	120	10.0	17.2	38	7.0	10.1	15	14.0	21.7	10	13.2	22.7	416	27.8	42.3	1	4.5	6.3			
石匙	176	6.8	16.5	122	10.1	17.5	102	18.9	27.1	6	5.6	8.7	25	32.9	56.8	242	16.1	24.6				5	10.2	19.2
石錐	487	18.7	45.6	235	19.5	33.7	62	11.5	16.4	11	10.3	15.9	3	3.9	6.8	71	4.7	7.2	5	22.7	31.3			
掻器	225	8.6		75	6.2		6	1.1		2	1.9		10	13.2		加工痕に						22	44.9	
削器	329	12.6		109	9.1					9	8.4					含まれる			1	4.5		スクレーパー		
異形石器	2	0.1		3	0.2											3	0.2							
加工痕	1479			302						20						3000			8					
打製石斧	89	3.4		11	0.9								1	1.3		11	0.7							
磨製石斧	170	6.5		69	5.7		43	8.0		9	8.4		12	15.8		90	6.0					1	2.0	
凹石	253	9.7		81	6.7		62	11.5		8	7.5		3	3.9		111	7.4		2	9.1				
磨石	321	12.3		114	9.5		50	9.3		3	2.8		2	2.6		7	0.5		1	4.5				
敲石	104	4.0		27	2.2					5	4.7					277	18.5							
石皿	27	1.0		7	0.6		1	0.2		1	0.9		2	2.6		4	0.3		1	4.5				
砥石	4	0.2		8	0.7					1	0.9					1	0.1		1	4.5				
石錘	10	0.4		2	0.2		1	0.2								11	0.7							
石碗													2	2.6										
計	4082			1505			540			127			76			4499			30			49		
加工痕除く計	2603	100.0		1203	100.0		540	100.0		107	100.0		76	100.0		1499	100.0		22	100.0		49	100.0	
定形石器計	1069		100.0	697		100.0	377		100.0	69		100.0	44		100.0	984		100.0	16		100.0	26		100.0
石核				132									4			527								
原石				42																				

＊不定形石器は、報告書で器種判然とせず、掻器、削器とした。宮の前・作野・釜淵Cでは石核を加えた。

	器種	石鏃					石槍				石錐				石匙				石篦				掻器			削器					異形石器		加工痕・不定形石器				小計(A)	合計A+B=(C)	小計(B)	磨製石斧		*蛤刃	含む
石材／遺跡		宮3	下	作3	作2	生	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	生	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	宮3	下	作3	作2	生	宮3	下	宮3	下	作3	作2				宮3	下	作3	生
堆積岩	珪質頁岩	80					6	60			49				39				39				26			31					1		40				371	372	1				
	黒色珪質頁岩	5									5				6				6				2			1											25	25	0				
	黒色頁岩	17	12					15			20	14			10	23			41	70			4	36		7	62						33	304			668	671	3				
	黄色頁岩		13					11				4				6				28				6			7							52			127	127	0				
	緑色頁岩					4																							1								5	5	0				
	頁岩	36	61	19	3	17	11		6	4	42	83	12	1	64	122	6	5	142	332	11	5	39	173	2	66	231	9	1	22	1		224	999	17	7	2773	2842	69		1		
	緑泥岩	4						4				1								2				2			2					1	8			24	26	2		2		
	粘板岩																																1			1	61	60	2			
	砂岩																															1				1	92	91	10	14		
	硬砂岩	1																	2							1										4	4	0				
	礫岩																															1				1	6	5				
	泥岩		1					1				2				1				14				1			8						3			31	56	25				
	凝灰岩															1																	2			3	105	102	1	7		
	シルト岩																																			0	24	24				
	石灰岩																																			0	1	1				
	緑色凝灰岩								1							1																	6			8	19	11				
	小計	143	87	19	3	21	17	91	7	4	116	104	12	1	119	154	6	5	230	446	11	5	71	218	2	106	310	9	1	23	2	0	300	1375	17	7	4042	4436	394	13	24	0	0
火成岩	流紋岩	2	6					7				4				11				22			2				6						48			108	157	49	5			
	石英粗面岩																																			0	9	9	2			
	安山岩																			2							4						5			11	469	458	33	49	6	1
	鉄平石																																			0	3	3				
	玄武岩																																			0	12	12	1	8		
	花崗岩																																			0	453	453	1	4	2	
	閃緑岩		1																																	1	18	17	5	57	1	
	角閃岩																																			0	1	1				
	小計	2	7	0	0	0	0	7	0	0	0	4	0	0	0	11	0	0	0	24	0	0	2	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	53	0	0	120	1122	1002	47	118	9	1
変成岩	花崗片麻岩																																			0	0	0	1			
	片麻岩																																			0	0	0	1			
	片岩																																1			1	24	23		17		
	黒色片岩																																			0	31	31	1			
	緑泥片岩																																			0	0	0				
	石墨片岩																																			0	24	24				
	千枚岩																																			0	8	8				
	蛇紋岩																																			0	0	0	4	6		
	ホルンヘルス																							1												1	9	8	2	5		
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	96	94	9	28	0	0
岩脈状火成岩	玉髄	24	17	2	1			2	2		1		1		2				4	2			1	2		2	1						1	3	1		69	69	0				
	鉄石英	19	13		1			4	1		1	2			1	4				3				1		1	1				1	1	1	13		1	69	74	5				
	珪岩	3	11					3	1				2							2				2			2							9			35	35	0				
	瑪瑙	7	33	5				9		1		11				7			1	10			1	1			5							24			115	115	0				
	石英	1									1																										2	2	0				
	黒曜石	1	1																												1		1	2		6	6	0				
	翡翠		0																																	0	3	3				
	碧玉	3									1																										4	4	0				
	小計	58	75	7	2	0	0	18	4	1	4	13	3	0	3	11	0	0	5	17	0	0	2	6	0	3	9	0	0	0	1	2	2	50	3	1	300	308	8	0	0	0	0
合計		203	169	26	5	21	17	116	11	5	120	121	15	1	122	176	6	5	235	487	11	5	75	225	2	109	329	9	1	23	3	2	302	1479	20	8	4464	5962	1498	69	170	9	1
アスファルト付		40	12	2	2					1		3			21	29	3				1					1	1										116		0				
比率(%)		20	7	8	40					20		2			17	16	50				9					1	0										2.6		0				

＊遺跡名は、宮3：宮の前遺跡3次、下：下叶水遺跡、作3：作野遺跡3次、作2：作野遺跡2次ST40出土資料、生：生石2遺跡を表す。釜淵遺跡は、個別の石材が不明なため除外した。
＊器種組成を主とし、宮の前遺跡などの石核・原石は除外した。外した。宮の前・下叶水では頁岩を細分したが、作野2・3次では頁岩としてまとめた。
＊三脚石は三脚石器、冠・鋸は石冠・石鋸を表す。

打製石斧		磨石				凹石				敲石			石皿				砥石				石錘			石棒		石刀		石剣		独鈷石	冠・鍬	岩板・線刻礫			三脚石	垂飾品	石製品		勾玉他		円盤状	石製品			器種
宮3	下	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	宮3	下	作3	作2	宮3	作2	宮3	下	生2	宮3	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	遺跡
																																						1				珪質頁岩
																																										黒色珪質頁岩
	3																																									黒色頁岩
																																										黄色頁岩
																																										緑色頁岩
8	57	1	1																					2																			頁岩
																								2																			緑泥岩
																								13	16	23	2						4		2							粘板岩
1		4	17			7	13	2			4		1	6	1		5	4	1	1			1	2		1		1		5	1		4	3	4			1	1			砂岩
																																										硬砂岩
		1				1							1				2																									礫岩
	14		4				1		1		1															1					1								1			泥岩
		2	40			3	18				4	1		2							1	10		1		1					4		2		7	2			3	1		凝灰岩
				2			9	2									1													1	1		2	2	3			1				シルト岩
																																1										石灰岩
	1				1		1	1	1			4																						1		1						緑色凝灰岩
9	75	8	62	2	1	11	42	5	2	0	9	5	2	8	1	0	8	4	1	1	1	10	1	20	16	26	2	1	0	6	7	1	12	6	17	3	0	3	4	2	0	小計
	5					1	4				1													1		1									1			35				流紋岩
		2				7																																				石英粗面岩
2	3	102	31	1		62	22	3		27	18		5	15		1					1			1	1	1			1	1							153	5	1	1	安山岩
																																	3									鉄平石
	1		5				3				3																															玄武岩
		1	199				177				71			4																					1							花崗岩
	4	1	3				5																		2													2			閃緑岩
	1																																									角閃岩
2	14	106	238	1	0	70	211	3	0	27	93	0	5	19	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	3	2	0	0	1	1	0	0	3	0	2	0	0	188	7	1	1	小計
																																										花崗片麻岩
																																										片麻岩
			19								2																		1						1							片岩
																								31																		黒色片岩
																																										緑泥片岩
																								24																		石墨片岩
																								8																		千枚岩
																																										蛇紋岩
																									8																	ホルンヘルス
0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	小計
																																										玉髄
			2																																1			2				鉄石英
																																										珪岩
																																										瑪瑙
																																										石英
																																										黒曜石
																																			1	1	1					翡翠
																																										碧玉
0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	2	0	0	0	小計
11	89	114	321	3	1	81	253	8	2	27	104	5	7	27	1	1	8	4	1	1	2	10	1	85	27	28	2	1	2	7	7	1	15	8	21	4	0	193	11	3	1	合計
																																										アスファルト比率（%）

第 21 図　石器石材組成

に器種が増え、赤彩率は 50%以上に増加する。

補修孔（第 19 図）　土器の補修孔は、赤彩土器と共に、土器の精粗（再利用される土器の意味）などを検討する上で重要な要素となろう。Ⅰ期～Ⅱ期では、後期深鉢に補修孔があるものが大半（下叶水では精製と粗製でほぼ半々）で、全体に占める比率は、５～７%台にのぼる。

Ⅲ期に入り、比率はやや下がる傾向にある。Ⅳ期では遺跡によって６～８%とばらつきがあるが、深鉢・鉢・浅鉢に一定量は認められる。Ⅴ期には 3%以下（古相の作野 ST40 で 2.5%・新相の生石で０%）になり、器種も浅鉢（報文では鉢・高坏）などに限定される。縄文後晩期に補修率が一定量あり（10%以下）、弥生時代に入ると少なくなる傾向があろう。

地文（第 17 図）　各期の地文組成なども特徴を記す。Ⅰ期には、斜縄文ＬＲが 30 ～ 40%台と最も多く、次の無文が 20%台と、以後Ⅳ期まで普遍的にこれらの比率が高く続く。他に結節ＬＲ、ＲＬ、ｌ、ＬＲ・ＲＬ（羽状）などが５～ 10%前後、その他特殊な縄文は 3%以下で、櫛歯状文などヘラ描文もⅠ・Ⅱ期には一定量散見され、全体に多様な縄文施文がみられる。

Ⅳ期には、ＬＲの比率が 40%以上に増加し、遺跡によって結節ＬＲ（下叶水）、ｌ（宮の前）、ＬＲ・ＲＬ羽状（作野）などが 10%以上になるものがあるが、遺跡差や地域差か判然としない。その他特殊な縄文は 3%以下である。全体にＬＲや幾つかの縄文施文に種類が集約されていくようである。Ⅴ期には、古相の作野 ST40 でＬＲが 70%まで増加し、条痕文など当期特有の施文も認められる。新相の生石では再びＬＲが全体の約 40%まで下がるが、無文化も約 40%まで増加する。ＲＬ 12%や縦位ＬＲ施文 6%などに地文が集約化される。

B　石器－器種・石材（第 20・21 図）

石器は、各層位毎では数量が限られるため、各遺跡単位で組成を試みた。時期は遺跡毎の主体的な時期をあて、特に本節では縄文時代に特有の定形化した剥片石器の概略的な変遷を古い順に整理する。

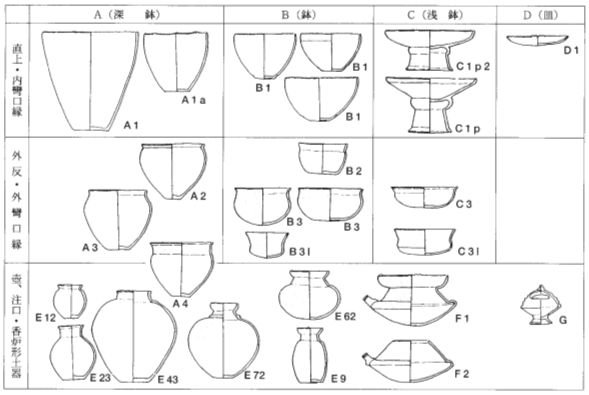
石器器種（第 20 図）　器種では、縄文時代に特有の定形化した剥片石器の中で、下叶水（Ⅰ・Ⅱ期主体）では、石鏃が 16%と一定量あり、これは以後全遺跡を通し狩猟具として一定量認められる。他に石匙 17%、石篦 46%と多く、当期の主体的石器と考えられる。宮の前（Ⅱ～Ⅳ期主体）は、下叶水と同じ器種組成の高い比率を示すが、石鏃・石匙は 20%台に増加、石篦は 25%

遺跡	時期（大洞）	深鉢・鉢 深鉢	台付深鉢	鉢	台付鉢	計	浅鉢 浅鉢	台付浅鉢	計	壺	注口	その他	個体数
是川①	B～A′	7.2		13.1	9.4	29.8	9.2	4.3	13.5	34.2	19.1	3.4	997
②	B～A′	2.7	5.0	10.5	8.4	26.5	19.0	1.5	20.4	34.0	17.4	1.7	1,693
亀ヶ岡	C_1～C_2	2.1		37.5	6.3	45.8	18.8		18.8	35.4			48
土井Ⅰ号	BC～A	8.5	9.3	3.3		21.6	12.3	0.3	12.6	54.4	7.7	4.4	366
石　郷	B	3.0		12.1	11.1	26.3	7.0	4.0	11.1	37.4	22.2	3.0	99
九年橋	C_2～A	4.7		37.0	8.0	49.8	11.8	3.0	14.8	32.3	3.0		297
ドウマンチャ	B	70.8		19.8		90.6	1.8		1.8	7.1	0.5		561
	A	81.0		14.3		95.2	3.2		3.2	1.6			63
宇　鉄	C_1～C_2	68.7			17.4	86.1	5.5	0.1	5.7	7.7	0.4	0.1	793
亀ヶ岡	C_1～C_2	32.3		41.0	1.7	75.0	10.8		10.8	13.9	0.3		288
山　王	C_2	71.3				71.3	13.0		13.0	14.8	0.9		216
	A′	48.0		27.0		74.9		12.0	12.0	13.0			382
館	BC	62.8		9.3		72.0	5.3	7.6	13.0	6.2	8.0	0.8	486
	C_1	52.3		10.0		62.3	7.7	9.2	16.9	16.9	3.8		130
	C_2	52.3		11.9		64.2	17.3	4.1	21.4	11.9	2.1	0.4	243
	A′	53.4		10.1		63.5	2.8	12.4	15.2	20.8		0.6	178
沢　上	B	82.9				82.9	9.2		9.2	3.9	3.9		76
二月田	B	92.9				92.9	1.7	1.7	3.4	2.8	0.9		466
寺　脇	C_2	62.1		24.7	0.5	87.4	7.4		7.4	4.9	0.3		364

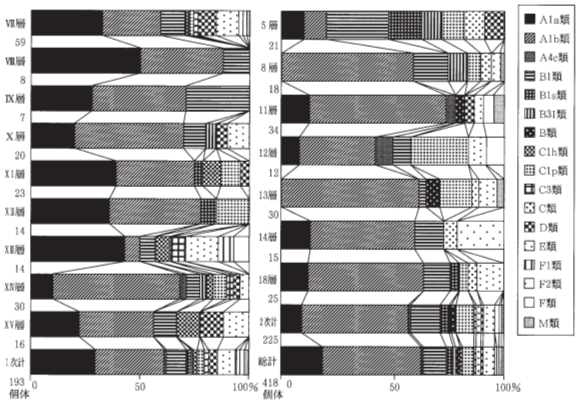
第 22 図　東北地方各遺跡の組成比率（藤村 1983）

資　料	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	その他	計
完形資料	4 (4.7)	134 (45.1)	44 (14.8)	96 (32.3)	9 (3.0)		297
復元資料	132 (19.9)	180 (27.2)	123 (18.6)	205 (31.0)	17 (2.6)	7 (1.1)	662
合　計	146 (15.2)	314 (32.7)	167 (17.4)	301 (31.4)	26 (2.7)	7 (0.7)	959

第 23 図　岩手県九年橋遺跡の組成比率（藤村 1983）



中沢目貝塚Ⅱ群土器の器種類型（アミ部分は装飾、文様帯）



第 24 図　宮城県中沢目貝塚層位別土器組成（須藤 1995）

台に減少する。作野（Ⅳ期主体）は、石鏃が 28％・石篦 31％で宮の前と同等であり、石匙 70％と石錐 56％は増加傾向にある。植生や動物相など違いもあるが、後期から晩期後葉への石器組成の様相（石篦の減、石匙・石錐の増など）が遺跡や地域によってやや異なるようである。

作野 ST40（Ⅴ期主体）では、数量が少ないが、石鏃 31％、石槍 31％、石篦 31％、石錐 6％と器種が限定的になる。最も新相の生石では、石鏃 80%、石匙 19％と更に器種が集約化され、縄文時代に一般的な石篦などはなく、スクレイパー（報文）と称される不定形石器が石鏃と同等量で存在する。

石器石材（第 21 図） 石材は、剥片石器では、頁岩の堆積岩が主で、玉髄・鉄石英・瑪瑙など岩脈状火成岩も多い。礫石器では、流紋岩・安山岩、花崗岩などの火山岩、砂岩・泥岩・凝灰岩など堆積岩が多い傾向にある。

器種別には、剥片石器の石鏃・石槍・石錐などの小形の石器では、主体の頁岩の他に玉髄や鉄石英、瑪瑙製が多く、宮の前では原石の大きさに起因すると考えられる。他に下叶水では黄色頁岩が石鏃・石槍・石篦などに一定量認められる。頁岩が熱変性を受けた小国町近辺（荒川・朝日山系）特有の石材（田宮良二氏のご教示による）で、今後その分布範囲などが注目される。

6　まとめ

上記までに縄文時代終末～弥生時代初頭にかけての各遺跡の土器や石器の組成などの変遷を概観した。最後に前章までを整理し、まとめにかえる。

近年東北では、貝塚遺跡などを中心に遺物の組成比率などが研究されている（第 22 ～ 24 図）。特に岩手県九年橋遺跡をまとめられた藤村東男氏は、従来の土器組成比率を整理し、詳細な遺物組成論を展開する（藤村 1983）。その中で藤村氏の土器組成における留意点を要約すれば、①資料の取捨選択がないこと（優品など資料の偏りを防ぐ）、②多くの資料数の確保（数量的な信頼性）、③個体数の数え方の共通性（完形品と破片資料の同一個体性の有無など）、④土器分類の基準の共通性（器形・文様分類の差異による相違）があげられる。更にこれらを踏まえ組成率には、a 完形資料の組成比（堆積時の小破片を除く組成比率）、b 破片資料の組成比（使用時の破損消耗を補充するために新規に供給された土器も含めた累積総量の組成比率）、c 完形資料と破片（復元）資料の援用（使用時の組成比率）の 3 種類があり、各々その組成の意味する性格が異なり、c が「考古学的には最も意味のある数値」とする（藤村 1983。第 23 図）。

本稿では、前述①は、各遺跡の捨て場（各層位）や竪穴住居跡など一括性の高い資料を取り上げた。②はⅤ期の作野 ST40 や生石 2 を除き、各遺跡の遺物が出土する各層位の前後を補完して、藤村氏が指摘する安全な 100 ～ 200 点の確保に努めた。③は生石 2 を除き（生石 2 は土器形態を探るため完形資料のみで 51 点確保）、各遺跡（各層含む）の集中域の概ね 1 個体（残存率 1/6 以上 [宮の前のみ 1/4 以上]）と判断できるものを抽出した。④は九年橋遺跡などと同様に器種を優先したが、時期的に九年橋遺跡（大洞Ｃ 2 ～ A 式）と異なり時期幅があるため、共通的分類として上位から器種→文様（精粗）→器形の順で分類した。

全体的な組成比率は、九年橋遺跡同様の「徹底した復元」作業などから、少なくとも下叶水・宮の前・作野 3 次・作野 ST40 資料は、藤村氏の c 完形資料と破片（復元）資料の援用（使用時の組成比率）を目指した。しかし、実際には土器捨て場の性格や、洪水層を含む堆積層のあり方、一部資料点数の少なさなどから、各遺跡の各層位が「使用時の組成比率」を直截に表しているか信頼性が乏しいものもあった。

そのため、本稿でまとめた全体的な資料では、前後の層の補完や、複数遺跡により資料数を確保することで、「少なくとも各期（時期幅がある場合も含む）での捨て場などに持ち込まれた（使用時の）個体数の組成比率」（植松 2007）を表すと判断し、県内当該期の遺物組成率の変化を大枠で知る上で有効な資料と考えた。

その結果、全体には、縄文時代の終末期のⅠ期（後期後葉：瘤付土器Ⅰ～Ⅲ期）に深鉢（精製Ⅰ、Ⅱ類・粗製Ⅱ類）や注口土器が主体だったものが、Ⅱ～Ⅲ期（後期末～晩期前半：瘤付土器Ⅲ～大洞Ｃ 1 式期）に入り、精製品は深鉢（Ⅱ類）や鉢、浅鉢、壺などに広がり多様化・小型化（一部注口土器は大型化）する。同時期は粗製品も前述器種で若干は作られるが、特に粗製深鉢Ⅱ類は一定量が後晩期（Ⅰ～Ⅴ期古相 [作野 ST40 段階]）を通じ存続し、埋設土器にも意識的に利用された。

Ⅳ期（晩期中～後葉：大洞Ｃ２～Ａ式期）に入り、一部壺や浅鉢などは大型化し、器種の組成で鉢や浅鉢などの増加の偏りが見え始める。岩手県九年橋遺跡（大洞Ｃ２～Ａ式期）と時期が重なる宮の前上層（同Ｃ２～Ａ式期）・下叶水上層（同Ｃ１～Ａ式期）・作野（同Ｃ２～Ａ式期）の組成比率は、一部深鉢・壺などで異なるが、概ねほぼ同等の器種比率（深鉢・鉢の合計比は全体の約1/2を占める）で、当期の東北地方に通底した土器組成なのであろう。

Ⅴ期（同晩期後葉～弥生時代初頭：大洞Ａ'～青木畑式期）では、全体に浅鉢や深鉢、壺・蓋などに器種が集約され、古相の作野ST40ではⅣ期の縄文的な土器組成を残しつつ、石器組成では、それまでとやや異なる様相（器種の偏り・集約など）が看取される。新相の生石では更に集約化が進み、土器の新たな器形や赤彩比率、石器の器種組成などからもⅣ期までの系譜から大きく変容するあり方を示す。但し、土器地文では原体の集約化などはあるが、依然としてⅠ期以降に普遍的な原体（ＬＲ）を選択している。

上記から、Ⅰ～Ⅲ期は概ね縄文時代的組成変遷で、Ⅳ～Ⅴ期の縄文時代最終末から弥生時代初めにかけては、縄文的な要素を残しつつ、段階的（土器器形[文様]・石器器種[大洞Ａ式期]→土器器種［大洞Ａ'式期］→縄文施文（青木畑式期）などの順）に、相互に相関関係を持ちながら、生活環境を変容させ、新たな稲作文化を受容していった当時の人々の様子が窺える。

最後に本稿を作成するにあたり、黒坂雅人、小林圭一、藤村東男、須藤隆、藤沼邦彦、秦昭繁、田宮良一、高柳健一、渡邉淑恵、山木巧、後藤枝里子氏には多大なご指導を得た。記して感謝申し上げる。

引用・参考文献

安孫子昭二　1989「瘤付土器様式」『縄文土器大観４』小学館
安孫子昭二　1982「縄文時代後・晩期」『村山市史別巻１原始古代編』村山市教育委員会
阿部明彦　1984『作野遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会83集
阿部明彦　1988「蟹沢遺跡」『東根市史』
安部実　1987『生石２遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会111集
植松暁彦　1999『宮の前遺跡第３次調査報告書』山形県埋蔵文化財センター第65集
植松暁彦　2007「村山市宮の前遺跡第３次調査の遺物組成」『北村山の歴史第９号』北村山地域史研究会
植松暁彦　2009『下叶水遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター177集
植松暁彦　2011『作野遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター194集
植松暁彦　2012『作野遺跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター205集
黒坂雅人　2000『釜淵Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター115集
高柳圭一　1988「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代　85号』
小林圭一　2001「最上川流域の縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第７巻第１号
小林圭一　2011『亀ヶ岡式土器成立期の研究』早稲田大学先史考古学研究所
佐藤庄一　1984「山形県における縄文時代後晩期の遺跡分布」『砂川Ａ遺跡発掘調査報告書』朝日村教育委員会
佐藤鎭雄他　1977『主要地方道尾花沢寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』山形県教育委員会第９集
佐藤禎宏・佐藤鎭雄　1972『神矢田遺跡第３・４・５次発掘調査報告書と考察』遊佐町教育委員会
佐藤禎宏・佐藤鎭雄　1984『砂川Ａ遺跡発掘調査報告書』朝日村教育委員会
佐藤嘉広　1992「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」『加藤稔先生還暦記念東北文化論のための先史学歴史学論集』
鈴木克彦　1983「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究４』雄山閣
須藤　隆　1995『縄文時代晩期貝塚の研究２　中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
須藤　隆　1998『東日本先史時代文化変化・社会変動の研究』算修社
高瀬克範　2004『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
高橋龍三郎　1988「亀ヶ岡式土器の文様について」『亀ヶ岡式土器の編年について』第３回縄文文化検討会
林　謙作　1981「縄文晩期という時代」『縄文土器大成４』講談社
藤沼邦彦　1981「東北地方」『縄文土器大成４』講談社
藤沼邦彦他　1986『田柄貝塚Ⅰ』宮城県教育委員会
藤沼邦彦　1989「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観４』小学館
藤村東男　1977『九年橋遺跡調査報告書第３次～第６次合本』北上市教育委員会
藤村東男　1983「縄文土器組成論」『縄文文化の研究５』雄山閣
藤村東男　1984『縄文土器の知識Ⅱ』東京美術
森　幸彦　1988『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告書17集
山口博之　1994『宮の前遺跡第２次調査報告書』山形県埋蔵文化財センター19集
山内清男　1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第１巻第３号
山内清男　1932「日本遠古の文化」『ドルメン』第１巻第６・７号
山内清男　1964『日本原始美術１縄文式土器』講談社
山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
柳沢和明ほか1990『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集

東北地方出土の「橿原式文様浅鉢」について

小林圭一

1　はじめに

「橿原式文様」は、三角形に抉り込んだ文様（三角形刳込文）を交えた七宝文様風の精製有文土器に代表され、西日本の後期末葉～晩期前葉の限られた時期に盛行した文様である。当該土器を多く出土した奈良県橿原市橿原遺跡を標式遺跡としてその名を冠し、基本的には三角形刳込文が関与した文様を指示するが、同文様が関与しなくともそれに類した文様、また文様帯上下端の刻目帯や文様連結部の凹点文を持った七宝文様以外の土器も含まれる。橿原式文様の土器は東海以西を主たる分布域とするが、東日本にも散見され、識別が比較的容易なことから、西日本との交流を示す異系統の土器として、以前より研究者の注視するところとなっていた（大竹 1983、鈴木 1985）。

橿原式文様の土器が俄然脚光を浴びるようになったのは、大塚達朗氏による精緻な型式学的研究（大塚 1995）が発表されて以降であろう。同氏は詳細な文様観察から当該土器の４階梯にわたる変遷（滋賀里段階→橿原段階→宮滝古段階→宮滝新段階）と、東北地方を包摂した広域的な視座から後期末葉～晩期初頭に限定されることを明確にし、当該土器の理解を飛躍的に前進させた。更に今世紀に入って資料集成が進み（深澤 2002、中沢 2002、関根 2006）、列島規模での当該土器の内容が明白にされると共に、標式資料の橿原遺跡出土品が再整理され（松田編 2011）、研究の気運が喚起されている。

東北地方で出土した当該土器について、嘗て筆者も集成を試みた（小林 2010b：第 274 図）。しかし遺漏した資料や新出の資料が存しており、その補足が課題となっていた。そこで本稿ではそれ等の資料を追補して、若干の考察を加えてみたい。ほとんどが東北南部[1)]に位置する遺跡で占められているが、今後も資料の集積が期待され、広域編年の指標として重要性を増すことが想定される。先行研究を大きく踏み出した内容とは言えないが、亀ヶ岡式土器成立期の様相を理解するための基礎的作業を企図している。

なお関東・東北から出土した橿原式文様を施した土器について、これまで「近畿系晩期縄文式土器」（大竹 1983）、「関西系晩期有文土器」（鈴木 1985）、「橿原式文様土器」（中沢 2002）、「滋賀里系土器」（関根 2006）等と称されてきた。橿原式文様は精製の浅鉢形土器に主に施文されているが、深鉢形土器や壺形土器にも認められる（図１）。しかし東北地方の出土例は浅鉢形土器に限られるため、本稿では「橿原式文様浅鉢」の呼称を用いている。また各種の文様名については、関根達人氏の研究（関根 2006）に準拠させていただいた。

2　橿原式文様浅鉢について

橿原式文様は冒頭で触れたように、三角形刳込文が関与した文様を原則とし、それに刻目帯が従属的に加わる。前者は平行線文間に三角形に抉り込んだ文様の先端を相対ないしは交互に対向、背向して配置することで、七宝文様や楕円形の陽刻部を描出するが、陽刻内には沈線文が加えられ、陰影に富む印象的な文様となる（図１）。狭義の解釈では橿原式文様は上記した文様に限定される。しかし東北地方では楕円形の陽刻内に沈線を紡錘状に結束するように配した「結束重弧文」（図２－３・７・14）のみが該当し、その他に弧線を重ねた「山形連弧文」（６・８～ 13）、複数の沈線を鋸歯状に配した「ジグザグ文」（５）、２段のジグザグ文が相対して菱形を連結した「相対ジグザグ文」（１・２）等、三角形刳込文の関与しない文様も存しており、特に当地では山形連弧文が主流となっている。本稿ではこれ等も含め橿原式文様を広義に捉えているが、東北地方の上記した文様には、文様帯の上下端を限る刻目帯が巡らされ、文様の連結部に凹点文が刻まれるのが通例である。橿原式文様の特徴の一つに、鋭いヘラ状工具による刻目が挙げられている（岡田 2012：350 頁）。この刻目帯は一見大洞 BC

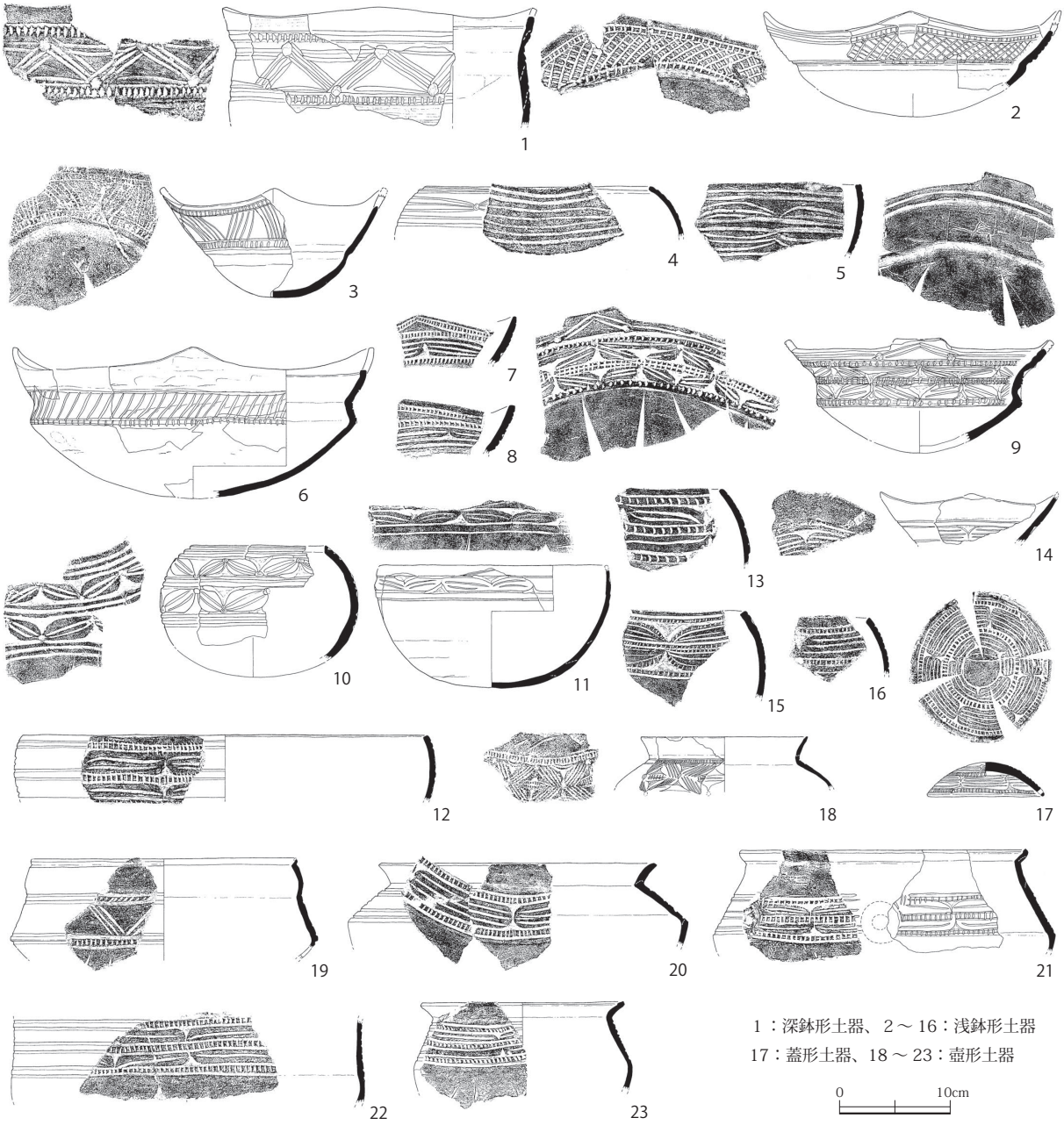


図１　奈良県橿原遺跡出土の橿原式文様の土器

式の珠文に類似する。しかし大洞 BC 式には陽刻部の形状を一定に保つため、陰刻後に「磨き」や「潰し」を加える原則（陽刻部形状の保持原則）が働いており、差異が存している。

上記した橿原式文様は、口径（最大径）に対し器高の低い浅鉢形土器に多く施文され、その他に深鉢形土器、壺形土器等にも認められる（図１）。浅鉢形土器は所謂黒色磨研系浅鉢で、口縁が内彎して立ち上がる椀形の器形の他に、丸底で皿形の胴部で頸胴部界で屈折し口縁が大きく開いたり、胴部上位が張り出し口縁が外折した器形等が存し、また口縁形態も平縁だけではなく緩い波状縁も見られ、本来的に多様である。ところが東北地方では口縁が内彎して立ち上がる平縁の椀形の器形にほぼ限られており、西日本に比べると単調な印象を拭いきれない。

橿原式文様は縄文時代晩期初頭の滋賀里Ⅱ式～同Ⅲａ式を構成する精製土器に施される。当該研究を先導する大塚達朗氏は、橿原式紋様の初現となる「くっつく相対の仕方」を表徴した橿原式紋様・滋賀里段階が後期末葉に成立したと見なしており、後続する橿原式紋様・橿原段階を晩期初頭に位置づけている（大塚 1995：129 － 130 頁）。また関根達人氏は埼玉県川口市石神貝塚出土

の椀形土器（図４－２）を、滋賀里Ⅱ式の器形と刻目帯を残しながら、大洞 B1 式・安行 3a 式に特徴的な磨消縄文を伴う入組文様が施された東西に由来する要素を融合した土器として、「滋賀里Ⅱ式－安行 3a 式－大洞 B1 式」の同時性の証左と評価している（関根 2006：102 頁、同 2008：240 頁）。この折衷土器から大洞 B1 式と橿原式文様の年代的接点が導出されよう[2)]。

しかしその下限については、大塚氏等の積極的な提言は見出せない。近畿では奈良県秋篠（あきしの）・山陵（みささぎ）遺跡（岡田 1998）で重弧文や格子目文、鋸歯状となる多条沈線文の土器が滋賀里Ⅲａ式に伴っており、東海では大洞 BC 式古相に併行する雷（いかづち）Ⅱａ式に伴うことが判明している（増子 2007：21 頁）。これ等の成果を考慮に入れると、橿原式文様の下限は大洞 B2 ～ BC1 式の年代を大きく下ることはなかったと推測される（小林 2010b：483 頁）。

3　東北地方出土の橿原式文様浅鉢

新潟県北半を含む東北地方では、11 遺跡 15 点の出土事例を収集した（図２・３）。東北中部の秋田県の１例を除くと、東北南部の福島県と新潟県で占められている。

（1）福島県の出土例

福島県では８遺跡 12 点の当該土器が抽出された。浜通りに位置した遺跡が６遺跡（図２－１～７・13）と最も多く、中通り（８～ 10）と会津（14）がそれぞれ１遺跡となる。

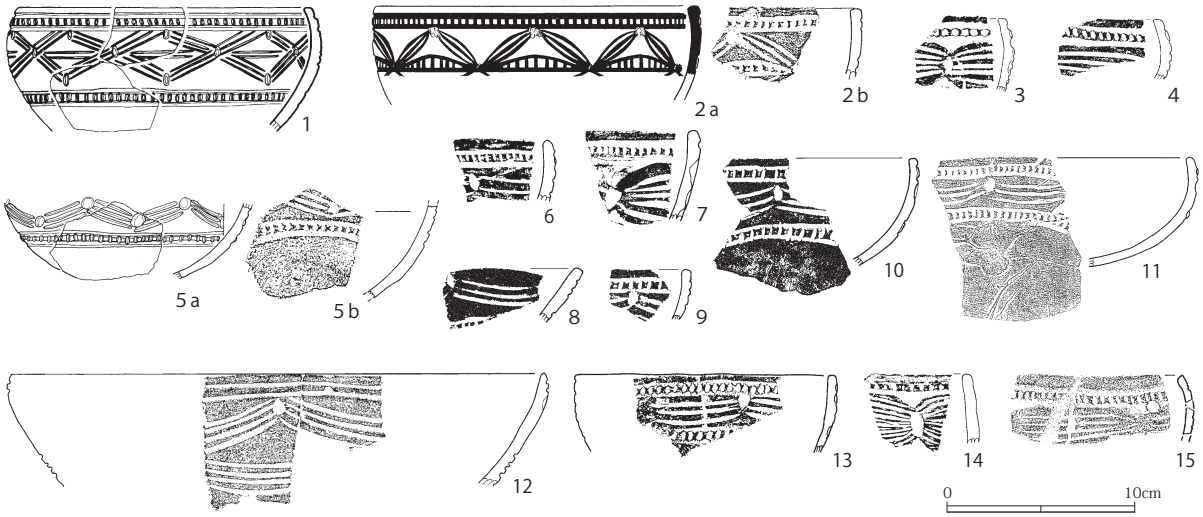
１は番匠地（ばんじょうち）遺跡（いわき市）から出土した。同遺跡は 1985 ～ 93 年の８年間にわたっていわき市教育文化事業団により発掘調査が実施されたが、１は 1987 年度に調査されたＡ低地のうち大洞Ｂ～Ａ式を包含した自然流路（第８号溝跡）から出土した。口縁部は内傾して立ち上がる平縁の椀形で、最大径（推定 16.8 ㎝）は頸部にあり、推定口径は 15.8 ㎝、器厚は５～７㎜を測り、口唇部は平坦気味に作出される。口頸部の上下端に刻目帯を巡らし、それに挟まれた２㎝超の幅に３条一組の沈線によるジグザグ状の文様を交互に２段、また中間にも横位の沈線を配置して、菱形に一文字の文様である「菱一文」を描出し、更に文様連結部には凹点文が刻まれる。なお報告書では先行研究を踏まえて、大洞 BC 式期（高島ほか 1993：第Ⅱ篇 264 頁）または同 C1 式期（同書：第Ⅱ篇第 212 図）に比定されている。

薄磯貝塚（いわき市）では、３点の当該土器が紹介されている。２は同貝塚Ａ地区で表面採集され、「口縁が平縁で、木の葉状の沈刻が施されており、橿原式と見なされる」と報告されている（吉田ほか 1979：52 頁）。口縁部が内彎気味に直上した器形で、推定口径は 17 ㎝、器厚は６㎜を測り、器面は内外ともによく研磨され、黒褐色を呈しており、赤彩の痕跡が見られる。口唇部は平坦で、口縁部には２本の沈線間に縦位の彫刻的なスリットが約５㎜間隔に施されている。更にその約２㎝下位にも同様な刻目帯がみられ、スリット間の空間に３条一組の沈線がジグザク状に配され、連結部に凹点文が刻まれる。下位の刻目帯の下端にも弧状の沈線が認められることから、七宝文様または１のような菱一文を構成していたと推測される。

３・４は 1982 年のいわき市教育委員会による同貝塚Ａ地区の発掘調査で出土したが、両例とも第 29 層（後期末から晩期初頭の土器群を見い出すことができる）からの出土品で、同層準からは瘤付土器第Ⅲ段階～大洞 C1 式土器が出土している[3)]。両例は口縁部が内傾して立ち上がる平縁の椀形で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は平坦に作出される。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は５条の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。写真図版から両例は黒褐色を帯びた色調で、同一個体のようにも窺われるが、拓影図では３の刻目帯の陰刻が太く刻まれている。なお報告書（大竹ほか 1988）では、大洞 BC 式に比定される土器群（第Ⅸ群土器）に分類され、滋賀里Ⅱ式に比定されている。

５は根古屋遺跡（いわき市）で出土した。同遺跡は 1983 年にいわき市教育文化財団によって発掘調査されたが、出土状況や共伴関係は不明である。内彎気味に立ち上がる椀形の器形であるが、口縁部を欠損しており、器厚は５～６㎜で、内外面共に赤彩の痕跡がみられる。文様帯下端に刻目帯を巡らし、凹点文を基点に３条の沈線がジグザグ状に配置される。

６は日向南遺跡（飯舘村）の第３次調査で出土した。同遺跡の第３次調査は 1986 年に福島県文化センターによって実施されたが、６は調査区西部のＬⅡ’ａ層（黄



１：番匠地遺跡（福島）、２～４：薄磯貝塚（福島）、５：根古屋遺跡（福島）、６：日向南遺跡（福島）、７：羽白Ｃ遺跡（福島）、８～ 10：浜井場Ｂ遺跡（福島）、11：元屋敷遺跡（新潟）、12：矢津遺跡（新潟）、13：本町西Ａ遺跡（福島）、14：村下遺跡（福島）、15：堀ノ内遺跡（秋田）

図２　東北地方出土の橿原式文様浅鉢集成図

茶色砂質土）から出土した。同層準は縄文前期～晩期の遺物を包含し、特に後期末葉以降の遺物が多く出土した。６は口縁部が内彎気味に直上した器形で、器厚は６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に凹点文を基点に３条の弧線文が配されると想定される。なお報告書（鈴鹿ほか 1987）では後期中葉（Ⅲ群土器２類）に分類されている。

７は羽白（はじろ）Ｃ遺跡（飯舘村）の第１次調査で出土した。同遺跡の第１次調査は 1987 年に福島県文化センターによって実施されたが、７は東地区のＬⅡｂ層（黒味を帯びた暗褐色土）から出土し、同層準には縄文中期～晩期前半にかけての土器が含まれていた。７は口縁部が内彎気味に直上した器形で、器厚は６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が巡らされ、その直下に浅い三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は５条の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。なお報告書（鈴鹿ほか 1988）では大洞 BC 式（Ⅴ群土器２類）に分類されている。

13 は本町西（もとまちにし）Ａ遺跡（富岡町）で出土した。同遺跡は 2000 年に福島県文化センターによって発掘調査され、調査区北東部の黒褐色土（ＬⅡｂ層）から出土したが、出土状況や共伴関係は不明である。13 は口縁部が内彎気味に直上した器形で、推定口径が 14 ㎝弱で、器厚は５～６㎜を測る。口唇部が平坦に作出され、上下端を刻目帯に挟まれた２㎝幅の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。報告書では「胎土や焼成より近畿地方からの搬入品ではなく、本遺跡周辺または当地域と近畿地方との間の地域で模倣された土器である可能性が高い」と考えられている（能登谷ほか 2002：160 頁）。

８～ 10 は浜井場Ｂ遺跡（須賀川市）で出土したが、中通りでは唯一の遺跡となる。同遺跡は 1987 年に福島県文化センターによって発掘調査が実施され、３点とも遺物包含層から出土したが、出土状況の詳細は不明である。９・10 は浅い窪地である D1 グリッドから出土し、９は地山（第Ⅶ層）直上の茶褐色土層（第Ⅵ層）、10 は上位の耕作土（第Ⅱ層）の出土と注記されている。同一の個体と推測され、口縁部が内彎して直上した椀形の器形で、器厚は５㎜を測り、口唇部はやや平坦気味に作出される。上下端を刻目帯に挟まれた幅２㎝超の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。８は F2 グリッドの耕作土（第Ⅱ層）の出土と注記されている。口頸部が直線的に外傾して立ち上がる浅鉢形土器で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は平坦に作出される。口縁上端の区画帯はなく３条の弧線文が口端に露出しており、下端に刻目帯が巡らされ、文様帯幅は 2.5 ㎝となる。３例とも写真図版から黒褐色を帯びた色調であると推定される。同遺跡からは瘤付土器第Ⅲ段階～大

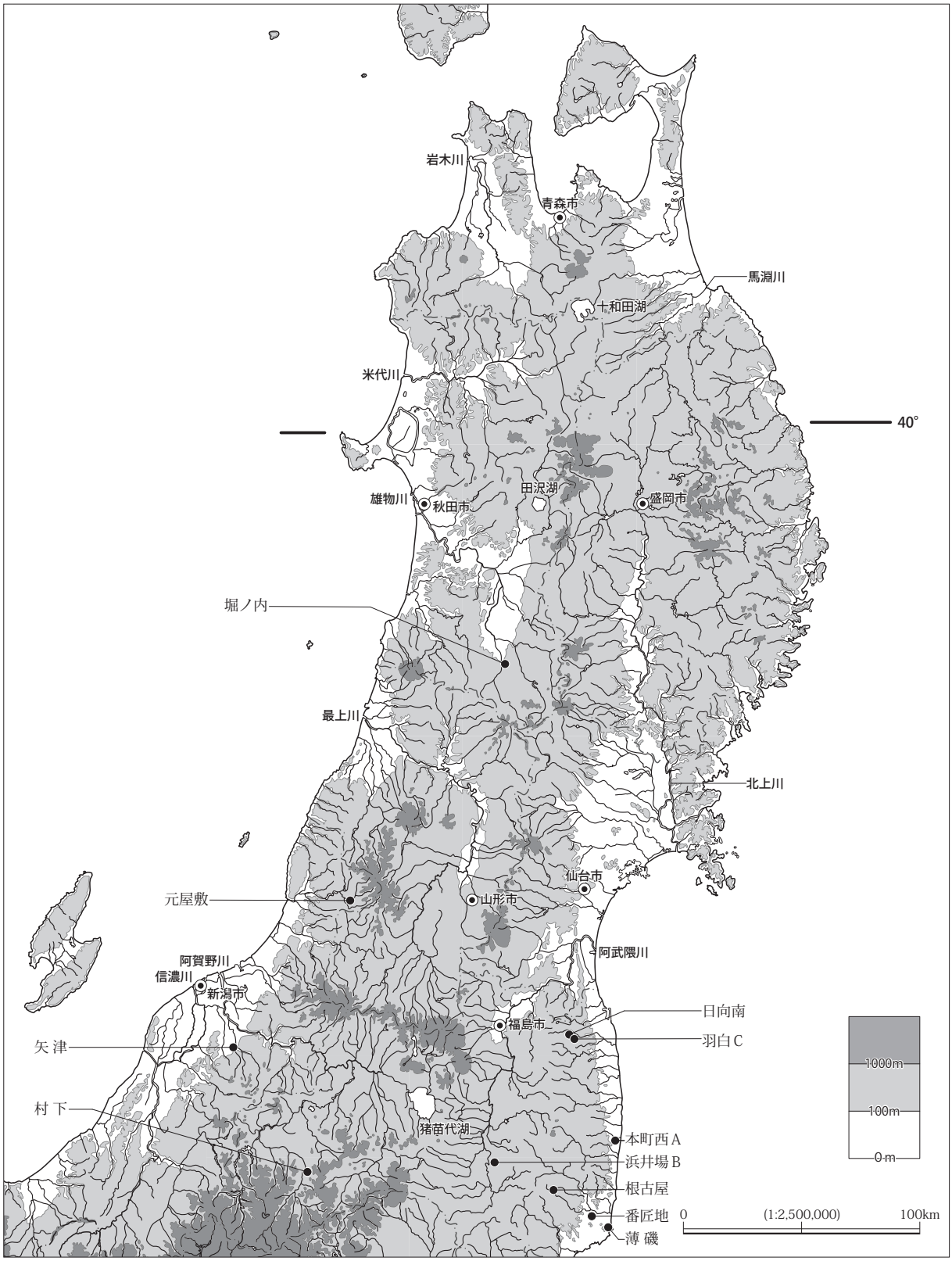


図3　東北地方の橿原式文様浅鉢出土遺跡

洞C2式までの土器が出土しており、安行2式土器も認められる。なお報告書では滋賀里Ⅲ式として大洞BC～C1式期に位置づけられている(阿部ほか1988:80頁)。

14は村下遺跡A地点（南郷村）で出土したが、会津では唯一の資料となる。同遺跡は1989・90年に発掘調査が実施され、14はC11区から出土したことから、第2次調査の資料であると想定されるが、出土状況や共伴関係は不明である。口縁部がやや内傾気味に立ち上が

り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられている。口縁に沿って刻目帯が囲繞され、その直下に浅い三角形の陰刻文様により横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内は 10 条程度の沈線が陰刻され、連結部には凹点文が刻まれる。報告書では晩期後葉の浮線網状文土器と共に図示されていることから、晩期後葉の資料として扱われたと推測される[4)]。なお同遺跡では安行 3a 式土器も出土しており、晩期初頭における関東との交流関係が想定されている。

（２）新潟県の出土例

新潟県では２遺跡２点の当該土器が認められるが、いずれも北部の下越地方から出土している。

11 は元屋敷遺跡（旧朝日村）で出土した。同遺跡は 1991 ～ 93 年と 1996 ～ 98 年に朝日村教育委員会により発掘調査が実施され、後期前葉～晩期末葉の膨大な量の遺物が出土したが、11 は居住域のある上段の旧流路西側の包含層（23J15 区Ⅳ層）から出土した。但し出土状況や共伴関係は不明である。口縁部が内彎して直上した椀形の器形で、器厚は５～６㎜を測り、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられる。上下端を刻目帯に挟まれた幅２㎝弱の文様帯内は３条の弧線文で構成され、連結部に凹点文が刻まれる。報告書（滝沢ほか 2002：写真図版・観察表編 90 頁）によると、外面に炭化物の部分的な付着や器面のナデ調整が認められ、色調は茶褐色を呈する。また胎土はⅠ類（雲母・石英を多量に含み、微量から少量の粘土粒を含む傾向にある）に分類されており、時期は大洞 B2 式併行期（12 期）～大洞 BC 式併行期（13 期）に位置づけられている。

12 は新潟県立歴史博物館が所蔵する落合清志コレクションの資料で、矢津遺跡（旧村松町）からの採集品である（荒川 2009 ）。12 は口頸部が内彎気味に外傾して立ち上がる平縁の浅鉢形土器で、口唇部は緩やかな丸味を持って仕上げられるが、尖鋭気味に作出される。推定口径は 27.9 ㎝、器厚は６㎜を測り、外面はよく研磨され赤彩が見られ、内面にはナデ調整が加えられる。口縁に沿って平行沈線文が囲繞されるが、沈線間は刻まれない。その直下に凹点文を基点として４条単位の弧線文が施され、更にその下位にも緩い弧線文が認められることから、基点をずらした弧線文を重層させたと想定される[5)]。

なお新潟県では、村尻遺跡（新発田市）で出土した刻目帯を有し鋸歯状山形沈線文を配した鉢形土器が、関西系晩期有文土器と指摘されている（鈴木 1985）。しかし大洞 C2 式に帰属されるので、本稿の対象から除外した。

（３）秋田県の出土例

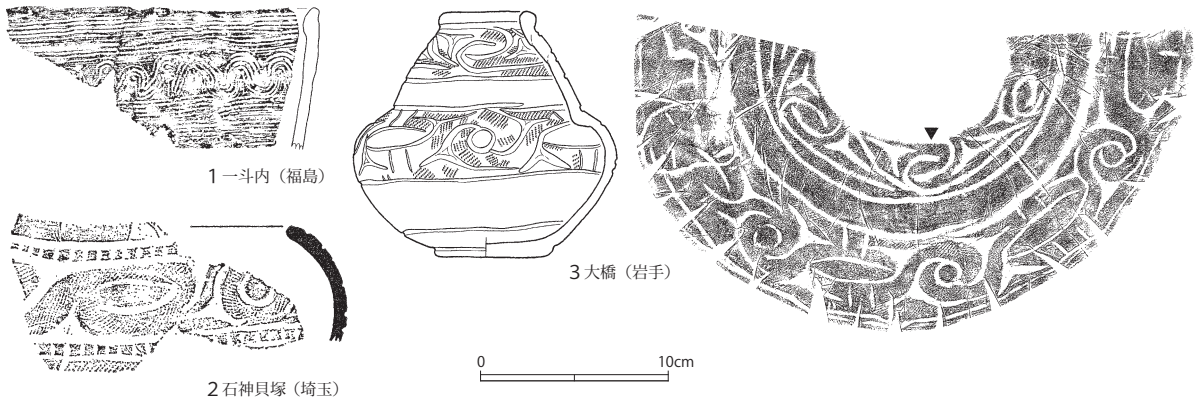
秋田県では、東北中部である横手盆地に位置する堀ノ内遺跡（湯沢市）で、当該土器が１点出土している（加藤ほか 2008）。同遺跡は 2003・04 年に秋田県埋蔵文化財センターにより発掘調査され、15 は調査区北東の後期中葉～晩期初頭の遺物包含層（Ⅵb(2) 層）から出土した。口縁部は内傾して立ち上がる平縁の椀形で、器厚は４～５㎜を測り、口唇部は平坦気味に作出される。口縁に沿って刻目帯を巡らし、その直下に横位の楕円形の陽刻部が描出され、陽刻内には４条の沈線が確認されるが、楕円文の連結部に凹点文は認められない。楕円文周縁の三角形の陰刻は判然とせず、刻目帯直下に補修孔が穿たれており、器面には文様施文後にナデ調整が加えられている。堀ノ内遺跡では瘤付土器第Ⅱ段階～大洞 BC2 式期の遺物が多く出土し、「入組三叉文高坏」等の仙北湖沼地帯に固有の土器群が出土しており、求心力を持った拠点集落であったと評価されている（小林 2010a）。

なお秋田県では同じ横手盆地に位置する平鹿（ひらか）遺跡（旧増田町）から、橿原式文様とされる土器３点が出土したと指摘されている（大竹 1983）。しかしいずれも晩期後半（大洞 C2 ～Ａ式）に帰属されるので、本稿の対象から除外した。

４　考　察

（１）器形の特徴

東北地方で出土した橿原式文様浅鉢のほとんどは、口縁部が内彎した椀形の器形で、口端にかけて直上または内傾して立ち上がる。破片資料だけなので、全体の形状は推測の域を出ないが、口径は 14 ～ 29 ㎝の範囲（多くは 20 ㎝以下）にあり、底部は平底または緩い丸底をなすと想定され、器厚は５～６㎜が大半を占める。口縁は平縁が多く、口唇部は緩い丸味を持って仕上げられたり、平坦に作出される。器面は内外面ともよく研磨されており、黒褐色～茶褐色を呈し、赤彩される傾向にある。



1：櫛描文土器、2：大洞B式と橿原式文様浅鉢の折衷土器、3：大洞B1式壺形土器

図4　縄文時代後期後葉〜晩期初頭の関連資料

上記したように器形には規格化が認められる。その意味で、口径が大きく口唇部が尖鋭気味に仕上げられた矢津例（図2－12）は、やや異質の感も否めない。また直線的に外傾した器形で、口端の区画帯がなく口頸部文様が露出した浜井場B例（8）は、器形の規約から逸脱しているように窺われる。

（2）文様の特徴

東北地方出土の当該土器の文様に関しては、3本一組の沈線文様、文様帯上下端の刻目帯、文様連結部の凹点文が、共通項として指摘される。

文様モチーフは、山形連弧文（図2－6・8〜11・12?・13）が多数を占め、結束重弧文（3・4?・7・14・15）が続く。その他は相対ジグザグ文（1・2）やジグザグ文（5）で、バラエティーに乏しい印象を受ける。三角形刳込文が関与するのは結束重弧文のみで、しかも浅い陰刻で本場のような深く抉られたものではない。楕円形の陽刻内には4〜5条の沈線文が加えられるが、14は10条程度の沈線文が認められる点で異質である。またこの結束重弧文以外は、3条の沈線を単位（12のみ4本単位）とした文様で構成される点が、東北地方の大きな特徴となっている。

文様帯幅は文様が1段で構成される場合、2㎝前後が通例であるが、2段で構成される場合は幅広となる。口縁部に沿った刻目帯は、通常口端から3〜5㎜下位に巡らされ、そのため口端に細い無文帯が作出される。刻目帯は幅6〜8㎜の平行沈線の間に、約5㎜間隔で刻目が加えられるが、ヘラ状工具によるものなのか刻目は一般に細く、大洞BC式のような陰刻後の「磨き」や「潰し」の手法は認められない。なお橿原式文様のヘラ状工具による刻目を、東北地方の瘤付土器に関連付ける意見（岡田2012：350頁）もあるが、筆者には判断しかねる。

文様連結部の凹点文は、縦長に抉り込まれた刺突である。沈線文様を施文した後に刻まれ、文様のアクセントとなっている。資料集成（深澤2002）を見ると、本場の橿原式文様では必須の要素にはなっていないので、関東・東北に強く働いた規範であったと考えられる。

（3）編年的位置について

編年的位置を考える上で、出土状況や共伴関係が明確に捉えられた事例は認められない。ほとんどの遺跡では後期末葉（瘤付土器第Ⅲ段階）〜晩期前葉（大洞BC式）の土器が出土しており、この年代幅に充当されることは確実であろう。薄磯貝塚では後期末から晩期初頭の土器群が主体となる第29層から出土し、年代的根拠と見なす向きもあるが、同層準には瘤付土器第Ⅲ段階〜大洞C1式土器が認められており、厳密な根拠にはなり得ない。

これまでの近畿・東海地方の研究成果や折衷土器（図4－2）の在り方からは、大洞B1式を中心に瘤付土器第Ⅳ段階〜大洞B2式期の時間幅に帰属される可能性が高いと考えられる。その下限が大洞BC式期まで下るのか判然としないが、当該土器に見られる刻目帯の陰刻の処理には前記した差異が存しており、刻目帯が大洞BC式と接点を持つとは見なせない。多くの遺跡で安行2・3a式土器が出土していることも示唆的と言えよう。

東北地方では山形連弧文で構成された例が多数を占める。しかし西日本で主流を占めた文様ではない（図1）。

その他に結節重弧文やジグザグ文、相対ジグザグ文が存するが、いずれも同期の所産となるのであろうか。岡田憲一氏の直近の研究（岡田 2011）では、山形連弧文（岡田氏の多重弧線文）は滋賀里 2b 期に位置づけられており、橿原式文様の土器の中でも新相となる。ジグザグ文（岡田氏の山形文）がこれに先行する滋賀里 2a 期（新）となり、楕円文の連結した結節重弧文（岡田氏の帯内珠文に収斂する集合弧線文）は滋賀里 2b 期ないし同 3a 期にかけての時期に位置づけられている。滋賀里 2a ～ 2b 期は大洞 B1 ～ B2 式の時期に相当するが、東北的視座から新旧関係を論じることは出来ない。但し移入された時期が極めて限定されることは確かであろう。

（４）分布について

橿原文様浅鉢は本町西Ａ遺跡と根古屋遺跡を除くと、比較的規模の大きな遺跡から出土している。これ等の遺跡はそれぞれの地域において求心力を持った有力遺跡と見られており、選択的にもたらされたと考えられる。いずれも小破片の資料からなり、出土点数はほとんどが１点のみで、複数出土した遺跡は薄磯貝塚と浜井場Ｂ遺跡に限られる。これまでの事例から、特定の遺跡に大量にもたらされたのではなく、少量の土器が移入され珍重されたと推測される。

出土した遺跡の分布を見ると、東北最南端の福島県の浜通りに集中している（図３）。浜通りは双葉地域（双葉郡内の６町２村）を中部として、それより北が北部、いわき市域が南部に区分されるが、南部が３遺跡５点と多く、中部が１遺跡１点、北部が２遺跡２点となる。数量から判じて、太平洋沿岸が主要な搬入ルートになっていたと考えられる。しかし福島県内では少数であるが中通りや会津にも認められており、それぞれに独自のルートが存していた可能性も想定される。

また新潟県の日本海沿岸でも飛び地的に出土しているが、日本海に沿った搬入ルートが存したのか、福島県を通じてもたらされたのかは、現時点では判断できない。秋田県の堀ノ内遺跡は山形県を飛び越え孤立して存している。交易品として中継されて運ばれたのではなく、関東方面から直接将来されたのであろうか。

なお当該期に東北地方で出土した同様の異系統土器として、東海地方の櫛描（くしがき）文土器が福島県中通りの一斗内（いっとうち）遺跡（須賀川市）で出土した事例（図４－１）を、増子康眞氏が指摘している（増子 2004：22 頁）。１は幅約１㎝の櫛歯状工具（５本一組？）で、口縁部から横位・波状・横位の順で整然と施文されており、同氏は晩期初頭伊川津Ⅱ式に裁定している。東北南部の後期後葉には、櫛歯状条線文を施した粗製深鉢形土器が盛行するが、多くは口縁部のみが横位方向で、その直下が縦位方向施文となっており、全面横位方向施文の例も存している。しかし１のような横位波状文の例は見出せない。増子氏は通常の精製土器の移動と異なり、土器の製作者自身の移動を強く示唆する事例と理解している。群馬県内では複合口縁に刺突文を施文した本刈谷式類似の深鉢も認められており、同氏の指摘を是とした場合、後期後葉～晩期前葉の東海地方と東北南部・北関東との間には、相互の交流関係の存していた可能性が考えられる。

５　まとめ

東北地方出土の橿原式文様浅鉢を集成し、その特性を検討してきた。年代的には後期末葉～晩期初頭、土器型式では瘤付土器第Ⅳ段階～大洞 B2 式期に相当し、特に大洞 B1 ～ B2 式期に主体があったと考えられる。東北から出土した当該土器は規格性が強く、椀形の器形や連弧状の文様が多く認められるが、これ等の特徴は関東地方の出土例と共通する。近畿・東海では椀形以外の浅鉢形土器が多く、文様も多様である（図１）。東北では橿原式文様の土器が選択的に受容された様相が窺われるが、西日本から東北へ直接将来されたのではなく、関東で模倣・製作された橿原式文様の土器が搬入された公算が高く、当該土器に関する限り西日本とは関東方面を媒介した間接的な関係にあったと推定される。当該土器を出土した遺跡で安行式系土器が認められる点も傍証となろう。

当該土器を出土した遺跡は地理的に近接した東北南部に偏在するが、求心力を持った拠点集落で出土しており、僅かであるが日本海側の新潟県や秋田県にも認められる。これ等の土器の胎土は在地系土器とは異なっており、上記したように関東方面で製作された土器が持ち込まれたと想定されるが、日本海側で飛び地的に出土しているのは、人伝に中継されたのではなく、直接土器が運び込まれたと理解すべきであろう。

一方後期末葉～晩期中葉の近畿地方では、東北系土器

の出土が目に付く。これ等の土器は東北から直接もたらされた搬入品ではなく、在地もしくは周辺地域で製作された模倣品が主体となっている。模倣品には亀ヶ岡式の規約から逸脱した例も認められるが、亀ヶ岡式土器の製作技法を熟知した者が担っていたと考えられ、亀ヶ岡式の荷担者が該域の拠点集落（滋賀里・橿原遺跡等）の構成員として受け入れられ、土器製作に関与していた可能性が高いと推測されている（小林 2012）。

東西で見られる異系統土器の背後にある地域間交流の在り方に、差異が存していたと想定したが、特に後期末葉～晩期前半にかけて東北系土器が他地域で多く出土するのに対し、東北では他地域からもたらされたと考えられる土器が思いの外少ないのが実情である。亀ヶ岡式土器の相対的優位性から、一方的な需要が生じていたことも否めないが、対等な関係を基底とした地域間交流が予察される以上、土器に見られる異系統的要素の抽出が、亀ヶ岡式成立期の土器研究において重要な課題となっている。

註

1) 東北地方の地域区分については、拙書（小林 2010b：10－12 頁）に準拠する。即ち「東北中部」は、北緯 40° 以南（厳密には北緯 39° 45′ 付近の秋田市－田沢湖－盛岡市－宮古市を結んだライン）から山形・宮城県にかけた地域に相当し、北緯 40° 以北が「東北北部」、山形・宮城県と新潟・福島県の境界を結んだラインより以南が「東北南部」に相当する。なお山形県の最上川上流域（置賜地方）と宮城県の阿武隈川下流域は、緩衝地帯として東北南部に含まれる可能性が高い。

2) 図 4－2 は 1966 年に発掘調査された A 地点貝塚から出土した資料である。「安行系の土器」の浅鉢 H（口縁が内傾する浅鉢）に分類され、口縁が小波状をなすと見られ、刻目帯の間にレンズ状の各接点には三叉状文を上下から互い違いに対向させている。内外面ともよく研磨されており、安行 3a 式に伴うものと報告されている（小田ほか 1975：29 頁）。同例の文様と類似したものとして、岩手県北上市大橋遺跡出土の大洞 B1 式壺形土器（図 4－3）を図示したが、楕円形と円文の交互の磨消区画に、入り組む三叉状の陰刻文様が関与する。楕円形と円文の交互に配した構成は横位連繋の入組文の系譜が想定され、円形区画は入組文の咬合部、楕円形区画は帯状文に相当する。

3) 大竹憲治氏により図 2－3 は「大洞 BC 式で古い段階の貝層」、4 は「最下層に近い大洞 B 式に比定される貝層中」より出土したと紹介されている（大竹 1983：23 頁）。しかし報告書（大竹ほか 1988）では、同じ第 29 層からの出土品として図示されており、両例の細かな出土層位を跡付けることは出来ない。

4) 筆者は図 2－14 の存在を関根達人氏の研究（関根 2006）によって知った。報告書（司東ほか 1991）では浮線網状文土器として図示されているが、連結部の上下幅が広い点や、沈線の間隔が一定でなく、沈線に挟まれた陽刻部も比較的平坦に作出されることから、浮線網状文土器の範疇には含まれないと判断される。但し陽刻内の沈線が 10 条程度と多いのが気掛かりである。なお写真図版から、黒褐色を帯びた色調であることが窺える。

5) 増子康眞氏は刻目帯を持たない連弧文土器を、橿原式とは無関係であると判じている（増子 2007：24 頁）。同氏の言説に従うならば、矢津例（図 2－12）は橿原式文様の範疇に含まれないことになるが、刻目帯を持たない山形連弧文の土器は関東方面に少なからず存しており（中沢 2002：第 10 図）、矢津例は該域から運び込まれたと推測される。

引用文献

阿部俊夫ほか 1988『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告 25 浜井場 B 遺跡・舌内塚・舌内板碑群・古宿遺跡』福島県文化財調査報告書第 189 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

荒川隆史 2009「新潟県矢津遺跡出土土器の再検討」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 10 号（特集 落合清志コレクション 矢津遺跡出土土器の研究） pp.7-121 新潟県立歴史博物館

大竹憲治 1983「関東・東北地方出土の近畿系晩期縄文式土器について」『考古学ジャーナル』第 224 号 pp.23-25 ニュー・サイエンス社

大竹憲治ほか 1988『薄磯貝塚－縄文時代晩期貝塚の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告第 19 冊 いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会

大塚達朗 1995「橿原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 13 号 pp.79-141 東京大学文学部考古学研究室

岡田憲一 1998「1 期 縄文時代（滋賀里Ⅲ a 式段階）」『秋篠・山陵遺跡－奈良大学附属高等学校建設に伴う発掘調査報告書－本文編』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第 17 集 pp.104-114 秋篠山陵遺跡調査会

岡田憲一 2012「3 節 橿原遺跡の縄文時代晩期初頭土器と「橿原式」」『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第 11 冊 pp.336-351 奈良県立橿原考古学研究所

小田静夫・金子裕之・金子浩昌 1975「埼玉県石神貝塚の調査」『埼玉考古』第 13・14 号 pp.1-86 埼玉考古学会

加藤朋夏・高橋学 2008『堀ノ内遺跡－一般国道 13 号湯沢横手道路建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』秋田県文化財調査報告書第 432 集 秋田県教育委員会

小林圭一 2010a「「入組三叉文高坏」再考」『宮城考古学』第 12 号 pp.153-166 宮城県考古学会

小林圭一 2010b『亀ヶ岡式土器成立期の研究－東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式－』 早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所

小林圭一 2012「亀ヶ岡式土器の分布と遠距離交易」『三大学公開シンポジウム－パプアニューギニア民族誌から探る縄文社会－発表要旨集』 pp.43-55 早稲田大学考古学研究室

周東一也・宮沢聡 1991『村下遺跡 A 地点の調査』南郷村文化財調査報告 南郷村教育委員会

鈴鹿良一ほか 1987『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ 日向南遺跡（第 3 次）・稲荷塚 B 遺跡』福島県文化財調査報告書第 182 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

鈴鹿良一ほか 1988『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ 羽白 C 遺跡』福島県文化財調査報告書第 194 集 福島県文化センター・福島県教育委員会

鈴木加津子 1985「関東北の関西系晩期有文土器小考」『古代』第 80 号（西村正衛先生古稀記念 石器時代論集） pp.258-276 早稲田大学考古学会

関根達人 2006「東北地方出土の安行系・滋賀里系土器からみた地域間交流」『ムラと地域の考古学』（林謙作編） pp.97-132 同成社

関根達人　2008 「広域編年の事例②　亀ヶ岡式土器」『縄文時代の考古学２　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－』 pp.240-256　同成社
高島好一・木幡成雄ほか　1993 『久世原館・番匠地遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 33 冊　いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会
高島好一ほか　2007 『根古屋遺跡・上野遺跡－縄文後期埋設土器と石囲炉・円墳の調査－』いわき市埋蔵文化財調査報告 118 冊　いわき市教育文化事業団・いわき市教育委員会
滝沢規朗・高橋保雄ほか　2002 『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）－奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ－』朝日村文化財報告書第 22 集　朝日村教育委員会
中沢道彦　2002 「中部地方出土の橿原式文様土器」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会　研究発表資料集』 pp.35-47　日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会編
能登谷宣康・三浦武司ほか　2002 『常磐自動車道遺跡調査報告 32　上郡Ｂ遺跡・本町西Ａ遺跡』福島県文化財調査報告書第 391 集　福島県教育委員会・福島県文化振興事業団
深澤芳樹　2002 「橿原式紋様の展開」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会　研究発表資料集』 pp.25-33　日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会編
増子康眞　2004 「東三河縄文晩期前半土器群の編年再編」『古代人』第 64 号　pp.10-38 名古屋考古学会
増子康眞　2007 「愛知県西部の縄文晩期〈寺津式・雷Ⅱａ式〉土器組成の検証」『古代人』第 67 号　pp.1-25　名古屋考古学会
松田真一編　2011 『重要文化財　橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第 11 冊　奈良県立橿原考古学研究所
八木勝枝・新井田えり子・吉田真由美　2006 『大橋遺跡発掘調査報告書－中山間総合整備事業岩間地区関連遺跡発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 481 集　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
山内幹夫ほか　1984 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査　16　一斗内遺跡』福島県文化財調査報告書第 132 集　福島県文化センター・福島県教育委員会
吉田秀亨ほか　1979 「薄磯貝塚報告」『考古』第 20 号　pp.1-97　福島県立磐城高等学校史学部

図版出典

図１－１～23：（松田編 2011：図８・11 ～ 14・16・17）
図２－１：（高島ほか 1993：第 98 図１）、2a：（吉田ほか 1979：第７図８）、2b：（大竹 1983：図２－４）、３：（大竹ほか 1988：第 46 図１）、４：（大竹 1988：第 46 図２）、5a：（高島ほか 2007：第 13 図７）、5b：（大竹 1983：図２－５）、６：（鈴鹿ほか 1987：図 97 －２）、７：（鈴鹿ほか 1988：図 263 － 21）、８：（阿部ほか 1988：第 41 図包 366）、９：（阿部ほか 1988：第 41 図包 365）、10：（阿部ほか 1988：第 41 図包 367）、11：（滝沢ほか 2002：図面図版 284 － 3675）、12：（荒川 2009：第 47 図 680）、13：（能登谷ほか 2002：図 50 －３）、14：（周東ほか 1991：図 44 － 13）、15：（加藤ほか 2008：第 234 図 15）
図３：国土地理院発行（1996 年３月）「１：500,000 地方図（３）東北」をベースに作成
図４－１：（山内ほか 1984：第 60 図 112）、２：（小田ほか 1975：第 16 図 144）、３：（八木ほか 2006：第 137 図 1253）

古代出羽南部における菊花状痕跡を有する土器集成

吉田　満

1　はじめに

奈良・平安時代の遺跡調査では、土師器や須恵器などの土器が多量に出土する。それらの土器の底部には成形の痕跡が残ることが多い。ロクロを使用した切離し方法（回転ヘラ切り・回転糸切り・静止糸切りなど）や、木葉痕、ムシロ痕などがある。その形態の違いは、遺物の年代を求める指標のひとつにもなっている。

上記で示した痕跡の他に、本稿の題材として挙げた菊花状の痕跡がある。標記通り、菊の花のように花弁が廻る様が痕跡として残るもので、他に「放射状の痕跡」と呼称されるものでもある。本稿では、出羽南部に位置する山形県内での菊花状の痕跡を有する土器資料収集を目的とし、出土状況などを基に本資料の性格を検討し、今後の基礎資料としたい。

2　研究史

菊花状の痕跡についての研究はあまり行われておらず論考も数少ない。初めての報告は 1953 年『古代』誌上の「青森縣森田村附近の遺跡調査概報（第 2 次調査）」とされる（西村・桜井 1953）。それ以降も東北北部地域で 50 を超える遺跡で出土が報告され、1972 年坂詰秀一氏により、菊花状の痕跡を有する須恵器の分布領域が東北北部から北海道南部に限られていることが指摘されている（坂詰 1972）。近年の研究では利部修氏の論考（利部 2008）がある。東北北部（青森・岩手・秋田・宮城）から北海道南部にかけての広範囲で出土した菊花状の痕跡を有する土器の製作工程や分布等について言及されている。また、本資料の年代が 9 世紀から 10 世紀にわたって存続すること、施文される土器の大部分が高台を有する土器であることが報告されている。

山形県内では、清水北 C 遺跡 (米沢市) で初めて確認され報告されている。その後、境田 C 遺跡 (山形市) の SD 1 より多量に出土し、報告書内で詳しい内容が記載されている。その後も、古代遺跡の調査で出土し報告されてきたが、菊花状痕跡そのものについての論考がなされずに今日に至った。

3　研究方法

県内の発掘調査報告書から当該資料を検索・抽出し集成した。報告書によっては、拓影図のないもの、文章・観察表での記載がないものもあった。本資料が出土した遺跡名・遺構・年代などの情報も収集し、菊花状痕跡の研究資料とする。

4　収集成果

集成の結果、46 の遺跡で、総数 418 点の資料を確認した。出土遺跡位置図（図 1 ・ 2）、土器集成図 [1]（図 3 ～ 8）、型式分類図（図 9）や、出土遺跡一覧（表 1）、遺構別出土状況（表 2）、遺構別出土件数（表 3）、出土遺構の年代（表 4）を作成し成果を示した。詳細は項目毎に記載する。

遺跡分布　46 遺跡で菊花状の痕跡を有する土器の出土を確認した（図 1 ・表 1）。県内の庄内・最上・村山・置賜の 4 地域で広く確認された。庄内地方では最上川以北のみに分布し、以南では確認されなかった。最上地方では、古代遺跡の調査件数が少ないこともあり、 1 件のみにとどまった。村山地方では主に山形市北部～天童市南部（図 2）に出土遺跡が集中している。直径約 8 ㎞の範囲内に 15 の遺跡が位置している。それより以南では確認されなかった。置賜地方においては、広く分布し、特に一部に集中することは確認されない。

古代遺跡の分布として、平野部かつ河川に近い場所に営まれる傾向にあるが、今回収集した遺跡も最上川やその支流に近い場所に営まれている。ただし、平野山窯跡は遺跡の性格上、平野の周縁部に位置する。

出土数　総数 418 点を確認した（表 1）。出土数を 6 区分にし、目視化した表を作成した。遺跡毎の出土数は 4 個以下の出土遺跡が大半以上（33/46）を占める。最も多く出土したのが、古志田東遺跡（米沢市）の 164 点、

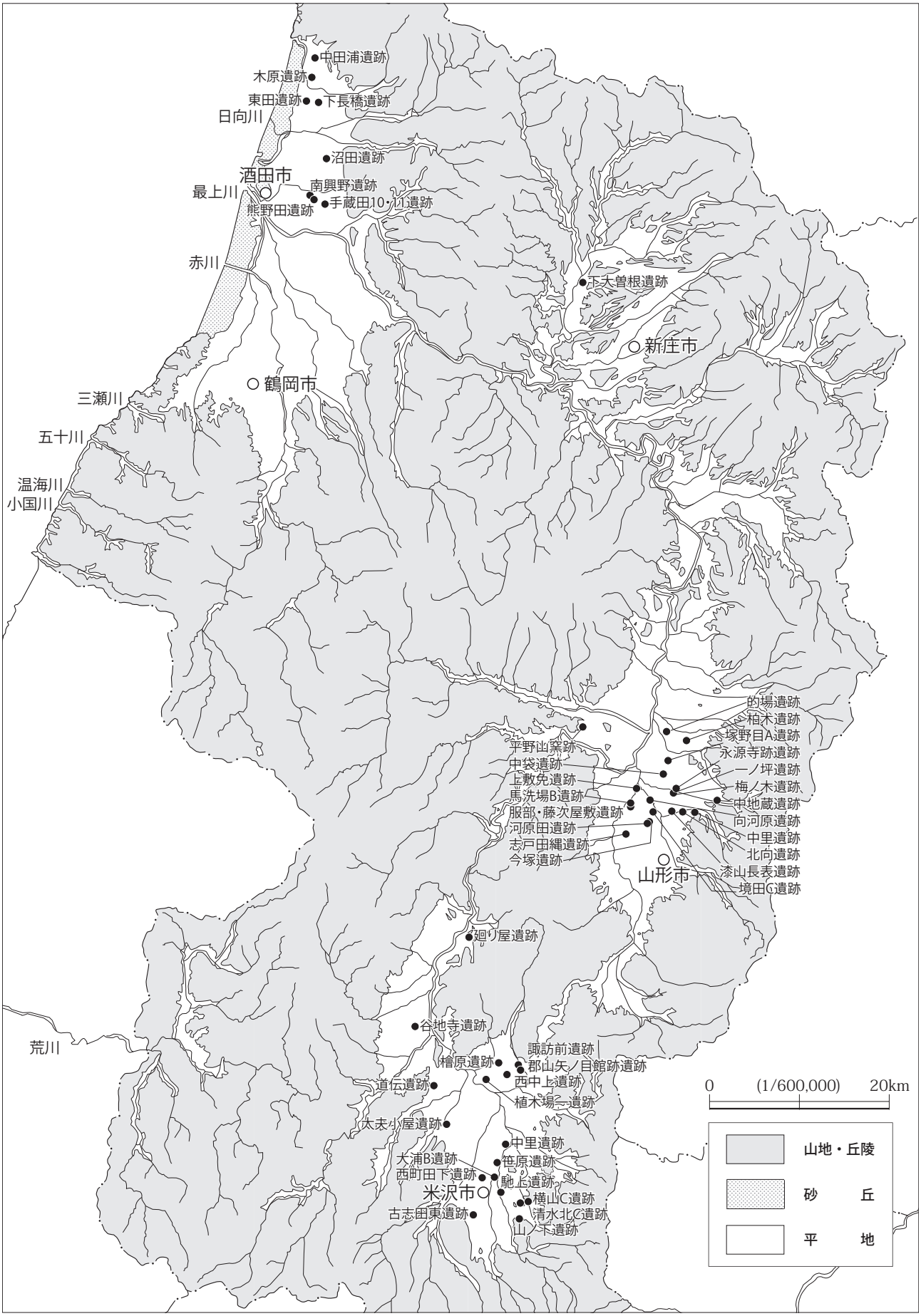

中田浦遺跡
木原遺跡
東田遺跡
下長橋遺跡
日向川
沼田遺跡
酒田市
最上川
南興野遺跡
手蔵田10・11遺跡
熊野田遺跡
赤川
升大曽根遺跡
新庄市
鶴岡市
三瀬川
五十川
温海川
小国川
的場遺跡
柏木遺跡
塚野目A遺跡
永源寺跡遺跡
一ノ坪遺跡
梅ノ木遺跡
中地蔵遺跡
向河原遺跡
中里遺跡
北向遺跡
漆山長表遺跡
境田C遺跡
平野出窯跡
中袋遺跡
上敷免遺跡
馬洗場B遺跡
服部・藤次屋敷遺跡
河原田遺跡
志戸田縄遺跡
今塚遺跡
山形市
廻り屋遺跡
谷地寺遺跡
荒川
諏訪前遺跡
檜原遺跡
郡山矢ノ目館跡遺跡
西中上遺跡
道伝遺跡
植木場C遺跡
太夫小屋遺跡
中里遺跡
大浦B遺跡
笹原遺跡
西町田下遺跡
馳上遺跡
米沢市
横山C遺跡
古志田東遺跡
清水北C遺跡
山ノ下遺跡
0　(1/600,000)　20km
山地・丘陵
砂丘
平地

図１　出土遺跡位置図

図2　遺跡位置図（山形市北部・天童市南部）
＊国土地理院発行　5万分の1「山形」「楯岡」を使用

表１　出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	出土数						報告書
			1～4	5～9	10～14	15～19	20～29	30～	
1	中田浦遺跡	遊佐町当山	1						県教委 185 集 (1993)
2	木原遺跡	遊佐町宮田	1						県教委 186 集 (1993)
3	東田遺跡	遊佐町庄泉	3						県教委 165 集 (1991)
4	下長橋遺跡	遊佐町小原田		5					県教委 130 集（1988）・145 集（1989）
5	沼田遺跡	酒田市大島田	1						県教委 78 集（1984）
6	南興野遺跡	酒田市南興野	1						県教委 114 集（1987）
7	熊野田遺跡 (第３次)	酒田市熊野田	1						県 146 集（1988）
8	手蔵田 10・11 遺跡	酒田市手蔵田	1						県 124 集（1988）
9	下大曽根遺跡	鮭川村庭月	3						埋文セ 182 集（2010）
10	平野山窯跡群	寒河江市柴橋	1						埋文セ 52 集（1998）
11	的場遺跡 (第２・３次)	天童市成生	3						埋文セ 126 集（2004）
12	柏木遺跡	天童市久野本	1～						—
13	塚野目 A 遺跡	天童市塚野目	1						天童市教委 22 集（1999）
14	中袋遺跡	天童市高擶						38	埋文セ 97 集（2002）
15	永源寺跡遺跡	天童市清池		7					埋文セ 86 集（2001）
16	一ノ坪遺跡	山形市漆山		6					山形市教委 12 集（2001）
17	梅ノ木遺跡	山形市漆山		5					埋文セ 78 集（2000）
18	中地蔵遺跡	山形市山寺	4						埋文セ 77 集（2000）
19	上敷免遺跡	山形市成安	3						埋文セ 159 集（2007）
20	馬洗場Ｂ遺跡	山形市中野					23		埋文セ 123 集（2004）
21	服部・藤治屋敷遺跡	山形市中野	2						埋文セ 119 集（2004）
22	向河原遺跡	山形市渋江				19			埋文セ 111 集（2003）・141 集（2005）
23	境田 C・C'・D 遺跡	山形市境田						50	県教委 62 集（1982）・76 集（1984）
24	漆山長表遺跡	山形市青柳	2						埋文セ 58 集（1998）
25	北向遺跡	山形市風間					23		山形市教委 27 集（2006）、埋文セ 146 集（2006）・154 集（2006）
26	今塚遺跡	山形市今塚	1						埋文セ７集（1994）
27	河原田遺跡	山形市河原田	2						山形市教委 22 集（2004）
28	志戸田縄遺跡 (第２・３次)	山形市陣馬	1						埋文セ 92 集（2001）
29	廻り屋遺跡	白鷹町荒砥	2						埋文セ 27 集（1995）
30	谷地寺遺跡	長井市九野本	1						長井市教委 27 集（2007）
31	檜原遺跡 (第２・３次)	南陽市西落合	2						埋文セ 185 集（2010）
32	諏訪前遺跡	南陽市	1						県教委 102 集（1986）
33	郡山矢ノ目館跡遺跡	南陽市郡山	1						南陽市教委１集（1984）
34	植木場一遺跡	南陽市宮崎	1						埋文セ 59 集（1998）
35	西中上遺跡	南陽市高梨	1						埋文セ 158 集（2007）
36	道伝遺跡	川西町下小松		5					川西町教委８集（1984）
37	太夫小屋遺跡１・２	川西町時田		8					埋文セ 81 集（2001）
38	大浦Ｂ遺跡	米沢市中田町	1						米沢市教委 67 集（2000）
39	中里遺跡	米沢市窪田			10				埋文セ 75 集（2000）
40	笹原遺跡	米沢市中田町	3						米沢市教委７集（1981）
41	西町田下遺跡	米沢市塩井町	1						埋文セ 44 集（1997）
42	馳上遺跡	米沢市川井	1						埋文セ 101 集 (2002)
43	横山Ｃ遺跡	米沢市竹井	2						県教委 168 集（1991）
44	清水北Ｃ遺跡	米沢市八幡原	1						米沢市教委２集（1976）
45	山ノ下遺跡	米沢市万世町	2						埋文セ 169 集 (2008)
46	古志田東遺跡	米沢市林泉寺						164	米沢市教委 73 集（2001）

表 2　遺構別出土状況（1）

No.	遺跡名	遺構名	個数	遺構の年代	ロクロ土師器				土師器			須恵器		
					有台坏（ミガキ調整）			高台皿	有台坏（ミガキ調整）			有台坏	双耳坏	壺
					なし	内面	両面		なし	内面	両面			
1	中田浦遺跡	遺構外	1	—										1
2	木原遺跡	SX938	1	10 世紀第 2 四半期		1								
3	東田遺跡	SK374	1	10 世紀				1						
		SK681	2	10 世紀				1						
4	下長橋遺跡	SX105	1	10 世紀代			1							
	下長橋遺跡	SK22	1	—		1								
		SK28	2	10 世紀第 2 四半期		2								
		遺構外	1	—				1						
5	沼田遺跡	遺構外	1	—	1									
6	南興野遺跡	SK202	1	10 世紀後半頃		1								
7	熊野田遺跡 (第 3 次)	SD5	1	9 世紀末葉～ 10 世紀初頭		1								
8	手蔵田 10・11 遺跡	SE584	1	10 世紀頃		1								
9	下大曽根遺跡	SK55	1	—	1									
		SK57	1	—	1									
		SK152	1	10 世紀第 1 四半期	1									
10	平野山窯跡群	SQ33	1	9 世紀第 2 四半期								1		
11	的場遺跡 (第 2・3 次)	SG2639	1	9 世紀中葉以降		1								
		SD624	1	平安時代前期	1									
		遺構外	1	—		1								
12	柏木遺跡	—	1 ～	—										
13	塚野目 A 遺跡	SD3	1	—	1									
14	中袋遺跡	SK1	8	10 世紀第 1 四半期										
		SK2	12	—										
		SD5	2	9 世紀第 4 四半期～ 10 世紀第 1 四半期	1	1								
		SK574	1	—		1								
		SX357	1	—		1								
		SX238	2	—	1						1			
		SK564	1	—		1								
		SP207	1	—		1								
		SP263	1	—			1							
		SP569	1	—		1								
		SD6	1	9 世紀第 3・4 四半期							1			
		SD166	2	—	1	1								
		SX23	1	—	1									
		遺構外	4	—	1									
15	永源寺跡遺跡	ST489	1	—	1									
		ST814	3	10 世紀初頭	1	2								
		SG267	1	—	1									
		SX694	1	—		1								
		遺構外	1	—		1								
16	一ノ坪遺跡	SI12	2	10 世紀前半	2									
		SI50	1	10 世紀前半	1									
		SK03	1	—	1									
		SK17	1	—					1					
		SK64	1	—							1			

表 2　遺構別出土状況（2）

No.	遺跡名	遺構名	個数	遺構の年代	ロクロ土師器				土師器			須恵器		
					有台坏（ミガキ調整）			高台皿	有台坏（ミガキ調整）			有台坏	双耳坏	壺
					なし	内面	両面		なし	内面	両面			
17	梅ノ木遺跡	ST6	1	—		1								
		ST9	1	9 世紀後半	1									
		ST11	1	—	1									
		SK2	2	9 世紀後葉	1	1								
18	中地蔵遺跡	ST1	2	9 世紀後半	1	1								
		遺構外	2	—	1	1								
19	上敷免遺跡	ST39	2	10 世紀前半	2									
		SK41	1	9 世紀後半～ 10 世初頭			1							
20	馬洗場 B 遺跡	SE862	1	—		1								
		SD366	1	—		1								
		SD861	1	—	1									
		SD417	1	—	1									
		SP426	1	—		1								
		SG699	5	—	2	3								
		SG754	7	—	5	2								
		遺構外	6	—	5	1								
21	服部・藤治屋敷遺跡	SK344	2	10 世紀初頭	2									
22	向河原遺跡	ST44	1	—							1			
		ST54	1	—							1			
		SE154	1	9 世紀第 4 四半期～ 10 世紀第 1 四半期		1								
		遺構外	6	—	1	5								
	向河原遺跡 (第 5・6 次)	ST697	4	10 世紀	2	2								
		ST545	2	10 世紀	1	1								
		ST554	1	10 世紀		1								
		ST557	1	9 世紀後葉			1							
		SX1096	1	—	1									
		SX798	1	—		1								
23	境田 C 遺跡	SK	1	—	1									
		SP8	1	—		1								
		SP10	1	—	1									
		SX1	11			5	6							
		遺構外	5	—	2	2	1							
	境田 C' 遺跡	遺構外	1	—	1									
	境田 D 遺跡	SD1	30	9 世紀末葉～ 10 世紀	13	16	1							
24	漆山長表遺跡	ST2	1	9 世紀末～ 10 世紀初頭		1								
		遺構外	1	—	1									
25	北向遺跡	SI1005	2	9 世紀後葉	1	1								
	北向遺跡（第 1 次）	ST8	2	10 世紀中葉～後葉		2								
		ST85	1	9 世紀前半	1									
		ST89A	1	—	1									
		ST94	1	—							1			
		ST100B	1	9 世紀末～ 10 世紀初頭	1									
		ST100C	3	—	2	1								
		ST12	1	9 世紀末～ 10 世紀前半	1									
		ST35	1	9 世紀中葉～後葉	1									

表 2　遺構別出土状況（3）

No.	遺跡名	遺構名	個数	遺構の年代	ロクロ土師器				土師器			須恵器		
					有台坏（ミガキ調整）			高台皿	有台坏（ミガキ調整）			有台坏	双耳坏	壺
					なし	内面	両面		なし	内面	両面			
25	北向遺跡（第 1 次）	ST36	1	—	1									
		SK1	1	—		1								
		SK5	1	10 世紀中葉～後葉	1									
		SP10	1	—						1				
		遺構外	1	—		1								
	北向遺跡（第 2 次）	ST492	1	—	1									
		ST523	1	9 世紀中葉									1	
		SK622	1	9 世紀後半		1								
		SK626	1	9 世紀後半		1								
		SK627	2	—	1	1								
		SK629	1	—		1								
26	今塚遺跡	SG200	1	9 世紀後半		1								
27	河原田遺跡	SD4	2	8 世紀後葉～ 10 世紀前葉	1		1							
28	志戸田縄遺跡（第 2・3 次）	遺構外	1	—						1				
29	廻り屋遺跡	ST12	1	—		1								
		遺構外	1	—	1									
30	谷地寺遺跡	—	1	9 世紀末葉	1									
31	槍原遺跡（第 2・3 次）	SG3026	2	—		1	1							
32	諏訪前遺跡	遺構外	1	9 世紀後半～ 10 世紀代	1									
33	郡山矢ノ目館跡遺跡	—	1	—							1			
34	植木場一遺跡	SK520	1	9 世紀後半							1			
35	西中上遺跡	SD61	1	—	1									
36	道伝遺跡	SD35	5	9 世紀～ 10 世紀後半		2	3							
37	太夫小屋遺跡 1	SK101・102・103	1	—			1							
		SD749	1	9 世紀前半			1							
		SX250	3	—			1							
		SX908	1	—		1								
		ST400	1	—			1							
	太夫小屋遺跡 2	遺構外	1	—								1		
38	大浦 B 遺跡（第 6・7 次）	遺構外	1	—	1									
39	中里遺跡	遺構外	1	—		1								
		SX2627	3	—	2	1								
		SE2608	5	—		3	2							
		SD27	1	—	1									
40	笹原遺跡	SD3	3	9 世紀中葉～後半										
41	西町田下遺跡	SG1.2T3	1	—		1								
42	馳上遺跡	SG2131	1	9 世紀中葉～末葉								1		
43	横山 C 遺跡	ST3	2	10 世紀中頃～後半	2									
44	清水北 C 遺跡	SK15	1	—	1									
45	山ノ下遺跡	SX160	2	9 世紀代	1		1							
46	古志田東遺跡	KY1	164	9 世紀中葉～末葉	53	91	20							
		合計	418		143	182	44	3	1	2	8	3	1	1

境田 C・C'・D 遺跡（山形市）の 50 点、中袋遺跡（天童市）の 38 点と続く。調査面積等の要因もあるが比較的出土量が少なく、大量に出土するのは特別な事柄の存在が考えられる。

出土遺構　46 遺跡で、延べ 131 件の遺構から出土した。主に集落跡内で検出される竪穴式住居（ST）、溝跡（SD）、

表３　遺構別出土件数

No.	遺跡名	遺構数	遺構								
			ST	SD	SG	SE	SK	SP	SQ	SX	遺構外
1	中田浦遺跡	1									1
2	木原遺跡	1								1	
3	東田遺跡	2					2				
4	下長橋遺跡	4					2			1	1
5	沼田遺跡	1									1
6	南興野遺跡	1					1				
7	熊野田遺跡（第３次）	1		1							
8	手蔵田 10・11 遺跡	1				1					
9	下大曽根遺跡	3					3				
10	平野山窯跡群	1							1		
11	的場遺跡（第２・３次）	3		1	1						1
12	柏木遺跡	1									1
13	塚野目Ａ遺跡	1		1							
14	中袋遺跡	14		3			4	3		3	1
15	永源寺跡遺跡	5	2		1					1	1
16	一ノ坪遺跡	5	2				3				
17	梅ノ木遺跡	4	3				1				
18	中地蔵遺跡	2	1								1
19	上敷免遺跡	2	1				1				
20	馬洗場Ｂ遺跡	8		3	2	1		1			1
21	服部・藤治屋敷遺跡	1					1				
22	向河原遺跡	10	6			1				2	1
23	境田Ｃ・Ｃ′・Ｄ遺跡	7		1			1	2		1	2
24	漆山長表遺跡	2	1								1
25	北向遺跡	20	12				6	1			1
26	今塚遺跡	1			1						
27	河原田遺跡	1		1							
28	志戸田縄遺跡（第２・３次）	1									1
29	廻り屋遺跡	2	1								1
30	谷地寺遺跡	1									1
31	檜原遺跡（第２・３次）	1			1						
32	諏訪前遺跡	1									1
33	郡山矢ノ目館跡遺跡	1									1
34	植木場一遺跡	1					1				
35	西中上遺跡	1		1							
36	道伝遺跡	1		1							
37	太夫小屋遺跡１・２	6	1	1			1			2	1
38	大浦Ｂ遺跡	1									1
39	中里遺跡	4		1		1				1	1
40	笹原遺跡	1		1							
41	西町田下遺跡	1			1						
42	馳上遺跡	1			1						
43	横山Ｃ遺跡	1	1								
44	清水北Ｃ遺跡	1					1				
45	山ノ下遺跡	1								1	
46	古志田東遺跡	1			1						
	合計	131	31	16	9	4	28	7	1	13	22

表４　出土遺構の年代

地域	年代								遺跡名（遺構名）
	9世紀				10世紀				
	前葉		中葉	後葉	前葉		中葉	後葉	
	1	2	3	4	1	2	3	4	
庄内						■			木原遺跡（SX938）
						■			下長橋遺跡（SK28）
							■	■	南興野遺跡（SK202）
				■	■				熊野田遺跡（SD5）
最上						■			下大曽根遺跡（SK152）
村山		■							平野山窯跡（SQ33）
					■				中袋遺跡（SK1）
				■	■				中袋遺跡（SD5）
			■	■					中袋遺跡（SD6）
					■				永源寺跡遺跡（ST814）
					■	■			一ノ坪遺跡（SI12・50）
			■	■					梅ノ木遺跡（ST9）
			■	■					梅ノ木遺跡（SK2）
			■	■					中地蔵遺跡（ST1）
					■	■			上敷免遺跡（ST39）
				■	■				上敷免遺跡（SK41）
					■				服部・藤治屋敷（SK344）
			■	■					向河原遺跡（ST557）
				■	■				漆山長表遺跡（ST2）
			■	■					北向遺跡（SI005）
						■	■	■	北向遺跡（ST8）
	■	■							北向遺跡（ST85）
				■	■				北向遺跡（ST100B）
				■	■	■			北向遺跡（ST12）
			■	■					北向遺跡（ST35・SK5）
		■	■						北向遺跡（ST523）
			■	■					北向遺跡（SK622・626）
			■	■					今塚遺跡（SG200）
置賜				■					谷地寺遺跡
			■	■					植木場一遺跡（SK520）
	■	■							太夫小屋遺跡１（SD749）
		■	■	■					笹原遺跡（SD3）
		■	■	■					馳上遺跡（SG2131）
						■	■	■	横山Ｃ遺跡（ST3）
		■	■	■					古志田東遺跡（KY1）

河川跡（SG）、井戸跡（SE）、土坑（SK）、ピット（SP）、性格不明遺構（SX）、出土地点が不明なものは遺構外とした。集落跡以外では、窯跡（SQ）資料も１件確認されている。

遺構による出土割合を求めてみた（表３）。竪穴住居跡（31 件）、土坑（28 件）、遺構外（22 件）、溝跡（16 件）、性格不明遺構（13 件）、河川跡（９件）、ピット（７件）、井戸跡（４件）である。遺構別で比較すると建物出土の割合が高い。遺構の性格で、建物（ST）、水に関係する遺構（SD・SG・SE）、それ以外（建物・水に関係する遺構以外）、遺構外（出土遺構不明も含む）の４つに分類した。その結果、それぞれ大きな差が認められない。この結果だけで推測する限り、特別な使用用途は考え難く、遺構に関係なく土器として使用・廃棄されたと考えざるを得ない状態ではないだろうか。

遺構別の出土数については、比較的、河川跡・溝跡な

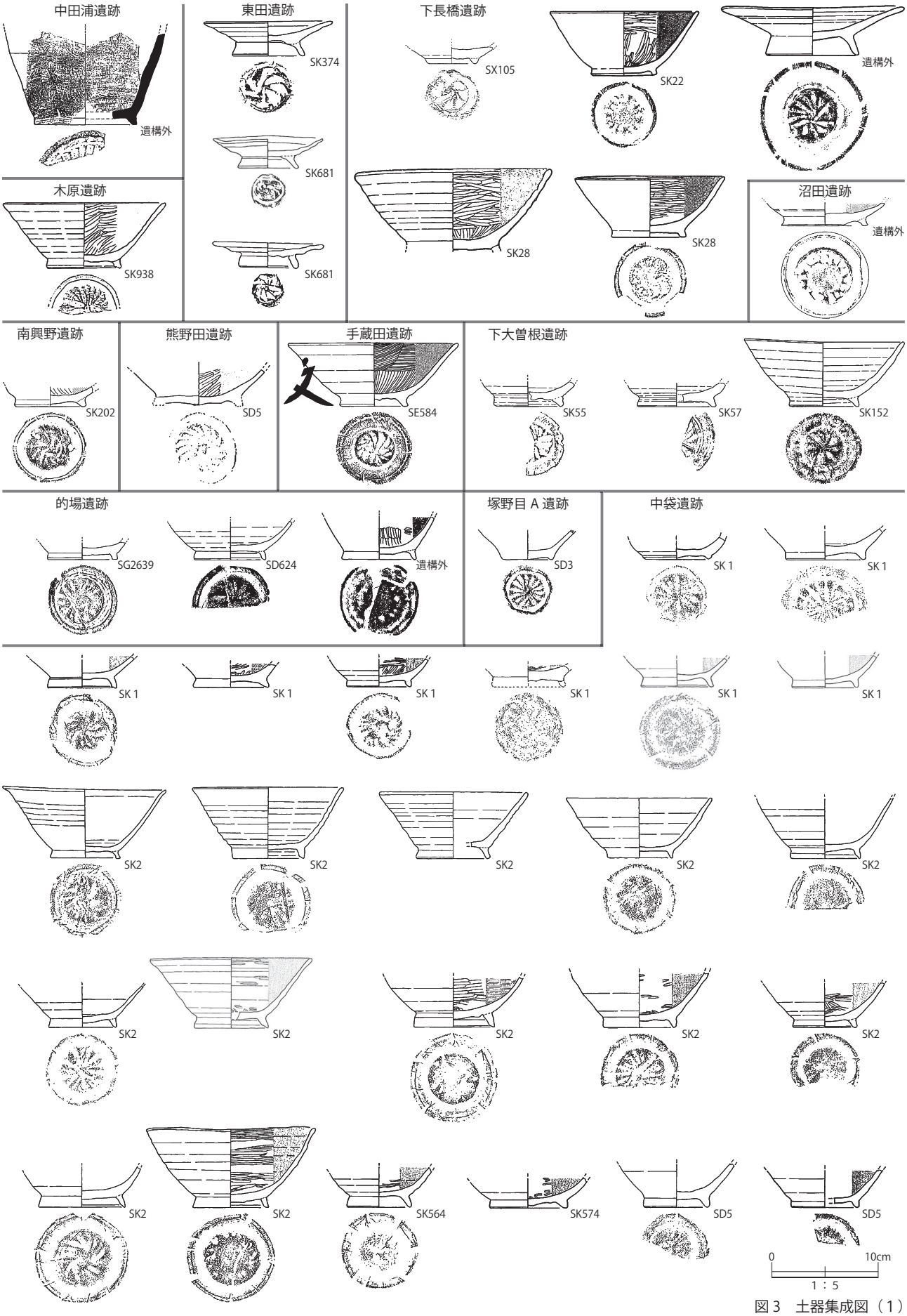

中田浦遺跡
遺構外
東田遺跡
SK374
SK681
SK681
下長橋遺跡
SX105
SK22
遺構外
SK28
SK28
木原遺跡
SK938
沼田遺跡
遺構外
南興野遺跡
SK202
熊野田遺跡
SD5
手蔵田遺跡
SE584
下大曽根遺跡
SK55
SK57
SK152
的場遺跡
SG2639
SD624
遺構外
塚野目 A 遺跡
SD3
中袋遺跡
SK 1
SK 1
SK 1
SK 1
SK 1
SK 1
SK 1
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK2
SK564
SK574
SD5
SD5
0
10cm
1：5

図 3　土器集成図（1）

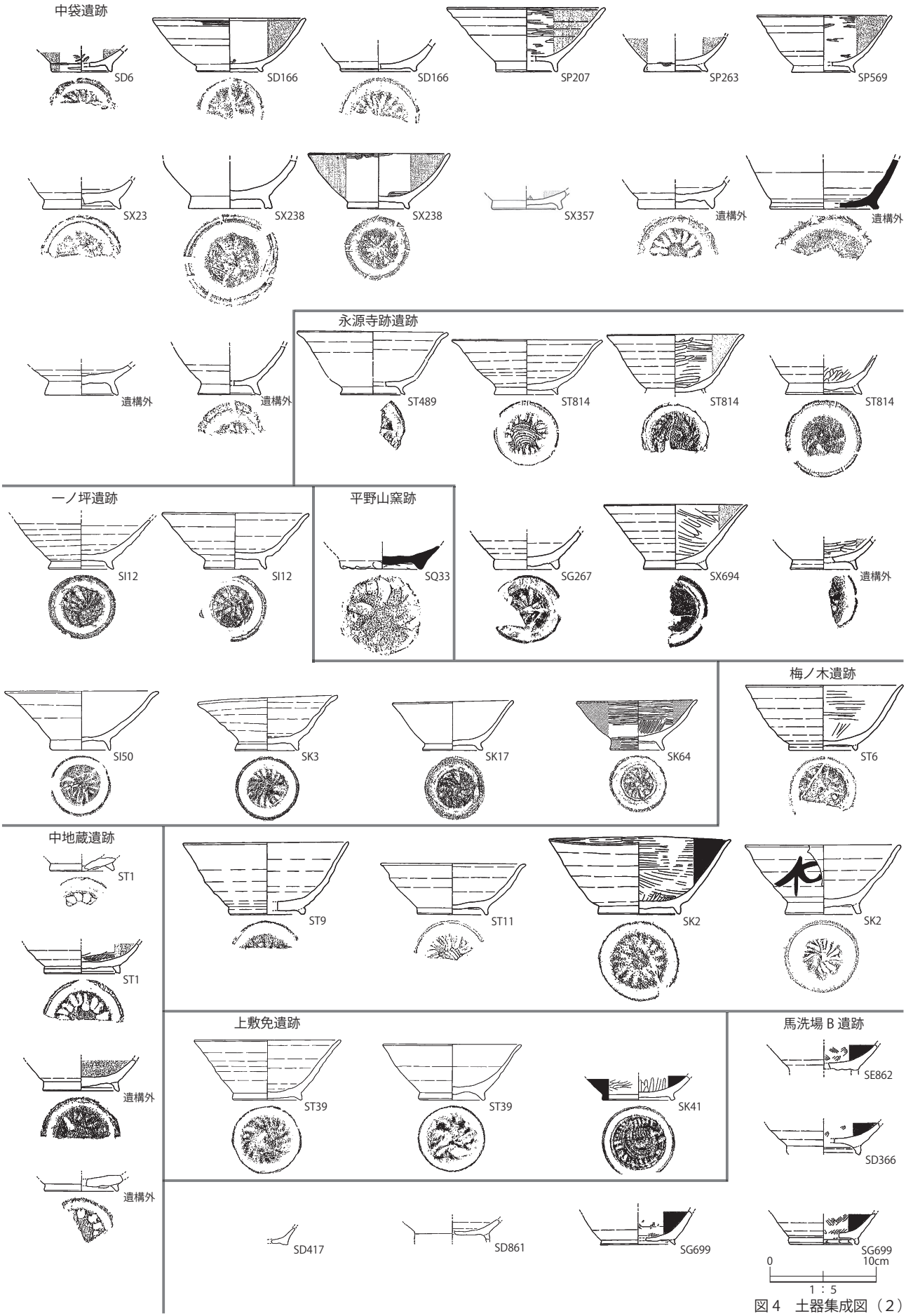

中袋遺跡
SD6
SD166
SD166
SP207
SP263
SP569
SX23
SX238
SX238
SX357
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
永源寺跡遺跡
ST489
ST814
ST814
ST814
一ノ坪遺跡
SI12
SI12
平野山窯跡
SQ33
SG267
SX694
遺構外
梅ノ木遺跡
SI50
SK3
SK17
SK64
ST6
中地蔵遺跡
ST1
ST1
ST9
ST11
SK2
SK2
遺構外
遺構外
上敷免遺跡
ST39
ST39
SK41
馬洗場 B 遺跡
SE862
SD366
SD417
SD861
SG699
SG699
0
10cm
1：5

図 4　土器集成図（2）

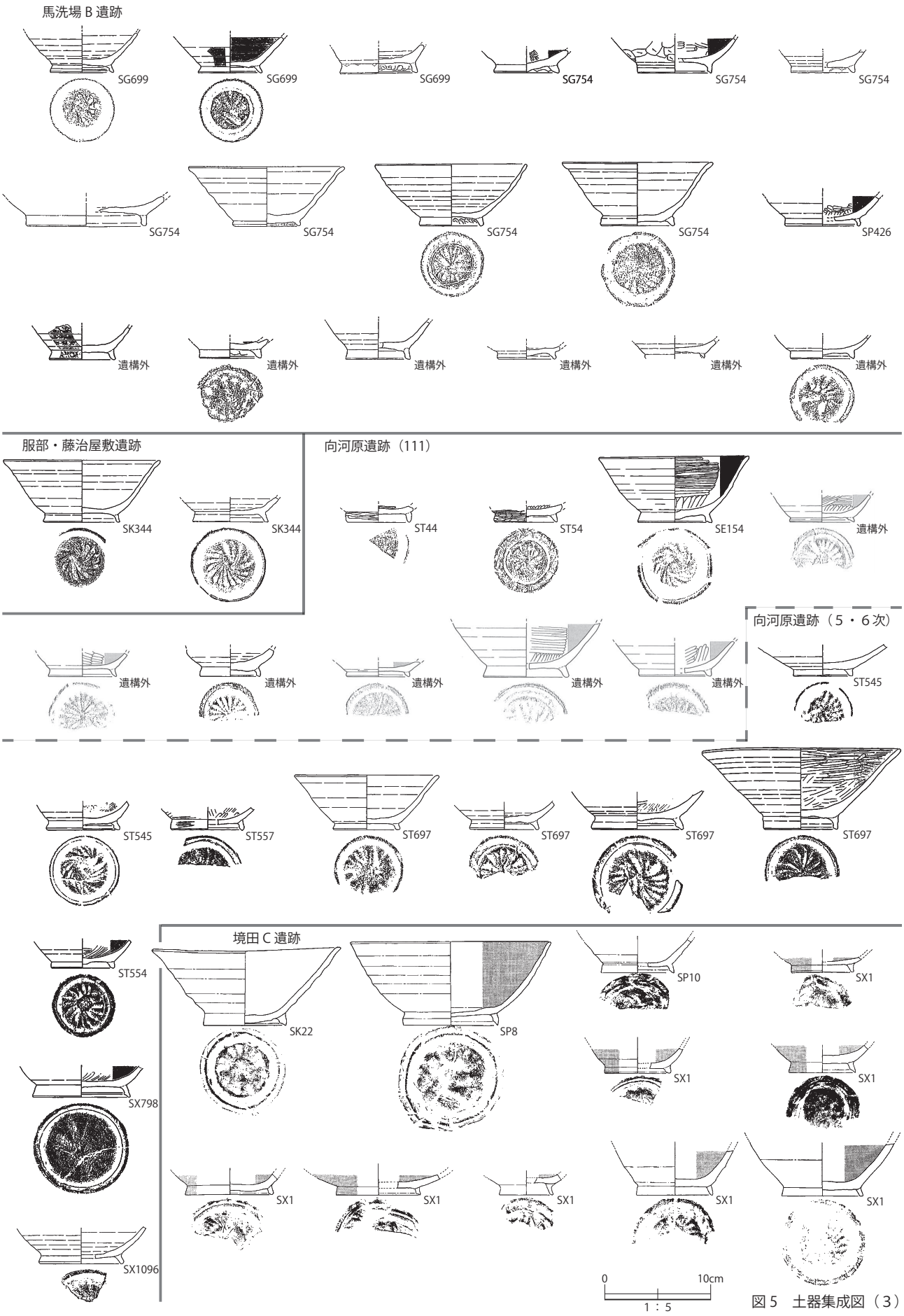

馬洗場 B 遺跡
SG699
SG699
SG699
SG754
SG754
SG754
SG754
SG754
SG754
SG754
SP426
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
服部・藤治屋敷遺跡
SK344
SK344
向河原遺跡（111）
ST44
ST54
SE154
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
遺構外
向河原遺跡（５・６次）
ST545
ST545
ST557
ST697
ST697
ST697
ST697
境田 C 遺跡
ST554
SK22
SP8
SP10
SX1
SX798
SX1
SX1
SX1
SX1
SX1
SX1
SX1
SX1096
0
10cm
1：5

図５　土器集成図（３）

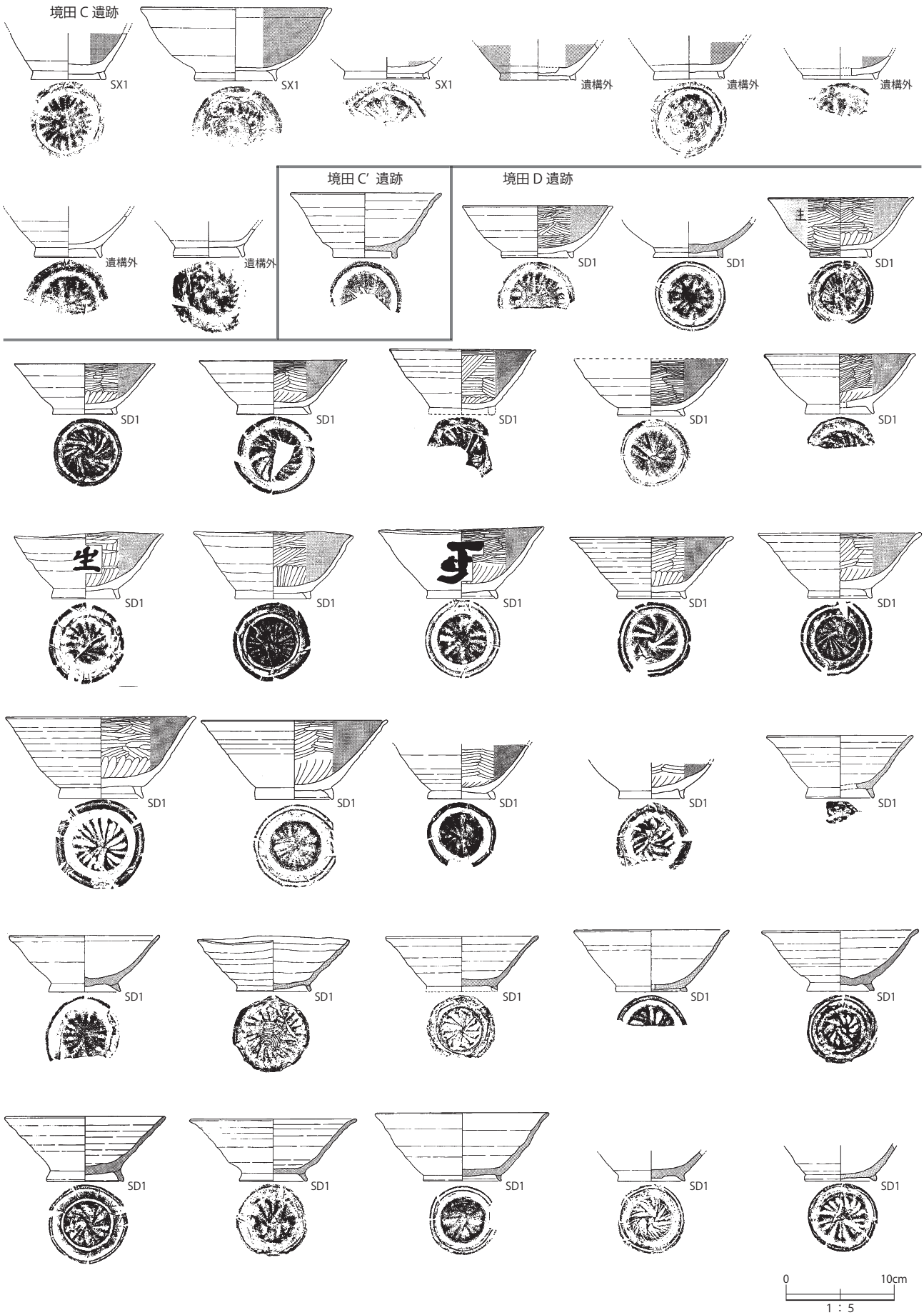


図6　土器集成図（4）

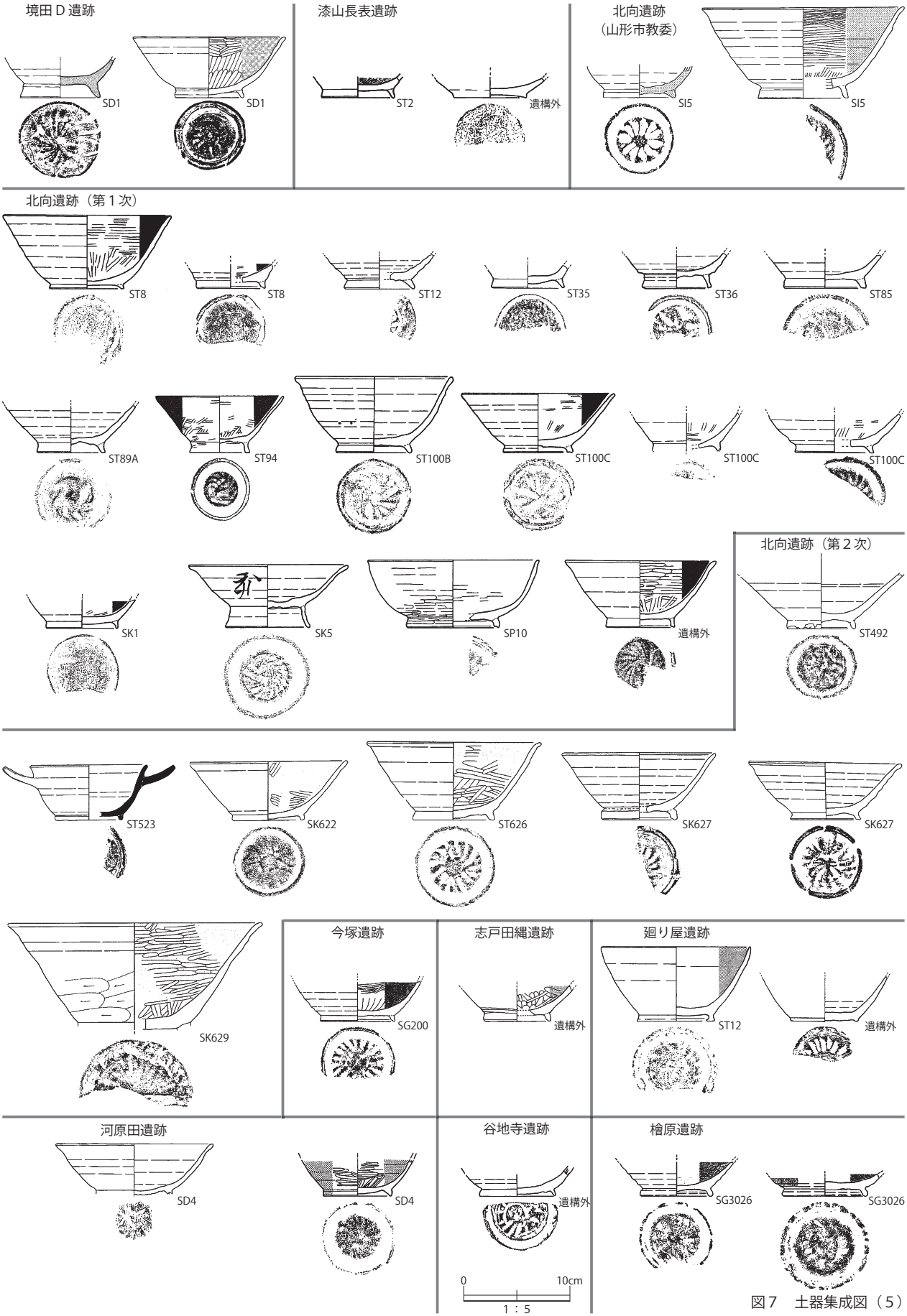

境田Ｄ遺跡
SD1
SD1
漆山長表遺跡
ST2
遺構外
北向遺跡
（山形市教委）
SI5
SI5
北向遺跡（第１次）
ST8
ST8
ST12
ST35
ST36
ST85
ST89A
ST94
ST100B
ST100C
ST100C
ST100C
北向遺跡（第２次）
SK1
SK5
SP10
遺構外
ST492
ST523
SK622
ST626
SK627
SK627
SK629
今塚遺跡
SG200
志戸田縄遺跡
遺構外
廻り屋遺跡
ST12
遺構外
河原田遺跡
SD4
SD4
谷地寺遺跡
遺構外
檜原遺跡
SG3026
SG3026
0
10cm
1：5

図７　土器集成図（５）

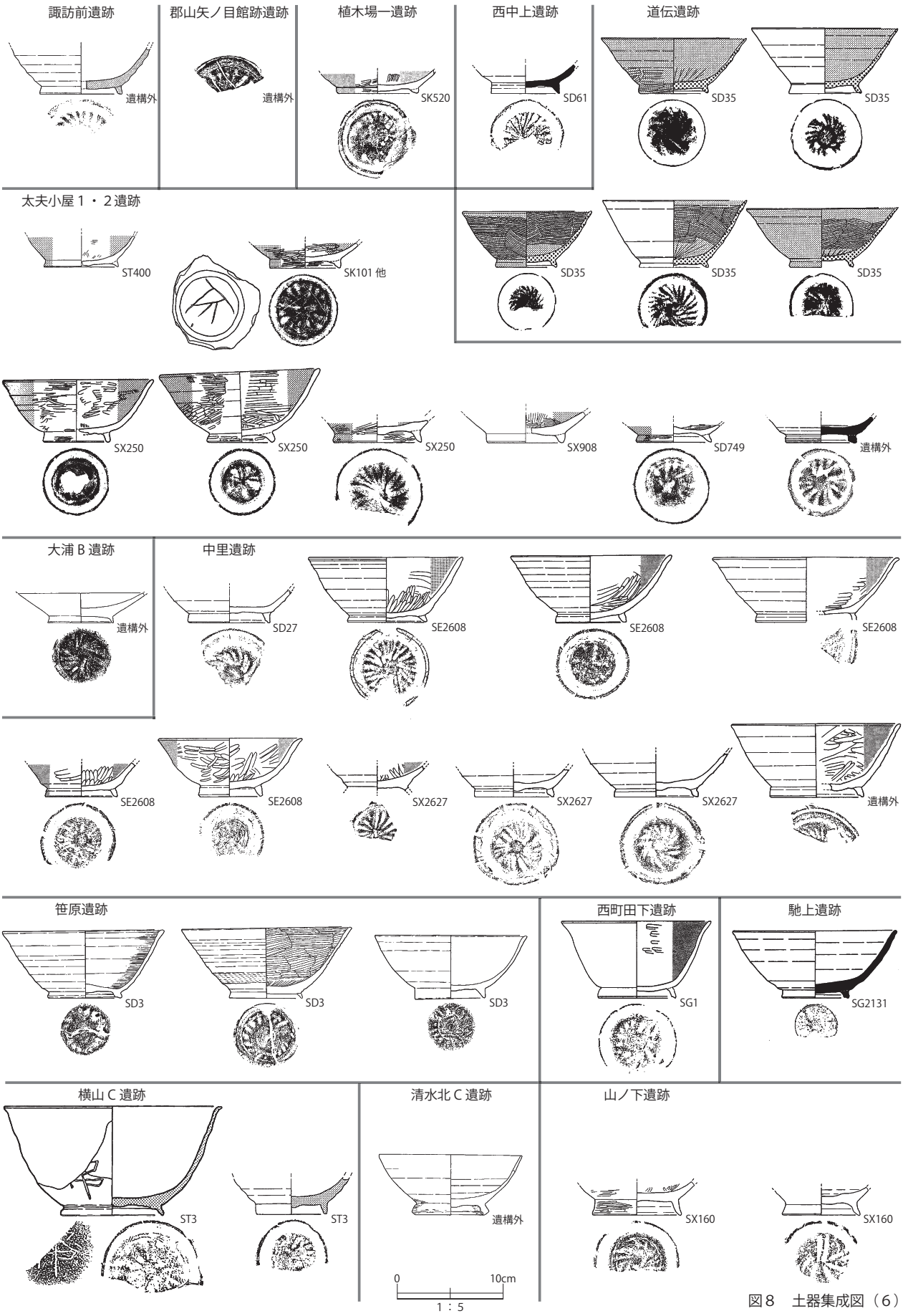

諏訪前遺跡
遺構外
郡山矢ノ目館跡遺跡
遺構外
植木場一遺跡
SK520
西中上遺跡
SD61
道伝遺跡
SD35
SD35
太夫小屋１・２遺跡
ST400
SK101 他
SD35
SD35
SD35
SX250
SX250
SX250
SX908
SD749
遺構外
大浦 B 遺跡
遺構外
中里遺跡
SD27
SE2608
SE2608
SE2608
SE2608
SE2608
SX2627
SX2627
SX2627
遺構外
笹原遺跡
SD3
SD3
SD3
西町田下遺跡
SG1
馳上遺跡
SG2131
横山 C 遺跡
ST3
ST3
清水北 C 遺跡
遺構外
山ノ下遺跡
SX160
SX160
0
10cm
1：5

図８　土器集成図（６）

A　菊花状ナデ調整
B　菊花状不整ナデ調整
C　菊花状ナデ同回転ナデ調整
＊『古志田東遺跡』底部切離の調整より抜粋

A　B　C

図９　菊花状の型式

どの、土器が廃棄される性格の遺構は出土数が多い傾向にある。実際、古志田東遺跡の KY 1 河川跡で 164 点、境田 C 遺跡の SD1 溝跡で 30 点で前述の通り、出土量が多い。そのため、本稿では遺構別の出土数の算出は行っていない。

また、遺跡別の出土遺構数では、大半以上が 1 件のみとなっている。地域毎で観察すると、庄内・最上地域は遺跡数が少ないため傾向はわからないが、置賜地域では出土遺構数が 1 件と少ない傾向があり、村山地域では置賜地域に比べ比較的出土遺構数が多い。最も出土遺構数が多いのが北向遺跡で 20 件、中袋遺跡で 14 件、向河原遺跡で 10 件と続く。比較的、図２で示した範囲内の遺跡では出土数が多い傾向である。

土器形態　表２に遺跡・遺構毎の土器形態を示した。主にロクロ成形の土師器で高台を有する高台坏が多い。種別として、ロクロ成形土師器（374 点）が多く、非ロクロ成形土師器（11 点）・須恵器（６点）と続く（種別が不明な資料も存在する）。全て台を有する器種で、高台坏が 385 点、高台皿が３点、壺が２点、双耳坏が１点である。また、土師器のミガキ調整の有無で観察すると、ロクロ成形・非ロクロ成形共に、ミガキ調整を伴う資料の方が多い傾向である。須恵器資料が確認されたのは、中田浦遺跡（遊佐町）、中袋遺跡（天童市）、平野山窯跡（寒河江市）、北向遺跡（山形市）、太夫小屋遺跡（川西町）、馳上遺跡（米沢市）の６遺跡で、器種は土師器と同様、高台を有する高台坏・双耳坏・壺である [2)]。資料数は少ないものの、県内全域で確認される。

土師器は供膳具の高台坏が主体となり、須恵器は出土数が少ないものの、供膳具の高台坏以外にも貯蔵具の壺があり、施文される土器の様相が異なる。

施文部位　全て高台の中に施文されるもので、他の部位には施文されていない。

土器の年代　土器の年代は、主に出土遺構の年代を用いた。ただし、河川跡・溝跡では比較的年代幅が広いため、参考資料とする。

収集の結果、９世紀前半頃から 10 世紀後半頃までの約 200 年に限定される。また、置賜・村山・最上・庄内４地域毎に見てみると、地域によって、出現期が異なり、終焉時期はどの地域もほぼ 10 世紀第４四半期頃である。置賜・村山地域では９世紀前半頃、庄内地域では、明らかな９世紀代の遺物が確認できないことから 10 世紀以降の出現と考えられる。最上地域においては、前述した通り、出土遺跡が１件のみのため、出現期・終焉期共に不明である。

痕跡の名称　「菊花状」また「放射状」という表記で報告され、前者の表現が多く用いられている。

施文方法　土器や拓影図を観察する限り、木製の工具を用いて施文されていると考えられている。主に拓影図の痕跡の幅を計測すると、工具幅約６㎜前後のものが多い。また、施文の幅が６㎜を大きく超えるものが多少見られ、指先によるナデツケで施文されたと考えられるものもある。指先と想定されるものは、工具の痕跡よりも幅が広いことと、施文で起こる凹凸が少ないことがあげられる。施文の手順は、底部周縁部から中央部へやや螺旋状に施文し、時計回りに同じ行為を連続し行っているものが多い。ただし、その工程が高台の取り付けの前後どちらかで行われているのか不明である。

型式分類　古志田東遺跡の KY 1 からは県内では最多となる 164 点が出土した。報告書では主に土器の実測図のみの報告にとどまり、拓影図の報告は僅かである。その中で、底部切離の調整として 10 種類提示され、そのうち３種類が菊花状の痕跡が挙げられている。「菊花状ナデ調整」・「菊花状不整ナデ調整」・「菊花状ナデ同回転ナデ調整」の３種類で、本稿ではそれぞれを A ～ C と呼称することとする（図９）。観察表による内訳は A が 124 点、B が 32 点、C が８点で圧倒的に A が多く、C が少ない。KY 1 の年代は９世紀中葉～後葉と半世紀以上の時期幅がある。その遺構から３型式の菊花状の痕跡

があることから、３種類の製作技法が同時期に存在していたことが推測された。

5　考　察

ここでは、今回の収集成果を受け、筆者の見解を述べていきたい。

土器の年代　収集の結果、９世紀前半頃から 10 世紀後半にかけて存続し、東北北部地域の存続時期とほぼ同時期であることが確認された。出現期である９世紀前半頃は、ロクロ成形の底部切離技法が「回転ヘラ切り→回転糸切り」へと移行する時期とされている（阿部・水戸 1999）。今回収集した拓影図を観察すると、回転糸切り後に施文されているのが確認できる資料が数点存在する。逆に回転ヘラ切りと断定できる資料は皆無である。つまり、切離技法が回転糸切りに移行後、菊花状の痕跡が施文されるようになったと予想される。

また、出羽南部における９世紀第２四半期～第３四半期頃、ムシロ底土器の出現期とされている（伊藤 2010）。出現期のムシロ底土器が出土している遺跡として境田Ｃ遺跡が報告されている。同遺跡からは、遺構は違うものの、菊花状の痕跡を有する土器も出土している。明確な根拠はないが、僅かな時期差はあるものの、何らかの関係が窺われると筆者は考えている。

型式分類　古志田東遺跡でのみ型式分類が行われ、３型式が挙げられている。この３型式をベースに全資料の観察を試みたが、拓影図のみでは判断し難い内容であった。痕跡の凹凸が不明瞭なためか、拓影図にハッキリと表現されず確認できない資料が多数見受けられた。

本稿では詳しい型式分類を提示することができなかったが、ある程度の内容を確認することができた。それは以下の通りである。

①種別・器種　ロクロ成形土師器・非ロクロ成形土師器・須恵器の３種別があり、記載順に出土量が多い。また、器種は全て台を有し、高台坏を主体に、他に高台皿・双耳坏・壺がある。また、土師器はさらにミガキ調整の有無でも分類される。

②施文範囲　大きくは２つに分類される。１つが底部中央部から周縁部まで広く施文されるもの、２つ目が底部中央部を除き、途中から周縁部にかけて施文されるものである。２つ目においては、中央から周縁部まで一度施文した後に中央部分のみナデ消したもの、初めから中央部を除いて施文するものに細分される。全て、底部の中心を意識し、施文していることが予想される。

③施文方法　底部周縁から中央部にかけて直線的またやや螺旋状に施文されている。整然と規則的に施文されるものと、そうではなく不規則的な施文もある。

④施文道具　主に木製工具のようなものを使用するのが多いようである。工具幅約６㎜前後が多い。また、指先で施文されたと観察されるものも僅かにある。

上で示した４点の項目において、ある程度の型式分類を行うことが可能である。ただし、今回収集した拓影図のみでは、施文内容が不明瞭な資料も多く存在した。意図的に不明瞭な施文を行った可能性もあるが、改めて資料を実見し作業を行う必要がある。

施文技術の伝播　庄内・最上・村山・置賜の４地域の出現期は、村山・置賜が９世紀前半、次いで庄内が 10 世紀と予想される。この様相から検討する限り、県南から北上していくことが予想される。村山・置賜共に詳細な出現期が不明なため、両者の前後関係も不明である。

庄内地域は東北北部地域に隣接しているが、本資料の出現時期は比較的遅い。明確な根拠はないが、伝播ルートは最上川に沿って北上したものではないだろうか。

6　まとめ

本稿では、古代出羽南部に位置する山形県における菊花状痕跡を有する土器研究の発端として、資料収集を主体とした内容となった。確認された事項は以下の通りである。

① 46 遺跡で 418 点の出土を確認した。

②窯跡出土を除いて全て集落跡からの出土である。集落跡のあらゆる遺構から出土した。遺構との明確な関係性は確認できなかった。明確な使用用途も不明である。

③庄内・最上・村山・置賜各地域で広域にわたって分布し、特に山形北部～天童南部地域で出土遺跡が集中する。

④施文される土器は全て台を有する器種で、大部分がロクロ土師器高台坏が占め、須恵器の資料は僅かである。

⑤施文部位は高台内の底部である。

⑥底部周縁部から中央部にかけて、直線的また、やや螺旋状に施文し、同じ行為を時計回りに繰り返すものが

多い。ただし、施文範囲・施文道具にはいくつかのバリエーションが存在する。

⑦存続時期は９世紀前半頃から 10 世紀後半頃までの平安時代で、東北北部地域と同時期であることが確認された。出現期、終焉時期もほぼ同時期であることから、菊花状の痕跡は広範囲に亘ってある程度規格的な土器として存在していたことが予想される。

⑧菊花状痕跡の出現期（９世紀前半頃）の資料が出土した境田Ｃ遺跡では、出現期のムシロ底土器も出土している。僅かな時期差の中で、新たな様相の土器が出現していることに何らかの関係性が窺われる。

以上の事項が確認・考察されたが、それ以上に不明な点や、必要な資料の確認作業がある。本稿では、前述した通り、主に資料収集がメインとなっている。本稿を基礎資料とし、土器資料の実見と共に型式分類を行い、時間的な変化・地域性など確認する作業を進めていきたい。

最後に本稿を執筆するにあたり、伊藤邦弘氏・高桑弘美氏両名にご指導いただいた。記して謝意を表する。

註

1)　古志田東遺跡出土の実測図は拓影図が明示されておらず、集成図には掲載することはできなかった。

2)　西中上遺跡 SD61 出土資料（図８）は須恵器として図化されているが、ロクロ土師器の間違いである。

引用文献

阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会

伊藤武士　2010 「平安時代におけるムシロ底土器の出現と展開」『北方世界の考古学』すいれん舎

利部修　2008 「北日本の須恵器についての一考察」『出羽の古代土器』同成社

坂詰秀一　1972 「津軽・持子沢窯跡の調査」『考古学ジャーナル』76 号　ニュー・サイエンス社

菅原祥夫　2000 「平安時代における蝦夷系土器の南下　－蝦夷の移住をめぐって－」『阿部正光君追悼集』阿部正光君追悼刊行会

西村正衛・桜井清彦　1953 「青森縣森田村附近の遺跡調査概報（第２次調査）」『古代』第 10 号　早稲田大学考古学会

＊出土遺跡の報告書の記載は割愛した（表１参照）

山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の「火縄」について

髙桑　登

1　はじめに

亀ヶ崎城跡は最上川河口の酒田湊に隣接して立地する（図 1）。中世には東禅寺城と呼ばれ、文明 10 年（1487）の築城とされる。天正 11 年（1583）、武藤家家臣の前森蔵人が最上義光と結び東禅寺城主となり、庄内地方は最上氏の支配下となる。天正 16 年（1588）、本庄繁長が攻め入り、庄内は上杉領となる。その後、志駄修理亮等が東禅寺城主となる。慶長 5 年（1600）の関ヶ原合戦後は最上領となり、慶長 8 年（1603）、最上義光が亀ヶ崎城と名を改めた。元和 8 年（1622）の最上氏改易後は酒井氏が庄内に入り、以後亀ヶ崎城は、鶴ヶ岡城を本城とする庄内藩の支城となる。

現在、本丸と二の丸には県立酒田東高等学校が建ち、校舎の改築等に伴って 5 次に及ぶ発掘調査が行われている（図 2）。第 1 ～ 3 次調査では主に近世の遺物が出土し、特に第 2 次調査では近世前半の色絵磁器が大量に出土した（山形埋文 1994・2009a）。平成 15・16 年に実施した第 4・5 次調査では、16 世紀前半から 17 世紀前葉の 3 面の遺構面が確認され、1 期：16 世紀前半、2 期：16 世紀中葉、3 期：16 世紀第 4 四半期、4 期：17 世紀初頭の 4 時期に分類されている。

遺構面間の遺物包含層から大量の遺物が出土した。慶長 5 年、天正 12 年の年号や、関ヶ原合戦前後の城主である「志駄修理亮」、「志村伊豆殿様」等の人名が書かれた木簡を始め、大量の木製品の出土が注目される（山形埋文 2009a）。

本稿では報告書刊行時にはその用途が不明であった繊維製品について再検討を行ない、その繊維製品が火縄銃に使用される「火縄」である可能性を提示する。

2　出土した繊維製品の概要

出土状況と年代　繊維製品は E 区 VI 層から出土した。E 区 VI 層は E 区 2 面整地層下の遺物包含層である。VI 層形成後に構築された溝（5SD2239）から天正 12 年（1584）銘の木簡が出土している。また、VI 層から出土した瀬戸美濃は大窯第 3 段階後半が主体で、第 4 段階の製品を含まないことから、VI 層の形成は 1590 年代を含まない 16 世紀第 4 四半期頃と考えられる。E 区は近世亀ヶ崎城の二の丸にあたる位置にある。近世には城代屋敷が置かれた。近世の本丸堀とほぼ同位置に中世の溝が検出されていることから、中世にも同様の縄張り

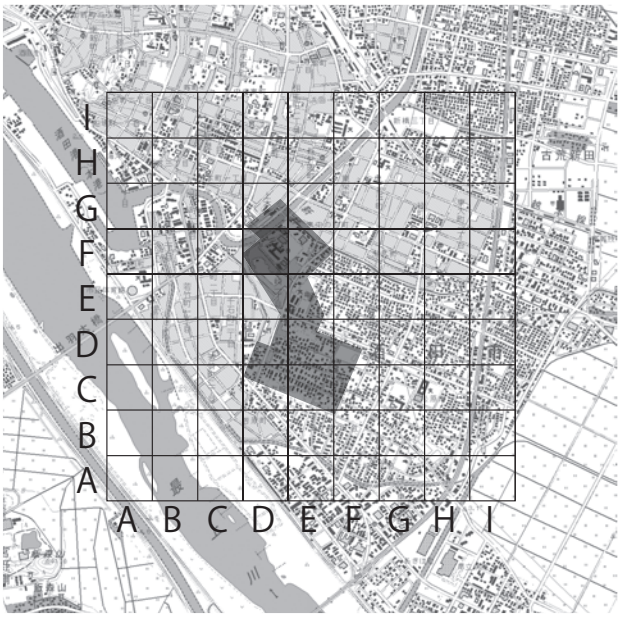


図 1　遺跡位置図（1/50,000）

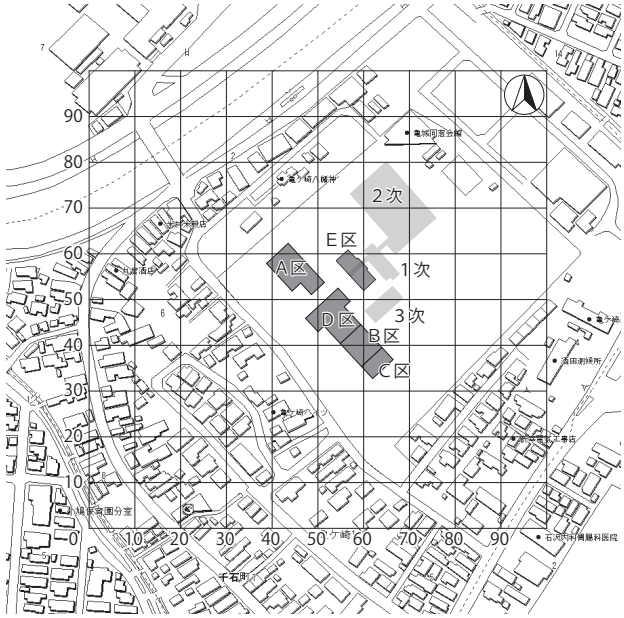


図 2　調査区概要図（1/5,000）

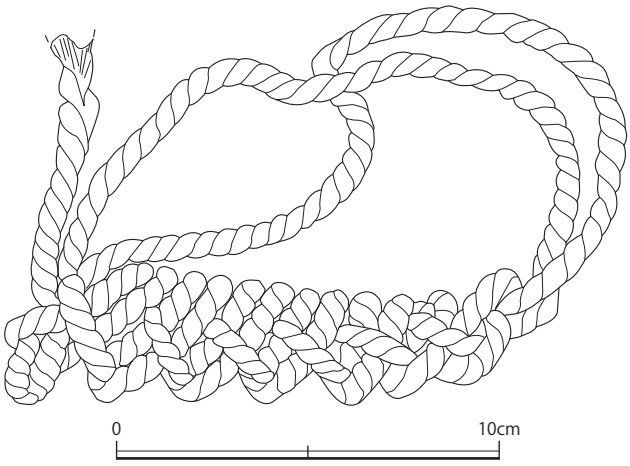


図３　繊維製品実測図（1/2）

であった可能性がある。VI 層形成前の２期には排水のための溝が多く構築され、形成後の３期には礎石建物、石敷遺構（苑池か）等が構築される。

E 区 VI 層からは 1396 点の遺物が出土している。そのうち 1207 点が木製品である。完形の漆器天目台の出土が注目されるが、他の地点と大きな差は認められず、日常的な生活用具が廃棄された遺物包含層である。

この繊維製品は 1590 年代を含まない 16 世紀第４四半期、他の生活用具とともに廃棄されたと考えられる。

繊維製品の形状　製品は、縄を直径 10 ～ 11cm の二重の環状にし、二重の縄を芯にして、それに縄を巻き付けている（図３・写真１）。巻き付け方は、二重芯の外側にループを作り、そのループに二重芯の内側から通した縄をループで通し、それを交互に繰り返している（写真2）。この方法で縄を結ぶことによって、縄の一端を引くことで連続的に縄が解け、容易に縄を伸ばすことができる。

縄の端部はちぎれたような状況で、もう一端は巻き付けられた部分の内部にあるため確認できない。縄の直径は 8mm、三つ撚りで撚りの方向は S 撚り（右撚り）である。分析を行なっていないため材質は不明である。

使用された縄の長さを測定するため、遺物と同程度の太さの縄を用いて復元を行なった。市販されている直径 8mm、木綿製の Z 撚りの縄を使用している。

その結果、出土品には約 3m の縄が使用されていることがわかった。さらにこの結び方で二重芯を一周していたとすると、元々の縄の長さは約７ｍあったと推定できる。ただし材質によって伸縮率が異なるため、数 10cm 程度の誤差があると考えられる。輪の直径の内寸は９～ 10cm となる。

この繊維製品については、2009 年の報告書刊行時には用途がわからず、その特徴的な結び方から武具や馬具の一部ではないかと推定していた。2012 年、松本城天守を訪れた際、展示品の火縄が本資料と類似していることに気づき、火縄の可能性を検証することとした。

3　現代の火縄との比較

本資料が火縄であることを検証するため、現在火縄銃の演武で使用されている火縄との比較を行った。比較資料の実見に際しては、米沢藩古式砲術保存会並びに会に所属されている市立米沢図書館青木昭博氏のご協力をいただいた。

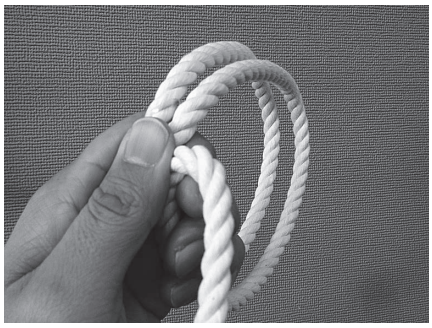
実見した資料はヒノキの樹皮製の火縄２種類と、木綿製の火縄１種類である（写真３・4）。ヒノキ製の方が火縄に適しているが、現在は製作者が少なくなり、木綿に硝石を染み込ませた縄（写真 4）も併用されている。

①は主に 10 匁筒に使用される火縄で、出土品とほぼ同じ太さである。演武で使用され短くなったため、バラけた状態になっている。出土品と同様に三つ撚りであるが、撚りの方向が出土品とは反対の Z 撚り（左撚り）となっている。出土品は土壌の色が沈着し黒ずんでいるが、樹皮の色の濃い部分と薄い部分が混在して撚られている状態や、繊維のほぐれ具合等が酷似している。肉眼での観察ではあるが、出土品も現代の火縄と同様にヒノキ樹皮製である可能性が高い。

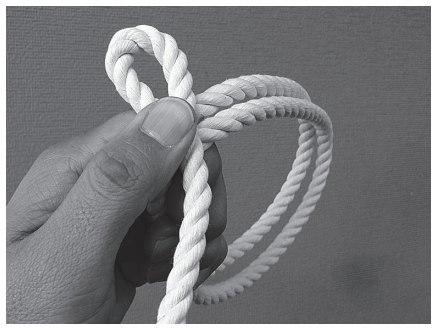
②は主に 30 匁筒に使用される火縄で、縄の直径は約 10mm と①の約 1.3 倍の太さがある。出土品と同様に、環状にした縄にさらに縄を巻きつけた形状をしている。輪の内寸は約 9cm で、出土品の推定内寸とほぼ一致する。現代の火縄の結び方では、一端を引くだけでは解けず、紐を伸ばすには結び目に端部を通して解く必要がある。縄の結び方は出土品と異なるが、長い火縄から射撃に必要な長さを引き出して使用するための結び方の工夫は同一である。青木氏のご教示によると、30 分程度の演武では火縄を解いて伸ばす必要はないとのことであった。

出土品も本来巻き付け部が環状であったものが、使用されて一部が残った状態と考えられる。公益財団法人宮坂考古館に同程度巻き付け部が遺存した火縄が展示され

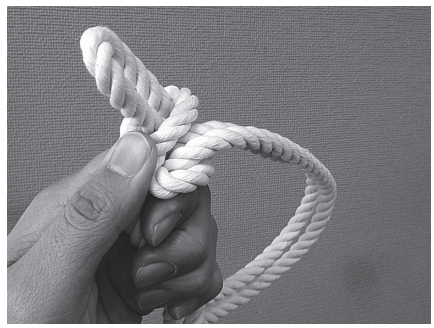
写真 1　繊維製品



①縄を二重の環状にし、巻き付けるための芯を作る。



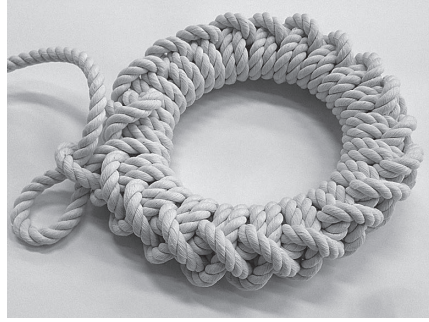
②二重芯の外側にループを作る。



③二重芯の内側から通した縄をループにして②のループに通す。

④さらに二重芯の内側から通したループを③のループに通す。

⑤②～④を出土品と同じ回数繰り返した状態



⑥二重芯を一周して完成。

写真 2　縄の結び方

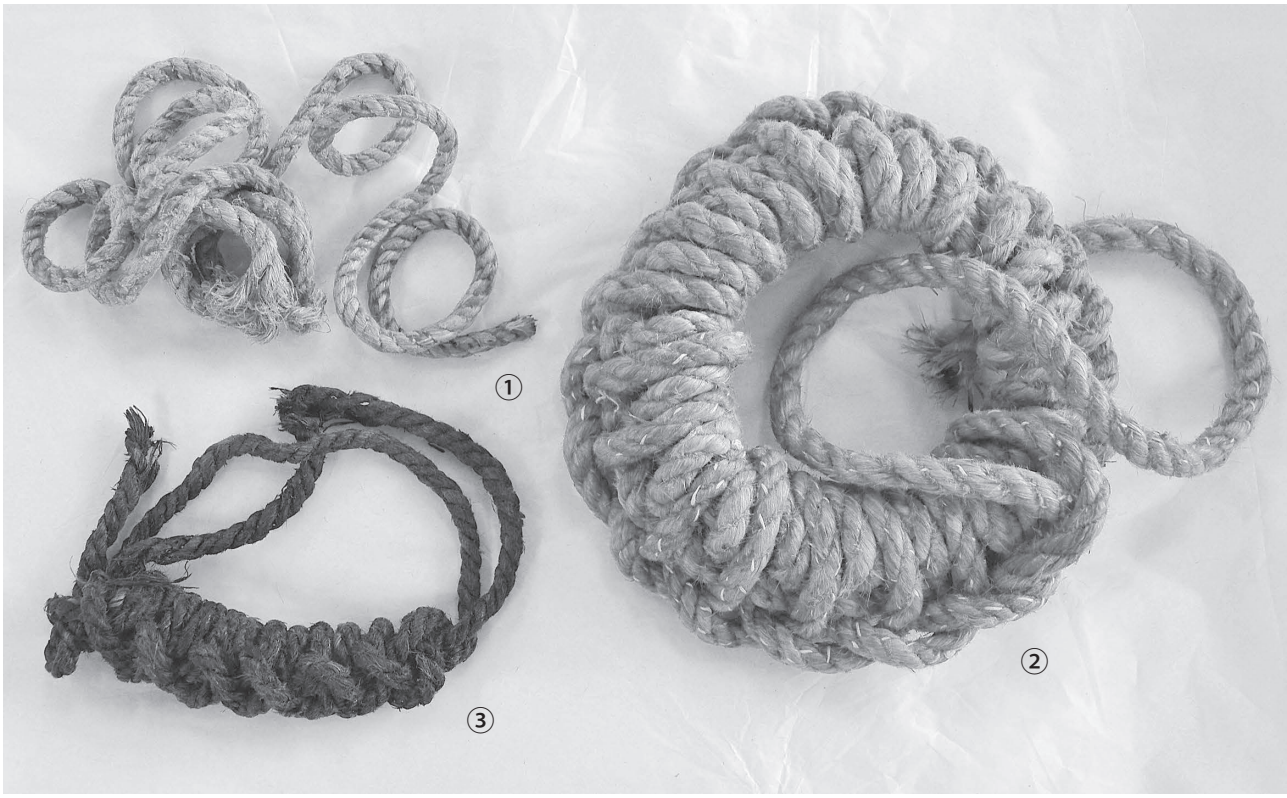


写真３　現代の火縄（①・②）と出土した繊維製品（③）

写真４　木綿製の火縄

写真５　出土品（左）と現代の火縄（右）拡大

写真６　②拡大

写真７　③拡大

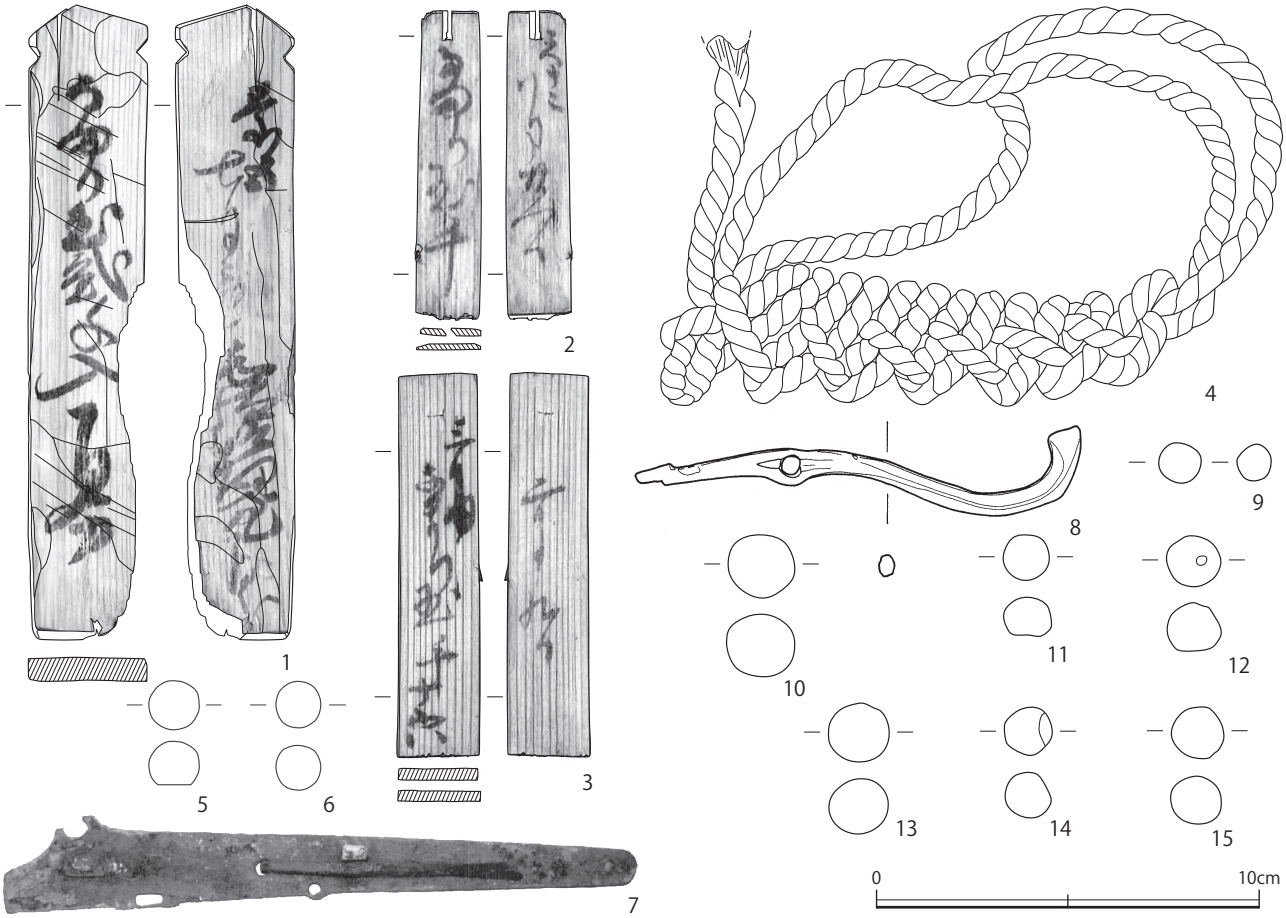
ている。①、②ともに先端のほつれを防止するために木綿糸が縫い込まれているが、出土品には認められない。

現代の火縄と出土した繊維製品を比較すると、肉眼観察ではあるが材質がヒノキ樹皮製であること、射撃の際に腕を通しやすい直径 10cm 程度の内寸であること、長い火縄から射撃に必要な長さを伸ばして使用する結び方でまとめられていること等、共通する点が多いことから、亀ヶ崎城跡から出土した繊維製品は、火縄である可能性が高い。

4　山形県内出土の鉄砲関連遺物

現代の火縄との比較の結果、亀ヶ崎城跡から出土した繊維製品が火縄銃に使用された火縄であることがわかった。山形県内での鉄砲の使用状況を知るために、鉄砲関連の遺物を集成する（図 4）。

亀ヶ崎城跡　1 ～ 3 はなまり玉の荷札木簡である。1 は慶長 5 年（1600）、当時の東禅寺城主であった志駄修理亮に宛ててなまり玉二千発を送ったことを示す荷札木



No.	種別	遺跡名	所在地	出土位置	備考（単位 :mm）	年代	文献
1	荷札木簡	亀ヶ崎城跡	酒田市亀ヶ崎 1-3-60	A 区 1 面 4SK0016F3	長 167.5/ 幅 31.5/ 厚 6.2　墨書「なまり玉弐千入　百分」/「慶五 七月三日 志駄修理亮殿」	慶長 5 年 (1600)	山形埋文 2009a
2	荷札木簡	亀ヶ崎城跡	酒田市亀ヶ崎 1-3-60	E 区 2 面 5SD2239F	長 82/ 幅 17/ 厚 2　墨書「なまり玉千」/「天十二 八月廿一日」	天正 12 年 (1584)	
3	荷札木簡	亀ヶ崎城跡	酒田市亀ヶ崎 1-3-60	A 区 3 面 4SD3047F	長 102/ 幅 22/ 厚 3　墨書「三月□　なまり玉千 十穴」『二月九日」　上部に穿孔	16 世紀中葉 (第 3 四半期？)	
4	火縄	亀ヶ崎城跡	酒田市亀ヶ崎 1-3-60	FD5856VI	長 165/ 幅 105/ 縄の直径 8	16 世紀第 4 四半期	
5	鉄砲玉	矢馳 A 遺跡	鶴岡市大字矢馳字下矢馳	V-20	径 13　鉛製	近世か	山形埋文 2012
6	鉄砲玉	矢馳 A 遺跡	鶴岡市大字矢馳字下矢馳	SX1133(Q.R-17)	径 12　鉛製　寛永通宝共伴	近世か	
7	地板	延沢城跡	尾花沢市大字延沢	北区	長 167　つぶれた鉛玉も出土している	17 世紀前半か	尾花沢市教委 2009
8	火挟み	双葉町遺跡	山形市双葉町一丁目	SD1104	長 117/ 幅 10/ 厚 4　銅製	17 世紀前半か	山形市教委 2004
9	鉄砲玉	睦合館跡	西村山郡西川町大字睦合	12-17G	径 10/ 重さ 4.17g　鉛製	16 世紀末～ 17 世紀前半	山形埋文 1999
10	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	原田家跡 E5-89	径 16 ～ 17	近世～近代	山形埋文 2009b
11	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	下大石家跡 1 面 E6-94II 層	径 11	近～現代	
12	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	下大石家跡 2 面 SP2012	径 12 ～ 14	近世～近代	
13	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	岡沢家跡 SX506	径 15　鉛製	近世～近代	
14	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	草刈家跡下層土間 III	径 12	近世～近代	
15	鉄砲玉	中山城跡	山形県上山市字上郭	草刈家下跡層 SP243	径 13 染付 B1 群と共伴	近世～近代	

図 4　山形県内出土の鉄砲関連遺物（1/2）

簡である。関ヶ原合戦直前、上杉勢が軍備を増強していたことを示す資料である。2 は天正 12 年（1584）の銘がある荷札木簡である。火縄（4）が出土した遺物包含層を掘り込んだ溝から出土している。

矢馳 A 遺跡　古墳時代から中世にかけての遺跡で、中世の方形館等が検出されている。近世の廃棄土坑及び遺構外から鉄砲玉（5・6）が出土している。

延沢城跡　天文 16 年（1547）に延沢満重が築城したとされる山城で、延沢氏の居城である。寛文７年（1667）に破却された。本丸から火縄銃の地板（7）が出土している。周辺から鉄砲玉、鉄滓、ルツボ等が出土している。

双葉町遺跡　山形城三の丸の武家屋敷にあたる。区画溝から火縄挟みと考えられる遺物（8）が出土している。

睦合館跡　六十里越街道沿いに立地する山城で、城主や築城年代は不明である。遺構外から鉄砲玉（9）が出土している。

中山城跡　上杉領の北端に立地する山城で、関ヶ原合戦に伴う慶長出羽合戦の際には最上攻めの拠点となった。近世には米沢藩の「御役屋」として武家屋敷が存続している。近世から近代の遺構、遺物が中心であるが、戦国期の遺物も出土しており、出土した鉄砲玉（10 ～ 15）も戦国期に遡るものがある可能性がある。

以上、山形県内では城館を中心に鉄砲関連遺物が出土している。亀ヶ崎城跡の木簡（２）から天正 12 年（1584）には確実に鉄砲が使用されていたことがわかる。紀年銘は無いが、出土した層位から３の木簡が 16 世紀第３四半期と考えられ、県内での鉄砲の使用もそこまで遡る可能性がある。

5　まとめ

現代の火縄との比較から、亀ヶ崎城跡から出土した繊維製品が火縄であることが明らかとなった。腐りやすい有機物であり、使用すると燃えて無くなってしまう火縄の出土例はほとんど無く、実際に戦闘に使用された戦国期の火縄の形状が明らかになった意義は大きい。

出土した火縄が使用されたと考えられる 16 世紀第４四半期は、庄内地方で上杉氏と最上氏の抗争が繰り返された時期にあたり、亀ヶ崎城の城主も頻繁に交代している。この火縄が上杉と最上のどちらで使用されたものかを判断することは難しい。ただし、全体的な遺物の様相を見ると、日常的な生活用具が出土遺物の主体であることから、長く庄内地方を影響下に置いていた上杉時代の遺物が多いと考えられる。また、犬形土製品や会津大塚山窯製品など上杉方の武将による直接的な搬入と考えられる遺物（高桑 2011）が認められることからも、この火縄が上杉方で使用されたものであると考えたい。

上杉謙信が早くから鉄砲に注目していたことに始まり、米沢藩では現在に至るまで連綿と砲術が伝えられている（青木 2011）。400 年前の火縄と現在使用されてる火縄が、結び方は異なるものの、ほぼ同じ形状であることは興味深い。出土品の結び方では火縄の一端に火がついたままで火縄を伸ばすことができ、より実戦的な使用が可能となっている。

また、復元した火縄の直径から、現代の演武と同様、環状の火縄に腕を通して使用していた可能性が高い。このことは射撃の際の動作も類似していたことを示している。絵図等で火縄の装着方法や射撃姿勢が描かれている例はあるが、出土遺物からそれを裏付けることができた。

引用参考文献

青木昭博　2011 「米沢の火縄筒の歴史」『米沢の火縄筒を伝えて－米沢藩古式砲術保存会 50 年のあゆみ－』米沢藩古式砲術保存会

尾花沢市教育委員会　2009 『延沢城跡発掘調査報告書－第３次調査－』山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第８集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　1994 『亀ヶ崎城跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　1999 『睦合館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 63 集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2009a 『亀ヶ崎城跡第４・５次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 180 集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2009b 『中山城跡第１・２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 178 集

財団法人山形県埋蔵文化財センター　2012 『矢馳 A 遺跡第２～４次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 196 集

高桑登　2008 「山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の備前焼について」『研究紀要』第５号　財団法人山形県埋蔵文化財センター

高桑登　2011 「山形県酒田市亀ヶ崎城跡出土の犬形土製品」『さあべい』第 27 号　さあべい同人会

山形市教育委員会　2004 『双葉町遺跡（山形城三の丸跡）発掘調査報告書　近世編』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第 17 集

執 筆 者（平成 26 年 3 月 31 日現在）

大場　正善（おおば・まさよし）	（公財）山形県埋蔵文化財センター整理課
菅原　哲文（すがわら・てつぶみ）	（公財）山形県埋蔵文化財センター調査課
植松　暁彦（うえまつ・あきひこ）	（公財）山形県埋蔵文化財センター整理課
小林　圭一（こばやし・けいいち）	（公財）山形県埋蔵文化財センター調査課
吉田　満（よしだ・みつる）	（公財）山形県埋蔵文化財センター調査課
髙桑　登（たかくわ・のぼる）	（公財）山形県埋蔵文化財センター調査課

研 究 紀 要 編 集 担 当

黒坂雅人・小林圭一・髙桑登・渡辺和行・山田めぐみ・安部将平・後藤枝里子・渡邉安奈

研 究 紀 要　第 6 号

2014 年 3 月 31 日発行

編集・発行　公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒 999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番

TEL　０２３－６７２－５３０１(代)

FAX　０２３－７７２－５５８６

URL　http://www.yamagatamaibun.or.jp

印刷　田宮印刷株式会社

BULLETIN

OF

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

The sixth issue

2014.3

CONTENTS

Technological Analysis of Refitted Materials from the Lithic Agglomerations of Takase-yama Sites (Sagae City, Yamagata Prefecture) based on the Concept of Chaînes Opératoires: Blade and Short Size Flake Production Techniques of Last Stage of Middle Jomon Period, and the Discovery of "Jomon Child".	OBA Masayoshi	1
Distributiions of Sites from Middle Jomon Priod to Late Jomon Priod in The Mogami River midstream basin.	SUGAWARA Tetsubumi	27
A Report on the Assemblage of Archeological Materials of from Last Stage of Final Jomon to First Stage of Early Yayoi Period in South Tohoku Region.	UEMATSU Akihiko	49
Consideration on the So-called Kashihara type Vessels found in Tohoku District.	KOBAYASHI Keiichi	69
A Corpus of Haji and Sue Wares on "Chrysanthemum flower-formed trace" in South Ancient "Dewa".	YOSHIDA Mitsuru	79
A Report on "Match Cord" from Kamegasaki Castle Site in Sakata,Yamagata Prefecture.	TAKAKUWA Noboru	97

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH